IS〈インフィニット・ストラトス〉～全てを虚無にかえすもの～

門矢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉～全てを虚無にかえすもの～

【Ｎコード】
Ｎ３５７５Ｒ

【作者名】
門矢光

【あらすじ】
もしも朔夜が黙示録ではなく、ＩＳの世界に行ったらと言う話。
ぶっちゃけこっちがメインになっている。ヒロインは鈴に確定。

始まりは転生（前書き）

始まります

始まりは転生

確か、ロキと戦って俺は死んだはずじゃ？何で生きている？

母「どうしたの？朔夜？おなか空いたのかな？今おっぱいあげるからねぇ」

おっぱい？まさか、赤ちゃんになってるぅぅぅぅぅぅ！

母「分かったから、そんなに暴れないの。」

取り合えずどうにでもなれ

十数年後

取り合えず分かった事俺はＩＳの世界に居ること、そして俺の立ち位置が織斑一夏であることだ。一様俺の力も健在だからよしとしとく。それよりもこれから入学か、確か姉貴が居るんだっけ、憂鬱だ。取り合えず行こう俺はＩＳ学園に向かう

教室

何故か視線が俺に集中してる。俺がそんなに珍しいか！俺がそんな事を思っていると

山田「織斑朔夜君」

朔「何ですか？」

そう言ったら涙目になっていた

山田「自己紹介してもらっていいかな？今『お』の付く人のところだから」

そうですか。

俺はそう言った。何他にはないですか？みたいな目を向ける。箒助けろ。何俺と目があった瞬間に赤くなって下を向く！

朔「織斑朔夜だ。一年間よろしく頼む」

朔「まぁ、趣味特技はラノベを読むことと、料理だな。後武術全般はいける。好きな食べ物は和食だな。嫌いな物アーモンドにピーナ

ッツだ」

そう言って座る。もうやだ。そこに、

山田「織斑先生。もう会議終わられたんですか？」

姉貴登場。織斑千冬。俺の姉貴で俺の秘密を知る人物の一人だ。

千冬「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

そしてクラスは騒がしくなった。このクラスは嫌だ！うるさい！そして授業に入った。

朔「終わった…」

一時間目の授業が終わった。つうか、暇！余りに暇だ！簡単すぎだ！神界の雑務…思い出すのやめとこ、あれは地獄だ…そして、廊下から視線を感じる。嫌だ！やめてくれ！俺は動物園のパンダか何か！そこに

箒「…ちょっといいか」

六年ぶりの幼なじみの篠ノ之箒が話かけてきた

朔「何?箒」

箒「…」

無言だ。そして少し顔を赤くしながら

箒「廊下でいいか?」

そう言われた。廊下か、まあいいがな

朔「分かった」

俺は廊下に出た。そして教室から少し離れた所に来たが、数メートル先に人溜まりがあるし、それより

朔「箒、久しぶり。元気そうでうれしいぜ。それに、すぐ箒だと分かったぜ」

篝「え…」

何故みたいな顔してるな。なぜってそりゃ

朔「髪型一緒だしね。後六年間の内に綺麗になったな。」

そう言った瞬間、篝が真っ赤になった。何故だ?

篝「よく覚えていたな?」

朔「まぁ、篝の事忘れるはずないしね」

そう言ったと同時に、チャイムがなる。時間か

朔「篝、教室に戻ろうぜ」

篝「ああ…」

俺たちは教室に戻る

二時間目終了時

？「ちょっとよろしくて？」

金髪の女性が話かけてきた。たしかセシリア・オルコットだっけ？
俺原作しらないし、なぜ名前を知ってるかって？自己紹介の時に覚えた。

朔「何か用か？セシリア・オルコット？」

そう言うと、向こうは不機嫌になり、

セ「まあ！なんですの、その態度。わたしくしに話かけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないのかしら？」

俺はあなたの事知りませんから、無理！何？女が偉いから敬えと？むりだな。

朔「悪いな、俺は君の名前しか知らないんだ。」

俺はそう言った

セ「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

へー、エリートね。

朔「で用件は何？自慢なら余所でやってくれ。眠いんだ」

セ「唯一入試で教官を倒したわたくしに向かって」

朔「それなら俺も倒したけど何か？」

セシリアは嘘みたいな顔をしていた。事実だし

朔「女子だけではって話だろ？」

セ「つまり、わたくしだけではないと…？」

朔「世の中は広いからねぇ」

セ「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

朔「ああ、」

まぁ、前生は戦いばっかやってたし、主に仕事でまぁ、そこらのＩＳのプロなら素手で倒せるね。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。三時間目が始まった今度は姉貴か、これは重要だな、真面目にやろう。俺は真面目に話を聞いて、ノートを執る。一言言っておく、山田先生の授業もノートは執っている！ただ、他の事を考えてるだけだ。

千「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

何今思い出した用に言うんだ？姉貴？代表者は何やるんだ？それは気になるな、やりたくないけど。主に面倒そうなので

千「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今

の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間は変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室がうるさくなった。絶対なりたくないな。そこで一人の生徒が、

「織斑くんを推薦します！」

きっと気のせいだ。織斑が俺あわせて二人いるに違いない！気のせいだ

「私もそれがいいと思います」

がんば！織斑、いや現実逃避はやめよう

千「では候補者は織斑朔夜…他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

誰か他の人を俺は嫌だ！ヘルプ！

千「他にはいないか？いないなら無投票当選だざ」

朔「待ってくれ！俺はやりたくない！代表はゴメンだぞ！織斑先生！」

千「自薦他薦は問わないといった。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

朔「嫌まてよ」

反論しようとしたら、甲高い声が遮った。これはセシリアか

セ「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルセットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

これで助かるかな？

セ「珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭もありませんわ！」

人を猿よばわりか！テメーはそこまで偉いのかよ！それにイギリスも島国だろ！

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛でー」

俺はセシリアのところまで歩き

ぱーん！

平手した。

朔「人の国をバカにしてるじゃねぇよ！高飛車！テメーの国だって大した事もないだろ！」
そう言ってやった。まあ、ムカついたからね。

セ「わたくしをぶったうえ、わたくしの祖国を侮辱しますの！」

あなたも侮辱したよね。心の中でツッコム俺でございます。

セ「決闘ですわ！」

朔「いいけど？もちろん手加減なしでよろしく。」

セ「あなたこそわざと負けたりしたら、奴隷にしますわよ」

朔「いってろよ！」

千「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意しおくように。それでは授業を始める（オルコットは終わったな。朔夜をキレさせたしな。私でも倒せないのだからな。）」

姉貴がぱんっと手を打って話を終わらせる。あの高飛車の鼻を折るぜ。

始まりは転生（後書き）

次回は部屋割りから

ルームメイトは幼なじみ（前書き）

始まります。

朔「終わった…けど疲れた…」

ＩＳの授業の内容は問題ないが、放課後にもなっても女子が他の学年が他クラスが押し掛け、きゃいきゃいと小声で話し合ってる。

（勘弁してくれ…。）

昼休みは完璧地獄だ。俺が学食に移動するとゾロゾロと全員ついてくるんだ。俺は大統領でおまえ等はマスコミか！学食じゃモーセの海割り状態だし、俺は無宗教です。（俺は闇の神だし）取り合えず安らぎの時間がなかった。俺は初めて来た動物かよ！

山田「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

朔「何ですか？山田先生」

俺は山田先生の方を向くと山田先生は書類を片手にもって立っていた。仕事どこかに行く途中か

山田「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って、部屋の番号が書いてある紙と鍵を渡してきた。

朔「俺の部屋は決まってなかったんじゃないんですか？一週間は自宅から通学してもらう話でしたが？」

山田「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。…織斑くん、そのあたりのこと政府から聞いていますか？」

政府とはもちろん日本政府だ。何せ、今まで前例のない『男のＩＳ操縦者』だからな。国としては保護と監視を付けようとしたが、俺達がＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩしてやった。内容は相手が男だったから阿部地獄だ。マスコミや遺伝子研究者が自宅に押し寄せてきた時は大変だったぜ。

山「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらく相部屋で我慢してください」

朔「相方は？」

俺は山田先生に聞いてみた

山「篠ノ之さんです」

箒か…説明したら、何とかなるよな…多分

朔「ならん荷物取りに行くか」

千「その心配はないぞ織斑！」

姉貴がそう言って近づく。家とは違いビシっと決めてるな。家でもそうしてくれれば助かるのに…

朔「織斑先生、まさか…」

千「すでに手配してある」

姉貴は微笑しながら言った。なら

朔「恩にきるぜ！姉貴！」

千「織斑先生だ！まったく…」

俺は部屋まで走った。さて、箒に説明しなきゃな

部屋の前

朔「あっ！箒！」

部屋の前にちょうど箒が居た

箒「さ、さ、朔夜！なぜ居る！」

箒は驚きながら、こっちを向く。その顔が可愛いと思うのは内緒で、

朔「実はな、政府の特命で俺を寮に入れることを最優先にしたせいで、お前と相部屋になっちまったんだ。一ヶ月までは我慢してくれないか？」

俺が頭を下げてそう言った。

箒「そ、そうか…それで、お前がわ、私の部屋を選んだのか？」

箒は顔を赤くしながら言ってきた。何故だ?熱でもあるのか?

朔「すでに決まってた。まぁ、違う人なら、箒に変えてたな。」

気を余り使わなくてすむと言う意味で、そう言うとさらに赤くなる。
やばいな。

朔「取り合えず入ろうぜ」

俺達は部屋に入る。すげーな、高級ホテル並だな!さてと話さなきゃな、今後の生活について、

朔「さて、今後の生活についてだが、箒は何かあるか?」

箒に聞くと

箒「あ、ああ、シャワー室の使用時間なんだが、私が七時から八時で、朔夜が八時から九時頼みたい。」

何故だ?取り合えず聞くか

朔「構わないが、どうしてだ！大人浴場とかあるだろ？」

箒「私は自分の部屋じゃないと落ち着いて使えないんだ」

朔「分かった。後は…」

その後色々決めて、その後は雑談してシャワーを浴びて寝た。ベットめっちゃ良いっす！

次の朝

朔「これはなかなかいけるな」

箒「うむ、これは美味しい」

俺は現在箒と朝食をとっている。食べているのは和風セット。箒も同じもの頼んでいる。周りから

「ねえねえ、彼が噂の男子たって～」

「なんでも千冬お姉様の弟らしいわよ」

「えー、姉弟そろってＩＳのそう従者かぁ。やっぱり強いのかな？」

昨日とかわらず、周りが一定の距離を保ち、何か話している。なんか落ち着かない

朔「何？これ新手の嫌がらせか？」

俺はそう言ってシャケを食べる。うん、うまい

箒「今は我慢しろ朔夜。その内収まるだろう」

朔「そうか？収まらない気がするんだが？」

そこに

「お、織斑くん、隣いいかなっ？」

女子三人が現れた。そして俺の反応をを待ちわびている

朔「いいけど」

俺がそう言ったら、三人は安堵のため息をもらし、後ろの二人は小さくガッツポーズをしていた。何喜んでるんだ?箒よ何負のオーラが出ている。さらに周りからは

「ああ～っ、私も早く声かけとけばよかった…」

「まだ、まだ二日目。大丈夫まだ焦る問題じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押し掛けた子もいるって話だよ!」

「なんですって!?」

はいいました。だが、箒が追い払いました。うるさいらしく。確かに同意だ。夜だからね。ちなみに三人はどう座るかは決定してるらしく、スムーズに席についた。

「うわ、織斑君って朝すっごいたべるんだ!」

「男の子だねっ」

朔「嫌、普通だろ？男なら」

俺はそう言ってお茶を飲む。お茶がうまいな。さすがＩＳ学園

朔「それより女子って朝少ないんだな。平気なのか？」

女子の皿にはパン一枚におかず一皿（少量）

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」

そうか、なら良いがな。

「お菓子よく食べるしー」

間食は太るぞ。さらに体に悪いしね

箒「…朔夜、私は先に行くぞ」

朔「待ってくれ！俺も後少しで食い終わるから」

先に食べ終わった箒席を立ち教室に向かおうとしたので引き留め、
俺は急いで食べた。さすがに一人はこの空間嫌だ。

朔「ごちそうさま。」

俺は食器を片づけ箒の後を追う

朔「箒、放課後暇か？」

箒「暇だが、朔夜は来週は試合だろ？そんなんで大丈夫か？」

朔「ああ、大丈夫だ。基本は分かった。後は応用と実戦でなれればいい。それに俺の強さは知ってるだろ？」

そう言って、箒に向く

箒「ああ、朔夜がそう言うなら、良いが、何だ」

朔「試合しようぜ。剣のな」

箒「構わないぞ。むしろ喜んでやってやろう」

そう言いながら、教室に向かうさてと、どこまで箒が強くなっているか楽しみだな。

放課後

朔「まさか俺が専用機持ちにね」

そう三時間目に姉貴にそういわれた。まあ、良いかそれより

朔「来いよ、箒」

現在実戦形式の剣術勝負を箒と始めた。箒は胴着に着替えたが、俺は制服のまま、手に持っているのは二人とも木刀だ。

箒「ではいくぞ！」

箒は大きく踏み込み、木刀を横に振るう。

朔「甘いな！」

俺はバックステップで避け、木刀を振り降ろす。それを箒は木刀で防ぐが、俺はすぐに突きの体制に入る。そして

朔「せい！」

突きをはなつ。箒はそれを避けて、俺に全力で木刀を振り降ろしてきた。俺はそれを避けて、箒の首に木刀を突きつけて

朔「俺の勝ちだ。箒」

箒「私の負けだ。」

そう言って、俺達はそんなことを一週間も続けた。いや楽しかったよ。もちろんＩＳの勉強もしたぜ。負ける気はしない。

第三アリーナＡピット

ついに試合の時間が来たが、

朔「俺の機体は何処だ？」

箒「さぁ？」

俺のＩＳがまだ来ていないのだ。そこに姉貴達が来て

山田「これが、織斑くんの専用ＩＳ『白式』です」

扉が開き、そこには純白のＩＳがそこにはあった

朔「白式ね、早速乗ってみるか。」

俺は白式にのり、スペックを見た。武器は刀が一本かほかには…そこに

千「気分は悪くないか？朔夜」

姉貴が声をかけてきた

朔「問題ない。いくぜ、姉貴」

俺はフィールドに向かって飛んだ

ルームメイトは幼なじみ（後書き）

次回はＶＳセシリア戦です

戦い？いえ準備体操（前書き）

朔夜の初陣

戦い？いえ準備体操

セ「あら、逃げずに来ましたわね」

セシリアがそう言って鼻をならす。腰に手を当てたポーズが様になっている。まあ、滅茶苦茶どうでも良いけど、俺にとってはね。

朔「まぁ、勝てるからね」

俺はそう言うと、

セ「強がりを言ってしまって、チャンスをあげますわ」

腰に当てた手を俺の方に、びっと人差し指を突き出した状態で向けてくる。

朔「いらねぇよ。どうせ謝らせてやるとか、自分から負けを認めろとかだろ。いらねぇよ！始めようぜ」

俺は刀を出して突っ込んだ

セ「そんな攻撃！」

セシリアはレーザライフルで撃ってくるが、俺は最小限で避けて、近づき

セ「嘘！わたくしの懐に！」

セシリアは驚いていた。まぁ、驚くよな、ＩＳ機動二回目の奴がこんなことしてるんだし。

朔「せい！」

俺は刀で斬りつける。そうすると、セシリアは思いっきり反対側に飛ばされる。

セ「嘘！あなたは本当にＩＳ機動二回目なのですか！」

セシリアが俺に聞いてきた。なので俺は

朔「二回目だよ。ＩＳはね。まぁ俺が戦いなれしてるだけだよ！」

俺は一気にセシリアに近づき斬りまくる。

セ「なら！」

セシリアはファンネル擬きを展開してきた。

セ「いきなさい！」

ファンネル擬きが俺にレーザーを撃ってきた。

朔「ふーん」

俺は紙一重でまたよけ、ファンネル同士で自滅させる

セ「わたくしのブルーディアースが、こうも簡単に…」

セシリアは余りにショックだったらしい、

千冬サイド

山「はぁぁ…。すごいですねぇ、織斑くん」

ピットでリアルタイムモニターを見てた山田真耶がため息混じりにつぶやく。確かに朔夜は機動二回目とは思えない戦いをしていた。まぁ、奴の話だと、戦いばっかしていたらしいし、ＩＳに近いものは動かしていたらしいからな、当たり前といえば当たり前か。しかし、それをすぐに生かすとは、朔夜は戦いの天才か…箒は奴の戦いに見とれていた。まぁいいがな。さてと、そろそろアレが終わる頃か

朔夜サイド

俺の画面に確認のボタンを押してください。と現れた。やっとか

セ「まさか、初期設定だけの機体で戦っていたって言うの！？」

セシリアの顔は余りにも驚いていた。まぁ、当たり前だよな。初期設定の機体にやられかけていたのだからね。さてと、そろそろきめるか

俺は刀、雪片弐型にエネルギーを送り、一気にセシリアを斬りさく。

「試合終了。勝者ー織斑朔夜」

朔「楽しかったぜ！セシリア・オルコット」

俺はそう言って、ピットに戻る。

朔「ふーう、久々の実戦だったぜ…」

俺がそう言って白式を待機状態にする。白のブレスレットかそこに

千「初戦にしてはなかなかだったぞ」

姉貴達がやってきた。姉貴は厳しいねぇ。

朔「まあね、フィッティングが終わらないうちに決着つくのも何だしね」

山田「どれだけの自信があるんですか？織斑君？」

山田先生がそう言ってきたので、

朔「わからねぇ。まぁ、自分から最強と名乗った奴には負けないかな。さて、着替えて帰るかな。」

俺は箒と一緒にアリーナを出た

箒「朔夜、勝ったな」

箒がそんなことを言い出した。

朔「まあな」

俺はそう言い返した。誇ることでもない。ただ、周りより長く生き、長く戦闘経験を積んでいただけだからだ。

箒「それと、朔夜の戦闘してるときが、か、か、かっこよかった」

箒が赤くなりながらそう言った。最後が聞こえなかったな。何だろう？

朔「最後が聞こえなかったんだが？」

箒「何でもない！それと、一緒にＩＳの鍛錬しないか？」

朔「いいけど、箒はＩＳ無いだろ？どうする？」

箒「訓練機が借りられるからそれを使う」

朔「分かった。それじゃあ一緒にやるか」

そう言いながら俺達は部屋に帰った。

セシリアサイド

わたくしはシャワーを浴びながら、織斑朔夜、わたくしを倒した。あの男子の事を思い出す。彼の真剣な眼差し、強い意志の宿った瞳、あの最後に見せた笑顔。そんな事を思い出すと、不思議と胸が熱くなった。さらに、ドキドキとしてきた。熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。なんだろう、この気持ちは。意識をすると胸いっぱいにする、この感情の奔流は。知りたい。わたくしはその正体、その向こう側にあるものを。知りたい。彼のことを。

朔夜サイド

朔「不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

山田「うるさいですよ。織斑くん」

俺の教室で叫ぶと山田先生に怒られた。何が不幸だって？クラス代表になったことだ。

朔「オルコット！おまえに代表を譲る」

俺はセシリアにそう言う。あいつなら喜んで、受け取るはずだ

セ「いりませんわ。朔夜さん。代表はあなたがなるべきです。あなたはわたくしに勝ちましたし、わたくしはあなたのことを認めましたし。」

セシリアがそう言ってきた。あれ？さっき、セシリアは俺を名前で呼ばなかったか？

セ「それと、よろしければ、わたくしと放課後特訓につき合ってはもらえませんでしょうか？」

放課後に特訓か～、別にいいが、そこに

箒「朔夜は放課後は私と特訓するんだ」

箒がセシリアにそう言った。なぜ私を強調するんだ?さらに言い合いはヒートアップする中に一人の救世主が現れた。

千「座れ!馬鹿ども」

姉貴が二人の頭に出席簿を叩き込む。今バシって良い音したよ。そんなこんなで結局クラス代表は俺のままだった。嫌だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

休み時間

♪~♪~

俺のスタッグフォンの着信音が鳴った。俺は廊下に出てディスプレイを見た

黒葉烏と書いてあった

朔「何だ?烏、今学校なんだ」

烏「大変だ！大変なんだ！」

烏がいつもと違う雰囲気だった

朔「何だよ」

俺が聞くと

烏「ロキが…ロキが…生きてやがる…」

俺はスタックフォンを落とした。ロキが…生きてるだと…

戦い？いえ準備体操（後書き）

次回はセカンド幼なじみが出る話だよ

再会、セカンド幼なじみ（前書き）

セカンド幼なじみ登場

再会、セカンド幼なじみ

朔「転入生ねぇ、今ごろにか？」

そう、今は四月だ。なんで入学ではなく、転入なんだ？ＩＳ学園の転入試験は滅茶苦茶条件が厳しい。試験はもちろん、国の推薦がないとできないのだ。つまりそいつは…代表候補生

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

朔「ふーん」

代表候補生ねぇ

セ「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

我等一組の代表候補生、セシリア・オルコットが今朝もまた、腰に手を当てたポーズが似合っていた。イギリス人は皆似合うのか？

箒「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほどでもあるまい」

さっきまで自分の席にいた箒がいつの間にか俺の隣にいた。箒も女子、噂に敏感だな

朔「どんな奴なんだろな」

二組の代表候補生ってどんな奴なんだろな。セシリアみたいな奴なんだろうか?まぁ、ほかのクラスだからどうでもいいか

箒「朔夜はその…気になるのか?転校生が…」

朔「まぁな、強い奴なら戦ってみたいしね」

箒「そうか…」

箒は安堵のため息を吐いていた。何を安心したんだ?最近やたらと機嫌が良かったり悪かったりしてるよな。何かあるのか?俺に相談してくれればいいのに。

箒「それより、来月のクラス対抗戦に向けて特訓するぞ朔夜」

セ「そう!そうですわ、朔夜さん。クラス対抗戦に向けて、より実

戦的な訓練にしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと朔夜さんだけなのですから」

セシリアはだけという部分をやけに強調していた。…まあ、事実だからな。他の奴等じゃ、訓練機の使用許可と整備で一日かかる。何故か、箒が頼むときはすんなりいくんだけどね。手っとり早く模擬戦するなら、セシリアに頼むのがいいんだがな。

白式魔改造しようかな。そんなことを考えている俺

「織斑くん、頑張ってねー」

「フリーパスのためにもね！」

「今のところ専用機を持っている代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」

女子たちが楽しそうに言ってきた。本人たちは気楽だよな。戦うのが自分じゃないしな。そこに

？「その情報、古いよ」

入り口から聞き覚えのある声が聞こえた。まさかな…

？「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組んで方膝を立てドアにもたれているセカンド幼なじみがいた

朔「鈴！」

鈴「そうよ。中国代表候補生、風鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑い、ツインテールが軽く左右に揺れる。

朔「いつも通りにしゃべった方がいいぞ、似合わないからな」

鈴「んなっ…！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

いつもの鈴だ！俺はこっちの方が好きだな。うん

？「おい」

鈴「なによ！？」

バシンッ！いい音がなったこれは奴しかいない。姉貴の登場だ

千「教室に戻れ！ＳＨＲの時間だ！」

鈴「ち、千冬さん…」

千「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

鈴「す、すいません…」

すごすごとドアからどく鈴。見るからにして姉貴にビビってる。昔から鈴は姉貴が苦手だ。理由は知らん！

鈴「また後で来るからね！逃げないでよ、朔夜！」

そう言って、クラスに戻る鈴。なぜ俺が逃げなきゃならない。

朔「っていうか、鈴はＩＳ操縦者だったのか。初めてしった」

俺は素直に感想を口にだして言ったら

箒「…朔夜、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだな？いろいろ聞きたいんだが。」

セ「さ、朔夜さん！？あの子とはどう言う関係で！？」

その他の女子が質問の集中砲火をしてきた。馬鹿した。あんなこと言わなきゃ良かった。

バシンバシンバシン

千「席に着け、馬鹿ども」

姉貴ナイスタイミング。つうか、何で知り合いとこうも再会ばっかするんだ？まぁうれしいからいいか

箒サイド

さっきの女子は何なのだ！朔夜はすごく親しそうにしてたが、まるで幼なじみと再会したように見えるではないか！幼なじみは私ではないか。まぁ、冷静に考えれば私は朔夜と同じ部屋。二人っきりの時間は何時でも作れる。

千「篠ノ之、答えは？」

突然千冬さんに声をかけられた。

箒「は、はい」

千「答えは？」

箒「…聞いていませんでした…」

私は思いっきり叩かれた。朔夜、覚えていろ

食堂

朔「お前が二組の転校生だっのか、帰ってくるなら連絡ぐらいくれよ。」

鈴「連絡よこしたら劇的な再会できないじゃない」

鈴はそう言ってラーメンを受け取る

朔「ラーメン好きだな、鈴は」

俺はそう言って、鯖味噌定食を受け取る。

朔「おばさん元気か？何時日本帰ってきたんだ？何時の間に代表候補生になったんだよ！」

俺は質問しまくった。気になるじゃん幼なじみの空白の期間

鈴「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳを使ってるのよ。ニュース見たときはびっくりしたじゃない。」

朔「まぁ、いろいろあってな、まぁ、鈴は俺が普通じゃないのは知ってるだろ？それが関係してるんじゃないのか？」

鈴も俺の秘密を知っている人物の一人だ。理由？中一の時に何故か

ワームがこの世界にいて、襲われそうなのを助けた。その時に話した。ぶっちゃけ、幼なじみ達は俺の秘密を知っている。そして受け入れてくれてる。

鈴「それ関係してるのかな？」

そんな事をいってる。鈴

箒「朔夜、そろそろ説明してほしいのだが」

セ「そうですわ！朔夜さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」

机を叩きながら、箒とセシリアが多少刺のある声できいてきた。他のクラスメイトは興味津々だし

鈴「べ、べべ、別に付き合ってる訳じゃ…」

朔「ああ、幼なじみだ」

鈴「…」

朔「何故に睨むだ?鈴」

鈴「別に!」

鈴が怒ってきた。何故だ?

篝「幼なじみ…?」

怪訝そうな声で聞き返す篝

朔「ああ、鈴とは入れ違いだったな。鈴、こっちが篠ノ之篝。前に話しただろ?小学校からの幼なじみだ。篝、こっちは風鈴音だ。お前が引っ越してからの幼なじみだよ。」

鈴「ふうん、そうなんだ」

鈴は篝をじろじろと見る。篝も鈴を見ていた

鈴「初めまして、これからよろしくね」

箒「ああ、こちらこそ」

そう言って挨拶してるのに、二人の間には火花が散っているように見えた。俺は疲れているのか？なら、今日は早寝しよう。

セ「ンンンッ！私の存在を…」

鈴「そう言えば、朔夜はクラス代表なんだよね」

鈴はセシリアの話を聞かず俺に話かけてきた。セシリア、哀れなり

朔「ああ」

鈴「あたしが訓練見てあげよっか？ＩＳの事あまり知らないでしょ」

さすが鈴、基本しか俺は知らない。後は訓練で身に付けた技術のみだからね

朔「確かに、それは助かるな」

セ「無視しないでくださる」

セシリアはキレて鈴にそういった

鈴「ごめん、興味ないんだ」

セ「言ってくれますわね」

箒「朔夜と特訓するのは私だ！」

セ「あなたは二組でしょ！？敵の施しは受けませんわ」

鈴「あたしは朔夜に言ってるの。関係ない人引っ込んでよ」

箒「か、関係ならあるぞ。朔夜から持ちかけてきたのだから」

箒よ、なぜ朔夜を強調する？この言い合いは長くなるな。数分後、結果、訓練が終わった後に会うことになった。

アリーナ

朔「二人とも来な！」

俺は雪片弐型を構える

箒「いくぞ！朔夜！」

箒は打鉄の刀を構え

セ「いきますわよ」

セシリアはライフルを構えた。ようは、一対二の模擬戦だ。さて俺は複数相手にどこまでやれるか楽しみだ。

数時間後

箒「はー、はー、朔夜、お前は、はー、異常だろ…」

セ「はー、そ、そう、はー、ですわ…」

二人はＩＳを解除し、地面に座り、そう言っていた。アイツよりかは異常ではない！

その頃アイツ

？「ハックシュン！誰か噂してるな、それよりあの義手造るか！」

朔夜に戻る

朔「さてとピットに戻るか。」

俺達はピットに戻る

鈴「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」

朔「ああ、サンキューな」

ふー、生き返るな。運動の後はぬるいスポドリにかぎる。体にあった、塩分などがとれるし

鈴「また、ジジ臭いこと考えたりしてない？やっぱ運動の後はスポドリにかぎるとか」

朔「まあね、生きてる年数が年数だしな」

鈴が少し可愛くなったなそういえば。なんだか一年見ないうち、あの頃にない女の子らしさがあった。うん、おじさん少しドキってしたよ。

鈴「朔夜は、あたしがいないと寂しかった？」

朔「まぁ、仲の良かった人がいなくなるのは寂しいだろ」

鈴「そうじゃなくて」

じゃあ何だ？

鈴「久しぶりに会った幼なじみなんだから、いろいろ言うことあるでしょうが」

言う事って何よ。思いつかん。

鈴「例えば…」

箒「ごほん」

わざとらしく咳をした。なんか機嫌が悪いな

箒「朔夜、私は先に帰る。シャワーは先に使っていいぞ。朔夜の汗が凄いしな」

朔「箒が使っていいぞ。先に帰るんだし。俺は後でいいよ」

そう箒に言った。そりゃ箒が先に帰るんだし、待たせちゃ悪いだろ

箒「なら、また後でな」

箒は後でを強調して消えた。

鈴「…朔夜どう言うこと」

鈴が何故か、機嫌が悪くなっていた。声のトーンも低い

朔「ああ、何か今日は先にシャワー使っていいと言い出したんだよ。いつもは箒が先なんだけどな」

鈴「しゃ、しゃ、シャワー!?いつも!?朔夜、アンタあの子とどう言う関係なのよ」

朔「幼なじみ」

鈴「幼なじみとシャワーの順番がどう関係するのよ」

それか

朔「ああ、今同じ部屋なんだよ」

鈴「…は?」

朔「俺の入学が特殊なもんだから、部屋が用意出来なかったから、今は二人部屋でー」

鈴「それってあの子寝食共にしてるってわけ!?」

朔「ああ、見ず知らずの相手だったら大変だったぜ」

鈴「…」

朔「どうした?鈴」

鈴「…ったら、いいわけね…」

朔「?」

鈴「だから、幼なじみだったらいいわけね!?」

朔「うわ!」

びっくりした。突然怒鳴りだすんだもんだから

鈴「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

何か一人で納得し始めたよ。

鈴「朔夜」

朔「何?」

鈴「幼なじみが二人いることを覚えておきなさい」

朔「何当たり前な事をいってるんだ？」

鈴「じゃあ、後で」

鈴が去っていた。何なんだいったい

部屋

鈴「というわけだから、部屋代わって」

箒「ふ、ふざけるなっ！なぜ私がそのようなことをしなくてはならない！？」

時は八時、俺がお茶を入れていると、ボストンバックを持った鈴がやってきた。この二人は相性悪いな

鈴「篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うし。のんびりできないし。その辺、あたしは平気だからさ代わってあげようと思ってさ」

箒「べ、別にイヤと言ってない…。それにだ！これは私と朔夜の問題だ。部外者に首を突っ込んで欲しくない！」

鈴「大丈夫。あたしも幼なじみだから」

箒「それがどういう関係がある」

さっきから全然話が進まない。鈴は我が道行く性格だし、箒は頑固だからな。

朔「鈴」

鈴「何？」

朔「まさか、荷物はそれで全部か？」

鈴「そうだよ。あたしはボストンバックひとつあればどこえでも行けるからね」

自慢ならぬぇ。

鈴「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

箒「ふざけるなっ！出て行け！ここは私の部屋だ！」

鈴「朔夜の部屋でもあるでしょ？じゃあ問題ないじゃん」

鈴は俺に同意を求めようとした。

朔「俺に振るな」

箒「とにかく！部屋は代わらない！出ていくのはそちらだ！自分の部屋に戻れ！」

鈴「ところで朔夜は約束覚えてる？」

箒「む、無視するな！ええい、こうなったら力づくで…」

激昂した箒はベットの横にあった竹刀を握り鈴に思いっきり振り下ろす。ちっ！馬鹿！俺は瞬動でいっきに鈴の前に行き、刹那を出して峰で受け止める

朔「箒！やりすぎだ！生身なら危なかったぞ！」

箒「う…」

自制心を失ったこと指摘されて顔を逸らす

朔「約束ねぇ」

俺は刹那をしまいながら思い出す

朔「酢豚を毎日奢ってくれるって話だったよな？」

そう言った瞬間、俺の頬がひっぱたかれた。鈴の肩は震え、瞳には怒りが満ち、さらに涙が滲んでいた。俺が一番見たくない姿だった。鈴はバックをひったくるように持ちん部屋を出た。

朔「待て！鈴！」

俺は走って、鈴を追いかけた。

朔「待て、鈴」

俺は鈴の肩を掴み

鈴「何よ！」

涙目でこちらを睨む

朔「ごめん。」

俺は謝った。

鈴「えっ？」

朔「だから、ごめん。俺がちゃんと約束を覚えてないせいで鈴を傷つけた。だからごめん」

鈴「いいわよ。ちゃんと謝ってくれたし。それにひっぱたいちゃったし、あたしの方こそごめんなさい」

朔「いいよ、鈴を傷つけた方よりましだ。おわびに、週末にどっかに出かけようぜ」

鈴「いいわよ。時間は？」

朔「後で連絡する」

鈴「楽しみにしてるからね！」

鈴は喜びながら、部屋に戻った

再会、セカンド幼なじみ（後書き）

次回はオリキャラ転入生登場

転入性は上○さん？（前書き）

誤字修正

転入性は上○さん？

ここは何処だ。まさかな…

？「久しぶりだな、俺よ」

朔「スケイス…」

目の前に白の部分が黒、黒の部分が白という反対色の俺が居た。

朔「何のようだスケイス？」

ス「久しぶりの再会だぜ。もっと喜ぼうぜ。」

スケイスは笑いながら近づく

朔「で、何のようだ、スケイス」

ス「無視かよ、まぁ、力をかしにきた。お前のＩＳだっけ、刀一本だと辛いだろ？だからだ」

力をかしにか、確かに辛いな。刀一本だと

朔「確かに、力を貸してくれるのはうれしいが、どうやるんだ？」

ス「それはお楽しみだ。じゃあな」

スケイスはその場から消えた。

朔「お楽しみかよ。まったく…」

部屋

朔「く…夢ではないようだな」

俺は右手についているブレスレットを見たら、白だったのが黒色に変わっていた。確かに、白式からスケイスの気配が感じられた。

教室

山田「今日はなんと転入生がきます。入ってきてください」

？「はい」

男の声だ。

ドアが開くとおもいきや、ドアは反開きになり、少年はドアに思いっきりぶつかる。かわいそう

？「不幸だ～、今日で２７回目だ」

確かに…この声上〇さんじゃねぇ。少年が入ってきた。外見は、上〇さんの白髪の金目だな。

千「黒島、挨拶しろ」

姉貴がそう言うと

黒「あっ、黒島晃です。一様専用機持ちです。よろしくお願いします」千「織斑、黒島の面倒は頼んだ。同じ男子だからな」

朔「了解」

千「この後は、アリーナで、実技だ。遅れるな。以上」

黒「これからよろしく頼む。織斑」

黒島が俺に挨拶してきた。どっから見ても上〇さんに似てるよな。
不幸体質も。

朔「こちらこそよろしく頼む。朔夜と呼んでくれ。」

俺がそう言って手を出す

黒「俺も晃で頼む。」

朔「分かった晃。まずはアリーナに行こうぜ」

俺たちはアリーナに向かう。やはり、女子たちは俺たちの後を着いてきた。やだねぇ。こう言うの

朔「走るぞ！晃！」

晃「何となく分かった！」

俺たちはアリーナまで全力で走った。

アリーナ

千「まずは前回の復習といこう、織斑、オルコット、黒島、お前たちがやれ」

セ「は、はい」

晃「分かりました」

朔「分かった」

セシリアはすぐに、ブルーティアーズを出す

晃「来い！幻想殺し！」

まさかの名前がそれ！晃はそう叫ぶと、右腕は飾り気のないアーマーに左腕はダイゼンガーの左腕、足はＳＲＸの足で背中にはダンクーガの翼がある。どこらへんが幻想殺し？

千「織斑！早く起動しろ！」

姉貴におこられた。起動しよう…起動しない。もう一度

朔「白式が起動しない」

箒「何だと！本当なのか！」

セ「何ですって！」

周りがざわめきだす。待てよ、朝たしか、スケイスが…そう言うことかなら

朔「来い…来いよ…俺は…此処にいる！」

腕輪が赤く光り

朔「スケェェェェェェイス！」

俺が叫ぶと、赤い粒子が、俺を包みスケイス２ｎｄフォームみたいなＩＳになる。

朔「フルスキンか…お！これのスペックか」

武装

死ヲ刻ム影
相手を斬ると相手のシールドエネルギー削った数値の十分の四回復。
シールドエネルギーを減らすことで、チャクラムを作り飛ばすことができる

光弾（麻痺付き）
名前のとおり

ワンオフ・アビリティー

データドレイン
相手をＩＳを初期化させる

箒「朔夜のＩＳが変わってる」

セ「まるで…死神のようですわ」

周りがざわざわなり始めた。それよりこの武装は半端なくやばいなこの武装。取り合えず飛ぼう。うん飛ぼう。復習が終わると

朔「なぜこうなった？」

晃「知らない」

俺と晃が何故か戦うことになった。誰か説明を！

千「始め！」

朔「やけくそだ！」

俺は光弾を乱射した。

晃「せい！はっ！」

晃は光弾を全て刀で弾く。やるな、なら俺は死ヲ刻ム影で接近戦に持ち込む

朔「うおぉぉぉぉぉぉぉ」

俺は晃のシールドエネルギーを次々に刈り取る。そして、

朔「終わりだ！」

チャクラムを作り、投げ飛ばす。しかし晃は

晃「その幻想をぶち壊す！」

奴は右手を翳すとチャクラムが四散した。モニターを見ると

相手のワンオフ・アビリティー

幻想殺し

相手の技を全て無効かする

奴の力もやばいな。さらに

晃「我が名は黒島、黒島晃、悪を断つ剣なり！」

奴の刀が巨大化した。斬鑑刀！マジかよ！だが…

朔「負けるかよ！スケイス！力を貸しやがれ！」

俺に答えるかのように鎌が赤く光。

晃「斬鑑刀・一文字斬り！」

晃は斬鑑刀を降り下ろしてきた。俺は

朔「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

鎌を横に振るい、刀を斬りさき、そのまま晃に喰らわせエネルギーをゼロにした。

千「勝者・織斑朔夜」

それとともに授業が終わる。余りにも疲れた。

土曜日・駅前

朔「ありゃ、鈴。もう来てたのか？」

鈴「いやー、い、今来たところだよ！」

鈴は赤くなりながら、そう言った。

鈴（こ、これって、朔夜とデ、デートだよね。何か緊張してきた。お、おかしくないよね）

朔「さて、何処に行くか鈴。鈴？どうした？」

鈴「な、何でもないよ！あそこかな」

鈴は服屋を指さす。あれ？あれは私の見間違えでなければ下着屋ではないですか？鈴はそれに気づき

鈴「さっきの無しで取り合えず行こう！」

俺は鈴に引きずられて、服屋に入った。

筹サイド

朔夜が朝私服に着替えて部屋を出るの見かけ後をつけてみたらなん

と風とデ、デ、デ、デートしているとは！

セ「篠ノ之さん、朔夜さん達が動きましたわよ。」

箒「分かった。行こう」

後で色々聞かせてもらうぞ朔夜

朔夜サイド

鈴が服屋いろいろ見おわり、現在喫茶店で一息ついているところだ。

朔「次は何処に行く？」

俺がコーヒーを飲みながら聞くと、鈴はチョコケーキを食べながら

鈴「特にはないかな。冷やかしに行こう！」

そんなこと言っている鈴であった。相変わらずで何故か安心する俺。
その後俺達は喫茶店を出ると、鈴あるものに目をとめた。それは

「第一回路上シンガーコンテスト！優勝は商品はこのペアネックレスにプロ歌手への道だ！」

鈴はさっきからハートのペアネックレスに目を止めていた

朔「ほしいのか？」

聞いてみたら

鈴「い、いらないわよ！」

そっぽを向いてそういった。可愛いねぇその仕草

朔「欲しいのか？あのペンダント？」

もう一度聞くと

鈴「う、うん…」

そう頷いた。ならやるか

朔「ならまってろ」

俺はそう言ってあの大会に出た

鈴サイド

朔夜走っていった。何処に向かったのかしら。大会を見ていろとか
言ったけど

「エントリーナンバーファイナル！ハセヲさんの登場だ！」

そう言って、出てきたのは

鈴「朔夜！」

髪をオールバックにしてサングラスをした朔夜だった。

「歌はあさきゆめみし」

朔「そらおよぐしらさぎなみまにうつるあいあかきゆらめきこのみ

をこがしてつつむ」

朔夜が歌いだした。綺麗な歌声、でも何か悲しい感じがする。

朔「ちとりとびてさりゆくをなげくことなくあるいてゆくよみのほとりあさきゆめみしながきねむりのたび」

そして朔夜が歌い終わる。

「審査発表優勝はハセヲさんです。」

朔夜に優勝商品が渡された。そして朔夜は

朔「プロ道は遠慮するわ！じゃ！」

そう言って朔夜は消えた。

朔夜サイド

朔「ほれ！鈴」

俺は鈴にペンダントを渡す。

鈴「あ、ありがとう…」

鈴は顔を下に向けてそういってきた。可愛いです。お持ち帰りしたい！

朔「鈴、それペアだけど、あいているのか？」

聞くと、

鈴「朔夜がもらって！あの！深い意味はないわ！その…記念ね！記念！再会した！」

再会した記念ね

朔「分かったもらうよ」

そう言ってペンダントを受け取りつける。そろそろ帰るか

朔「鈴、そろそろ帰るか。」

鈴「そうね。」

鈴も頷き、そして何故か腕を組んできた。

朔「り、鈴！」

鈴「いいじゃん！」

そう言ってさらに、くっついて来た。まあいいか、いやじゃないし。

それと、

朔「後ろの二人もなるべく早く帰れよ！」

朝から、俺達を尾行していた二人に言う

箒「気づいていたのか！」

セ「何時からですか！」

二人が出てきた。鈴は驚いていた。

朔「最初から。俺にばれたくなかったら、せめて、伝説の傭兵並のステルス技能を身につけてからにしな。帰るか、鈴」

鈴「そうね。バイバイ！お二人さん！」

俺達は寮に向かう

転入性は上○さん？（後書き）

次回ＶＳ鈴

なぜアーク！ゲッターじゃないよ。仮面の方のね（前書き）

一巻終了

なぜアーク！ゲッターじゃないよ。仮面の方のね

朔「まさか一回戦から鈴かよ」

俺は第二アリーナでため息をつく。なぜって戦いたくないからさ。まぁ賭をしたんだよね。負けた奴は好きなものを奢ると鈴の奴は絶対容赦なく頼むからな、正直いやだ。てか、何故アリーナの全席満員？つか通路まで？鈴のＩＳは甲龍だっけ何で読み方はシェンロン？まぁいいか。体に似合わずパーツゴツイ

朔「来い！スケイス！」

俺はスケイスをまとい、フィールドに出る

鈴「朔夜！データと違うじゃない！なによそれ！」

鈴が驚いていた。まぁ公式に出ているのが白式だしね、まぁ驚くよな。

朔「まぁ、気にするな。気にしたら負けだ。後全力で来い！」

俺は死ヲ刻ム影を出し、両手で持つ。鈴はふと鼻で笑い、

鈴「当たり前じゃない、何言ってるの朔夜。あんたこそ手抜くんじゃないわよ」

鈴は青竜刀らしきものを構えた。またも体に似合わぬ武器だな。

「初めてください！」

審判がそう言って試合が始まる。俺の鎌と鈴の青竜刀が互いにぶつかり合う。

鈴「やるじゃい！これならどう！」

鈴はもう一本青竜刀をだし斬りかかってくる。

朔「くっ！」

俺は光弾を出しながら後ろに下がる。セシリアよりは強いな。つかやりにくい。パワーが段違い！俺はスピードタイプだからね。俺はチャクラムを作り乱射するが、

鈴「甘いわよ！」

すべて斬り落とす。そして、甲龍の両肩が光だした。やばい！俺はその場から回避する。

鈴「よく避けたじゃない。しかし、今のはジャブよ！」

さらに見えない何かが俺を襲う。俺はひたすら避ける、鎌で周りを刈る。そんな作業をひたすら続けた。シールドエネルギー回復だ！

鈴「朔夜、最初の威勢は何処にいったのかな？」

ニヤけながらながら言ってきやがった。ならやってやるよ！待ってろよ今天狗の鼻をおってやるから。

朔「これからだよ。早く決着ついても面白くないだろ？」

鈴「言ってくれるわね！」

第三者サイド

箒「なんだあれは…？」

ピットからリアルタイムモニターを見ていた箒がつぶやく。それに答えたのは、同じモニターを見ていたセシリアだった。

セ「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す第三世代型兵器ですわ」

しかし、箒はそんな事は聞こえていなかった。箒はモニターに映る朔夜がまるでダンスしてるかのような動きに見入っていたのだから

箒「すごい…」

朔夜サイド

朔「うおおおおおおおおおおお！」

俺は衝撃波を全て避けながら突っ込み、鈴の懐に入る直前に鈴の青竜刀が俺を襲う

朔「簡単にはいかないか」

鈴「あたしは代表候補生よ！そう簡単にいくはずないでしょ？」

朔「それがいったんだよね。セシリアにはまぁそん時な白式のワンオフ・アビリティーのお陰なんだけどね。まぁ、やるだけやってやらぁぁぁぁぁぁ！」

死ヲ刻ム影に赤い光が宿り始めた。まぁ威力があがっただけだけどね。

鈴「はぁぁぁぁぁぁ！」

青竜刀と鎌がぶつかり合い、俺たちは螺旋を描きながら移動していた。俺はイグニッション・ブーストを使い一気に近づき

朔「俺の勝ちだ！」

鎌を振ろうとしたとき

ズドオオオオオオンッ！！

何かがアリーナのバリアを壊してアリーナに衝撃が走った。何が起

きた。客席にはすでに防御シェルターが展開していたその時

鈴「えっ！きゃあああああああああああああ！」

朔「うわっ！」

俺たちのＩＳが解除されていた。緊急事態だ、しかたがない。俺は闇の力で翼を作り、飛んで鈴の所まで近づく。翼の形は真ゲッターの翼ね

朔「大丈夫か？」

俺は鈴をお姫様抱っこしていた。鈴がすごく真っ赤になっている。何故だ？あっ！恥ずかしいのかな？

鈴「だ、だだだ、大丈夫よ！」

鈴はそう言った。そういや、鈴って俺の中にスポって入るな。何かこー、何ていやいいんだろ？うん。分かることは今の鈴がめっちゃ可愛い事だ。

朔「あれは…仮面ライダー…アーク…」

そこには仮面ライダーアークが立っていた。

鈴「朔夜あれは！」

鈴が俺に聞いてきた

朔「仮面ライダーアークだ！取り合えずやばい奴！姉貴！今から鈴をそっちに転送する！」

そう言って、鈴を転送した。

箒サイド

箒「朔夜！まさかあれ使うのか！」

私がそう言うと

朔「それしかなくね？つうか、今使ってるじゃん」

確かにそうだが

鈴「篠ノ之さん、今は朔夜があれ倒すしかないんじゃないの？」

箒「しかし！」

鈴「何故か今ＩＳがつかえないのよ！今あれを倒せるのは朔夜しかいない！あたしだって使わせたくないわよ！」

風が涙目で怒鳴り始めた。彼女も私と同じなのか。彼に、好きな人普通に生きてほしいと…

箒「分かった、ただし無事に帰ってきてくれ。」

朔「了解！姉貴もいいよな」

千「私は何も言わん！好きにしろ！」

朔「了解？」

そう言って通信が切れた。

セ「何の話ですの？篠ノ之さん？風さん？」

セシリアが聞いてきた。風が

鈴「見れば分かるわ！朔夜の全てが…」

朔夜サイド

朔「やりますかね」

俺はアークルに似たベルト、ダークドライバーを出して、

朔「変身！」

ライダーインストール・ダークネス！

俺は闇に包まれてそして闇が俺の体から離れると、顔はクウガ、体はブレイドみたいなライダー、仮面ライダーダークネスになった。

朔「久しぶりの相手がアークか、楽しめそうだな。」

俺はガーベラストレートの刃を黒くした刀、刹那を出し、アークに斬りかかる。アークは腕で俺を吹き飛ばそうとするが、

朔「甘いよ！リンディー茶に練乳入れるより甘い！」

俺はアークの攻撃をよけて

朔「タイムブースト」

タイムブーストを使う。一言で言えば、クロックアップみたいなもの。俺はアークを斬り刻む。

朔「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

タイムオーバー

俺はタイムブーストを切り、そして

朔「幕引きだ。ダークネスブレイク」

足に闇の力をためて思いっきり回し蹴りをした。

朔「今回はカブトバージョンだ。ふー、終わった。さてと、逃げる！タイムブースト！」

取り合えず逃げた。更衣室まで

朔「ふー」

箒「朔夜無事でよかった。」

箒に鈴、セシリアと姉貴に山田先生がいた。

山田「織斑くんさっき…朔「禁則事項です」酷いです。せめて最後まで言わせてください」

山田先生が涙目になった。

セ「教えてはくれないのですのね」

セシリアがそう言ってきた。そうだね話す気はあまりないね

朔「その内な、そういや、晃は？」

箒「そう言えば？」

その頃の晃

晃「ここから出してくれー！」

トイレに閉じこめられていた。助けられたのは翌日の１１時だった。

？サイド

此処が日本か、いい国だね。でも此から遣ることはあまり気が進まないな。織斑朔夜くんごめんなさい。あなたのデータを奪わせてもらうよ

？２サイド

此処が教官のいる国かそれはどうでもいい、教官に汚点を残させた

人物、織斑朔夜！わたしはお前を許さない！

？3サイド

いやっほぉぉぉ！俺転生！此処がＩＳの世界か！って事はもちろん俺が織斑一夏に転生ってわけだよな！確かに一夏に転生してたぜ！さて！俺様のハーレムストーリーを作るぜ！待ってろよ！俺の嫁たち！

朔夜サイド

まさかアークがね、取り合えず倒したが、誰が送ってきたかは想像がつく。少し警戒したほうがいいな。今日はシャワー浴びて寝よう

なぜアーク！ゲッターじゃないよ。仮面の方のね（後書き）

次回は二巻に入ります。

オリキャラ及び機体（前書き）

二巻に入る前にオリキャラ設定

オリキャラ及び機体

織斑朔夜

旧名十六夜朔夜
外見はハセヲの髪を少し長くした感じ
本編の主人公。ロキとの戦いで死んだ。何故かＩＳの世界に転生。
誰にでも優しく、一級フラグ建築士。そして鈍感。神の力とチートは健在。ＩＳは白式及びスケイス

黒島晃

外見は上条の白髪の金色の目
世界で二番目にＩＳが使える人間。そして不幸体質。幻想殺しも持っているが本人しかしらない。オンオフがきき、効果範囲は右腕全体。喧嘩が強く、そこら変の警察官なら余裕で倒せる。性格は困ってる奴を見ると考えるよりも体が動く、優しい奴。ＩＳは幻想殺し

幻想殺し
外見は右腕は打鉄、左腕はダイゼンガー、足はＳＲＸで翼はダンクーガ。武器は斬鑑刀と断空砲。ワンオフ・アビリティーは全てを無効化にする手幻想殺し

次回以降に出るキャラ
レイ・デュノア
シャルの双子の妹。実の父から道具として扱われて生活してきた少女。一言で言えばまんまシャル。けど少しシャルより大胆。ＩＳは水色のＲ－リバイブカスタム

織斑一夏

何故か一夏に転生してきた少年。自分がこの世界の主人公だと思い、自分のハーレム作ろうとする。性格は何をするにも手段を選ばず、ヲタクで変態。ＩＳはストライクフリーダム

オリキャラ及び機体（後書き）

次回からはやっと二巻

ブロンズの貴公子？いえ、女の子だよあれ（前書き）

二巻入ります。そして、オリジナル入ります

ブロンズの貴公子？いえ、女の子だよあれ

部屋替えをした次の日

山田「転入生が三人来ます。どうぞ」

レイ「レイ・デュノアです。」

シャ「シャルル・デュノアです。僕とレイはフランスからきました。同じ境遇の方が居ると聞いて、本国より転入をー」

骨格から分かるあの二人は女だな。まあ、何かあったのだろうな。まぁいいがな。シャルルが髪を下ろせばレイと見分けつかないな。それより眼帯の奴がさっきから殺気を飛ばしてきてやがる。初対面からそれはないだろう。

「きゃ…」

シャ・レイ「はい？」

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ」

某ポケットなモンスターのハイパーなボイス並の音だぜ。見てみろよ。転入生が軽くひいてるぜ。

「男子！一気に四人目！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～」

元気だなウチのクラスは、その元気を他のことに回せないのかね？ちなみに、他のクラスと学年からはまだ覗きには来ていないのはＳＨＲだからさ。教師の皆様ありがとう、職務をまっとうしてくれて、ついでに、他のクラスにも転入生が来たらしい。

千「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに姉貴がぼやく、主に仕事ではなく、十代女子の反応が鬱陶しいと顔に書いてあった。少なくとも俺はそう見えた。姉貴は学生の頃一般的な女子とつるんでなかったしな～。

山田「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってません～！」

山田先生がそう言った。忘れていた訳ではない。つうか忘れられない。少なくとも俺はね、殺気がビンビン伝わってくるからね。後見た目がからして異端だし、輝くような銀髪に白い肌に眼帯してるからねぇ

千「…挨拶しろ、ラウラ」

ラ「はい、教官」

ラウラが姉貴に異国の敬礼をしているのを見て周りはポカンと口をあける。姉貴はまた面倒くさそうに額を押さえていた。

千「ここではそう呼ぶな。わたしはもう教官ではないし、ここではお前は一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

ラ「了解しました」

ラウラはこちらを向きなおり、

ラ「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「…」

絶賛クラスが沈黙中、続く言葉を待つために、だが彼女は一言も喋らない。まるで生きた屍のようだ。周りとな一切のコミニケーションをとろうとしないようだ

山「あ、あの、以上…ですか？」

ラ「以上だ」

そして俺に近づいてきた。何か用か？

ラ「！貴様がー」

ガシッ！

ラウラが俺を叩こうとしたので、腕を掴み捻りあげ、地面にラウラの体を押しつける。女？関係ない。仕掛けてきたからにはそれなりの対応をね。

朔「相手の力量もよめないのか？ルーキー？」

ラ「くっ！私は認めない！あの人の弟であることを認めない！」

俺を睨みつけてくるラウラ。訳がわからない

山「あの、織斑くん、そろそろ解放仕上げてください。」

山田先生がそう言ってきたので、

朔「あいよ」

俺はラウラを解放した。ラウラはそのまま、席に着き、腕をくみ目を瞑った。

千「織斑、黒島、デュノア兄弟の面倒を頼む。」

朔「俺は朔夜だ。こちらは、」

晃「晃だ。」

レイ「僕はレイ、名前で呼んでいいよ」

シャ「僕はシャルル、僕も名前でいいよ」

朔「なら、俺も名前でいい」

晃「俺もだ。それより、アリーナの更衣室に行こうぜ」

朔「だな、レイ、シャルル、行くぞ。女子たちが着替えるし、」

俺たちが出ると

「ああっ！転校生発見」

「しかも織斑君達と一緒！」

HRが終わった瞬間に各クラスから情報先取りのために工作員がやってきた。お前等何だ！中には隠密のお供の段ボールを持ってる奴もいるし！波にのまれたらアウト、質問地獄だ。後、こいつらがさわられて女とバレないようにしなきゃな、なら、

朔「逃げるぞ！」

俺はレイの手を握り走り出す。晃もシャルルの手を握って走っていた

レイ「な、なに？何で騒いでいるの？」

朔「そりゃ、男子が俺達だけだからな、後、更衣室についたら、話がある。」

俺はその後は無言で歩き続けた

更衣室

俺はシャルルと晃から離れたところで着替え終わると、後ろにいたレイに向きなおり

朔「レイ、お前とシャルルは女だろ？」

レイ「そ、そんなわけないよ！朔夜、何冗談を！」

朔「骨格と所々の仕草に、最後は悪いが、鏡で、お前の体が見えちまった時に確信した。」

俺がそこまで言うと

レイ「こんなに早くバレちゃったんだ」

レイが俯いていた。

朔「何故男装なんかしていたんだ？」

レイ「父親かの命令なんだ、」

レイが説明を始めた。自分は愛人の子供で二年前に母親が死んで父親に引き取られ父親の会社、デュノア社が経済危機に陥ったために、男装して注目を浴びるための広告塔になりながら、俺と晃のデータをとＩＳのデータを盗んでこいだそうだ

朔「なるほどの、お前はどうするだ？」

レイ「私と姉さんは強制帰国でよくて牢屋行きかな？」

俺はレイと自分以外の時を止めて

朔「よくねーだろ！牢屋行きだぁ！そんなんならここにいろ！俺に頼れ、助けてやる！お前も、シャルルも！」

レイ「何で知り合ったばかりの私たちにそこまで言ってくれるの？」

朔「ダチだから、それだけだよ。俺はダチを見捨てないだけだよ。レイは牢屋に行きたいか？」

レイは首を横に振り

レイ「行きたくないよ。当たり前じゃない。」

朔「なら此処に居ろよ。助けてやる。後周りにもお前が女だと言わないから、報告しなくていいから」

俺はそう言ってレイの頭を撫でてやった。レイは赤くなった。そして

レイ「朔夜ありがとう」

レイは満面な笑みを浮かべながらそう言ってきた。

朔「どういたしまして、それと此からよろしくな。後は部屋は取り合えず俺と同じにしてもらわなきゃな、一応そちらのデータ取りの為にも、まぁ、取らせないけどね」

レイ「取らせてはくれないんだ。」

朔「当たり前じゃん、個人情報だし。後俺の秘密を教えてあげるよ」

俺は自分の過去どう言う人間だったかを話した。レイの顔は驚きを隠せていなかった。

レイ「信じられない…」

朔「でも事実さ…」

レイ「でも信じるよ、朔夜は私たちの為に此処までやってくれるんだし」

朔「ありがとう、よし、いこうぜ」

俺は時をまた動き始めさせた。

一夏サイド

なぜ、時間軸が二巻なんだよ！普通過去編からだろ！後何で俺が六組なんだよ！後幼なじみは居ないし！白髪の男子、ぶっちゃけハセヲが俺様のフラグを全て奪う！上条みたいのがシャルにフラグたてそうだし、絶対奪ってやる！この主人公の俺がな！

ブロンズの貴公子？いえ、女の子だよあれ（後書き）

次回は山田先生の模擬戦

舞い降りたのは魂を増やすもの、やってきたのはチートオブバグ（前書き）

あのキャラがやってきた

舞い降りたのは魂を増やすもの、やってきたのはチートオブバグ

さて今俺達はアリーナにいるそして目の前には

千「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

1、2組合同だから周りの声の大きさが二倍だな。いつもより気合いが入ってるな

千「今日は戦闘を実演してもらう。風！オルコット！専用機持ちはすぐにはじめられるな」

鈴「なんであたしが…」

セ「こういうのは見せ物のようで余り気が進みませんは」

二人は渋々前に出た。お疲れさま。つか何か感じるな、特に烏の気とか、烏の気とかがまさかね～、

千「やる気を出せ。ーアイツにいいところ見せられるぞ？」

姉貴が俺を見ながら鈴とセシリアに何かささやいた。俺を見ながらなにを言っているんだ？気になるんだけど。

セ「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

鈴「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

なぜか二人のやる気ゲージがＭＡＸに到達していた。姉貴あたなはなにをした。脅迫か！脅迫したのか！

セ「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

鈴「それはこっちの台詞。返り討ちよ」

千「慌てるなバカども。対戦相手はー」

キィィィィン…

何この音。空気裂く音にすっごく似ているのは気のせいか？まさかね…

山「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

やっぱりか…

朔「モンハンダイブ！」

俺はモンスターをハンティングするゲームの緊急回避をした。あの人本当に元代表候補？姉貴嘘ついてないよね？

千「さて、試合を開始するぞ。両者位置につけ」

鈴たちは指定の位置にいった。さてどうなるかな？あの二人だからすぐ負けるね。鈴たちの方が、打ち合わせ無しで試合したら、連携とれなくなって終わりやん。まあ、二人の技量と心使い次第で変わるかもしれないけどね。

千「では、はじめ！」

戦闘が始まった。おお！確かに山ちゃんの技量は凄いな！二世代であそこまでやるとは！まぁ、リヴァイブは性能は三世代初期に匹敵するからな。

千「デュノア姉！あの機体について説明してみろ！」

シャ「あ、はい！山田先生が使用している機体は…」

説明中

シャ「…知られています。」

千「ああ、いったんそこまででいい。…終わるぞ」

姉貴がそう言った時

ヒュウウウウウウ！

なにか風を切る音がするな。さらに

？「アイ・キャン・フラアアアアアアアアアアアアア

アアイ！」

その声は…

朔「からすぅぅぅぅぅぅ！」

烏が青い装甲着けて落ちてきた。つうか、ソウルゲイン着てだけど。

烏「おお！心の友よ！久しぶりの再会に、ＹＡ☆ＲＡ☆ＮＡ☆Ｉ☆ＫＡ」

よし、殺そう！俺は手にローレライの鍵を持ち

朔「先生！変質者が居るので、迎撃…いや殺害してもいいですか？」

俺は姉貴に許可を願う

千「いいだろう。許可をする。後処理はまかせろ」

姉貴が許可したので、俺はローレライの鍵を上に振り上げ

烏「ちょ！待て！さっきのはじょ…」

朔「問答無用！ロスト・フォン・ドライブ！」

秘奥義を発動した。烏は細切れになった。この世から悪は消えた。
そこに箒がとレイが来て

箒「朔夜、さっきのは？」

レイ「知り合いぽかったけど？」

朔「知らない、気のせいだ。あんな奴しらない…知らないんだ！」

俺は全力で否定した。そこに

烏「酷いぜ朔夜」

上半身と右腕が復活した烏がいた。周りの奴等は青ざめたり、口を
押さえたりしていた。

朔「取り合えず何しに来た。」

俺がそう烏に聞くと、

烏「本題に入る前に液体のり無い？体が直りにくいんだ」

烏がそう言ってきたので、俺は巨大な液体のりを出して烏に渡す。

烏「サンキュー」

烏は頭から液体のりをザバーっと被りニョキニョキっと復活した。
相変わらず意味わからないやつだな

鈴「朔夜、あれ人間？」

鈴が俺に質問してきた。周りの奴等も俺に早く答えが聞きたいと目線を送る

朔「俺も知りたい。そして分かったことがある。アイツは神、生物、無生物につづく新たなものそれが烏だ！」

俺はそう言った周りはずっこけた。

箒「それでは全く分からないではないか！」

朔「そうでもしないと、終わらないんだよ。長年一緒に居たけど分からないだ。」

俺はそう言って烏に向き直る。

烏「朔夜、本題はこれ。ほれプレゼント。」

烏はあるものを俺に付けた。それは

朔夜「やっぱりかい！」

ケンプファー化していた。

烏「実はな、周りの奴等が、朔夜（女）のアンジェルク（ＩＳ）が見たいってな、それ無理矢理こじ開けてやってきたわけ。」

朔「それで来たわけね、私は見せ物じゃないのよ。ってか何鈴は私の胸を凝視してるの！箒にセシリアってか周りのみんなまで！」

鈴「アタシより大きい、つか、男の朔夜に負けるなんて…」

箒「ものすごい屈辱だ…」

セ「まったくですわ」

朔「みんな元気出して、胸とかスタイルとかが女の魅力じゃないんだし、」

レイ「今の朔夜に言われても、意味ないよ」

朔「そうか…」

烏「さっさとやるぜ。ほれアンジェルク」

烏は天使の羽をモチーフにしたネックレス、アンジェルクを渡してきた。

朔「来なさい！アンジェルク！」

私はピンクの光に包まれてアンジェルクになる。外見はアンジェルクの羽て両腕に両足を付けた感じね。お腹が隠れてない。

烏「朔夜こっち向いて」

烏が写真をとりまくる。頭がいたい。後で半分は優しさで出来ている錠剤を飲もう

数分後

烏「じゃあな！後このソウルゲインもやるよ！」

烏はそう言って消えた。結局はなんだかんややっていくけど、いい奴なんだよね

千「授業を再会する！」

姉貴の一言で授業が再会した。八組にわかれて、機動と歩行練習をはじめた。あっ！ソウルゲインかアンジェルクを解体して、箒の専用機をつくろう！となると束姉に連絡しなきゃ！あの人なら、もう箒専用機のデータを作ってるだろうしね

朔「さてと次は？」

箒「私だ、しかしこれじゃ乗れない」

箒は打鉄を見ながら言った。なるほど、立ったままか。初歩的なミスね。

朔「ちょっとまってろ」

俺は白式を展開する

箒「何する気だ、朔夜」

朔「何って、だっこして運ぶんだけど？」

そういったら、箒は赤くなり、周りの奴等は一斉に俺を見る。何なんだよ今日は！

朔「箒、いくぞ」

箒「あ、ああ」

俺は箒をお姫様だっこして運ぶ

箒（これが伝説のお姫様だっこというやつか、前の奴には感謝しなきゃな。）

箒は何だか幸せそうだった

箒「朔夜は昼休みは予定があったりするのか？」

箒は打鉄を装着しながら言った。特にはないな

朔「無いが？何かあるのか？」

箒「なら、たまには一緒に昼を取らないか？」

箒がそう言ってきた。

朔「いいけど」

俺は箒にそう言うと箒はうれしいあまりか、立ったまま打鉄から降りた。

舞い降りたのは魂を増やすもの、やってきたのはチートオブバグ（後書き）

次回は弁当編から

弁当？サンドイッチ？いや最終決戦兵器だ！（前書き）

誤字修正

弁当？サンドイッチ？いや最終決戦兵器だ！

箒「…どういうことだ」

さて今俺たちは屋上にいる。俺の右隣に不機嫌な箒、左にレイ、目の前に鈴とセシリア何故か良い雰囲気な晃とシャルル。周りから見たらＢＬに見えるな確実に

朔「いや、飯を買いに行ったら、捕まった。鈴に」

鈴「抜け駆けは許さないわよ箒」

セ「そう言うことですわ」

箒「ちっ！朔夜を一人で行動させなければ良かった…」

朔「みんな何言ってるんだ？」

俺は何を意味しているか分からないのでレイに聞くと

レイ「はぁ～、鈍感過ぎるのはどうかと思うよ朔夜…なんて人を私

は好きになっちゃったんだろ…」

レイが最後に言った言葉がよく聞こえないな。

鈴「はい！朔夜、アンタの分」

鈴は俺にタッパーを渡してきた。これは酢豚か、どれだけ腕が上がったか楽しみだな。

朔「サンキュー」

俺がお礼を言うと

鈴「た、たまたま多く作っちゃったから分けただけよ。」

鈴はそっぽ向きながらそう言った。

朔「たまたまでも、もらえたからうれしいよ。」

セ「コホンコホン。ー朔夜さん、わたくしも今朝たまたま早起きをしてしまったのでサンドイッチを作ってみたのですが、お一ついか

がですか？」

セシリアが俺にサンドイッチを差し出してきた。何だろう？あれを見ると、愛紗や春蘭の料理を思い出す。あのダークマターを

朔「後でもらうよ。」

レイ「僕なんかが居てもいいのかな？」

レイがそんなことを言い出した。

朔「いいじゃん。此処に居たほうが安全だし。」

レイ「確かにね…」

レイも意味が分かったようで何よりだな。

箒「朔夜、それより、これを食べてみないか？」

箒が俺に弁当箱を差し出してきた。

朔「まさか、俺の分まで作ってきてくれたのか」

俺がそう聞くと箒は顔を赤くしながら無言で頷いた

朔「マジか！サンキュー。いただきます。」

俺は唐揚げを食べた。これはなかなか

朔「うまいな。これって仕込みに時間がかかっただろ。これ何処かで前に食べた気がするんだよな。何を使ったんだ？出来れば教えてくれないか？」

箒「ショウガに醤油におろしニンニクだ。それとあらかじめにコショウを少しだけ混ぜてある。隠し味に大根おろしを適量だ」

なるほど。だから後味がしつこくないのかな？

朔「さて、次はセシリアのだな」

俺はセシリアのタマゴサンドを食べる

朔「これはなかな…ごはっ！…セシリア何を入れた？正直に言ってくれないか？」

俺はそうセシリアに言う。何だ？やたらと甘かったり、場所によっては辛かったり、取り合えずヤバい

セ「写真と同じに風になるように、いろいろ入れてみましたわ」

なるほど、つまりは、作り方を見てないわけね

朔「なら今度は作り方どおりにやろうな。見た目はどうでもいいからな。」

俺は呼吸を整えて鈴の料理を食べる。

朔「うまくなったじゃん。これはなかなか。うん、あの頃とは比べものにもならない」

そう言って、俺は唐揚げをつまもうとしたら、箸が唐揚げをじーと見ていた。まさか食べたいのか？なら

朔「箒、あーん」

俺は箒の目の前に、唐揚げを差し出す。

箒「な、何をしている、朔夜！」

朔「何って、箒が、唐揚げを欲しそうに見えたから、あーん」

俺がもう一度やると、箒は唐揚げを食べた。箒の顔は幸せがいっぱいみたいな顔だった。

箒「い、いいものだな…」

朔「うまいだろ？これ」

箒「唐揚げではないのだが…うむ。いいものだ。」

何故か無言で自分にもやれオーラを放ってきていた。何故だ？俺は取り合えず、酢豚を箸でつまみ、

朔「鈴、あーん」

鈴「な、何突然！」

朔「何かやってほしいみたいなオーラが出てたから。ほらあーん」

鈴は酢豚を口に含みもぐもぐ食べた。その後セシリアにも食べさせたり、また箒や鈴に食べさせたりと、俺は落ち着いて食べられなかった。

部屋

結局俺はレイと同じ部屋になった。

朔「レイ、改めてよろしく。」

レイ「うん、よろしくね朔夜。後その機材は何？」

レイは俺の周りにある機材を見てそう言ってきた。

朔「ＩＳの機材だよ。何個か作ろうと思ってね。」

そう言った。レイが

レイ「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

レイがおもいっきり叫んだ。やっぱ驚くよな。

朔「叫ばないのレイ。周りに迷惑だよ。まあ、殆ど終わってるし、後はコアにインストールするだけ、まぁ、後一機は最初からやらなきゃだけどそれほど時間はかからないかな、」

レイ「何機作ったの？」

朔「5機、あっ！1機あげよっか？」

俺がレイにそう言うと、

レイ「い、いいの？ＩＳなんかもらっちゃって。」

朔「いいよ。こんなに作っても使わないし」

俺はそういって水色のブレスレットを渡した。

朔「機体名はビルトファルケン。こいつは、遠距離特化の機動性タイプだ。武器は後で見てくれ。俺は最後の1機、六機目に取り掛かるから、」

俺は六機目、箒専用機紅椿を作り始めた。束姉、ふざけた機体を作るなよ。まぁ、さらに魔改造するけどね

レイサイド

私は朔夜が作業に取り掛かり始めたから、ビルトファルケンのスペックを見た。何これ、バカげたスペックは、あり得ない。この機動力に射撃能力。まぁ装甲は微妙だけど。まぁ、相方にビルトビルガーって機体が居るとさらに連携技とかが使えるのか、やってみたいなぁ朔夜と。さてもう寝よっかな。明日も学校だしね

朔夜サイド

朔「もう朝か？早いな。さてと、きょう一日も頑張るか。」

そう言って、制服に着替える。さて今日が試運転だぜ。ビルガー、紅椿、そして

ディス・アストラナガン

弁当？サンドイッチ？いや最終決戦兵器だ！（後書き）

次回は前も書いた通り一夏をフルボッコかな？

現れるのは銃神、やられるのは自由の剣（前書き）

書きあがった

現れるのは銃神、やられるのは自由の剣

シャ「晃がいつも負けるのは単純に銃の特性を知らないのと、ワンオフ・アビリティーの使いすぎだね。」

晃「そうなのか？一応わかっているつもりなんだけど？」

レイたちが転入してから数日がたった日俺たちは晃を鍛えていた。土曜は午前は倫理学を習い、後はフリーなためアリーナが全解放していたからである

朔「特性がわかっていたら、避けられるだろ？お前は知識で知っているだけ、本物を知らないんだよ。だからシャルルの戦いの時に間合いがほとんど詰められるづに終わったんだよ。」

シャ「晃の機体は接近特化だからねぇ、射撃武器の特性をより深く把握しないと対戦じゃなかなか勝てないよ。」

シャルルが的確に晃に説明していた。良い感じに晃が成長したら良いがな、さてと、

朔「箒、こっち来いよ、良いものやるよ」

箒「何だ朔夜？良いものって」

箒が近づき俺にそう言った。

朔「これだよ。」

俺が指を鳴らすと、俺の横に赤い機体が落ちてきた。

箒「これは…」

朔「お前の専用機、紅椿だよ。俺が束姉からデータをもらい俺が作った機体。データより２０％性能が上がってるから。良かったら使ってくれ」

俺がそう言って箒方を向くと、

箒「私の専用機紅椿…朔夜が私の為だけの機体を…」

ブツブツ何かを言ってトリップいた。周りの奴等はズルーイとか差別とか言っていた。

鈴「何、箒にＩＳプレゼントしてるのよ！」

セ「そうですわ！不公平でしてよ」

朔「いや、箒の機体が無いから、余ったコアで第四世代機を作っただけだ。」

そう言うと周りはポカーンとしていた。

レイ「朔夜、今なんて言った？」

鈴「さっき…第四世代っていったわよね」

朔「そうだけど？」

セ「やっと各国で第三世代の試作機が導入されたばかりですのに…」

周りが沈んでいた。それよりも、

朔「箒、フィッティング始めるぞ。」

箒「ああ、分かった」

俺は紅椿のフィッティングを始めた。

そして数分後

朔「終わりだ。さて箒、試運転に模擬戦をしよう」

俺が箒にそう言うと

箒「いいだろう。やろう」

心良く引き受けてくれた。ならこっちもこいつだ

朔「来い！ビルトビルガー！」

俺は左手についている青い腕輪を掲げると、青い光に包まれて、ビルトビルガーになる

晃「朔夜がまた新しくなった。こんどは何だ…」

鈴「あんたは一体何機持ってるのよ」

朔「五機だな、いくぞ！」

俺はアサルトマシンガンを乱射して近づく

箒「せぇぇぇい！」

箒はそれをすべて避け赤いエネルギー、月牙天昇みたいなやつを飛ばしてきた。俺はそれを避けて、コールドメタルソードを引き抜き斬りかかる

箒「くっ！」

箒は俺の斬撃を受け止めた。それが狙いだよ、箒

朔「甘いよ」

俺は三連ガトリング砲を突き出し放つ

箒「くっ！早く逃げなくては」

箒は俺から離れようとするが、

朔「逃がさないよ！スタッグビートル・クラッシャー！」

俺は右手の固有武装、スタッグビートル・クラッシャーを展開しはさみ、引きずり回し、投げ飛ばす

箒「うわあああああああああああ！」

そして俺は、アーマーをパージして、ウウィングを展開し、

朔「喰らえ！これがこいつの切り札、ビクティム・ビーク！」

俺は箒を翼で斬りさき、箒のシールドエネルギーをゼロにした。俺はビルガーを待機状態にした。いやー、やはり扱いが難しいなビルガー、でもおもしろかった。そこにプラズマ砲が俺に向かって飛んできた。

朔以外「朔夜！」

一夏サイド

やったぜ！これで一人死んだ！後は上条もどきを殺すだけだ。これでやっとこの世界でハーレムが作れるぜ。

？「お返しだ。チキン野郎！」

そう言う声とともに俺に向かってエネルギー弾が飛んできた。

一「あれは…ディス・アストラナガン」

奴が立っていた場所にディス・アストラナガンが立っていた

朔夜サイド

いや～後少し展開が遅かったら致命傷だったぜ、さてとチキン野郎に

朔「お仕置きだな。ＺＯサイズ！」

俺は鎌を作り、一気にストフリの所まで行き

スト「何！」

奴はビームサーベルで俺を斬ろうとするが、

朔「甘いぜ、ルーキー」

俺はビームサーベルごと斬りさいた

スト「バカな！そんなことが」

朔「あり得るんだなこれが！」

俺はストフリを殴りまくる。どこぞのスタンド使いみたいな感じで

朔「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄！」

スト「がは！」

俺はストフリもどきを壁に投げ飛ばし、

朔「ガン・スレイブ、いけ！」

俺は無線型誘導兵器でストフリを撃ち抜く。まだまだいくぜ。

朔「喰らえ！メス・アッシャー！」

巨大なエネルギー砲がストフリを包み込む。

朔「ストフリが消えたか。」

戦闘は終わったが周りから

「うそっ！あれドイツの第三世代」

「まだ本国でのトライアル段階って聞いたけど」

俺は注目を浴びている奴目線を移した。そこにいたのは、もう一人の転校生、ラウラだった。転入からずっと一人でいる奴だ。

ラ「おい」

ラウラからオープンチャンネルで声が飛んできた。何か用か？

朔「なんだよ」

ラ「お前も専用機持ちだそうだな、話が早い、私と戦え」

そんなことか、だが

朔「ことわる。戦う理由がない。」

ラ「お前には無くても私にはある」

朔「なら、今じゃなくて、学年別トーナメントで決着つければいいだろ？それに、今さっき、戦っていてエネルギー消費してるしね」

ラ「分かった、そうしよう。」

ラウラはそのまま消えた。何とかなったな。さてと、帰りましょう。

ピット

レイとシャルルが先に部屋に戻り、晃と着替えていると

晃「朔夜、相談があるんだ。」

朔「何？」

晃「俺はシャルの事好きになってしまった」

そうなんだ。あっ！晃はシャルルのこと女と分かってないのか。だから相談してきたのか

朔「別にいいんじゃね？」

晃「相手は男のシャルだぜ！」

朔「ある人は言っていた。愛や恋いに性別や種族は関係ないと。そんな事を気にせずに当たってみたらみたら？後悔する前に。」

晃「分かった。サンキュー！」

晃は部屋に戻った。俺も部屋に戻ろう。

部屋

レイ「さ…く…や…」

俺の目の前に裸のレイが居た。こう見るとすごくバランスって

朔「悪い！今後ろ向くから。」

レイ「うん」

数分後

レイ「いいよ。後姉さんが晃にバレちゃったて。後わたしがバレたことも話した。晃もわたしたちの事を守ってくれるって」

シャルルは晃にバレたか、まぁ、晃にはよかったかもな。シャルルが女と分かって。

レイ「後姉さんは晃に惚れちゃったって、なにがあったんだろ？」

良かったな晃。これで両思いだ。赤飯炊くか。俺はそんなことを思い、キッチンに向かう

現れるのは銃神、やられるのは自由の剣（後書き）

次回はラウラをボッコやな

暴れる闇（前書き）

書き終えました。どうぞ

暴れる闇

朔「箒、話ってなに？」

俺は夕食を食った後、箒に呼ばれた。さて話って何だろう？

箒「うむ、その…学年別トーナメントで優勝したらつき合ってもらう！」

朔「はあ？」

箒がそう言って、部屋に走り去った。つき合うって買い物にか？まぁ良いが。

「聞いた」

「うん聞いた。」

「大ニュースだ！」

そんな声が聞こえたかもしれない俺が居た。まぁ気のせいだ。

次の日

セ「そ、それは本当ですの!?」

鈴「う、ウソついてないでしょうね!?」

教室に向かっていた俺は廊下まで聞こえる声が気になった。だって尋常じゃない声なんだよ。

朔「なんだ?」

レイ「さぁ?」

隣に居る、ルームメイトのレイに聞いた。さらに何か聞こえた

「本当だってば!学園中で持ちきりなのよ?月末の学園別トーナメントで優勝したら織斑君と交際できー」

朔「俺がなんだ?」

「「「きゃあああっ！？」」」

何だ！クラスに入って普通に話しかけたら、返ってきたのが取り乱した悲鳴かい。何かあったのか？

朔「で、何の話だ？俺の名前が出てきたけど？」

鈴「う、うん？そうだっけ？」

セ「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアがあははとかうふふとかいって話をそらす。俺はまずいこと言ったか？

鈴「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

セ「そ、そうですわね！わたくしも席につきませんと」

何だかよそよそしく二人は去り、周りに居た女子たちも自分のクラスや席に着く。

朔「なんなんだ？」

レイ「さあ？」

箒サイド

なぜあんな噂が流れている。優勝してつき合うのは私だけだろ！朔夜が言いふらしたのは考えられない。あの時の話が誰かに聞かれていたのかもしれない。だが大丈夫だ。私にはこれがある。朔夜がくれた紅椿がある。これがあれば負けない。負ける気がしないのだから！そしてあの時のような事はきっとならないはずだ！

朔サイド

朔「ＦＵＬＬＦＯＲＣＥ昨日より早く走るのが条件自分の限界いつも抜き去っていくのさ。ＦＵＬＬＦＯＲＣＥどんな時にでも強さという自信身体からあふれ出したら総てが力になる」

良い歌だなＦＵＬＬＦＯＲＣＥは。ライダー系の歌では一番好きだ。話は変わるがトイレが不便なんだよな～三カ所しかつかえなくて、でも一番不便はデュノア姉妹か、

ラ「なぜこんなところで教師など！」

千「やれやれ…」

この声はラウラに姉貴？何故こんなところで話を？

千「何度も言わせるな。私には役目がある。それだけだ」

ラ「こんな極東の地で何の役目があるというのですか！」

ラウラがこうまで声を荒げているのは初めてだな。話の内容はどうやら姉貴の仕事についての不満か

ラ「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力の半分も生かされません」

千「ほう」

ラ「大体、この学園の生徒など教官が教えたる人間ではありません」

千「何故だ？」

ラ「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなどー」

千「ーそこまでにしておけよ、小娘」

ラ「っ…！」

姉貴のドスの効いた声でラウラもたじろき、覇気が無くなる。言葉は途切れたまま、続きが出ないままだった

千「少し見ない間に偉くなったな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

ラ「わ、私は…」

ラウラの声は震えていた。恐怖にだ。圧倒的力の前に感じる恐怖、そして掛け替えのない相手に嫌われる恐怖。そしてラウラは走り去っていた。

千「盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

朔「そんなわけあるか！姉貴！」

千「学校では織斑先生と呼べ」

朔「了解。さて質問して良いか？」

千「何だ？」

朔「ラウラが俺を嫌っている理由はまさか第二回の…」

千「それは過ぎたことだ。それよりＩＳの練習をしとけ、おまえは戦いに強いがＩＳは初心者だ。余裕ぶっていると足元すくわれるぞ」

朔「分かってるよ。じゃあな」

俺はその場から去った。

鈴サイド

あたしは学年別トーナメントの為の特訓に来ていた。だって優勝すれば朔夜とつ、つ、付き合えるらしいしね。あたしがアリーナに出ると

鈴・セ「あ」

セシリアが居た。まかさ、セシリアも…

鈴「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

セ「奇遇ですわね。わたくしもまったく同じですわ」

やはり考えることは同じか～。朔夜は何で無意識ライバル増やしてくれるのよ

鈴「ちょうど良い機会だし、どちらが上かはきっりさせてみない？」

セ「良いですわね、この場ではっきりさせましょう。」

あたしたちは互いにメインウェポンを取り出すと。突然超音速の砲弾が飛来してきた。あたしたちはそれを避けて砲弾が飛んできた方

を見た。そこにはあの時の機体が居た

セ「ラウラ・ボーデヴィッヒ…」

セシリアの表情が苦くこわばる。

鈴「…どういうつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

あたしは連結した双天芽月を肩に預けながら、龍砲を展開する

ラ「中国の甲龍にイギリスのブルーティアーズか。…データで見た方がまだ強そうだな」

鈴「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。ジャガイモ農場じゃ流行ってんの？」

セ「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をおもちではないようです。犬でもワンと言いますのに」

あたしたちラウラに挑発をしてみたが、効果が無かった。

ラ「はっ…二人がかりで量産機に負けた奴が専用機持ちか、やたら人材不足と見える。数しか取り柄の無い国と古いしか能の無い国はな」

よくも、あたしの祖国をバカにしたわね！

鈴「よほどスクラップがお望みみたいね。セシリア、どちらが先にやるかジャンケンしよ」

セ「ええ、そうですわね」

ラ「はっ！二人がかりできたらどうだ？下らん種馬を取り合うメスに私が負けるものか」

さっきなんて言った？朔夜が種馬？あいつは許せない。朔夜の事をバカにした。たしかに朔夜は無自覚の唐変木であたしたちの気持ちは知らない。だけど誰よりも優しく、気にかけてくれて、強くてカッコいい。そしてあたしが初めてこの国来てとまどっていてからかわれた時に助けてくれたのも朔夜だった。それを種馬っていった。あたしはぜったいゆるさない

鈴「ー今なんて言った？あたしにはどうぞ好きなだけ殴ってくださ

いって聞こえたんだけど？」

セ「場にいない人間まで侮辱するなんて同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りです。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

ラ「とっと来い」

セ・鈴「上等！」

ラウラ覚悟しなさい！

朔夜サイド

レイ「今日も晃の訓練？」

朔「まあな、晃が初戦敗退は格好つかないだろ？」

俺はシャルルを横目で見ながら言う

レイ「だね。兄さんの為にもね」

晃「さっき聞いたんだけど、第三アリーナで専用機持ち三人がバトってるらしい」

俺はそれを聞いたとたん胸騒ぎがしアリーナまで走る

レイ「朔夜！待ってよ」

第三アリーナ

俺はあり得ない光景を見ていた

シャル「嘘…オルコットさんと風さんが一方的にやられてる」

そう、鈴とセシリアが一方的にやられてた。

朔「鈴！セシリア！おい！ラウラ！やめろ！」

俺は観客席で叫ぶが、フィールドには聞こえない。俺は観客席に張られているバリアを叩くが聞こえない。俺はその場でしゃがんでしまった

箒「朔夜…」

箒が俺の隣でそう呟いていた。俺には力があるのに救いにいけないのか、それ以上俺の大切な人を傷つけないでくれ！やめろ！やめろ！やめてくれ！やだ！やだ！やだ！やだ！やだやだやだやだやだやだやだやだ！

朔「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

俺が叫ぶと同時に何かが反応した。

朔「ぐるるるるる」

ハカイスル。キズツケルヤツラヲハカイスル

烏サイド

烏「それを使うな！朔夜！」

フェ「何事！烏」

俺の声にフェイトが反応した

烏「朔夜が……暴走した。」

フェ「何で朔夜が暴走を？」

烏「分からない、ただあいつが暴走したら、この次元が終わることは確かだな。」

俺がそう言ったら、周りの奴等一斉に驚く

な「な、何でなの？」

烏「あいつの能力は闇、つまりあいつの力は全てを無にかえす力だ。最初から何もなかったかのように、さすがにそれを喰らえば、俺も死ぬ。」

ティ「兄さんはどうやって正気に戻ったの？」

ティアナがそう聞いてきた。たしか…

烏「俺とアイビ、医療の神な、とおやっさん、これはポセイドンな、この三人がかりで何とか止めた」

ティ「神が二人に烏でやっとなんて…」

烏「祈るしかないな今は、」

向こうの世界の住人、なんとか朔夜を止めてくれ

晃サイド

朔夜が獣みたいな鎧を着ていた。そしてそのままバリアを壊して、ラウラに剣を斬りつける。

ラ「なんだこいつは！」

朔「がああああああああああああああああああああ！」

晃「何だよあれ！」

朔夜の後ろの空間が割けそこから大量の剣が現れて、ラウラを襲う。

ラ「こんな物！」

ラウラは停止結界を出すが

ラ「ば、バカな！結界がもたないだど！」

そのまま結界が破壊され、ラウラのＩＳが解除され、意識を失う。
朔夜の手には黒い固まりが集まる。あれはやばい！

晃「やめろ！朔夜！」

俺はラウラの前までダッシュした。そして右腕の幻想殺しをＯＮにして朔夜の攻撃を打ち消した。

朔「ナニヲスル。ジャマスルナ」

朔夜が片言で喋る。意識はあったか。そこに、

箒「やめろ朔夜！もういい、やめろ朔夜」

紅椿を装備した箒が朔夜に抱きつく

朔「ハナセホウキ」

朔夜は箒を剥がそうとするが、箒はさらに強く抱きしめ、

箒「もういいやめてくれ朔夜、今のお前は見たくない。お前はそんな奴じゃないだろ。お前は強さの意味を知り、人を守るために力を振るってきたのではないのか！今のお前は全く違うではないか！」

朔「マモ…ルタメ…」

朔夜は元の制服姿に戻り、そのまま箒の胸の中で眠っていた。

暴れる闇（後書き）

朔夜の暴走時の姿はハセヲＢ－ｓｔフォームです。次回は保険室から始まります。

説明とバンドと第2形態（前書き）

修正

説明とバンドと第2形態

朔「此処は…」

俺は目がさめると、保険室のベットに居た。確か俺は鈴たちがラウラにぼっこられてるのを見て、精神が不安定になり、暴走したんだっけ。

レイ「朔夜、気がついたんだ。」

レイが目の前にいた。何か顔が近いんだけど！さらに

箒「朔夜！大丈夫か！」

セ「気がついたのですね、朔夜さん」

鈴「やっと目がさめたのね、心配かけさせるんじゃないわよ」

箒、鈴、セシリアが隣からやってきた。鈴とセシリアはけが人なのによく動けるよな。保険室のスライドドアが開き

晃「目がさめたか朔夜」

シャル「目がさめたんだ、心配してたんだよ、みんな」

晃とシャルルが飲み物をもってやってきた。

朔「すまない」

俺はみんなに謝った。俺はベットから降りようとすると

レイ「まだ起きちゃ駄目だよ」

レイが俺の体を押さえた。俺はそのまま寝かされた

朔「大丈夫なのに、前にも暴走したことあるからその時だって特に問題なかったのに」

箒「そうなのかって！暴走！」

箒は納得したかとおもいきや驚いていた。

朔「そう暴走、俺は精神が不安定になると暴走するんだよ。いつもは不安定になってもそう簡単には暴走しないんだけど、今回は」

鈴「今回は？」

朔「鈴とセシリアが目の前でボコられるのを見て暴走したらしい」

そう言ったら鈴とセシリアは顔を下にし赤くなっていた。箒とレイは何故か暗くなっていた。

鈴（少なからず朔夜にとってあたしは特別な存在ってことよね）

セ（朔夜さんにとってわたくしは／／）

箒（私がああ言う状況になったら朔夜は…暴走してまで私を助けてくれるのだろうか）

レイ（朔夜は私が鈴と同じ状況なら同じくなってくれるよね）

四人は何かを考えていた。何四人は考え込んでるんだ？

朔「そうそう、話はかわるけど晃の右腕って幻想殺しだよな？」

晃「ああそうだけど。って何しってるんだよ！朔夜！」

朔「今日見たから。闇の神なめるな！」

そう言ったら、箒、鈴、以外が

「「「「闇の神！」」」」

どこぞのハイパーなボイスなみの叫びをあげた。うん、ぜったいあの叫び声にひけをとらないぜ、マンドラゴラに。名前あってるよな？ギロチンの下に生える草の名前？

レイ「さ、朔夜って神様なの！」

レイは顔を俺に近づけながら言ってきた。顔近いよレイ

朔「うん。冥界を統べる神だよ。まぁ、一番俺が新人なんだけどね」

晃「冗談だろ？」

晃はそう言ってきたので、てっりばやく、俺は刹那を出して、自分の首を跳ねた。

セ「さ、朔夜さん！何を！」

セシリアは顔を青ざめながら叫び声をあげた。

朔「何って、てとりばやく証拠を見せてみた。不死を。よいしょ」

俺は頭を胴体にくっつけた。いや～不死だからって痛みが無いわけじゃないから辛いんだよな。人間から神になったから骨折はする、インフルにもなる、意識不明の重傷にもなる。まぁ植物人間にはならんがな

シャル「これは信じるしかないよね…」

セ「そうですわね…」

四人は納得したようだ。

セ「それより、箒さんと鈴さんは知っているようですわね。朔夜さんの秘密」

箒「ああ、朔夜から話してくれた」

鈴「あたしの場合は怪人に襲われた時に話してくれた。ついでに二年前のＩＳ暴走事件のマゼンタ色の戦士は朔夜よ」

鈴が暴露しましたよはい。

朔「何暴露してるんだよ！鈴！」

箒「そうなのか！私は聞いていないぞ！」

セ「わたくしもきいていませんわ」

レイ「あの事件を止めたのって朔夜なの！」

そう二年前のＩＳ暴走事件、各国のＩＳの半分が何故か暴走し日本に来た。そして無差別に破壊を開始した。その時俺はディケイドに変身しコア以外を全て破壊し立ち去った。今でも各国ではマゼンタの戦士を捜査し仲間に引き込もうとしているらしい

朔「はいはい、もう話は終わり。さてと、ケアル」

俺は鈴とセシリアにＦＦの回復魔法ケアルをかけてやる

セ「痛みがひいていきますわ」

鈴「これも久しぶりよね。」

二人はそんなことを言っている。そこに

ドドドドドドドドドド

何？地震か！いや段々近づいて来る。そしてドアを蹴り破りながら女子が入ってきた。貴方がたは何者！何処にスライドドアを蹴り破る力が！

朔「何事！」

「「これ！」」

女子たちが一枚の紙を差し出す。なになに、内容変更、タックトーナメントか、俺はレイにアイコンタクトをとり、

朔「俺はレイと組む。」

レイ「後兄さんは晃とくむから、ゴメンね」

そう言うと女子は「ならしょうがないか」とか「男同士も絵になるよね」とか「朔×レイもいいよね」とか聞こえる。うん俺は正体知ってるからいいけど周りから見たらＢＬだぜそれ

朔「さて帰ろう。」

俺とレイは部屋に帰るが、鈴たちに止められるが、山ちゃんのおかげで何とかなった。

週末

朔「鈴、弾とカズはまだかな？」

俺と鈴は今某喫茶店に居る。

鈴「もうすぐ来るんじゃない？にしてもまだ続いてたのね、このバンド」

そう、俺と五反田弾と御手洗数馬と鈴でバンドを組んでいた。まぁ鈴が居なくなってからは三人だけど。バンド名は某傭兵組織からとり、ミスリルだ。

弾「オッス！朔夜に鈴、久しぶりだな。」

弾とカズ、何で蘭までがやってきた。鈴は蘭を見た瞬間ムスっとした。

朔「よう！弾にカズ、そして蘭」

カズ「そんなことよりさてと行こうぜ！スタジオに！久しぶりに四人で早く弾きたいんだ」

カズはそう言ってきた。相変わらずの音楽バカだ。

鈴「蘭じゃん、少しは成長した？」

蘭「あなただけに言われたくありません」

二人の間に火花が散り、鈴の背後に龍、蘭の背後虎が見えた。はあ～またか

朔「喧嘩はやめろ。可愛い顔がだいなしだぞ」

俺がそう言うと二人は顔を赤くなりながらにらみ合うのやめた。

弾「おまえは何人それで女を落としたんだ？」

朔「落としてねぇよ。行くぜ」

俺たちはスタジオに向かう。

スタジオ

鈴「此処に来るのも一年ぶりね」

鈴はキーボードをいじりながらそう言った。

朔「確かにな、」

俺はギターをチューニングしながら相打ちを入れた。

カズ「準備はいいか？」

カズがそう言うと、弾は

弾「いいぜ」

ベースを持ち直しながら、そう言った。格好つけたつもりか？まぁ良いんだけどさ。

鈴「こっちも良いわよ」

朔「構わない」

俺たちがそう言うと

カズ「1、2、3！」

カズがスティックを叩き始める。それから俺たちは演奏を始めた

朔「？～？～？」

歌っているのはＧＡＣＫＴのＪｏｕｒｎｅｙｔｈｒｏｕｇｈｔｈｅＤｅｃａｄｅだ。この世界にはこの歌ないから、楽譜を異世界から取り寄せたぜ。そんなこんなでスタジオの使用時間いっぱいまで楽しんだ。

トーナメント当日

朔「さて俺の対戦相手は…ラウラに箒か…」

レイ「初戦からボーデディッヒさんか」

晃「俺たちの相手は織斑一夏？だれそれ？」

シャル「三番目の男でＩＳが使える人だよ、晃」

晃の疑問にシャルルが答える。

晃「ありがとうシャル」

シャル「どういたしまして。」

すげぇいい雰囲気なんだけど向こうは

晃「行ってくるよ。朔夜」

朔「かってこいよ！」

シャル「行ってくるね、レイ」

レイ「頑張ってね姉さん」

二人はフィールドに向かう

晃サイド

フィールドに出ると打鉄と朔夜を襲撃した機体が居た。

シャル「あれって！」

シャルも気がついたようだ。シャルもあの機体を睨む

晃「さてあれをぶん殴んなきゃな」

俺は斬鑑刀を構え、イグニッション・ブーストで近づくが、

一「主人公をなめるな！屑が！」

ビットを展開し、攻撃してきた。俺はそれを交わすが狙いは、

シャル「きゃっ！」

シャルだった。

一「よそ見してる場合か！」

奴はビームサーベルで斬りかかる。俺はそれを防ぎ、背中の断空砲をゼロ距離で撃つ

晃「これならどうだ！」

煙がはれると奴は無傷であった。さらに青い光をまとっていた。

シャル「大丈夫晃」

シャルは敵の相方を倒して、俺に近づく。奴は口を開く

一「初めまして、シャルル・デュノア、いや、シャルロット・デュノアのほうが正しいか」

それを聞いたシャルは青ざめて口を開き、

シャル「何であなたが僕の名前を！何であなたが知っているんだ！」

シャルはそのまま奴に突攻していった

晃「シャル！何してるんだ！お前らしくないぞ！」

さらに奴は

一「お前の秘密は知っているぜ、妹のほうもな。言われたくなければ俺のものになりな」

奴はシャルに脅迫をしてきた。なんつう外道だ。シャルはそれを聞いた瞬間止まり、黙り込んだ。何で奴がシャルの事を！許さねえ、シャルをものにするとか言いやがるか！

晃「クソ野郎が！」

俺は奴に突っ込むが逆に迎撃される。俺は地面に逆さまに落ちる。奴はそのまま、俺の顔を踏む

シャル「晃！やめて！それ以上は命に！」

シャルが涙目で叫ぶ。奴は

一「これ以上みたくないなら、分かってるな？」

シャル「分かった、僕は…」

畜生！俺はシャルを守るって言ったのに！なのに守れないのか！力

が力がほしい！

ほしいか？

何かが俺にささやきかける。欲しいさ。シャルを守る力が！

ならやるよ！人をこえ、獣をこえ、神をもこえた力を！

晃「やぁぁぁぁぁてやるぜぇぇぇぇ！」

俺のＩＳが光出す。

一「なんだこれは！」

奴は驚いていた。俺は奴の足を掴み、壁に投げ飛ばした

晃「何って、幻想殺しの第二形態だよ」

俺の幻想殺しは前朔夜に見せてもらったファイナルダンクーガに似ていた

シャル「晃が無事だ。良かったよ～」

シャルが泣き出した。俺はシャルの頭を撫でて

晃「後で言いたいことがる。だから少しだけ待ってくれ」

俺はそう言って、イグニッション・ブーストをして、さらにワンオファビリティーの幻想殺しを発動し、殴りとばした。さらに背中のファイナル断空砲を展開し、

晃「貴様の愚かな幻想ごと破壊する！」

そう言ってファイナル断空砲を放つ。

一「主人公の俺がぁぁぁぁぁ！」

奴は倒れて俺たちの勝ちになった

更衣室

シャル「言いたい事って何？」

晃「あの、その、俺はお前のことが、す、好きなんだ！女って分かる前から！」

俺がそう言うと、

シャル「本当…なの？」

晃「ああ、だから答えを聞かせて欲しい。」

シャル「僕も晃の事が好きだよ。だからその、よろしくお願いします。」

そう言ってシャルがキスしてきた

説明とバンドと第2形態（後書き）

次回もよろしく

ＶＴと乱入、現れるマゼンタ（前書き）

本日二度目の更新

ＶＴと乱入、現れるマゼンタ

朔「俺たちの番か」

レイ「頑張らないと」

俺たちは晃の試合が終わり、機体の最終チェックをしていた。

朔「行こうぜレイ」

レイ「うん。」

俺たちはＩＳを機動させて、フィールドに出た。

ラウラ「データにない機体だと！」

ラウラが驚きの故に顔がおもしろかった。そうです。だって俺は今ビルトビルガーだしレイはビルトファルケンだもんな

朔「そう、データにない機体。つねに予想外の事を想定しとくことをおすすめする」

俺はそういってアサルトマシンガンを構える

ラウ「まぁ、これで待つ手間は省けた。」

朔「そうだな、」

試合の合図がなった

朔・ラ「ぶっつぶす！」

俺とラウラは同時に動いた。俺はマシンガンを連射しながら一定の距離を保ちながら戦う。

レイサイド

私は箒の紅椿と戦っていた。紅椿の機動とパワーはとてもすごいだがビルトファルケンはさらに上をいっていた。私はオクスタンライフルを構えて、

レイ「朔夜じゃなくてゴメンね！ファイヤー！」

私はオクスタンライフルからエネルギー弾を放つ。しかし箒はそれを避けた。これは想定ない。私はさらにスプリットミサイルHを乱射した。箒はそれに当たるさらに高出力の時に出来るフレシキブルで外れたビームを当てる

箒「何！」

箒はあまりの出来事に驚いていた。その顔が見たかったの、私はさらにオクスタンライフルを構えて

レイ「モードW」

オクスタンライフルWは実弾とビームを同時発射が出来るモード。ビルトファルケン一番攻撃力の高い武器でもある私はそれをゼロ距離から

レイ「ファイヤー！」

箒に向かって放つ。しかも連射で箒の紅椿はシールドエネルギーがゼロになる

箒「無念」

箒はそう呟いていた。さて朔夜の手伝いにいかなきゃね。私は朔夜の元に向かう

朔夜サイド

朔「せい！」

俺はワイヤーブレードをコーメタルソードで破壊しながら、三連ガトリングを放つ

ラウラ「無駄だ！」

ラウラは停止結界で弾をすべて止めた。やっぱりか。それに射撃武器は全て弾切れか、なら、やるしかないか

朔夜「アーマパージ」

俺はビルトビルガーのアーマーをパージした。そしてソードを構えて突っ込む。

ラウラ「無駄だと言っているだろ。」

そう言って停止結界を展開して俺の動きを止めた。そしてレールカノンを構えて放とうとしたときに

レイ「やらせないよ」

レイがオクスタンライフルから実弾を放ち、弾の軌道をそらした。

レイ「お待たせ。」

レイが俺の隣にくる

朔「箒は？」

俺がレイに聞くと

レイ「お休み中だよ」

レイが向く方を見ると、箒が悔しそうにしていた。まぁ、それは誰でもそうか。レイとは相性が悪いからな～負けるのは当たり前か

朔「いくよ、レイ」

レイ「了解！」

レイがビームを撃ちながら牽制する。ラウラはそれを避けて、レイにワイヤーブレードを放つ、その隙に俺はコーメタルソードで斬りかかる。

ラウラ「ちぃ！小癪な！」

ラウラは俺の攻撃をぎりぎりでかわした。そこで俺を停止結界で動きを止めるが

レイ「喰らえ！」

レイの攻撃に注意をひかれ、停止結界が解かれた。

レイ「はぁぁぁぁ」

レイがロッシュセイバーで斬りかかると停止結界で動きを止められ

るが、俺が攻撃して、レイが脱出した。

朔「レイ！パターンＴＢＳだ」

俺がそう言うと

レイ「任せて！」

笑顔で俺に答えてくれた。

レイ「喰ら！」

レイはスプリットミサイルを連射して煙幕を作る。

ラウラ「無駄な真似を！」

ラウラはそう言うが、

朔「それはどうかな？スタンショック！」

俺は相手を麻痺にさせるスタンショックを喰らわせた。そしてスタックビートルクラッシャーでラウラを殴り

朔「アインス！」

俺はラウラをハサミ上げ

レイ「ツヴァイ！」

レイがWモードでラウラを撃ち抜くさらに

朔「ドライ！」

俺はラウラを投げ飛ばし

朔「ツインバァァァァド」

レイ「ストラァァァァイク」

ラウラを翼で斬りさいた

ラウラサイド

こんな所で負けるのか…私は…私は負けられない！負けるわけにはいかない。私は戦うためだけに作られ、生まれ、育て上げられ、鍛え上げられた。私は優秀であった。常に最高レベル維持し続けた。世界最強兵器ＩＳが誕生するまでは、すぐに私にも適合性向上のためナノマシン処置を行われたが、適正がないため、出来損ない烙印を押された。世界は一変した。私は暗闇の中を転がり落ちた。そしてあの人に会い。私はまた最強の座に舞い戻った。私は常に彼女になろうと、努力した。凛々しく強く堂々した彼女にある時私は聞いた。どうしたらなれると、しかし彼女の答えは「私には弟がいる。あいつを見ていると分かる。本当の強さ、意味がな」優しい笑みを浮かべながら言った。そんな彼女は私が目指したものじゃない。だから彼女に汚点を残した奴を許さない！

ＶａｌｋｙｒｉｅＴｒａｃｅＳｙｓｔｅｍ起動

朔夜サイド

ラウラの機体が粘土の用に形を変えさらに

ウエポン

エクストリーム

ガイアメモリがラウラの体の中に取り込まれた。

朔「レイ！箒と一緒に下がってくれ。」

俺はそう言ってダークドライバーを出し

朔「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

俺はダークネスに変身して、ウエポンDと戦う。俺は刹那を使い、受け流し、そして斬りさく。そして、殴り、蹴りを放ち、きめようとしたら

真人「そこまでだ！朔夜」

真人が鈴を人質にとっていた。さらに河童の魔化網（漢字変換できないため、適当に入れさせてもらいました）がセシリアを人質にとっていた

朔「真人テメェー」

俺は真人を睨む、あいつからロキの気配が！まさか融合したのか！さらにシェルターを解除しやがった

真人「人質を殺されたくなきゃ、変身を解きな！」

鈴「ダメ！解いちゃダメ！」

鈴がやめるように言うが、俺は変身を解いた。周りからは「嘘！」とかいろいろ声があがっていた。俺はウエポンの猛攻を喰らう。

真人「きゃはははは！いいねぇ、今度はこっちが一方的にやれるなんて」

セ「卑怯ですわ！」

鈴「やるならちゃんと戦いなさいよ！」

真人「人質は黙ってろ！」

真人はセシリアと鈴に電撃を流す。

朔「やめろ真人！」

真人「安心しろ！殺しはしていない！」

チョウ「最近の美男子は過激ね」

鈴がチョウ蝉に変わっていた

？「はーはははははは、はーはははははは！」

この笑い声は！まさかね、

志郎「すり替えておいたのさ！」

朔「志郎！」

志郎「友のため、次元を越える男！スパイダーマッ！」

真人「しかしまだ人質は…」

真人はそういうが、

志郎「横を見てみろ！」

セ「ありがとうございます。」

ケン「俺の友の為だかまわん」

ケンシロウが魔化網を殴りとばして、セシリアを救出していた。烏、おまえは何がしたい…世紀末救世主を送るなんて

志郎「朔夜！これを！」

志郎が俺が二年前に整備の為に烏に渡したディケイドドライバーを投げてきた。

朔「ナイス！志郎！ラウラ、今助けてやるよ」

俺がそう言うと、

ラウラ「…助けるだとむりだろ…そんなぼろぼろの体でか？それに私はもう国にも必要とされんだろ…人外と化した。いっそう殺してくれ…」

ラウラがそういってきた。殺してくれだと

朔「ふざけるな！何言ってやがる！世の中には生きたくても生きら

れない奴がいる！さらに必要とされてないから？ふざけるな！周りではなく、ラウラお前はどうしたい！生きたいのか、死にたいのか」

ラウラ「私は…私は、生きたい！…だから…助けてくれ」

ラウラはそう言った。俺には、泣いて、苦しくて、助けを求めているように見えた。

朔「今助けてやる…変身！」

カメンライド・ディケイド

俺は仮面ライダーディケイドに変身した。

「あれって二年前の事件を解決した、戦士だよね」

「まさか織斑くんだなんて」

ラウラ「お前は一体何者なんだ？」

ラウラが訪ねてきた。そして俺は答えた。

朔「通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

俺はライドブッカーで斬りかかり、さらに俺は蹴りと殴りを入れて攻撃し、そしてあるカードを入れた

朔「使わせてもらいますよ、本郷さん」

カメンライド・イチゴウ

俺は初めて誕生したライダー仮面ライダー一号になる。

朔「ライダーきりもみシュート」

ラウラを思いっきり回転をかけてなげる。そして

朔「これでも喰らえ」

ファイナルアタックライド・イ・イ・イ・イチゴウ

朔「セイヤー！」

ライダーキックをきめるが、まだ生きていた。ならまた決めればいい。

カメンライド・ヒビキ

俺は響鬼になり、

朔「最初からきめる」

ファイナルアタックライド・ヒ・ヒ・ヒ・ヒビキ

朔「音撃打・猛火怒濤の型」

俺は響鬼の必殺技をラウラに喰らわせると。ラウラは元に戻った。

ラウラ「すまない。私のせいで」

朔「気にするな。今は寝ていろ。」

ラウラ「そうさせてもらう。」

そう言ったら何かがつながった気がした。そこで何かラウラと話した気がした。それより今は、

朔「真人覚悟しな」

俺はディケイドに戻り、真人を睨む、真人は河童何かをして、バケガニにしていった。

朔「チョウ蝉！烏に響鬼をよこせと言ってくれ」

チョウ「それならすでに手配済みよ！」

チョウ蝉が暑苦しい笑みを浮かべた。遣ってきたのは

雪奈「朔夜！心配かけさせるな！」

幼なじみの海東雪奈である。俺は雪奈を抱きしめて、

朔「ごめん。それより手伝ってくれ」

雪「分かってるわよ」

雪奈はディエンドになり、響鬼を喚び、俺がファイナルフォームライドをさせた。

朔「やるか！」

俺が音撃棒を持つと

雪「ええ」

雪奈は音撃弦、志郎は音撃管を構えケンシロウは

ケン「はっ！」

上着を気合いで破り、音撃棒を構える、そしてバケガニにそれぞれダメージ与える。イメージはディケイドの響鬼の世界のバケガニ戦だ。

朔「これで終わりだ！」

俺が最後に叩くと、バケガニは消えた

ＶＴと乱入、現れるマゼンタ（後書き）

次回は二巻最後に入ります。

説得と真実と武力行使（前書き）

二巻終了

説得と真実と武力行使

朔「さてと何故囲まれている？」

俺はバケガニを倒し、みんなを元の世界に帰したら、教員がＩＳに乗り、俺を囲み始めた。

山「織斑君、お願いがあります。」

山ちゃん先生が俺にアサルトライフルを向けてそういってきた。俺は一回ため息をつき

朔「山田先生、それ人に頼む態度じゃないよねぇ？それに頼みたい事ってどおせ、変身を解き、ツールを渡せとかだろ？あいにくディケイドドライバーは俺しか使えない。残念でした～。それにこの世界の技術じゃ造るどころか解析も出来ないよ？」

山「それでもそれは…朔「殺されたくなきゃさっさとどけ！」っ！」

俺は殺気を全開にして教師たちを睨む。そしたら教師たちはたじろき、俺は更衣室に向かう。さてとやることといっぱいあるな。

朔「晃にシャルル」

俺は更衣室で仲良くいちゃついてる二人に話しかける。

晃「お疲れさん」

シャル「お疲れレイ」

二人は俺たちに気づき、そう言ってきてくれた。俺はある物を取り出した。

朔「二人にやるよ。結ばれた祝いに」

俺は晃にアルトアイゼン、シャルルにヴァイスリッターを渡した。

シャル「さ、朔夜！ＩＳなんてもらえないよ」

晃「そうだぜ！」

二人が俺に帰そうとするが、俺はこう言った。

朔「もともとおまえ等のために造ったものだ。それにシャルル」

俺は小声でシャルルに、

朔「これは夫婦機なんだぜ？ちゃんと合体技とかもある。晃の隣で戦いたいだろ？ほかの奴にとられたくないだろ？」

俺はシャルルにそう言ったら

シャル「ありがとう朔夜！僕のことを特別にシャルって呼んでいいよ！朔夜と友達になれてよかったよ」

突然そう言ってシャルの機嫌がよくなった。計画道理だ！こころよく引き取ってくれたぜ。俺はケータイを取り出し、ある番号にかける

朔「烏？俺だ。実は頼みたい事があってな？もう手配済みだって！

さすが烏！分かってるな。じゃあ、明後日交渉が終わったら。また連絡する。」

俺はケータイをしまい、着替え始めた。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と…』

俺は醤油ラーメンを食べながらテレビをみていた。やはりラーメンは醤油にかぎる。レイは味噌ラーメンを食べていた。

朔「レイやはり予想通りだな。」

レイ「だよね。朔夜、一味とって」

朔「ほらよ」

レイ「ありがとう」

当事者なのにのんびりしていて周りから批判喰らう？知るか！着替え終わった後は政府からの勧誘、教師陣からの話とデータ撮らせろときたり、しょうがないからＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしてきて疲れてるからいいだろ？さらにはなぜか女子がピ〇ミンみたいについてくるし、もう何事だよ。おじさんやだよ。

朔「ごちそうさま。」

そう言って食べ終わると、女子たちが

「…優勝…チャンス…消えた…」

「交際…無効…」

「…うわあああああああああああんっ！」

バタバタと走って消えていった。何事だよ？

朔「何なんだ？」

レイ「さあ？」

一人箒がそこに立っていた。何故かもじもじしながらね。俺は近づき

朔「どうした箒？」

俺が箒の顔を覗き込むと、箒は顔を真っ赤にして、

箒「何でもない！」

学食を走り去っていった。何がしたいんだ？箒は

レイ「朔夜、女心を少しは分かろうよ」

女心をねぇ、そこに山ちゃん先生が現れて、大入浴場を使えることを聞いて俺たちはどうするかを考えながら進む。非常にまずい！何故かレイとシャルは入らないと言って、脱衣所で待つことにした。俺が脱衣所で待つのに

朔「いい湯だ～」

晃「だよな～」

俺たちは風呂につかっていた。今までの疲労がとれるぜ。そこにがらがらっと音がし、ぴたぴたっと音が聞こえた。

レイ・シャル「おじゃまします」

レイとシャルだ！俺たちはすぐに、

朔・晃「失礼しました！」

俺たちが風呂を出ようとしたら、レイたちが俺たちの手を握り

レイ「待って！話したいことがあるから！」

レイは俺を風呂に引き戻し、話し出した。

レイ「私はこの学園に残ることにしたよ。朔夜の居る学園に」

朔「そうか…」

レイ「後、自分のあり方もね。」

そうレイが言ってきた。あり方か…

次の日の朝

山「転入生と言うか、説明し直しですかね」

そう山ちゃんが言うと、女子制服のデュノア姉妹が入ってきた。

レイ「改めて姉さん共々よろしくね」

そうレイが言うと、教室のドアが壊れ、鈴が現れた。

鈴「さ～く～や～、死ねぇぇぇぇぇ！」

鈴が龍砲を撃ってきた。さてと打ち返すかな？その時黒い何かが、俺の前にやってきて、龍砲を防ぐ。ラウラだった。

朔「サンキューラウラ、機体は大丈夫なのか？」

ラ「予備で組み直した」

そう言ってラウラは俺に近づいてきた。何かを感じるやばい！

朔「晃シールド！」

俺は晃を盾にして、ラウラの何かを防ぐ

ラウラ「朔夜の消しゴムか…どけ！後朔夜は私の嫁にする！異論はみとめん！」

なんて言いました？嫁？断固拒否する！

朔「断固拒否する！」

俺は某乙女座のフラックファイターのハム仮面みたいにいう

晃「俺は消しゴム…」

シャル「大丈夫だよ、消しゴムじゃないから、僕にとってはお、王子様だから／／」

晃「シャル…ありがとう。シャルが居てくれて良かった」

シャル「晃／／」

ラ「王子様？貴様は見る目がないな、そいつは消しゴムで十分だ」

そうラウラが言ったら、晃は沈んだ。シャルは

シャル「覚悟はいい？」

ヴァイスリッターを展開し、俺が遊び半分で付けたリボルビングステークをラウラに向けて

シャル「全弾もってけ！」

ラウラに放つ。ラウラよ哀れなり！

デュノア社前

朔「さて行くか」

俺は社長室に向かう。俺は社長室に入る

朔「さて交渉だ、社長さん」

「何をだ？」

朔「あんたの娘たちをこちらに引き取る。代わりに、このデータ、ゲシュペンストのデータと武装をくれてやる。どうだ？」

「娘？うちには娘はいないが？」

社長がそんなことを言うので、俺は顔面を殴ってやった

朔「娘じゃない？ならなんだよ！」

「道具だ！」

朔「やはり貴様は屑だ！俺が引き取る。データはくれてやるよ！じゃあな。テメーが朝日を拝められたらな」

俺はそう言って出ていった。俺は烏に電話をして、シャルとレイの戸籍を作らせ。烏が作った会社黒金のテストパイロットするよう頼んだ。遊びで作ったのが、ＩＳ界のアジア第一位に輝くのはどうよ。そのことをシャル、レイに話した。余談だが、デュノア社は何者かにより解散した

説得と真実と武力行使（後書き）

次回はオリジナルだよ

来訪者はスーパーコーディネイター？現れる魔法少女（前書き）

キラファンすいません。ウィッチーズ数人参戦。

来訪者はスーパーコーディネイター？現れる魔法少女

朔「…」

俺がレイたちを引き取ってから数日、今は俺は朝早くに剣道場に居る。たまたま早く目がさめたからだ。それなので久しぶりに舞をまおうと思ってきた。俺はゲキファンを取り出し意識を無にして舞を舞始めた。

箒サイド

私は日課になっている真剣の鍛錬のため、剣道場に来てみると、朔夜が舞を舞っていた。何というか、様になっている。私の神楽舞よりキレイに舞っている。私はそれに見とれてしまっていた。

朔夜サイド

俺は一度舞うのをやめると、道場の入り口に箒が居るのを見て、

朔「何してるんだ箒？」

俺が箒に話しかけると

箒「い、いや、そのだな、真剣の鍛錬をしようと思ってな、」

何かをごまかすように早口でそう言ってきた。何を隠しているんだ？まぁ良いけど。

朔「そっか、なら俺は立ち去るかな。邪魔になりそうだしな」

俺がそう言って立ち去ろうとしたら

箒「朔夜！じゃ、邪魔じゃないから、見ていってくれないか？その、し、指摘をしてもらうために。」

箒がそう言ってきた。指摘のためにか、俺のが役にたつのかねぇ？

俺は刀は我流だしな

朔「かまわないけど、俺の指摘が役にたつか分からないぞ？箒と同じ流派じゃないし」

箒「かまわない。…朔夜と居られるのが重要なのだ…」

朔「何だ？最後が聞こえなかったんだけど？」

箒「気にするなこちらの話だ。」

独り言か、ならいいか。さてと、箒が刀を振り始めた。なかなか綺麗なものだが、今一、スリ足がまだ遅いな。

朔「なかなかいいんだが、足がまだ今一だな。俺から見るとだ。」

箒「そうか、ありがとう。私はシャワーを浴びてから帰る。ではまた後でな」

箒はそう言って、部活棟のシャワー室に向かう。さて俺も行くかな

部屋に。俺は部屋に向かう。

外

俺は今寮に行く途中だった。そこに人のパイロットスーツを着ている人が居た。あのパイロットスーツはまさかね…俺が近づいてヘルメットを取るとはぁ?誰ですか?女の子?でも誰かに似ている。思い出した!キラ・ヤマト!さて取り合えず、部屋に運ぼう。

キラサイド

キラ「…此処…は?」

私が目をさますとそこは見知らぬ部屋、見知らぬ場所だった。確か私はアスランのイージスの爆発に巻き込まれて死んだんじゃなかったの?分からない。それに今の私はシャツに短パン?

?「あっ!気がついたか?君はうちの学園で倒れてたんだぜ」

そう言ってシャワー室らしき場所から、セミロングの白髪の少年、私より年上の人が上半身裸で髪をふきながら現れた。結構たくましな／／てなに見とれてるんだろ私は!さっき学園って言ってなかった

朔夜サイド

なぜかキラ・ヤマトらしき人物が顔を赤くしながらこっちを向いていた。風邪かな?

朔「ちょっとごめんね」

俺はキラ?の額に自分の額をくっつける。少し暑いな。でもこれな

ら少し寝ればすぐ治るな。

キラ「あ、あの！」

キラ？らしき人が話しかけてきた。

朔「あっ悪い俺は織斑朔夜。ここＩＳ学園の一年生だ。君は？」

キラ「私はキラ・ヤマト、連合軍所属鑑アークエンジェルのパイロットです。」

やっぱりですか！さてなにから話そうかな？色々あるからな～

朔「さて驚かないで欲しいんだけど、此処は君の居た世界じゃい。簡単に言うなら、パラレルワールドだ…」

俺はそう言ってキラに説明をした。彼女も驚きが隠せないようだ。何せ彼女にとっては可能性男である原点を話したからである。

キラ「そうなんだ…」

キラが暗くなっていた。俺はそんな彼女を優しく抱きしめて

朔「悪いな、やな話を聞かせてしまって」

そう言って謝罪した。彼女の反応は

キラ「ううん、いいよ私も助けてもらったし。」

そう言って俺を許してくれた。さすがキラだ。心が広い！

朔「これは君の持っていた所持品」

そう言って、青い指輪を渡す。多分ＩＳだと思う

キラ「私はこんなものを持ってなかったよ」

なるほど全てが分かった。こいつ誰かが送った転生者だよ！何この世界！転生者率高いよ！

朔「多分君の愛機が変わった奴だよ。よくある転生者のパターンだね。」

キラ「まさかストライク…」

キラは指輪をまじまじ眺めていた。取り合えず姉貴に連絡をしよう。俺は姉貴にこの事を教えた。キラには元の世界に帰れると話したが、この世界に居ることにしたらしい。

時は昼まででのぼり、俺はキラの生活必需品を買いに出かけた。扱いはレイたちと同じにした。そのさい烏にこの会社あげるとか言われた。つうか押しつけられた。

キラ「ここまでしてくれてありがとう、朔夜」

朔「好きでやってることだからな。本当によかったのか？帰らなくて、」

キラ「うん、きっとこれも何かの運命だから。」

キラはそう言って笑いながらそう言ってきた。

朔「そうか、なら俺は何も言わないよ」

そう言って俺たちは洋服屋をまわった。そして突然銀色のオーロラが現れたまさかの…中からは五人の少女と黒い巨大な物体、ネウロイだった

キラ「何あれ…」

キラはネウロイを見て、呆然としていた。

ミーナサイド

私たちはネウロイを倒すために戦っていたら、突然銀色のオーロラに飲み込まれて、見たことのない街に宮藤さんリネットさんサーニャさんにエイラさんたちと居た

エイラ「どうするんだよ！てか此処どこだよ！」

サー「…分からない」

リネ「それよりもネウロイが街を壊しちゃうよ」

芳「止めなきゃ！」

宮藤さんがそう言った。確かにそうね、今はネウロイを止めなければ、私たちは攻撃を開始した。

サ「いつもと…違う」

エイラ「確かに、攻撃が喰らってない。」

確かに、今回のネウロイは全くこちらの攻撃を喰らっていない。ネウロイの攻撃がこちらに向かってきた。私はとっさに防御したが耐えられなくて、シールドは破壊され、地上に向かって落ちる。さらに、敵の攻撃がこちらに向かってとんできた。これで終わりなのかしら?

プロテクション

何か無機質な音が聞こえるのとともに何者かに抱き寄せられていた。

?「大丈夫か?」

白髪のセミロングの私より少し年下の少年だった。その少年は私を本当に心配そうに私の顔を見ていた

ミ「ええ、大丈夫よ。」

私がそう答えると、

?「それはよかった。」

少年は笑顔でそう言った。私はその顔にどきっときてしまった

朔夜サイド

朔「飛べるか?」

俺がそう聞くと、ミーナは

ミ「え、ええ、飛べるわ」

ミーナは顔を赤くしながら言った。大丈夫か？

朔「おまえはそこに居ろ。」

俺はそう言って、シラードを構えてネウロイに突っ込む。

朔「一気に終わらせる！秘奥技・重装甲破！」

ネウロイをまっ二つにしコアを見つけシラードからＧＴ－Ｚに武装を換え、コアを撃ち抜いた

エイラ「すごい、私たちが五人がかりで倒せなかったのを一人で…」

リネ「すごい…」

周りのウィッチは驚いていた。

来訪者はスーパーコーディネイター？現れる魔法少女（後書き）

原作キャラの言葉つかいがおかしかったら、指摘お願いします。

異世界からの来訪者（前書き）

龍の骨さんとのコラボ

異世界からの来訪者

たけしサイド

俺たちはハジケ道場たちあげて数カ月は経つけど依頼があまりこない。そんなある日

たける「依頼がきてる！しかも上位だ！」

その依頼を見ると

モーバイレーツを朔夜に届けろ依頼主黒葉烏依頼内容このゴーカイジャーの変身ツールを無事平行世界に居る朔夜に届けてくれないか？移動手段はそこに書いてある。無事届けたら好きなものをやろう。エロいものは駄目だぜ。

ダイチ「エロは駄目か…」

ダイチは落ち込んでいた。好きなものだから、エロいのを頼もうとしたのか、朔夜ってあのアビスの世界であった朔夜さん！依頼主を見ると、あのストロンガーに変身した烏さん！久しぶりに会えるのか、成長したところを久しぶりに見てもらえるな

朔夜サイド

俺は自己紹介をした後ウィッチたちを連れて、ＩＳ学園に連れていった。そして俺が学園について最初に言ったことは

朔「まず、ズボンかスカートをはいてくれ！」

リネ「はいてますけど？」

と言って、リネットは自分のシャツをめくってパンツを見せてきた。

朔「うちの世界じゃそれは下着だ！警察に捕まるぞ！取り合えずこれに着替えろ！」

そう言って学生服を渡した。疲れる。今日は疲れる。キラを助けたのはまだ良い、常識がある。ウィッチの方はこちらの世界と常識が違って困る。こんな所を誰にも見られなくて良かったよ。さて夕飯の時間か、

ミーナ「さて朔夜くん、いろいろ聞きたいのだけれども良いかしら？」

そう言ってミーナが着替え終わってやってきた。

朔「何が聞きたい？まぁ、聞きたいことは大体は想像がつくから、飯の時で良いか？」

ミーナ「構わないわ。」

ミーナがそう答えた。そして学食に向かう。

朔「さてとまずは、ここはあなたがたにとって平行世界、パラレルワールドとでも言うのかな。」

芳佳「あの平行世界って何ですか？」

芳佳が聞いてきた。まず此処から説明しないとか

朔「一言で言えば違う未来をたどった世界だ。」

リネット「違う未来をたどった世界？」

リネットが首を傾げながらいった。絶対頭に？マークがあるよな

朔「そう、違う未来をたどった世界だよ。始まりは皆同じ、しかし、未来は違う。例えば、俺がカツ定食を頼み、はじめに食べたものが味噌汁だった。しかし違う世界では同じものを頼んだがキャベツの千切りを食べた。同じメニューでも違うものを食べた。これが平行世界かな。またの言い方は可能性の世界かな」

エイラ「今一分からないな」

エイラはそう言って、カルボナーラを食べていた。俺説明下手だからな～

サー「なんとなく…分かった」

サーニャはそう言って、オムライスを食べた。サーニャは理解したらしい。

ミーナ「あなたは何故そんな事を知っているの？」

その事を聞いてくるか！なら答えるか。

朔「一人の少年が居ました。その少年の家族は少し変わっていました。そんなある日、少年学校から帰ってくると、両親は殺され、妹はレイプされかけていました。それを見た少年はそいつらを殺しま

した。だが、そいつ等のボスがいて逆に殺されかけました。少年は死にたくないと願い続けました。その時に全てを無にする闇の神の力を手にいれました。その敵のボスを倒しました。そして神に目覚めた少年に使命が与えられた。平行世界であり得ないことがあったら、救う使命をね」

ミーナはそれを聞いて、何故か暗くなっていた。いや、ウィッチたち全員がなっていた。

エイラ「お前も、辛い過去があったんだな」

芳佳「可愛そうだよ朔夜くん。使命までおわされちゃって」

朔「選んでやってることだ。辛くはない。それに頼れる仲間も居るからな」

俺はそう言ってお茶を飲んだ。そんなこんなで楽しい夕食になった今日の一日が終わった。

次の日

ラ「朔夜、その女は誰だ！なぜお前の部屋から出てきた。」

ラウラはミーナを睨んでそう言った。説明してなかった。なら説明しなきゃな。

朔「彼女はミーナ、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。平行世界でストライクウィッチーズって部隊の隊長をしてるんだ。昨日この世界に部隊の人間数人と迷い込んじゃったんのを保護した。ミーナ、彼女はラウラボーデヴィッヒ。俺のクラスメイトでドイツの特殊部

隊の隊長だよ」

ラ「それと部屋が同じのが何が関係する！」

朔「空いてる部屋がなかったから泊めた。」

そう言うとラウラは

ラ「ヴィルケ、わたしがお前に部屋を変わってやろう。朔夜はわたしの嫁だから、わたしが朔夜の部屋に泊まる」

またそんな事を言うかラウラ、しかしミーナはそれを聞いて、不機嫌になる。そして、

ミーナ「朔夜くん、彼女が言っていることは本当なの？」

何故か俺に向かって黒い笑みをうかべながらいった

朔「嘘だ。どこかの誰かが、ラウラに変な知識を与えた」

そうミーナに言うとミーナは黒い笑みをやめて普通の笑顔になる。そのままラウラを連れて、学食に向かう。

校庭

千「これから、模擬戦をおこなっ…？「どいてくれぇぇぇぇぇ」」

どこからか聞き覚えのある声が聞こえた。上を見ると

朔「たけしと誰？」

たけしと二人の男の子が落ちてきた。一人は俺と同じぐらいかな。

た「こうなったら、ダイチ！たける」

ダイチ「おう！」

た「分かった」

二人はうなずき、三人はどっからか風呂敷を取り出し、あれはまさか！

三人「パラシュートがわりだ！」

三人は風呂敷の角四カ所をつかみパラシュート代わりにした

朔「たけし！久しぶりだな！元気にやってるか！」

たけしに近づくと、たけしがこっちを向いて、

たけし「久しぶりです。朔夜さん！あっ！こちにいるのはダイチとたけるっていいます。」

ダイチ「俺はリュウ・ダイチ！最強の気力使いを目指してる」

たける「俺はかける。ハジケ流空手をならってる。」

ふーんハジケ流か、

朔「俺は朔夜、織斑朔夜だ」

それを聞いた、たけしが、驚いて、

たけし「十六夜じゃないの！」

叫んでいた。ああ、知らなかったな。

朔「俺、死んで転生したんだよ。この世界にね。だから、姓が違うんだよ。つか何でこの世界に来たんだ？」

ダイチ「これをあんたに届けに来たんだ。」

そう言って烏印のトランクケースを渡してきた。なるほどね。

たける「依頼終了だ！」

依頼？たけしから話を聞くと平行世界のＩＳ世界にハジケ道場をつくり、依頼をこなしてるらしい。何処のモンハン！

朔「中身はっと、おお！ゴーカイジャーか！良いもの送るな～烏！」

そこにブラジラ一行が居た。

ブ「闇の神を倒せば、私が神になれる！」

変な事を言っていやがるな、丁度いい、試させてもらうぜ！俺はたけしたちにツールを渡し、残り一個は誰に渡すか、なら

朔「鈴！受け取れ！」

鈴に渡した。何故って目があったから。

鈴「受け取れって使い方わか…あれ？何故か分かる。」

朔「派手にいこうぜ！」

五人「豪快チェンジ！」

アァァァァバレンジャー

オォォォォォレンジャー

ゲェェェェェキレンジャー

ダァァァァァイレンジャー

俺はアバレキラー、たけしはオーレッド、たけるはゲキレッド、ダイチはリュウレンジャー、鈴はゲキイエローに変身した。自分で思うんだが、なに此の異様な光景はせめて最初は同じ戦隊にするべきだったかな？取り合えずビービをさっさとけちらすか、みんなはそれぞれの武器などを構えてビービを倒す。凄いね、たけるも小四には見えない戦いかたをするな。ビービの攻撃をいなし、さらに一太刀いれる。将来が楽しみだな。ダイチはさすが最強を目指すだけあって、ビービを軽く倒す。ありゃ、リュウレンジャーの戦いかたをあなたは知っているのですか！時折天火星秘技流星閃光とか天火星稲妻火炎波とか聞こえるんだけど。たけしは前より確実に成長していた。スターライザーで敵をことごとく斬り倒す。なかなかの剣さばきだ。鈴にかんしては特には無いな。うん無事ならそれで良い。うんただ五人ほしかっただけだし。俺はアバレモードでただ敵を倒すだけ。数分もかからず。ブラジラ一人になった。

朔「どの調理法でいくかな?」

鈴「これは?」

鈴がゴーオンジャーのレンジャーキーを取り出した。

朔「採用!いくぜ!」

五人「豪快チェンジ!」

ゴォォォォォンジャー

俺はレッド、たけしはブルー、鈴がイエロー、ダイチはブラック、
たけるはグリーンになる。

朔「喰らえ!サーベルストレート!」

俺がロードサーベルでブラジラを斬り、

たけし「ランチャースターター」

たけしがガレージランチャーから光弾を放ちそこに

鈴「バレットクラッシュ!」

鈴がレイシングバレットをブラジラに突撃させて

たける「アックスツーリング!」

たけるがブリッチアックスから衝撃はを飛ばした。

ダイチ「まだ終わらないぜ！レーザーハイビーム」

ダイチかカウルレーザーから光弾を連射しそして

五人「スーパーハイウェイバスター！」

それぞれの武器を合体させた

朔「終わりだ」

そして、レイシングバレットがスピードルのオーラをまとい、ブラジラに突撃してとどめをさした。そして変身をとき、たけしたちと分かれると、

箒「少し聞きたいことがあるんだが？」

セ「わたくしも」

レイ「わたしも」

ラウラ「わたしもだ！」

ミーナ「朔夜くんいいかな？」

何故か五人は笑顔でこちらに向かってきた。目が笑ってない。しかもそれぞれ武器を構えて

箒・セ・レ・ラ・ミ

「何で私にツール渡さないで、鈴に渡したのか説明して！」

こうして俺は地獄の鬼ごっこが始まった。解放されたのは昼休みだった

異世界からの来訪者（後書き）

次回もオリジナルだよ。

訓練と出会い、出会いの相手は…何処までリンクしてるのこの世界！（前書き）

ユニコーン参戦

ミーナ「これがＩＳね」

エイラ「なかなかの着こごちだな。」

サーニャ「ストライカーより良いかもしれない」

芳佳「でも動かし難いよ」

リネット「イーメジが上手くいかないよ」

キラ「飛ぶ感覚が今一出来ない」

俺は新人組の練習を見ていた。ミーナとエイラにサーニャは飲み込みが早く、既に飛ぶところまでマスターした、リネットと芳佳はまだまだ駄目だった。キラはまあ初めてやったにしては合格クラスだな。

朔「芳佳にリネットはストライカーで飛んでるイメージをして飛んでみな。わざわざ、教科書通りにやんなくていい」

俺は二人にアドバイスをした。

二人「はい！」

二人はまた飛び始めた。今度はミーナたちにひけをとらないようになった。さてウィッチーズがつけているＩＳは黒金製量産型ゲシュペンストＭＫ－２改だ。外見はゲシュペンストを擬人化したかんじ

だ。キラはストライクだ外見はエールストライクの擬人化。にしても、平和だな～。そこに、マリーダ似の人がやってきた。いや、雰囲気もマリーダだな。つうかマリーダだろ！あれ！

マ？「お前が織斑朔夜か。」

朔「そうだが？あんたは？」

マ「私はマリーダ・クルス。アメリカの代表候補だ。お前との模擬戦を申し込む」

マリーダがそう言ってきた。つか代表候補かい！まさか機体もな…模擬戦かなぜに俺？理由を聞いてみよう

朔「何故俺と模擬戦をしてみたいんだ？」

マ「貴様が噂通りかの奴か試してみたい。」

マリーダがそう言ってきた。噂ってなんだ？気になるな。まあ、良いか

朔「ならやろうぜ？機体は？」

マ「借りてきた。いつでも良い。」

マリーダはギラドーガを装着する。あっ！うちの量産型だ！なら俺は

朔「これで良いか」

俺はうちの量産機のジム３を使う

マ「お前は専用機持ちじゃ」

朔「相手に合わせるのが礼儀だろ？始めようぜ」

俺が笑顔でそう言ったら

マ「…やはり噂だな。気を抜けばおとされるな…」

顔を赤くしながら何か呟いているマリーダさんがいた

朔「なんだ？マリーダさん？」

マ「気にするな。独り言だ！」

キラ「あの子落とされたわね。…朔夜の周りに何で女の子が…」

ミーナ「まったくね」

二人が何を言っているか分からないが、もんくを言っていることは確実に分かった。

朔「いくぜ」

マ「こい！」

俺たちはビームサーベルの斬り合いを始めた。

朔「あまいぜ！マリーダ！」

俺は空いている左手でバズーカを取り出し、撃つが

マ「そちらがあまい！」

マリーダは左の盾に付いているグレネードを放ってきた。

朔「くっ！なら！これはどうだ！」

俺はミサイルを全弾放つがマリーダはそれを撃ち落とす。まあ狙い通りだ。

朔「喰らいやがれ！」

俺はビームライフルをフルパワーでゼロ距離で放ちさらにサーベルを喰らわせた。

マ「きゃあああ！」

マリーダの機体は逆さまに落ちていく。やばい！俺はイグニッション・ブーストを使い、マリーダを救出した。

朔「大丈夫か？」

俺はマリーダの顔を覗くとマリーダは顔を真っ赤にして、そっぽを向き

マ「大丈夫だ／／」

と答えた。なら良いけど。顔が赤いぞ。

朔「さてと、今日は終わりだ。体を冷やすなよ」

俺はそう言い残してアリーナを立ち去る。原作のマリーダとは少し違ったな。

学食

箒「こいつは誰だ！朔夜」

箒はマリーダを見ながら言った。つうか鈴やレイ、セシリアとラウラを見ながら、箒の言葉に頷く。もともとは箒たちと昼飯を食べる約束だったが、マリーダが一人で食べるのを見かけて俺が誘った

朔「なにって今日友達になった、マリーダだけど？アメリカの代表候補の」

鈴「そうなんだ…ならいいか、つき合ってないし」

箒「だな」

レイ「そう言えば、朔夜はこの後予定ある？」

レイが俺に聞いてきた。確か…

朔「うちの試作機の稼働テストかな」

レイ「確かユニコーンとクシャトリアだっけ？」

レイがそう言ってきた。そううちの新たな機体、ユニコーンとクシャトリア。まだ出来てないけど、クスイーとペーネロペーも開発中。

セ「試作機って、朔夜さんは会社かなにかやっているのですか？」

セシリアが質問してきたので俺は

朔「ああ、ＩＳの会社の社長をね二日前になったんだよ。キラを引き取ったときに。」

レイ「しかもアジア１の会社、食品からＩＳまで何でも来いの黒金カンパニーの社長だよ朔夜は！私と姉さん、晃はそこのテストパイロット！」

周り「うそぉぉぉぉぉ！」

周りが大声で叫んだ。

箒「あの、黒金の社長！」

鈴「ゲシュペンスト、ヒュッケバイン、ギラドーガ、ジムスリー、あの量産型にしてオーバースペックの機体を次々と出すあの会社の…」

ラウラ「入社が困難にして、コアを独自に開発をしているあの…」

セ「あの黒金の…社長…が朔夜さん」

四人がめっちゃ驚いていた。しかたないしな。あの黒金の社長なんだし。マリーダが普通にそうなのかとかいってきてあまり驚いていなかった。

朔「ごちそうさま。じゃあ俺はテストがあるから。」

俺は学食を出る。

アリーナ

朔「2機とも問題ない！」

俺はテストが終わり。ユニコーンを待機状態にした。そこに、

？「あら、いいもの見ちゃった。久しぶりだね。朔夜くん」

朔「楯無か…何してるんだ？俺は暇じゃないんだけど？後で報告書書かないといけないの」

俺はこの学園の生徒会長の更識楯無にそう言った。いつ知り合いになったかと言うと。昔に会って遊んだことがあるからさ。

朔「じゃあ！部屋に戻るから。」

俺がそう言って帰ろうとすると、楯無が俺にひっつき、

楯「久しぶりに、愛深めよ！」

朔「愛深めるって！俺たち愛し合ってないだろ！何そのねつ造！」

楯「それより周りがあれね…」

そう言って楯無がまじめになり、そう言った。

朔「ああ、大体三機かな？いける？」

俺が楯無に聞くと。

楯「朔夜くんが背中守ってくれるなら。」

朔「ならやるか！」

俺はユニコーンを起動させた。楯無はミステリアスレディーを起動させた。出てきた敵はなんと、フォビドゥン、レイダー、カラミティーだった。あれはうちの機体…何で…

朔「亡国の野郎！楯無油断するなあいつ等は実弾はきかない！緑の鎌の方はビームを跳ね返すから！」

俺が説明すると楯無は

楯「詳しいね朔夜くんは」

朔「うちの製品だからね。破壊していいから」

楯「了解！」

楯無はレイダーに向かう。俺は残りの2機か。さっさと決着着けなきゃか。俺はガトリングを取り出し、フォビドゥンに連射した。あいつの弱点はエネルギー切れになりやすいこと。だからあえての無駄撃ちをする。

朔「あらよっと！」

俺はカラミティーの砲撃を次々と避ける。しかし砲撃の行き先は、

朔「何でマリーダが此処に！」

ＩＳを運んでいる。マリーダが居た。やばい

マ「嘘！死ぬの…」

マリーダにカラミティーの砲弾があたりそうになる。死なせるものか！

ＮＴ－Ｄ起動！

俺はこいつのワンオフ・アビリティー、ＮＴ－Ｄを発動する。それにより、起動性、パワーなどを爆発的にあげるしかし、制限時間は五分、時間が過ぎると強制解除で次の使用出来るまで１５分かかる

朔「マリーダ！」

俺はマリーダをかばう！

マ「朔夜なのか？これはいったい？」

朔「話は後だ！こいつ使って、応戦してくれ。あいつ等は見たものは殺すまで追いかけてくるかもしれないから」

俺はマリーダにクシャトリアを渡す。

マ「分かった。信じよう。」

マリーダはクシャトリアを展開し、応戦にはいる。俺はフォビドゥ

ンをサーベルで斬りかかるがやつは鎌で防いだ。俺はさらに蹴りをいれた。しかしフォビドゥンたちは突然撤退を始めた。それと同時に、ユニコーンが強制加除に入った。

訓練と出会い、出会いの相手は…何処までリンクしてるのこの世界！（後書き）

次回は何にするかな？

アンケートをとりたいと思います。キラの第二形態はどれがいいですかね？

1、フリーダム

2、ストライクルージュ

3、ストライクノワール

出きればアンケートに答えてほしいです。

朔夜、久々に異世界に行く（前書き）

本日2度目

朔夜、久々に異世界に行く

朔「癒しがほしい…」

最近よく女性陣つうか、女しかいないか。晃を抜いて。誰か忘れたが、布団に入ってくるんだよね。きわどい服で。なわけで、少し旅に出よう。何処に行くかな?よし!電王の世界に行こう!さてゲートを開けよう。その時に

鈴「入るわよ!」

箒「じゃまするぞ!」

鈴と箒がやってきた。ノックぐらいしようぜ?礼儀知らずだと思われるぜ。

鈴「何してるのよ朔夜」

朔「何って異世界に行こうとしたんだけど?」

そう言うと二人が突然俺の体に飛びつく。何でだ?

箒「まさか、この世界から出ていく気なのか!」

鈴「そうなの?答えなさいよ!」

何なんだ!何なんだ!

朔「えー、何なんだ?」

箒「頼む、居なくならないでくれ…」

鈴「何処にも行かないでよ。お願いよ。」

泣きながらそう言ってきた。何やら勘違いしています。この二人

朔「居なくならないから。ただ、少し気分転換に行こうとしただけだからね。」

俺がそう言ったら。二人は泣きやみ、俺から離れた。

箒「そうか、気分転換か…（さっきのはさすがに恥ずかしかったな。でもさすがに私が朔夜のことをどう思っているかは分かったよな）」

鈴「そう言うことは早く言いなさいよ（何処にも行かないのか～よかったわ。でもさっきの行動でさすがにあたしの気持ちは分かるわよね）」

朔「さて行くか。んじゃあ行ってくるわ」

そう言ってゲートをくぐろうとしたら、

箒「私も連れてってもらおうか」

鈴「あたしも、心配させた罰よ！」

そう言って、二人は俺の手を掴んだ。はなさいんだろうな。諦めよう。連れていかないと何か言われるんだろな。

朔「分かったよ。連れてくよ」

そう言って、二人を連れていく。さてとデンライナーにレッツゴー

デンライナー

朔「俺！参上！」

箒「何やってるんだ？」

鈴「そうね…」

デンライナーについて最初にやった事はモモへえの嫌がらせ

モモ「何久しぶりにやってきたかと思ったら、俺の決めゼリフを取ってるんだよ！朔夜！」

朔「モモ、すぐにキレるのはカルシュウムが足りないぞ。煮干し食え煮干し」

俺は煮干しを一袋渡す。

モモ「いらねぇよ！」

ウラ「もらっときなよ先輩。足りないのは事実なんだし。」

キン「そうやで、モモの字。」

二人に追い打ちをかけられるモモタロス。

リュウ「ねえ、お姉ちゃんたちだれ？朔夜とどういう関係？」

箒「朔夜との関係は幼なじみだ」

鈴「同じく。」

良「久しぶり朔夜。ライダー大戦以来だね。」

朔「久しぶり、良太郎。元の姿に戻ったんだ。」

そういいながら、俺はコーヒーを飲む。ナオミさんのじゃないよ。
あれは飲めたものじゃない。

良「今日は何しにきたの？何かなきゃ来ないでしょ？」

朔「いや、遊びに来た。」

ハナ「遊びにって…」

ハナが何かいいたげだが無視。

朔「オーナー、ターミナルに向かってくれない？」

オ「良いでしょう。後、勝負しませんか？今回は勝ちますよ」

そう言って、チャーハンを取り出した。受けてたとう。

朔「良いぜ！受けてたつ。負けないぜ！」

鈴「何を始まるの？」

箒「さあ？」

俺はオーナーとチャーハン対決を始めた。結果は俺の勝ち。まだまだだね。オーナー

ターミナル

朔「ターミナルに着いたぜ。久しぶりだな。でも余り変わってないな。」

箒「異世界はいろいろ驚かせられるな。」

鈴「そうね、朔夜、此処には何があるのよ？」

朔「何でも売ってるぜ。好きなのを見てきていいぜ。その前に、これもっとけよ」

俺は二人にスタッグフォンを渡しとく。

鈴「これって朔夜の使ってる。」

朔「ああ、此処じゃケータイ使えないし、護身具にもなるからね。じゃあまた後でね。」

俺はそこから立ち去る。さて駅長よ待っていろ。決着をつけてやる。

駅長室

朔「駅長よ決着をつけよう！」

駅「かまいませ～ん。望むところですよ～。」

本日チャーハン勝負二回戦が始まった。結果は引き分けだった。後少しだったのに！机が揺れやがって！そこに、

「駅長！イマジンがターミナルで暴れています。」

それを聞いて、俺はその場から走り出す。箒、鈴頼む無事でいてくれ。

鈴サイド

あたしは箒と買い物をしている途中に突然サソリみたいな奴とモグラみたいな奴等が現れた。

箒「鈴、逃げるぞ！」

鈴「分かってるわよ！」

私たちは逃げ出した。しかし奴等は追いかけてきた。

鈴「きゃっ！」

箒「鈴！くそ！」

あたしは転んでしまった。モグラみたいのがあたしに攻撃しようとしてきた。あたしは此処で死ぬの？死にたくない！まだ朔夜に気持ち伝えてない。

鈴「朔夜あああああ！」

あたしは彼の名前を思いっきり叫んだ。

トルネード・ドリル・フロート

スピニングダンス

無機質な声がターミナル内に響いた。そして、モグラみたいのに赤黒い物体が次々と怪物を貫いた。

鈴「朔夜？」

朔「無事か鈴に箒！」

朔夜は変身を解きながら、近づいてきた。朔夜が助けてくれた。

朔夜サイド

モールイマジンを取りあえず無双した俺はサソリのイマジンにむき直り、そこに

良「朔夜！」

良太郎がやってきた。ならやるか。

朔「いくぜ、良太郎」

良「うん」

良太郎はデンオウベルトを付け、俺もデンオウベルトをつける

二人「変身！」

ソードｆｏｒｍ

ネガｆｏｒｍ

良太郎は電王ソードｆｏｒｍ俺はネガ電王になる。

ネガ「さて本当の悪の力を見せてやるよ！」

もちろんネガタロスに取り付いてもらってね。ネガやるぜ

ネガ「ああ」

モモ「何で此処に偽物野郎が！」

良（そんなことより今はイマジンをやるよ！）

モモ「分かったよ！良太郎！最初から最後までクライマックスだぜ！」

モモタロスがデンガッシャーソードモードでサソリに斬りかかる。

ネガも斬りかかる。以外にチームワーク良いな。

ネガ「その程度か、興ざめだな。今楽にしてやる。」

モモ「クライマックスだな。」

フルチャージ

ネガ「終わりだ。」

モモ「俺の必殺技、パート2」

二人は必殺技をサソリにたたみこんだ。何でいがみ合ってるのに息があってるんだよ！

朔「じゃあそろそろ帰るわ！」

モモ「また来いよな！」

良「またね。」

鈴「さようなら」

箒「世話になった」

俺たちは元の世界に帰った

朔夜、久々に異世界に行く（後書き）

次回の内容決まってねぇぇぇ

朔「原作やれば？」

イヤだ！後2話はオリジナルを！

朔「頑張れ、駄文作者よ！」

番外！鈴との過去、現れるマゼンタ！（前書き）

過去編。後半はディケイド無双の始まりだ！

修正

番外！鈴との過去、現れるマゼンタ！

二年前

朔「鈴、何故俺は此処に居る？」

そう気がついたら。俺は引きずられていた。確か俺は家で仮面ライダーオーズを烏から動画を送ってもらってみていたはずなんだけど？シャウタが見れなかった。後少しでシャウタが登場するところだったのに！

鈴「気にしたら負けよ。良いじゃない。どうせやることなくて幼稚な特撮動画を見てるだけなんでしょ？遊んであげるんだから感謝しなさい。」

感謝できないんだけど俺、楽しみの途中を奪われたんだし。それに特撮は俺の心の栄養源だ！

朔「何処に行くんだ？予定無いなら、帰るぜ、見てた途中なんだからな。」

俺はそう言って、歩くと、鈴はあるものを取り出した。

鈴「今日オープンするテーマパークのプレミアムチケットよ。」

そう言って、俺に見せてきた。行く場所はあったのか。しかしよく手に入れたよな。そして高かったをだろおなー、その金額払うのか、まあいいが、

朔「よく手に入ったなそれ。」

鈴「たまたまよ（これ手に入れるの大変だったのよね。どれだけ応募したっけ?それより今日こそ告白しよう!）」

朔「そうか、なら早く行こうぜ!楽しみだぜ!何あるかな、」

そんなこんなで始まった。鈴とのお出かけだ。テーマパークはそんなに遠くではなかった。

朔「さて何に先ず乗るか?鈴は何乗る?」

俺は鈴に聞いてみると、鈴は

鈴「まずはあれでしょ?」

上に上がって急降下するのりもに指を指していた。あれか、まあ良いけど。俺たちはあれに乗る

朔「さて、上に上がってきたな」

鈴「そうね、ワクワクするわ」

鈴の顔は本当に楽しそうにしていた。見ているこっちも楽しくなってきた。そして一気に急降下を始めた。

朔「いいいいいいいやっほぉぉぉぉぉぉ!」

そして地上に着いた。なかなかのスピードだったな。

朔「次はあれに乗ろうぜ」

俺は水の上をはしるジェットコースターみたいのを指す

鈴「へぇ、良いわね。いきましょ」

少し列んで、順番を待っていた。そして順番がきた。

朔「さてと、貴重品は預けたし、乗るか。」

俺たちは乗り込む。そしてゆっくり進み始めた。そして坂を一気に滑り始めてた。水しぶきをたててそれが少しかかる。

朔「楽しかった。鈴」

鈴「何？」

朔「飲み物買ってくるけど何が良い？」

鈴「何でも良いわよ」

鈴がそう言った。俺と同じで良いか

朔「了解した。じゃあ行ってくる」

鈴サイド

朔夜が去った後あたしはベンチで休んでいたら、ちゃらい男が三人ぐらいやって来た。

男1「ねぇ君暇？」

男2「なら一緒に遊ばない。」

男3「良いことして」

なんかうざいな～、朔夜こないかな～

鈴「うざい、ささっと消えて、人待ってるから」

あたしがそう言うと男たちがあたしの腕をつかんで

男「いいからこいよ」

あたしを掴んでた奴が突然倒れた

朔「うちの連れになにやってるんだよ」

朔夜がやって来た。何かカッコイイ。

朔「鈴大丈夫か？」

鈴「う、うん大丈夫」

朔夜サイド

さて鈴は大丈夫らしいし

朔「さて、十秒で立ち去れよ？じゃないと、バラすぞ」

チャラオに殺気を飛ばすとチャラオたちはさっさと立ち去った。

鈴「朔夜」

朔「何?鈴」

鈴「助けてありがとう」

鈴がそういってきた。そんな事か

朔「どういたしまして。さて次いこうぜ」

そこに、何故かＩＳがやって来て暴れていた。何故だ!何があった。

朔「鈴逃げろ!俺はこいつらを止める!」

俺はディケイドライバーを取り出す。しかし凄い数だな。

鈴「ちゃんと生きて帰ってきなさい!」

鈴がそういって避難し始める。

朔「帰るさ!変身!」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身した。さらに俺は

アタックライド・ブラスト

アタックライドブラストで周りにいるＩＳを撃ち抜いた。コアを外して

朔「まだだ!」

フォームライド・アクセル

ファイズアクセルになり

朔「いくぜ」

スタートアップ

俺は千倍のスピードで動き始める。そして、ライドブッカーで斬りさき始めた。これもコアを残して、さらに

ファイナルアタックライド・ファファファイズ

クリムゾンクラッシュを叩き込む。そして

カメンライド・ドラゴンナイト

ドラゴンナイトに変身して

アタックライド・ストライクベント

朔「ドラゴンクローファイヤー」

ドラゴンクローファイヤーを放つそして

朔「さらにいくぜ」

ファイナルアタックライド・ドドドラゴンナイト

俺はドラゴンライダーキックを放つ何故かコア破壊せずに倒しています。

カメンライド・スカイライダー

空を征するライダー、スカイライダーになる。

ファイナルアタックライド・ススススカイライダー

朔「スカイスクリューキック」

またもやコアを破壊せずに倒す。

ヒーローライド・ズバット

朔「ズバット参上てか？」

俺はズバットが使っているムチで敵薙ぎ払う。そして

ファイナルアタックライド・ズズズバット

朔「ズバットキック！」

ヒーローライド・キカイダー

朔「使わさせていただきます。ジローさん」

キカイダーにチェンジした。そして

朔「大車輪投げ」

俺はキカイダーの技の大車輪投げを使いさらに

ファイナルアタックライド・キキキカイダー

朔「デンジエンド」

俺はまたもやコアを破壊しないで倒す。

カメンライド・キバ

朔「キバっていくぜ」

フォームライド・ガルル

俺はガルルセイバーを使って斬る。斬りまくる。

朔「終にするよ」

ファイナルアタックライド・キキキバ

俺はダークネスムーンブレイクを放つ

数分後

朔「これで終だ」

ファイナルアタックライド・ディディディケイド

俺は最後一機にディメンジョンキックを放つ

朔「終わったな」

そして俺は鈴の元に行く

数日後

朔「鈴最近元気無いけどどうした？」

鈴「そ、そんなこと無いわよ」

鈴はあきらかに動揺していた。

朔「してる！俺には分かる。何があった。話せないことなら良いけど、話せる事なら話してほしい。力になれるかもしれない。」

鈴「実は…」

鈴の親が離婚したらしい。何があった。あんなに仲が良かったに

朔「そうか…聞いてごめん。辛い事思いださせて」

鈴「良いわよ。気にしないで」

俺はそんな鈴を抱きしめた。今の鈴は今にも壊れそうだった

朔「泣きたいなら泣けよ。無理しなくていいから」

鈴「う、うわぁぁぁ

番外！鈴との過去、現れるマゼンタ！（後書き）

次回もがんばります

何が起きたらこうなる？告白はどこぞの時報のように現れるのか？（前書き）

あるキャラ三人が朔夜に告白！

何が起きたらこうなる?告白はどこぞの時報のように現れるのか?

朔夜「何が起きた」

よう、朔夜だぜ!今俺の隣に裸Yシャツの鈴がいる。一刀曰く裸Yは男のロマンだそうだ。やばい!シャツの中見えてるよ!見るな!俺!見ちゃいけない!そう見るな!そして周りの奴等にばれるな!いやばれるな、何せ隣のベットにミーナが居るし。てか、何で鈴が部屋に入ってこれたんだ?それより理性持つかな?鈴は一年見ないうちに綺麗になったし。

鈴「んん、あっおはよう朔夜」

目を擦りながら起きてきた鈴。可愛いです。やばい!俺撃沈しそう。そこにある意味救世主が現れた。

箒「朔夜!久しぶりに…何をしている!」

箒が俺と鈴をみて叫びをあげる。響いてますよ箒さん。それにより

ミーナ「いったい何…って何してるの?鈴さん?」

箒の叫びにより起きたミーナ。朝から黒い笑みを浮かべないで。夏なのに冬に感じるから

鈴「何って一緒に寝ただけよ」

朔「何故そんな事を!つうかどうやって入った」

頬赤くしている鈴に聞くと、鈴は

鈴「はあ、いい加減ここまでやっているんだから気づきなさいよ！」

何に気づけと！まさか！このパターンは！まさか鈴は俺のことを…

出来ればやめてくれ

鈴「朔夜の事が好きなのよ！」

やはりか…それを聞いた二人は突然の事にビックリしています。そこに箒とミーナが

ミーナ「私も貴方の事が好きよ。ここに居る誰よりも」

ミーナもか…

箒「私も朔夜の事が好きだ。この気持ちは誰にも負けはしない」

箒もか…でも俺は…

鈴「答えを聞かせてほしい。」

鈴、ミーナ、箒は奇態と不安が混ざった瞳でこちらを見てきた。

朔「俺は…俺は…誰ともつき合えない」

そう言い放つと箒が

箒「何故だ？」

理由を聞いてきた。やはり聞くよな

朔「俺のこの両手は千人…いや、何百万の命を殺してきた。そんな奴が誰かを好きになり、愛する資格はない。」

鈴「それは過去の話でしょ?今は!」

鈴がそう言ってきたが、

朔「そう言う意味じゃない、過去でも俺がやったのに変わりはない。俺の罪さ。だからだよ」

そこにミーナが

ミーナ「なら、私は貴方の罪を一緒に背負ってあげる。それならどお?」

そう言ってきた。俺は

朔「それはうれしいが無理だ。もう一つつき合えない徹底的な理由がある。それは俺が感情が破綻してるんだ。恋いと言う感情が」

それを聞いて三人がかなり驚いていた。

鈴「ど、どうして…」

朔「俺が闇の神とし働き始めた。その時多くの罪人を殺してきた。任務だから、そんなことをしているうちに、感情、心が壊れちゃったんだよ。今はある程度治ってきたけどね」

そこに鈴が俺にキスしてきた。そして

鈴「なら、朔夜に恋と言う感情を思い出させて、好きにさせればいいのね？」

鈴がフェイトと同じこと言ってきた。

箒「そうだな、あきらめたら終わりだしな。そうとなれば、思い出させて、私を好きにさせよう。」

箒が顔を赤くしながらそう言った。箒か、まさか

ミーナ「そうね、それが良いわ。朔夜くん。私はあきらめが悪いから、惚れさせてみせるからね」

ミーナもか！俺はため息をして、言った。

朔「みんなあきらめが悪いんだな。まぁこんな俺だけど良いんだな？」

三人「うん」

朔「よろしく頼む。」

俺がそう言って、三人と新たな関係が生まれた。

食堂

やばい！キラ、ラウラ、セシリア、レイの視線が怖い！何だ！ヤバい！本能が告げる！逃げろと！

キラ「朔夜？何で三人にはいあーんをしてるのかな？それ以前に何で三人はものすごく嬉しそうにしてるのかな？かな？」

やめて！怖い！キラが何処かの竜宮さん化してる！

レイ「朔夜、聞かせてくれるよね？」

レイ笑顔は可愛いが目が笑ってない！目が笑ってない

セシリア「朔夜さんお話を聞かせてくださいませんか？すぐに？」

セシリア？ここでライフル出すのはどうかと思うぜ？何故ビットまで？

ラウラ「朔夜、浮気とは良い度胸だな」

ヤバい！よし！逃げよう！

朔「タイムブース…っどわ！」

タイムブーストを使う前に、キラに捕まった。目があれＳＥＥＤ化してるよ！

キラ「説明して？」

朔「はい…」

なわけで朝何があったか説明した。そして離脱した。

アリーナ

千「黒島とデュノア姉に織斑と篠ノ之前に出ろ」

俺たちは姉貴に呼ばれて前に出た

千「貴様等には今からタックの模擬戦をしてもらう」

はい？私のお姉様は今何とおっしゃいました？タックバトル？練習もしてないのに？せれないよ～ねーちゃーん！（ジャイアン風に）

朔「来い！白式！」

俺は武装を魔改造した白式を喚ぶ。箒も紅椿を展開した。向こうはアルトにヴァイスか。なら

朔「箒は晃を頼む。俺はシャルをやる」

箒「まかせろ」

俺たちは短いやりとりをして戦闘にはいる。俺は雪片弐型を右手で握り、左手にアサルトライフル『霙』を握り乱射を始めた。一発の威力はどこぞのレールガン並だ。ヴァイスの装甲は薄い、シールドを突破して装甲を破壊すればかたがつく。しかし相手は、レイと同じラピットスイッチ。そう簡単にはいかないな。さらにシャルはカスタムしまくってるし

シャル「いくよ！」

シャルはオクスタンランチャーを放つ。実弾のほうかなら、霙で俺

は相殺しさらに両肩からミサイルポット、『散れ桜』を放つ。散れ桜は実弾、ジャミング弾の二種類に切り替え可能の武装だ。同時撃ちも化。俺は実弾を放つ。

シャル「ちっ！」

シャルは腕についてる三連ビームキャノンで破壊するが俺は散れ桜のジャミング弾を放つ。

朔「もらった！」

俺は白式のワンオフアビリティーの『零落白夜』を発動してシャルを二回斬りさく。そしてシャルは脱落した。

箒サイド

箒「はぁぁぁぁ！」

私は雨月と空裂で攻撃する。しかし、ステークで受け止められる。朔夜からデータが送られて見てみたが。防御とエネルギーが半端ではない。さすがは一点突破型、そこに、晃が

晃「喰らえ！」

ステークを私にたたみこみ。紅椿のエネルギーが切れかける。負けたくない。朔夜の背中は私が守りたい。いや守るんだ！

ワンオフアビリティー

『絢爛舞踏』機動

紅椿のエネルギーが回復し始めた。これなら戦える！朔夜の背中が守れる！

箒「はぁぁぁぁぁ」

私は空裂でビームの刃を飛ばしさらに私はある太刀を取り出すその名は

箒「いくぞ『忍冬』」

忍冬、その刃は紅椿と違い純白である。能力は白式と同じく『シールド無効化攻撃』しかし使えるようになるにはある一定の条件がある。それはわからないが今は使える！私は晃を斬り伏せた。

朔夜サイド。

箒は勝ったようだな。しかし絢爛舞踏と忍冬が使えるようになったとは凄いな。

朔「お疲れ箒」

俺はそう言って箒に近づく。箒は

箒「朔夜もな」

箒は何故か笑顔で言ってきた。その笑顔に俺は見とれていた。

何が起きたらこうなる？告白はどこぞの時報のように現れるのか？（後書き）

さて次回はあるキャラとあるキャラがバトります

華蝶対ハジケ（前書き）

今回は最後に龍の骨さんとコラボ。原作3巻に入ります。

さて俺はレイと駅に買い物にきた。臨海学校の水着を買いに

レイ（朔夜とお買い物。朔夜から誘ってきてくれたお買い物！でもこのままじゃ進展出来ないし、告白した方がいいかな？ミーナに鈴、箒もしたらしいし。このままだと追いつけなくなるしな～。今の強敵は鈴だよね。キ、キスまでしてるし）

なにやらレイは考えこんでいるようだ。なにかんがえてるんだ？あっ！もうすぐ箒の誕生日だ！

朔「さてと悪いレイ少し待っててくれないか？別の買い物があるだ」

レイ「さ、朔夜！」

俺はアクセサリーなどが売っている店に入る。

朔「すいません。このリボンとこのペンダントくれませんか？」

俺は白のリボンと防水加工のシルバーのネックレスを頼む。

店員「かしこまりました。」

朔「リボンの方はラッピングをお願いします。ネックレスの方はそのままで」

俺は商品を受け取り、レイの所に戻る

朔「お待たせレイ。これ買い物につき合ってくれたお礼」

俺はネックレスを渡す。レイは

レイ「何か高そうだけど良いの？もらって」

朔「レイに買ったものだから気にするな。」

レイ「ありがとう！大切にするよ」

どうやら大変気に入ったようだ。

鈴サイド

あたしたちは朔夜が何処に出かけるか気になりついてきていた。まさかレイと出かけるなんて

鈴「あれ贈り物よね」

セ「ですわね」

箒「贈り物だな」

ラ「同じく」

キラ「贈り物だね」

ミーナ「そうね」

やはりみまちがえじゃないんだ。

鈴「よし殺そう！」

あたしは右腕だけ甲龍を展開していた。そこに

マリーダ「何をしているだ？尾行か？この人数で？」

アメリカの代表候補のマリーダ・クルスが現れた。たしかこの人も

朔夜に惚れたんだっけ

鈴「悪い？気になるのよ」

マリーダ「構わないが、バレるぞこの人数だと」

確かにそうよね。バラバラに動くかな？そうしないとバレるわよね

一夏サイド

気晴らしに外に出ていた。最近俺は思う。あいつ等に何かをするの

をやめようと、取りあえず歩いていると。一人の女を二人の男が囲

んでいた。はぁー、何やってるんだか

一「やめてやれよ！嫌がってるだろ！」

？サイド

私はフェルト・グレイスオーストリアからやってきた。今日は私が

通っているＩＳ学園が休みのため臨海学校の必用品を買いにきてい

た。しかし、今男の人たちに捕まってしまった。どうしよう

？「やめてやれよ！嫌がってるだろ！」

誰かが助けに来てくれた。今の時代でもこう言う人が居るんだ。

晃サイド

俺はシャルと買い物兼デートに来ていた。

シャル「晃とデート…えへへへ」

相当喜んでるようだ。そこに、二人の男が一人の女を囲んでいた。

はぁー、

シャル「晃」

シャルはやる気のようだな。まぁ俺もやる気だし。しかしそこに

一「やめてやれよ！嫌がってるだろ！」

あいつが助けに入っていた。確実に助けに入りそうにない奴が。認識を改める必要があるな。シャルもそんな感じだった。

一夏サイド

やっちまった。もう逃げられないな。まぁ逃げるきないし。

チャラ「何かようかよ。うせな」

チャラ2「そうだぜ、うせろ」

二人はそう言ってきたが俺は、

一「嫌がってるんだから、止めろって言ってるんだよ！やるか？」

そう言うとチャラズは殴りかかってきた。やっぱりか。俺はその腕を掴み、チャラ2に投げる。さらにドロップキックをかまして、そこらへんに居た警備員に引き渡し、その場を立ち去る。

晃「見直したぜお前。」

シャル「そうだよ見直した」

デュノア姉に黒島が居た。デートか

一「別に、見ててムカついたからやっただけだ。後あの時は悪かった。」

俺は素直に謝った。

晃「いいよ。」

シャル「いいよ。君が外道のままなら許さないけど、今はいい人みたいだし」

そう言って許してもらった。さて帰るか。俺は寮に向かった

朔夜サイド

一通りの買い物が終わった。にしても尾行は止めようぜ皆さん。結局現在はみんなと行動していた。そこに

星「主！」

超子龍（漢字が出ないので似てるのを使っています）のこと星が走ってやってきた。

朔「星！何で此処に！」

俺はあまりの出来事に驚いていた。会えるのはうれしいけどね

星「何でって、主に会いたかったからです。」

朔「いや、クロスワールドは次元封鎖されてるんじゃ」

星「主よ愛があれば不可能を可能に出きるのですよ！」

こいつも烏に似てチート化してるのかよ！

星「主よ！丁度ホテルがあります。久しぶりに愛を確かめ会いましょう！私はこの日をどれだけ楽しみにしていたことか！」

そう言うと後ろから、途轍もないオーラが、何で姉貴まで！怖いわ！

千「朔夜、そいつは誰だ？どういう関係だ？」

姉貴よ、今俺にはターミネーターのあの曲が聞こえるよ。

星「我が名は超子龍。そちらで言う三国志の英雄だな。星とは真名と言ってその人の本質を表す神聖な名前だ許可なく呼ぶと殺されてもしかたないほどのもの。主、朔夜とは主従の関係だ。それと私は

朔夜を恋いておる。ついでに肉体関係も持っていて初めては互いのものだ。」

星さん、詳しすぎる説明ありがとう。そこまではいらないよ。周りの奴等は口がふさがってないよ。いろんな意味で、

星「最初は抱くのを拒むが、一度抱いてもらうと後はいつでも相手してもらえますな」

はいとんでもない発言ありがとう。事実だから何もいえない。だってねぇあれだぜ。命かけてまで、俺の事を愛してくれてる奴等だから何か拒めないんだよ。

鈴「さ、朔夜！事実なの！」

鈴が叫んで聞いてきた。

朔「事実だ！こいつらの時代は三国で命かけてまで俺を愛してる奴等も居た。敵でもだ。そいつ等の気持ちは無碍に断れなかったし。」

何か周りの奴は黙ってます。つうか考え込んでる。

朔・星以外（一番の強敵って超雲！）

朔「話は終わり！さてと、昼食いに行こうぜ！星も行こうぜ」

星「ぜひ行きますとも主！」

俺たちは昼飯を食いに行く。

中華屋

朔「さてどうするかな？」

箒「何をだ？」

箒が聞いてきた。

朔「これからの予定と星についてだよ。星は帰る気なさそうだしさ。」

そこに

覆面１「動くな！」

覆面集団が現れた。はぁ～、やることになるな。なら仕方がない。

俺と星は静かに立ち去る。そして

たけしサイド

何故か朔夜さんの世界に居た。

ダイチ「何かねえかな～」

たける「そう簡単に起きないよ」

しかし覆面集団が中華屋を占拠していた。

たけし「あいつらを俺たちのハジケで倒しに行こうぜ」

そう言うと

？「まてぇぇぇい！」

変なパピヨンマスクを付けた五人の人が居た

朔夜サイド

俺たちは屋根の上に上がっていた。星と朱里、恋となのはを巻き込んで

星「天知る！」

朔「神知る！」

朱里「我知る！」

恋「…子知る」

なのは「悪の蓮華の咲くところ！」

星「華蝶の連者が現れる！星華蝶！」

朔「夜華蝶！」

朱里「朱華蝶！」

恋「…恋華蝶」

なの「白華蝶」

五人「ただいま参上！」

後ろからもちろん爆発も起きた。やるなら徹底してやらなきゃ。ハムが居ないって。連れてきてないから。

星「さあ、丁重にお縄につけ！強盗たち！」

そして俺たちの一方的なフルボッコが始まる。

たけし「そこの仮面！俺たちと戦え！」

たけしたちが居た。まえ帰したはずだが？まあいい、相手してやる。

朔「白相手してやれ」

な「分かった」

たけし「いくぜ！たけし劇場！」

たけし劇場父と誓った夢！

たけし「お父さん、俺、最強のレーサーになるよ」

父の墓に誓い、たけしは修行にでた。ある日は火竜と戦い！ある日はプルコギをして、またある日は最速の将と戦い、またある日は「僕と契約して魔法少女になってよ」って言われ。またある日は英雄狩りの男と戦った。月日が経ち

たけし「俺はお前に勝つ！」

某鷹の異名を持つ男とレースをした

たけし「お父さん！俺は奴に勝ったよおおおおおお！」

たけし劇場完

な「かはっ！」

なのはは吐血をした。

な「僕と契約して魔法少女なんて…性別間違ってるよその珍獣」

たけし「まだだ！必殺！ベリオルキャノン！」

たけしはベリオロスをなのはに飛ばしてきた。なのははノックダウンした。

朔「なかなかやるな。これをやろう、さらばだ！」

俺は魔剣大根ブレードを渡し消える

華蝶対ハジケ（後書き）

次回は海だ！

何故…此処に居る（前書き）

ケータイから書きました

何故…此処に居る

朔夜「海か」

箒「どうしたら？」

俺の呟きを聞いたか、箒が俺に話しかけてきた。

朔「いや少しな…」

蓮華の願い事聞いてやれなかったな、孫呉の奴等と海に行こうという簡単な願い事を

朔「考えてもしかたないか…今日は楽しむかな」

そして海に着いた。しかし良い場所だな。そして旅館花月荘につく

千「此処が三日間お世話になる花月荘だ。全員従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくおねがいしまーす」」」

姉貴の言葉の後に全員で挨拶した。ついでに毎年この旅館を使っているらしい。着物の女将さんが丁寧にお辞儀した。

「はいこちらこそ。今年の一年も元気があってよろしいですね」女将さんがそう言ってきた。いや元気が有り余っていますよ今年の一年は

「あら、こちらが噂の…」

俺を見た女将が姉貴に訪ねる

千「ええまあ。今年は数名男子が居るせいで浴場分けが難しくなってしまって申し訳ありません」

そんなこんな話をしている姉貴。さてそんな話も終わり、海に入ることになったが俺は移動中に奴を見た。奴もこちらを見た。何で此処に居るんだよ！

鈴「朔夜。何してるのよ！早くしなさいよ！」

鈴にそう言われて俺は更衣室に向かう

朔「今は考えてもしかながないか。つか今日考えごとばっかだな」

俺は着替え終わると海に向かう。

箒「さ、さ、朔夜！」

真っ赤になった箒が俺を呼んだ。箒がなんと普通ならあり得ない格好をしていた。だって露出度の高いビキニですからねぇ。色は白だ

朔「何だ箒？」

箒「その、変ではないよな？」

おどおどと俺に聞いてきた。何が心配なんだ？ああ、何となく分かった

朔「似合ってるよ。つうかキレイだよ」

俺がそう言うと箒が「キレイ…朔夜が私にキレイと言った…」と言ってトリップを開始した。

鈴「何二人でイチャついてるのよ!私も混ぜなさいよ!」

鈴が俺に飛びつく。やめろよ!お前の控えめの胸があたるから!やめろ!鈴の水着はオレンジのタンキニタイプだ

鈴「おー!よく見える!」

止めて!揺れるな!当たる!胸が!

朔「頼む鈴!降りてくれ!胸が!俺の理性が!」

そこまで言うと、鈴は俺から降りて、顔を赤くしていた。

鈴（こんな体でも意識してくれてるんだ。）

それを見ていた箒が俺に抱きついてきた。箒さんあなたの胸が当たっています

朔「箒!」

箒「鈴も抱きついたからいいだろ」

顔を赤くしながら言ってくる箒。恥ずかしいなら止めたらどうだ?ってか鈴!また抱きつくな!

セ「箒さん！鈴さん！何してるんですの！」

セシリアが両手にパラソルとシートを持ってやってきた。青のビキニに腰にはパレオか

鈴「何って抱きついているんだけど？」

箒「そうだな、抱きついている。」

そういやあ、箒大胆になった。俺に告白してから。

朔夜「なかなか似合ってるなセシリア」

そういうとセシリアは顔を赤くしながら

セシリア「朔夜さんよろしければ、サンオイル塗っていただけないでしょうか？」

サンオイル！いやないだろ！無理！塗れないよ！だって今、六人ぐらいがセフィロスを殺せるぐらいの殺気を放ってきてるから！

キラ「セシリア、サンオイルなら私が塗ってあげるよ」

レイ「うん塗ってあげる。隅から隅まで」

ミーナ「そうね、塗ってあげるわよ」

スゲー、黒い笑みがスゲー！

朔夜「じゃあ、俺はこれ…」

俺はセシリアたちをおいてその場を立ち去る。だって立ち去れって目で訴えてるんだぜ

朔夜「さてと、何するかな？」

そこに鈴がやって来た。あの目は！

鈴「朔夜！どちらが速く岬に着くか勝負ね！負けたら、何か奢りなさい！」

鈴がそういって泳ぎ始めた。ずりいな、先に泳ぎ出しやがった。なら俺もだ

鈴「速くきなさいよ」

そう鈴が言ってきた時鈴が溺れ出した。鈴が危ない！俺は鈴の救出に向かう。

朔夜「大丈夫か！鈴」

鈴「ガバッ…だい…ガハッじょうぶ」

赤面している鈴が咳き込みながらそう言ってきた。

朔夜「そうかなら良いけど、とりあえず俺の背中に乗れよ」

鈴「う、うん」

鈴がそう言って俺の背中に乗ってきた。軽いな、そのまま浜に向かう。

鈴「おろして」

鈴を砂浜におろした。そして俺はみんなと遊んだ後、そこら辺を歩いていると、ある人物を見つけた。やはり見間違いじゃなかった。

朔夜「何で居るだ！オーヴァン！」

何故かオーヴァンが居た。俺は余りの出来事に頭が追いついて来なかった

オーヴァン「ハセヲか…今は話せない。だがその内分かる」

オーヴァンはそのまま居なくなった。俺はその場から動けなかった

何故…此処に居る（後書き）

また次回あいましょう

ＡＩＤＡ出現（前書き）

何とか書き上げたぜ

ＡＩＤＡ出現

朔夜「何でオーヴァンが此処に居る…」

ずっとそんなことを考えていた。飯の味が結局解んなかったな。

千冬「朔夜どうした。そんな顔して」

そこに部屋にもどってきた姉貴がやって来て、そう言ってきた。俺は

朔夜「いや別に、気にしなくていいよ姉貴」

千冬「気にするなと言われてもそんな深刻そうな顔されてると、気にせずにいられないがな。話してみろ。」

姉貴が微笑みながら言ってきた。相変わらずのブラコンやろう。まあ良いけど…いや良くないか

千冬「朔夜、さっき私の悪口考えていなかったか？」

朔夜「いや考えてないよ姉貴。」

千冬「そうか、なら話してみろ。何悩んでいたんだ？」

そう言って積めよって来た。顔近い！何する気だ！

千冬「話さないなら。お前を食ってから話してもらうかな」

朔夜「いや！止めろ話すから」

千冬「ちっ！」

舌打ちしたよ。マジだったのか！マジなんだ。

朔夜「実は他の世界の友人にあったんだよ。」

千冬「そんなことか」

朔夜「そいつは次元を渡る能力は持ってないんだよ。そいつが居たんだ。そいつが何かをしているってことは何かしらの計画があるんだよ」

そう俺が姉貴に言うと

千冬「なるほどな、だから悩んでいたのか。そいつが何計画してあるのか。」

姉貴がそういったら、姉貴が

千冬「小娘共入ってこい！」

はい？何て言いました？お姉さま？小娘共と言いしたよね？そうすると箒、鈴、セシリア、レイ、ミーナにキラ、そしてバカップルの晃にシャルが入って来た。何故だ！（某お持ちかえり風）

朔夜「何で居るんだよ」

千冬「みんな朔夜を心配してたんだよ」

マジか！そこまで心配かけたのか

箒「そんなことかがあったのか朔夜。」

朔夜「ああ。しかしあいつが此処にいる理由が全く見えない。昔から何考えているか分からない奴だったから」

鈴「そんな奴なら考えても無駄じゃない。」

朔夜「無駄って…」

鈴「考えても無駄なら、起きてから考えなさいよ」

鈴がそう言ってきた。確かにアイツの事を考えても何も解らないな

キラ「そうだよ。せっかく楽しむ時なんだし、楽しまなきゃ」

キラがそう言って微笑んでいた。楽しむか、でも明日は訓練だぜ？遊べないが？

レイ「キラ、明日は非限定空間による訓練だよ？」

レイがキラにツッコミを入れた。同じこと考えていたのか。

朔夜「俺、少し散歩してくる」

俺はその場から立ち去る。姉貴は何も言わなかった。何故だ

千冬サイド

さてと、朔夜が部屋を立ち去ったところであの話をするか。

千冬「そう言えば、お前らはあいつの何処が良い？料理は本場の味以上、家事も得意、姿も中々マッサージも実はうまい。」

箒「私は、その…カッコイイのと優しいところです」

鈴「あたしも優しいところです。」

レイ「わたしもかな」

三人がそう言った。それにつづいてラウラ以外が顔を赤くしながらうなずく。私はあえて言ってみた

千冬「誰にでも優しいだろあいつは」

ミーナ「そうなんですよね。」

ヴィルケがそう言ってきた。

ラウラ「私は…強いところでしょうか」

千冬「確かに強いな。強さの意味も知っている。」

ラウラ「そうですね…」

始めてみたな、ラウラのあんな顔は、朔夜のおかげか…さてあれを言ってみるか

千冬「お前ら、朔夜を欲しいか?」

箒、鈴、セシリア、レイ、ラウラ、キラ、ミーナ「くれるんですか!」

みんなの顔が喜びに満ちて言ってきた。だが私は

千冬「やるかバカ共」
何せ私の愛する弟だ。やってたまるか

箒、鈴、セシリア、ラウラ、レイ、ミーナ、キラ「えー」

みんなが落ち込み始めた。

千冬「女なら自分を磨いて奪ってみせろ十五歳共」

私はそう言って、みんなをそれぞれの部屋に帰した。さてと速く朔夜が帰って来ないものかな。

朔夜サイド

俺は海岸から海を眺めていた。やはり考えてしまう。オーヴァンのことを。そこに何故かＡＩＤＡが居た。何故だ！まぁ良い。倒せばいいことだ。俺は万死ヲ刻ム影を取り出し、斬り始める

朔夜「消えやがれぇぇぇぇぇ！」

ＡＩＤＡを斬り始める。だが、奴は斬れた次には増え始める。まるで、メズールのヤミーのように。ヤミー？やつらの下を見たらセルメダルが落ちていた。まさか奴等ははメズールのヤミーか。

朔夜「消えろ！ダークシューター！」

俺は黒色のアクセルシューター、（まあ魔力は使ってないけど、つうか闇の力だな）をヤミーに放つ。そこのヤミーは全滅したが親玉はまだ倒していない。探さないとな

カザリ「それは無理だよ。僕ヤミーだからね」

カザリが居た。なるほどなカザリのヤミーか

カザリ「キミの力を見せてもらうよ。闇の神」

カザリが俺に攻撃してきた。俺はその攻撃をかわして、

カメンライド・タイガ

タイガ「こいつ倒せば英雄になれるの？」

朔夜「倒せばな」

俺はタイガにそう言うとタイガは

タイガ「なら倒さなきゃ」

タイガがカザリに攻撃を始めた。さらに俺は

カメンライドパンチホッパー

朔夜「バイバイネコさん」

俺はカザリから逃げる。さてヤミーを探すか

ヤミーの場所

朔夜「お前倒すよ答えは聞いてない！」

ＡＩＤＡヤミーに向かってそう言ってディケイドドライバーを出して

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身した

カメンライド・クロウ

何処かのチートオブバグに変身する。

その頃の何処かのバグ

バグ「ハクシュ！風邪かな？それより、スーファミのマリオをやるか」

朔夜に戻る

朔夜「ハハハハハハハハハハハ」

俺は重力の塊を放つまくる。ハハハハ！楽しいな～総て潰れろ！

朔夜「喰らえ？」

俺は腕に重力を集めて敵を殴る。更に足に重力をまとわせて蹴る

ファイルアタックライド・ク、ク、ク、クロウ

朔夜「死ね？アトミックグラビティ」

俺は重力の塊を高速回転させて小型ブラックホールを作り敵をのみ込む。中々ものだよね。

朔夜「其より何でＡＩＤＡ型のヤミーが…」

考えても仕方ないかなさて旅館に戻るかな。俺は旅館に向かう

ＡＩＤＡ出現（後書き）

次回は束さんがでるよ

真束さん無双（前書き）

修正

真束さん無双

朔夜「まさかね…」
箒「まさかな…」

朔夜だ。現在俺は箒と渡り廊下的場所に居る。目の前にウサミミがある。絶対束姉だ

朔夜「無視しよう箒」

箒「無視だな朔夜。朝食を食べに行こう」

朔夜「そうだな。」
箒「今日は隣に座っていいか？」

朔夜「構わないが？」

そう言いながら俺たちは歩き出す。そしたら、

ヒュゥゥゥゥゥゥドカーン！

庭にニンジンロケットが落ちてきた。クレーターが出来たよ。束姉よ、何してるんだよ。旅館の人が泣くぜ

束「無視はひどいよ！さっくん！束さん泣いちゃうよ！」

朔夜「このクレーターを見た旅館の人が泣くよ」

俺がそう言うと束姉が口を尖らせて、

束「さっくんに箒ちゃん、ちーちゃん以外はどうでもいいもん」

束姉がそう言って俺に抱きつこうとしてきたが、箒が紅椿を起動させて束姉をアイアンクローを咬ました。痛そうだな。

束「何するの箒ちゃん！」

アイアンクローを喰らいながら、束姉がそう言ってきた。よく頭がつぶれないな。ある意味凄い

箒「朔夜は私のものにする気なんだ。余りに触れないでもらえないでくれないか？姉さん」

箒が顔を真っ赤にしながら言っていた。いやいや俺はものじゃいよ。赤くなるならそう言うなよ。

束「さっくんは束さんのものなの！箒ちゃんでも渡さないよ！」

束姉が駄々をこねながらそう言っていた。はぁ、空が青いな～、そうだ、朝飯はなんだろう？和食なら何でも良いんだけどね。さてと箒を連れて行くか

朔夜「箒そろそろ行くよ。遅刻するから」

俺が箒にそう言うと、箒が紅椿を解除して

箒「そうだな、千冬さんに怒られてしまう。さぁ行こうか朔夜」

箒がそう言いながら、俺の腕に自分の腕を絡める。もう何も言わない。何言っても聞かないからな。

朔夜「束姉また後でねぇ。どうせ俺に用なんだろ？」

束「そうだよさっくん。またねー」

束姉は走って何処かに行ってしまった。

場所は海になる

千冬「此より訓練を始める！各自、持ち場に付け！」

俺たちはそれぞれの持ち場に行く。そこに彼女が現れる

束「ちーちゃーん」

束姉が現れた。

てーレテーレテレッ！テレッテレーテンッ！イェッイェーイワオ！イェッイェーイワオ！ビールのー谷間のくらやーみにー、スパイダーマッ！

あれ？おかしいなー？何処から駆けろスパイダーマンが聞こえるんだけど

志郎「気分でＩＳを動かしに来た男スパイダーマッ！」

束「さっくんに会いに来た女束さん！」

何故…志郎が束姉と一緒に来てるんだよ！つうか何でも束姉も何感染されてるんだよ！姉貴も額を押さえ始めてるよ。箒なんかでプルプル震えてるよ！主に怒りか何かで…

朔夜「何で志郎が居るんだよ！」

俺が志郎に聞いて見ると

志郎「ああ、烏がこれ届けに行けと言ってな」

志郎が烏印のトランクを取り出してきた。俺は中身を見て見ると、ＩＳサイズの太陽炉が六個入っていた。

朔夜「太陽炉かよ！俺に世界にケンカを売れと」

志郎「そうなんじゃない？それよりは機体は何するんだ？」

志郎が俺に聞いてきた。そうだな。一つ目は後太陽炉を付けるだけで完成するアストレアタイプＦ２だろ。後はダブルオーかクアンタだろ？それとケルビムだな。個人的にサバーニャより好きだし。俺はアストレアに太陽炉を付ける作業を開始した。そこに束姉が話かける

束「さっくん、太陽炉って何？」

束姉の質問にみんながうなずく。俺は作業しながら答えて言った

朔夜「太陽炉は半永久的にエネルギーを生み出す装置だよ。それから産み出される粒子でセンサー類を無力化したり、空を飛んだり、武器に使ったりする。」

そう答えると周りの連中はポカンと口が開いたままだった。束姉が俺に近寄り、

束「太陽炉を一つ頂戴さっくん！解析したいの！」

束姉は興奮状態でそう言っていた。ヤバい状態しゃん！

朔夜「無理、解析は束姉でもできないよ多分ね。それより俺に用があるんだろ？何？」

そう言ったら、束姉の顔が変わり

束「そうそう、さっくんが頼んだものを持ってきたよ！空をご覧あれ！」

そう束姉が言うと空から何かが降ってきた。あれは何だろうな？四角い物体だぜ？

束「じゃじゃーん！白式の追加パーツの白雪だよ。」

そう言って、四角い箱が展開して中から、白くて今の白式のレガースよりでかいのがあった。これが頼んでいたやつか…

朔夜「早速やるかな…」

俺はアストレアの調整が終わったので白雪の調整をを開始を始める。

数分後

朔夜「出来た！」

白雪の調整が終わった。さてとテストしなきゃ

セシリア「そう言えばこちらの方かだは誰ですの？」

セシリアの言葉に皆が反応した。確かに知らないか、言えば分かるよな、束姉は

朔夜「篠ノ之束だよ。隣に居るのが、前に鈴たちを助けてくれたスパイダーマンのこと亀田志郎だよ。」

周りがそれを聞くとええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇと言う声が響き渡る。どうでもいいがさてと

朔夜「志郎やろうぜ」

俺はそう言って、白式を起動させた

志郎「チェンジ！レオパルドン！」

志郎はフルスキンタイプのＩＳつうか見た目まんまレオパルドンだった

朔夜「おして参る！」

俺は一瞬で志郎に近づき、雪片弐型を持って斬りかかるが、志郎はソードピッカーで受け止め

志郎「アームロケッター！」

レオパルドンのロケットパンチのことアームロケッターが俺を襲うが俺は、足のブースターでムーンサルトキックを咬ましてやった。

さらに襲を取り出して放つ。

志郎「くっ」

志郎は後退を始めるが俺は近寄り雪片弐型で斬りさくさらに横に一閃を入れる。

朔夜「とどめの一撃！」

俺は零落白夜を起動させて斬り裂く。試合は俺の勝ち。そこに山田先生が現れた。

山田「大変です！織斑先生！」

千冬「何だ、山田先生」

あくまでも落ち着いて行動する姉貴

山田「これを」

山田先生はケータイを姉貴に見せる。その時に俺は見た。束姉がさりげなく笑うところを

千冬「専用機持ちのお前らにやってもらいたいことがある」

姉貴が真剣な目でそう言った

真束さん無双（後書き）

次回もよろしくお願いします。

さ、さ、さ、作戦会議だ！（前書き）

修正

さ、さ、さ、作戦会議だ！

専用機持ち＋ウィッチーズが集まっていた。

千冬「では説明する。２時間前ハワイ沖で試験稼働中だったアメリカ・イスラエルの共同開発していたＩＳ『銀の福音（シルバリオン・ゴスペル）』が管理下を離れて暴走したの事だ」

ＩＳの暴走か、つか何でアメリカとイスラエルの共同開発何だ？別に良いけどね

千冬「五十分後には二キロ先を通過する。我々はそれの破壊を担当する」

束姉は何起こしてるんだよ。面倒な事起こしてくれるよな。それに嫌な予感がするよ。

千冬「他の質問はないか？」

ミーナ「相手の性能、武装のデータを見せてもらいませんか？」

ミーナがそう言っていた。さすがの現役軍人だな。

鈴「見るからに甲龍と同じく安定型だわ」

ラウラ「接近の能力が未知数だな。教官、偵察はできないんですか？」

千冬「無理だ。福音は高速移動で此方に向かっている。接触は一度

きりだ。」

なるほどな。だったらどうしようか。一様調べるかな。

朔夜「なら俺が調べよう。スケイスセットアップ」

スケイス［セットアップ］

俺はスケイス（デバイス）を起動させた俺の格好はＸｔｓフォームになる。久しぶりの格好だな。

朔夜以外「朔夜その格好何！」

俺のバリアジャケットを見てみんなが驚き始める。

朔夜「うーん、バリアジャケットだけど？」

そう答える俺だが、周りが

レイ「だからそのバリアジャケットってなんなの朔夜」

その説明からか～、面倒なんだよな～、何て言おうか。

朔夜「魔導師の防護服だな。ついでに此れのを説明するか。どうせ説明しなきゃならないし。此れはインテリジェントデバイス。魔導師の魔法の杖の代わりになるものだよ。」

そう言ってＧＴ－Ｘの形をしているスケイスを持ち上げる。

鈴「へー、そうなんだ。何で今使うのよ」

鈴が不思議そうに聞く。そしてみんながその言葉にうなずく。

朔夜「ラウラの要望に答えて、サーチャーを飛ばして偵察をする。俺は今嫌な予感がするんだよ」

そう言って白い球体を作り出し、外に飛ばして、空間ディスプレイを出す。

セシリア「あれが、銀の福音…」

箒「あれが我々が実戦で初めて戦う相手…」

その言葉に周りの緊張がはしる。まぁラウラと俺、志郎以外は実戦は初めてだから仕方ないかな。

そう言って白い球体を作り出し、外に飛ばして、空間ディスプレイを出す。

セシリア「あれが、銀の福音…」

箒「あれが我々が戦う相手…」

二人の言葉に周り緊張がはしる。まぁラウラと俺に志郎以外は初めての実戦だからね。多分

千冬「何だあの機体は…センサーに反応してなかったぞ」

ディスプレイには赤い粒子を出しているＩＳが三機居た。あの機体は…

一夏「…スローネが何で此処に…」

一夏が小声でそう言っていた。そう、ディスプレイにはガンダムスローネアイン、ツヴァイ、ドライが映っていた。しかし、すぐに画面にノイズがはしる。そして何も見えなくなった。

山田「織斑先生！センサー類が全滅しました。」

千冬「何！それは本当か！」

姉貴は山田先生の言った言葉に驚いた。姉貴が仕事の時に驚くのを見るとはな

朔夜「ドライのせいか…となると出撃メンバーはどうするか…」

俺は今回の事を考えていた。今回のミッションは速さと一撃必殺が必要だ。速さは紅椿だ。一撃必殺は俺の白式である。しかし、スローネがついている。駆り出すのは箒に俺、志郎と一夏だな。しかしその前にウサギさんを入場させなきゃな

朔夜「出てきなよ！束姉」

俺がそう言ってスケイスで天井を撃つと

束「痛いよさっくん。未来のお嫁さんに何するのかな？」

天井から落ちてきた束姉はお尻をさすりながらそう言ってきた。よし殺そう。

ヒロインライド・ナノハ

朔夜「少し頭を冷やそうか…」

俺はそう言ってディエンドドライバーでなのはを召喚した。

なのは「今日は何の用なの朔くん！」

なのはが飛びつきながら言ってきた。

朔夜「何と言うか手伝ってほしいことがあってな、それより元気そうで何よりだよなのは」

俺はそう言ってなのはの頭を撫でながらそう言った。なのはは嬉しそうに目を細める

なのは「なのはは何時も元気だよ。それよりお手伝いは？」

なのはがそう言ってきたので俺は束姉を見て、

朔夜「この人が勝手に色々言ったりやったりするから少しね…」

なのは「例えば？」

朔夜「俺の嫁になるとか今日は言ってたな」

そう言った瞬間になのはの表情は暗くなる。何だろう？ものすごく危ない気がするんだよね。俺じゃないよ。束姉が

なのは「駄目だよ？朔くんは私のお婿さんなんだよ？お父さんやお母さんにお兄ちゃんやお姉ちゃんにももう言ってあるんだよ？」

なのは、お前もかよ…頭が痛くなってきたよ。バファ○ン買わなきゃ…

なのは「少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ　しましょう」
なのはは束姉の首根っこを掴みひきずっていく。
束「助けてよ！ちーちゃん！さっくん！」
助けてと呼ぶ束姉だが誰も助けずに行かなかった。なのはが時折に「かめはめ波」、「ジェノサイドフレイバー」か聞こえたよ。
なのは「ふー、終わったよさっくん。またねー」
なのははその場で俺にキスして消えた。
朔夜「ふー、さて作戦だが、志郎と一夏にはスローネの相手をしてもらう」
志郎「任せろ」
一夏「わかった」
二人はそう俺に言ってきた。
朔夜「銀の福音の相手は俺、織斑朔夜と、箒だ。理由は今回の作戦はスピードと一撃必殺が必要だからだ。ＩＳの速さはこの中で一番速いのが紅椿なんだよだからだ。時間は１１．５０でいいか？」
千冬「問題ない」
こうして銀の福音の作戦が決まった

さ、さ、さ、作戦会議だ！（後書き）

次回もよろしくお願いします。

朔夜散る（前書き）

書き上がった

朔夜散る

１１時五十分

朔夜「行くよ箒、お前の背中は俺が守る。だから俺の背中は任せるよ。」

俺が箒にそう言った。箒は少し笑いながら

箒「分かった。私の背中は朔夜に任せる」

朔夜「おうよ！志郎に一夏、頼むぜあの三機を」

俺は志郎と一夏にそう言うと、二人は笑いながら

志郎「任せな、あの三機は破壊してやるからな」

一夏「任せな。速攻で潰してくるぜ」

千冬「時間だ！作戦開始！」

俺たちはＩＳを展開して飛び始めた。俺は箒の紅椿に股がり、銀の福音に居る方に向かう

志郎サイド

俺と一夏は朔夜が作った強化ブースターを装着して朔夜たちを追う。しかし速いなあの機体、紅椿はな朔夜はどんな機体を作ってるんだよ。

一夏「紅椿は速いな～ミーティアでやっと追いつける感じだな。しかし直ぐにエネルギーぎれになるのがおちだけどな」

一夏は朔夜が何故か持っていたミーティアを使って篠ノ之を追いかけていた。そういやあ、コイツは転生者なんだっけ？しかも原作を知っている。先の事を聞いておくか。

志郎「一夏この後の展開はわかるか？」

一夏「実は解らないんだよ。その知っているのに一番重要な部分が分からなくなるんだよ。」

一夏は下を向きながらそういった。誰かの仕業か…其処に赤い粒子のビームがとんできた。スローネたちが来た。俺はブースターを切り離しスローネに飛ばす。

一夏「当たれぇぇぇぇぇぇ！」

一夏はスーパードラグーンを使って、攻撃を開始した。

朔夜サイド

朔夜「箒！もう少しで敵との接触だ！気を引きしめていくぞ」

俺は箒にそう言ってみるが、何故かウキウキしている箒にはその言葉はまるで通じていなかった

箒「安心しろ。私は何時も気を引きしめてる。」

ぜんぜん気を引きしめてねぇ。俺がサポートしなきゃ。

箒「後十秒で目標に接触する。」

俺は箒の背中に立ち、俺は雪片弐型を両手で握りしめる

朔夜「零落白夜起動」

俺がそう呟くと体が山吹色のオーラに包まれる

朔夜「うおおおおおおおおおおおお！」俺は銀の福音を斬り裂こうとするが、銀の福音は後ろに避ける。そしてビームを放ってきた。俺と箒は分散して避ける。俺は散れ桜を出してミサイルを放つ。

箒「喰らえ！」

箒は裂割を震い、ビームの刃を飛ばす。しかし銀の福音はそれを全て避ける。

朔夜「なら、箒！左から回り込め！」

箒「任せろ！」

俺は右から回り込み銀の福音を斬り裂こうとする。箒は左からだ。しかし福音はそれを避ける。そして、福音は拡散ビームを放ってきた。

朔夜「ちっ！」

俺は全て避けるが

箒「きゃっ！」

箒は数発当たる。

朔夜「大丈夫か箒！」

俺は声を張り上げながら箒に言う。シールドエネルギーを貫通してないよな。

箒「大丈夫だ朔夜！」

箒はそう言いながら、体制を立て直して此方に飛んできた。良かった。無事か

朔夜「喰らいやがれ！」

俺はもう一度零落白夜を起動させて接近戦を持ち込み始めた。しかし、なかなか当たらない。さらにもう一閃喰らわせようとするが、接近戦用ブレードで受け止められる。そして銀の福音の翼が光だした。そして俺に向かって無数の光の束が襲いかかる。間に合わない。

ドカーン

俺は銀の福音の攻撃を受けてしまった。

箒「朔夜！」

箒は俺の名前を叫びながら呼ぶ。俺は叫びながら

朔夜「俺は無事だ！」

俺はそう言いながら箒に近寄る

箒「朔夜ぶじだったのだな。良かった。それより、私が動きをおさえるから、その隙に朔夜が一撃を入れてくれ」

箒がそう言うが紅椿のエネルギーが余りない状態なのだ。

朔夜「箒、お前は今の自分の状況を分かって言ってるのか」

俺は箒にそう言ったが箒は

箒「大丈夫だ。分かっていて言っている。それに、朔夜が守ってくれるのだろ？」

箒はそう言ってきた。確かに言ったけどさぁ、

箒「私は朔夜のことを信じている。だから朔夜も私を信じてくれないか」

箒は真剣な目で俺を見ながら言ってきた。そんな顔をされたら断れないだろうが…

朔夜「分かった。正しい死ぬなよ。大切な人をもう一人も失いたく無いんだ」

俺がそう言うと、箒は少し顔を赤くしていた。

箒「分かった（私は朔夜にとって大切な人。ってことはまさか朔夜は感情を思い出して、朔夜と私は…）」

朔夜「いくぜ、箒」

箒「わ、分かった」

箒は銀の福音に斬りかかる。銀の福音は箒の斬撃を全て受け止める。しかし俺は直ぐに零落白夜を起動させて斬りかかろうとしたが、福音はビームを箒に撃ち込み離脱しさらに攻撃してきた。しかし俺は避けられなかった。それは俺の後ろには密漁船がいたからだ。俺は福音の攻撃を全て斬り裂く。箒は俺の行動を見て

箒「朔夜！何故攻撃をしない。さっきがチャンスではないか！何故犯罪者を守る！」

箒は俺を見てキレた。

朔夜「箒！損なことを言うなよ。力を手にしてから、可笑しいぞ。そんな事を言わないでよ。」

箒は俺の言葉を聞いておくか体が震えだしていた。箒の持っていた雨月がてから落ちて、粒子とかした。やばい！箒の命がやばい！銀の福音は箒にビームを放ってきた。

朔夜「箒ぃいいいいい！」

俺は箒と銀の福音の間にきて、箒を庇う。

朔夜「がぁぁぁ

箒「朔夜ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

箒は、叫びながら俺に近づいてきた。その時に箒のリボンが焼けてしまった。箒のリボン無しも可愛いじゃん…

箒サイド

私は何てこと…朔夜を傷付けてしまった。せっかく素直になれたのに。せっかく想いを伝えたのに。せっかく力を手に入れたのに。私の悪い癖のせいで朔夜を傷つけてしまった。もう二度とＩＳは乗らない。

朔夜散る（後書き）

次回はヒロインたちの話と朔夜は女神に会う

だから俺は此処に居る（前書き）

誤字修正

だから俺は此処に居る

箒サイド

私たちは朔夜を回収した後千冬から撤退の命令を受けて旅館まで撤退をした。朔夜は昏睡状態におちいった。命に別状はないが、いつ目覚めるかはわからない。そして朔夜の身体はシールドエネルギーを貫通して、肌のあちらこちらが焼けてしまった。

箒「朔夜…」

私は手が白くなるほど握る。力があると使いたくなってしまう私の悪い癖。それをしないために私は剣道をしてきたのに結局駄目だった。そこに

鈴「なに?今反省中って訳?」

鈴が入って来た。今の私には余り関係が無い

箒「なにか、用か、無いなら一人にしてくれないか?」

私はそう言って朔夜を見ていた。

鈴「あー、もう、こう言う空気は嫌いなよ!あんたは何時までそうしてるつもりよ」

箒「さぁ?」

鈴「何よさぁって!何もしないわけ」

何を私にしろと、

鈴「何って例えばパッケージのインストールとか福音を探すとか、今のままで良い訳？」

ＩＳか…

箒「ＩＳにはもう乗らない…」

私はそう言うと鈴が私の胸ぐらを掴み

鈴「ふざけるんじゃないわよ！専用機持ちはそんなわがままが言える立場じゃないのよ！この戦わなきゃいけない時に戦えない臆病ものが！何？朔夜がこんな状態なのに何も思わないわけ？敵討ちに行きたいと思わないわけ？」

鈴の言葉で私のなかの闘志がまた芽生え始めてきた。

箒「戦えるなら戦いたい！今度こそ倒したい！しかし場所が解らないではないか！」

その言葉に鈴は笑いながら答えた。

鈴「今ラウラが調べてるわ」

なら今度は同じ過ちは繰り返さない。今度は絶対に倒してみせる。

朔夜サイド

朔夜「此処は何処だ？」

俺は真っ暗な空間に居た。しかし此処は何処だ?何か懐かしい感じする。その時真っ暗な空間に光が満ちる。

朔夜「隠されし禁断の聖域…」

俺が今立っている場所は隠されし禁断の聖域、グリーマ・レヴ大聖堂に居た。何故此処に居る?しかも、ＡＩＤＡサーバに居るような感覚だ。

スケイス「ようハセヲ!またあったな。」

俺の姿のスケイスが居た。精神世界か…

朔夜「何のようだスケイス。今の俺の状態はどうなっている。」

俺がスケイスに聞くとスケイスは

スケイス「ああ、お前の状態か。お前は箒をかばって、ビームの直撃を喰らって昏睡状態になったわけだ。」

スケイスは笑いながら言っていた。昏睡状態か…

スケイス「さてと、ハセヲ、そろそろみんなの所に帰ろうぜ。イニスたちに会いたいし。」

スケイスはそう言ってきた。千草…智香…潤香元気かな?

スケイス「ハセヲもあいつらに会いたいんじゃんか。」

朔夜「そうだけど、行かない。こっちの世界がまだ終わってない。

だから行くわけには行かない。」

スケイス「俺は戻りたい。だがお前は戻りたくない。なら、勝負で勝った方の言うことを聞くと言うことで…勝負！」

スケイスは虚空双牙を取り出して、俺に斬りかかる。

晃サイド

俺たちは現在、福音と戦闘中しかもスローネつきでだ。ラウラが砲撃をして、シャルとレイが防御をしてセシリアが、狙撃で注意をそらして、鈴と箒と俺でとどめのをさす方向性でやっていたが、上手くいかない

シャル「喰らえ！」

シャルはミサイルを福音に放つが全て落とされる。さらにスローネアインがビームキャノンを放つ。シャルはシールドで防ぐ。

シャル「ジンガスクードの盾はそう簡単には破壊できないよ」

ラウラ「喰らえ！」

ラウラはレールキャノンをさらに放ち、スローネドライを破壊しようとするが、スローネツヴァイがそれを阻止する。

セシリア「まだですわ」

セシリアが狙撃でスローネツヴァイを撃つ。スローネツヴァイの脚が破壊できた。

しかし、まだまだ先はながそうだな。

晃「喰らいな！リボルビングステーク！」

俺は粒子チャージ中のスローネアインをリボルビングステークで破壊した。

鈴「はぁぁぁぁぁぁ！」

箒「せぇぇぇぇぇぇぇい！」

箒と鈴はスローネドライを二人で叩き斬り裂く。スローネドライはそのまま海に落ちる。

朔夜サイド

朔夜「変身！！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身をする。さらに俺はケータッチを取り出してクウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・電王・キバファイナルカメンライド・ディケイド

俺はディケイド・コンプリートフォームになる。そして俺は

ブレイド・キング

俺はブレイドキングフォームにカメンライドをした。俺のコンプリートフォームは仮面ライダーの召喚の他に最強フォームに変身が出来る。

朔夜「いくぜ」

アタックライド・キングラウザー

俺はキングラウザーを喚び出して、スケイスに斬りかかる。スケイスは虚空双牙で受け止めるが俺は膝で腹を蹴る。さらに、左ストレートを放つ。スケイスは大聖堂の椅子を何個か壊す。スケイスは死ヲ刻ム影を杖にしながら立ち上がる。

スケイス「まだだ！まだ終わってない…」

スケイスはそう言っているが、足は凄くふらついていた。

朔夜「何故お前が此処までやろうとする。」

スケイス「イニスに会いたいからじゃ！」

朔夜「そうか…情けは無用だ。」

ファイナルアタックライド・ブ、ブ、ブ、ブ、ブ、ブレイド

俺はスケイスにロイヤルストレートフラッシュを放つ

朔夜「俺の勝ちだ。」

その時に奴が現れた。

朔夜「何故此処にいる。アウラよ」

俺はアウラに聞くが何も答えず。

アウラ「久しぶりです。モルナガの小さきこらよ」

アウラがそう言ってさらに俺に質問をしてきた

アウラ「あなたはあの世界で何をするのですか?」

朔夜「仲間が…友達を守る事だ」

そう言うとアウラは先に消え始めた。最後にアウラが

アウラ「願いなさい。そうすればあなたに力があたえられます」

願う。何をあいつらを守る。新たな力が欲しい

ポーン

だから俺は此処に居る（後書き）

次回はＶＳ福音

復活の朔夜（前書き）

書き終えた…

復活の朔夜

晃サイド

晃「斬艦刀一閃！」

俺は斬艦刀でスローネツヴァイを叩き斬り裂く。これで残りは銀の福音のみだ。しかし、みんなシールドエネルギーはほとんど残っていない。もつのかな？

一夏「いけ！ドラグーン！」

一夏はドラグーンで相手の動きを封じようとするが、全て落とされた。

レイ「喰らえ！！」

レイのヘビーアームズのガトリングが火をふく。しかし福音は全て避けてから拡散ビームを放ってきた。みんなはそれを避ける。

箒「はぁぁぁぁぁぁ！」

箒は剣で福音を斬ろうとするが、福音は接近戦用ブレードで受け止め、さらに箒の首を掴む

箒サイド

私は此処で死ぬのか。死にたくない。嫌だ。生きたい。まだ朔夜といたい。

箒「朔夜…」

私が朔夜の名前を呼んだときにに福音は私から離れていた。そう、無数の光が福音を襲っていたのだ。光が飛んできた方を向くと白い身体に三つ目に背中に八本の光の剣を持っていて死神を連想させる身体。彼が来た。私が一番会いたくて、私が一番好きな人が居た。

朔夜「殺らせるかよ。もう目の前で誰も殺らせはしない！」

織斑朔夜が居た

朔夜サイド

俺は銀の福音に無数のビームを放って箒から遠ざけた。

箒「朔夜、無事なのか…」

箒は今にも泣きそうな顔で俺に近づいてきた。俺は箒の頭を撫でながら、

朔夜「大丈夫、それより誕生日おめでとう。」

俺は箒に白いリボンと紅葉の形をしたペンダントを渡した。箒はそれを見て驚いていた。

箒「覚えていてくれたのだな。私の誕生日を」

朔夜「忘れるわけ無いだろ?箒の誕生日だし。」

俺がそう言うと、箒は顔を赤くしながら

箒「私の誕生日だから忘れないか…」

軽くトリップしていた。それよりも俺は銀の福音を睨み付けて、箒に

朔夜「少しいってくるわ」

俺は銀の福音に光で作った鎌で襲いかかる。さらにマシンガンの如く光弾を連謝した。そして、鎌で斬り裂くと、銀の福音から黒い泡が現れた。ＡＩＤＡだ。俺は泡に向かって斬りかかる。

鈴「朔夜！」

鈴が俺に近づいてきた。

朔夜「来るな！」

俺が鈴にそう言うが、すでに遅く、ＡＩＤＡの触手は鈴を狙っていたが、ＡＩＤＡの触手は何者かに破壊されていた。それは、

オーヴァン「間に合ったな」

コルベニクを出しているオーヴァンが居た。

朔夜「オーヴァン！」

俺は驚きが隠せずに居た。

オーヴァン「それより速くかたずけろハセヲ」

朔夜「わかってる」

俺は右手に光の剣を集結させてデータドレインの体制をとる。そして、

朔夜「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

データドレインは銀の福音を襲いかかる。そしてＡＩＤＡは駆除されたが、銀の福音は初期設定になっり海に落ち始める。俺はイグニッションブーストを使い、操縦者を助けた。これで一段落つけるかな。それより、

朔夜「オーヴァン！何故此処に！」

オーヴァン「後で砂浜に来い。その時に話そう。」

オーヴァンはそう言い残してその場を立ち去った

旅館の近くの海岸

俺は海岸に行き、夜空を見ていた。星がキレイだな

朔夜「♪～♪～」

俺が歌っていると、横から、オーヴァンのこと犬堂雅人が現れてきた。

雅人「中々だな、亮」

朔夜「朔夜だ。雅人」

雅人「俺にとっては亮だ。それは変わらない。」

朔夜「用件は？」

俺がそう言うと、笑っていた顔が真剣なものになった

雅人「帰ってこい亮。みんなが待っている」

雅人はそう俺につげた。みんなが待っているか…

箒サイド

私は朔夜を探してあるいていた。すると歌声が聞こえてきたので近づいてみると朔夜がいた

朔夜「♪～♪～」

相変わらずの素晴らしい歌声ださぁ近づいて、リボンとかのお礼を言おう。そうしようとしたら、オレンジ色のサングラスの男が現れた

雅人「中々だな、亮」

朔夜「朔夜だ。雅人」

亮？朔夜ではないのか？

雅人「俺にとっては亮だ。それは変わらない。」

朔夜「用件は？」

サングラスの男の顔が真剣なものになった

雅人「帰ってこい亮。みんなが待っている」

帰ってこい？まさか朔夜はここからいなくなるのか！もう離れたくない

朔夜サイド

朔夜「それは無理だ。まだこの世界でやることが終わってない。」

俺は雅人にそう言うと、、雅人は蒸気銃を構えて

雅人「なら無理矢理でも連れて帰るぞ亮！」

雅人は俺の急所を外して撃ってきた。俺はそれを避けて、双銃を構えて撃ち始める

朔夜「俺は帰らねぇぞ雅人！」

俺は双銃をしまい、やばいけどさっさと終わらせる為に俺はトルクのアドベントデッキを取り出して

朔夜「カメンライド！」

俺はトルクに変身する。

シュートベント

俺はギガランチャーを装備して、雅人に向かって放つ。まぁ、死なない程度にいたぶりますか。雅人はそれを避けるが、そこにマグナバイザーで足を撃つ。

雅人「くっ！」

雅人は膝をつく。

ファイナルベント

俺はそこにファイナルベントをベントインする。マグナギガを召喚し背中にマグナバイザーを取り出して、エンドオブワールドを放つ。ぶっちゃけ全弾発射だよね。雅人はそのまま気絶した。

朔夜「来い！烏！」

烏「ぶぅぅぅぅぅぅぅらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

烏が雄叫びをあげて出てきた。

朔夜「烏、こいつを烏「分かっている。」」

烏は雅人を元の世界に蹴り戻した。さっきぐちゃってなったよな。

烏「それより朔夜」

烏はそう言って、ギギの腕輪を取り出す。

朔夜「分かってるよ」

俺はオニキスのアドベントデッキを取り出す。さて何かな今日の相手は

復活の朔夜（後書き）

次回で三巻終了

番外、朔夜のいないクロスワールド（前書き）

息抜きです

番外、朔夜のいないクロスワールド

作者サイド

烏「はい、6課しゅ～ご～」
朔夜の居なくなったクロスワールドの6課に烏の気だるそうな声が
響いた

ティアナ「一体何なのよ」
なのは「どうしたの、烏君」

フェイト「また、何かする気？烏？」

シグナム「黒葉、私と決着をつけるぞ」

ヴィータ「止めとけよシグナム」

スバル「それで本当に何なの？」

エリオ「おじさん、また何か企んでますね」

キャロ「おじさまよくそんなに考えつきますね」

烏の号令に集まった6課のメンバー達はそれぞれの反応を示した

烏「んじゃ皆が揃ったから訓練するぞ～」

ティアナ「ちょっと待ってよ、部隊長は？」ティアナが言うとうり、はやての姿が見えない

烏「あぁ、はやてなら俺の後を付け回してたから、捕まえて懲罰中だ☆」

烏が笑顔で言うと皆の顔が青ざめた

スバル「部隊長……命知らずだなぁ」

烏「んなことより、今日の訓練はこれだ！」

烏が指を鳴らすと、魔神な皇帝様が９体と偉大な勇者９体が現れた

フェイト「何だ、今日の訓練は軽めだね」

フェイトは安心したよに言ったが……

烏「今日の訓練はこいつを破壊してもらう、ただし、こいつのＡＩは、朔夜の十分の一と俺の二分の一が組み込まれている」

＜そう言った瞬間エリオとキャロ以外の皆からの文句…というよりは悲鳴が聞こえてきた。

ヴィータ「お前はあたしらを殺す気かぁぁぁぁぁぁ」

ヴィータの叫びが響く

ティアナ「そうよ、というかあんたはできるの？」

ティアナがそう言った瞬間烏が一体と戦い一瞬で破壊した

烏「これでいいか？」

烏はティアナに向かって言った

ティアナ「……もうわかったわよ、てゆうか何でエリオとキャロは驚かないのよ？」

ティアナの質問にエリオとキャロは

エリオ「昨日おじさんにやらされましたから」

キャロ「昨日はおじさまと、朔夜さんのＡＩつんだ機体５０機と戦いました」＜とんでもないことを言い始めた

＜

＜フェイト「烏！二人に危ない事させないで！」

ものすごい剣幕でフェイトが烏に詰め寄った

烏「二人がやりたいつったからやらせたんだ、安心しろ本当に危なかったら俺が止めるしな」

烏がそう言ったら、渋々フェイトは引き下がった

烏「あ～ついでに一番早く倒した奴に賞品やる。なのは、フェイト、ティアナは朔夜に会わせてやる」

三人の目がやる気になった

烏「シグナムは俺が直々に模擬戦してやる」

シグナム「ほ……本当か？」

シグナムが臨戦体制になり

烏「スバルとヴィータにはアイスを好きなだけ食わせてやる」

ヴィータ「本当だな」＜スバル「やるやる、アイスの為なら」

ヴィータとスバルはアイスにつられた

烏「エリオは新しい技を教えてやる。あれだな、今回は魔力によるストナーサンシャインだな」

エリオ「嬉しいです。おじさん」

エリオが烏にお礼を言った

烏「キャロは…新しい召喚獣をくれてやろう。そうだな、ババハムート烈だ」

キャロ「ありがとうございます。おじさま」

キャロはものすごく喜んだ

烏「んじゃ、初め、ヴィヴィオ「烏おじちゃんヴィヴィオもしたい」

そうか、んじゃヴィヴィオにはこいつかな」

そう言った烏は、ボロットのボスを出した

なのは「ちょっと烏君！！ヴィヴィオには無理だよ！」

なのはが言うと

烏「大丈夫だ、俺が少し鍛えたからな、自由なガンダム位なら倒せ

る位だぜ！」
そう言ったら引き下がった

ティアナ「それはいいけど何であたし達と相手が違うのよ？」
ティアナが質問すると

烏「子供相手にカイザーは危ないだろう？」
烏は当然の如く言いのけた

ティアナ「じゃ、エリオとキャロの相手も変えてあげなさいよぉぉぉぉぉ！！」
ティアナが絶叫すると

烏「あの二人は、俺が直々に、大切に鍛え上げているこれくらい出来なきゃ困るぜ」＜烏が真剣に言った。
＜
＜ティアナ「わ……わかったわよ…」
ティアナは烏の殺気を感じ引き下がった

烏「さて少し遅れたが、そろそろ始めるぞ～ヴィヴィオ、倒したら朔夜パパに会わせてやるからな～、んじゃ、初めぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」烏の号令と共に全員が一斉に戦い初めた。

なのは「ディバインバスター！」

偉大な勇者になのははディバインバスターを０．０５秒で放つ。更に、

なのは「雷神槍！」

レイジングハートをエクセリオンモードにして貫く
なのは「一体目！後はマジンカイザーのみだね。」
しかしカイザーはファイヤーブラスターをなのはに放つ。なのは撃沈
フェイト「なのは！」
フェイトがなのはの名前を呼んだ時にサンダーブレイクを放つ。しかも全体に
烏「わるい！なのは以外のグレートは十割朔夜のＡＩだわ」
烏が言った時にはみんな全滅だった

おまけ

はやて「無理やってこんなん」

はやての目の前には
マジンカイザー
真ゲッター１
大雷皇
ダイゼンガー
ファイナルダンクーガ
ディスアストロナガン
が仁王立ちしていた

はやて「烏く～ん、私が悪かったから許して～な～」

はやてが涙目になっていた

烏「仕方ねえな～もう人の事を付け回さねぇなら、助けてやる」

はやて「は…はい！誓います～だから助けて～」
はやては号泣状態になっていた

烏「ったく（不覚にも萌えちまったぜ）ほらよ」

烏が6体のロボットを重力で破壊した

はやて（スゴすぎやろ…ほんまに……）
こうしてはやての罰は終わったが……
はやて（これは、調査せえへんと）
また、起こるようです
（´、ｏ、）ﾆｺ3

番外、朔夜のいないクロスワールド（後書き）

次回は本編

ライダー無双（前書き）

三巻終了

ライダー無双

岩かげからシャドームーンにアポロガイスト、死神博士のこと、イカデビルが居た。

烏「アーマーゾーン」

烏はアマゾンに変身をした。そして俺は

朔夜「カメンライド！」

俺は仮面ライダーオニキスに変身をする。

朔夜「さて、焼却タイムの始まりだ」

アタックベント

俺はドラグブラッカーをアタックベントで喚びだした。

ブラッカー「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ドラグブラッカーは雄叫びをあげて海面から出てきた。そして青色の炎を吐いてイカデビルを攻撃した。

烏「ジャガーショォォォォォクッ！」

烏はアポロガイストに向かってジャガーショックを喰らわせる。

アポロガイスト「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

うわーグロっ！

烏「こいつの肉は不味いな…」

烏はそう言って、アポロガイストを放り投げた。グロすぎだから…

ストライクベント

朔夜「ドラゴンクローファイヤー」

俺はストライクベント…ドラゴンクローを装備して、イカデビルを殴り飛ばす。いやーよく燃えるよ

ソードベント

俺はドラグセイバーでイカデビルを斬り裂き、さらに蹴りを入れて、アッパーを喰らわせた。そこに

ストライクベント

本日二度目のストライクベントを装備して

朔夜「ドラゴンクローアッパー！」

俺はドラゴンクローを装備した手でアッパーを喰らわせた。。良く燃えるよ。

ファイナルベント

俺はファイナルベントを発動させた

朔夜「うおおおおおおおおおおおおお！」

俺はドラゴンライダーキックをイカデビルに喰らわせた。イカデビル爆殺！（ＡＩＢＯ風）

烏「スーパー大切斬！」

烏はガガの腕輪を装着してスーパー大切斬をでアポロガイスト（生身）を斬り裂く。うわ～真っ二つになって血の噴水が出来上がったよ。

しかし、シャドームーンが箒に向けてサターンサーベルを突きつけていた。

シャドームーン「コイツを殺されたくなければ変身を解いて、アドベントデッキを横に投げろ」

俺はシャドームーンに言われた通りにオニキスのアドベントデッキをＶバックルから外して、横に放り投げた。俺はシャドームーンに身体をけさがきに斬り裂かれた

朔夜「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は膝を付くそこにシャドームーンは俺の肩にサターンサーベルを刺してきた

箒「朔夜！私に構わず戦え！」

箒は泣きながら叫んできた。箒を犠牲にして戦えるかよ。大切な人

をもう失いたく無いんだ

朔夜「嫌だね。俺は箒を失いたくない。」

箒「私は朔夜に傷ついてでほしくない」

朔夜「大丈夫だよ。なぁ烏」

俺がそう言うと、烏は箒を押さえていた兵士を木っ端微塵にした。

烏「終わったぜ朔夜」

シャドームーン「何故彼奴が！」

シャドームーンは驚きを隠せずに居た。

烏「何故って、普通に分離した。」

烏はリョロリョロと分離した。

朔夜「此からが本場！変身！」

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

俺はオーズタトバコンボに変身した

朔夜「さぁ、倍返しにするかな」

俺はトラクローを展開し斬り裂く。更にバッタレックに力を貯めて蹴りまくる。

朔夜「まだだ！」

タカ・カマキリ・バッタ

俺はオーズタカキリバになり、カマキリソードで斬りまくる。使いやすいぜ。俺はついでにサマーソルトキックを喰らわせた。

タカ・ゴリラ・バッタ

俺はオーズタカゴリバになる。俺はシャドームーンにどこぞのスタンド使いみたいな連続パンチを喰らわせた。さらに

朔夜「ロケットパアアアアアアアアアアアアアンチ」

俺はシャドームーンにゴリラバゴーンを放つ。まさかライダーでロケットパンチを放つとはな

タカ・ウナギ・バッタ

俺はオーズタカウバになる。俺はウナギの電撃ムチで叩きまくる。何だろう？シャドームーンがMになりかけてね？

朔夜「さてと、次は」

クワガタ・カマキリ・バッタ

ガタガタキリッバガタキリバ

俺はオーズガタキリバコンボになる

朔夜「うおおおおおおおおおおおおお！」

俺は雄叫びをあげて、シャドームーンに突っ込み殴り飛ばす。さらにカマキリソードでシャドームーンを斬り裂く。そこに膝蹴りを入れて、さらに投げ飛ばす

シャドームーン「がはっ！」

俺はガタキリバの能力の分身で五十人に分身をして、タコ殴りをかえしした。

スキャニングチャージ

俺はガタキリバキックを咬ました。いやー、自分でやってなんだが、卑怯だな…

朔夜「あれ？」

俺は突然身体がぐらついた。力が入らない…

箒「朔夜！大丈夫か！」

箒が俺の身体を支えてくれた。箒からいい臭いがする。

朔夜「箒、少し疲れただけだ。休めばすぐなおるさ。少しごめん」

俺は箒の膝に寝た。

箒サイド

朔夜が私の膝に寝ている。これが膝枕というやつか、朔夜の寝顔久しぶりに見るな、同室だった時には見てなかったが、朔夜の寝顔が可愛いな。今ならいいよな、鈴もやったのだから。私は朔夜の口にキスをした。

次の日

朔夜「眠い…」

俺は昨日の戦闘の疲労及び睡眠不足で眠い。さらに箒は何故か機嫌がとても良いし、烏に俺が寝た後の事を聞いたら、箒が俺にキスをしたらしい。まさか箒がしてくるとはな…

？「織斑朔夜ってだれ？」

金髪の二十代前後の女の人が居た。

朔夜「俺ですが？」

？「私はナターシャ・ファルス。銀の福音の操縦者よ」

へー、この人が、

ナターシャ「助けてくれてありがとう。白いナイトさま」

ナターシャは俺にキスをして立ち去った。周りの視線がいたいんだ

けど。

レイ「朔夜人気だね」

ラウラ「また浮気か？」

箒「ハレンチだ！」

セシリア「朔夜さん速球なようけんが」

キラ「あるんだけど？」

ミーナ「いいか？朔夜くん」

周りから殺気が恐いよ。生きて帰れるかな？

ライダー無双（後書き）

次回はオリジナル

夏休みに入りました（前書き）

オリジナル篇

夏休みに入りました

朔夜「なんだ此処は！またあのパターン！」

俺は地球が無数に広がる場所にいた。てことは…

渡「久しぶりだね。朔夜」

紅渡が目の前に居た。また厄介ごとかな？

朔夜「何かようか？何処に行けばいい？どうせ拒否権はないだろ？」

俺がそう渡に言うと渡は申し訳なさそうな顔をしていた。

渡「ごめん…人手が足りないんだ…」

朔夜「それはいいから、内容は？」

渡「実はオーズの世界に行ってほしいんだ。」

渡はそう言ってきた。オーズの世界？Wの世界とつながってるあの世界か…

朔夜「いいけど」

俺はそう言ったら、渡は

渡「有り難う。助かるよ。行く日にちは、明後日だから。」

明後日か…何も予定は無いしいいか。しかし、何時帰ってこれるか分からないから、姉貴には言ってから行くとしよう。俺は元の場所に戻った

朔夜「取りあえずは姉貴に言わなきゃな」

俺は姉貴の元に向かう。何て言うかな姉貴

寮長室

俺は寮長室の前まできて、ノックをして中から声がしたので

朔夜「失礼します」

と言って中に入った。うわぁ相変わらずの汚なさ…整理しようよ

千冬「何だ？座ったらどうだ？」

姉貴がそうすすめてきたが、俺は

朔夜「掃除しようよ…」

俺はそう言って掃除を始めた。せめて下着はしまおうぜ…弟を入れるのに、下着は散らかさないだろ。

千冬「朔夜、何の用なんだろ？まさか私を朔夜「それはない」っち！」

姉貴よあなたの処女はいりませんよ。姉弟だし。まぁ姉弟じゃなかったら、嬉しかったかもしれないけどね。

朔夜「明後日から俺は異世界のダチを助けに行く」

俺は姉貴にそう言った。姉貴は寂しそうな顔をした。その顔はけして外のやつらには見せない顔だ。

朔夜「大丈夫だよ姉貴。必ず帰ってくるから」

俺はそう言って、笑顔で姉貴の頭を撫でる。姉貴は顔を赤くしながら

千冬「私は子供ではないぞ！朔夜」

朔夜「せめて、俺の十倍生きてから言ってよ。千冬ちゃん」

俺は姉貴をからかいながらそう言った。姉貴は顔をブスッとしながら、

千冬「姉をからかうな朔夜！」

姉貴はそう怒ってきたが怖くない。何故って、今の顔は何処にでも居る女の子だからだ。

朔夜「はいはい」

俺はそう言って部屋を出た

屋上

朔夜「さてと、さすがのこの歌は男のままはやだからな」

俺は契約の腕輪を使い女になるそして

朔夜「♪～♪～」

ストライクウィッチーズのOPを歌てみた。そこに

ミーナ「朔夜くんは歌もうまいのね。」

ミーナがやって来た。

朔夜「ミーナよりはうまくないわよ？」

私はそうかえすとミーナは驚いていた。自分が歌を歌えることを私が知っていることにだろう

ミーナ「よく私が歌を歌えることをしっているわね」

朔夜「まぁ『ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ』が歌を歌えることは知っているけど『ミーナ』が歌を歌えることは知らないわよ」

私はそうミーナに言ったら、ミーナは微笑ながら

ミーナ「やはり朔夜くんは私たちの事を一人の人間として見ていてくれるのね」

朔夜「人しか見れないじゃない。ミーナたちをキャラとしか見れないやつがいたら。ぶっ飛ばしたいわね。それより良く私が朔夜とわかったわね」

私はミーナに聞いてみた。ミーナにこの姿は見せたこと無いのにね。

ミーナ「女の感よ？それより、さっきの歌は何？」

朔夜「ＳＴＲＩＫＥ　ＷＩＴＣＨＥＳ～わたしにできること～」

私の言った言葉に驚きが隠せないようだ。何故なら自分の部隊の名前が出てきたのだから。

ミーナ「まさか…」

朔夜「そうよ。貴女たちの主題歌よ。私は結構好きなのよねこの歌。」

私はそう言って空を見上げた

ミーナ「そうなの…他に何か良い歌ない？」

ミーナがそう言ってきたから私は

朔夜「♪～♪～」

私は創聖のアクエリオンを歌った。それを聴いていたミーナは顔赤くしていた。毎回この歌を聴いている女の子は顔赤くするんだよな

朔夜「さてと戻るかな」

俺は男に戻って、屋上を立ち去る。

部屋

楯無「ハロー朔夜くん元気かな？」

楯無が居た。確か俺はカギを閉めてきたよな。しかもドアごと交えて、カギは俺しか持ってないはずなのにな…

楯無「朔夜くん。なに勝手にドアを交えてるのかな？」

朔夜「知りませんな。それよりようは何？」

楯無「愛を深めに」

俺はそのまま楯無を外に出そうとしたら、

楯無「冗談だよ！ちゃんと話はあるよ。しかも亡国企業の」

楯無は真面目な顔つきになる

朔夜「それは？」

楯無「臨海学校の三機は亡国企業のものらしいの。しかもその三機は何者かに提供されたものらしい。」

朔夜「なるほどな…ありがとう」

俺は楯無にそう言うと

楯無「良いわよ。好きな人には私は尽くすのよ」

楯無はそのまま消えた

夏休みに入りました（後書き）

次回は龍の骨さんとのコラボです。こんなに作品で良ければコラボ要請を送ってくださると嬉しいです

リアルバイオ（前書き）

編集

リアルバイオ

朔夜「よっしゃー！２０連勝！」

俺は現在ゲーセンの某型月の格ゲーをしている。七夜はやっぱ良い。

そこに

弾「よう朔夜。」

弾が現れた。一人のようだが何しに来たんだ？

朔夜「何だ弾。俺は今メル◯ラで目指せ五十連勝をしているだ。」

弾「そんなことより遊ぼうぜ。ナンパしようぜ」

弾はそう言ってきた。相変わらずだな…俺はそれを無視してメル◯ラを続けた。相手は暴走アルクかさてと秒殺を目指すかな

弾「無視するなよ朔夜」

弾がそう言ってきたが無視をする。ナンパに興味無いしな。

朔夜「ナンパに誘うならカズにしろよ。俺は興味無いんだからよ」

弾「しかしお前が居ると女が近づいて来るんだから」

そんな動機かよ！

朔夜「さてとお前の罪を数えろ！」

俺は力任せに弾の顔を殴り飛ばす。

弾「何をするんだよ！」

弾は顔を抑えながらそう言ってきた

朔夜「何ってお前の罪を数えろ！」

？～？～

俺のケータイの着信音が鳴り出した。着信音は仮面ライダー剣第二期ＯＰだよ。ディスプレイには『風鈴音』と表示されていた

朔夜「鈴からか…何のようだろう」

取りあえずでるか

朔夜「何の用だ鈴」

鈴『朔夜！今すぐに学園に戻りなさい！拒否権はないわよ！』

鈴はそれだけ言って電話をきる。せめて要件だけは言ってくれよ…

朔夜「弾悪いな、鈴が俺を呼んでるらしいから帰える。」

俺はそれだけを言ってＩＳ学園に向かった

ＩＳ学園

朔夜「鈴何か用か？」

俺はそう言って鈴の部屋に入る

鈴「朔夜、率直に言うわ、あなたはこの世界を離れるの？実は千冬さんとの話を聞いちゃったの」

鈴は俺を不安そうな目で見る。成る程、聞いちゃったのね。

朔夜「一時的な。向こうのダチが困ってるから助けにな」

俺が鈴にそう言うと

鈴「朔夜！あたしも連れてって」

鈴が真剣な顔つきで俺に言ってきた。

朔夜「いや無理だ。危険だし。」

俺はそう言ってみたが、

鈴「行く！絶対に行く！」

鈴は引き下がらない。

朔夜「ダメだ。鈴を危険な目にあわせたくない。頼むから」

鈴「やだ！」

だが引き下がらない鈴。俺は軽くキレかけて

朔夜「いい加減に、鈴「もう朔夜が危険な目にあうのに助けられないのは嫌だよ」」

鈴が泣きながら言ってきた

鈴「やと力がてにはいったのに、助けられないのは嫌だよ」

俺はそんな鈴をただただ見ていることしかできなかった

朔夜「鈴…分かったよ連れていく。ただし、危なくなったら逃げろよな。」

鈴「わかったわよ。」

明後日のオーズの世界には鈴も同行することになった

朔夜「明後日出発だからな。」

俺はそう言って部屋を出たがその時に何か見覚えのある人がやって来た。それは

アックス「朱愛大丈夫?」

蔡帽「大丈夫です。アックスさま。それよりアックスさまこそ大丈夫ですか?」

どこぞのバッカプルの蔡帽にアレックス・ウェスカーが居た。

朔夜「何で二人が居るの!」

俺の叫びが聞こえたらしく、二人は此方に振り向く。さらに鈴も此方に居た。

アックス「君たちは誰だい?僕と朱愛の楽しみを邪魔をするのは」

あれ?何で二人はこちらのことを覚えていないんだ。成る程な大体分かった。平行世界か…。俺たちは自己紹介をしたのち、適当にぶらついた。

朔夜「何でこうなった?」

アックス「分からない」

今俺たちはゾンビを倒している。何故って普通に歩いていたら、突然襲われたんだよ。

鈴「まさかリアルバイオをやるなんてね」

鈴はハンドガンでゾンビの頭を撃ち抜く。

蔡帽「全く嫌なことですね」

蔡帽は戦斧で一気に何体もゾンビを蹴散らす。思えば鈴と蔡帽は似てるな。胸のサイズは全く違うけど。

朔夜「喰らえ!」

俺は刹那とキーブレードの『過ぎ去りし思い出』でゾンビたちを斬り伏せる。敵の数は半端じゃない。

アックス「こいつらは一向に減らないよ」

朔夜「確かに…何かないかな」

倒したゾンビを見ると

鈴「人間に戻ってる」

蔡帽「本当です。アックスさま、ゾンビが人間に戻っています。」

蔡帽もそう言っていた。此れはゾンビみたいなものか…

？「がぁぁぁ

そして

朔夜・アックス「変身！」

カメンライド・ディケイド

ヘンシン

俺はディケイドにアレックスはサソード・マスクドフォームになる

朔夜「先ずは雑魚の一掃から始めるぜ」

カメンライド・カブト

俺はカブトにカメンライドをした。さらにカードをディケイドドライバーに差し込む

アタックライド・クロックアップ

俺はカブト系ライダーの技クロックアップを使った。それで高速で動きながら、ライドブッカーソードモードでゾンビたちを斬り伏せる。

アックス「僕もやるかな。キャストオフ」

キャストオフ

チェンジ・スコーピオン

アレックスはサソード・ライダーフォームになり、

アックス「クロックアップ」

クロックアップ

アレックスもクロックアップを使ってゾンビたちを斬り伏せる。

朔夜「残りはお前だタイラント擬き」

カメンライド・ファイズ

俺はファイズにカメンライドをした。俺はライドブッカーソードモードでタイラント擬きを斬り、横からアレックスが斬り、同時で殴り飛ばす。そして俺たちは

ファイナルアタックライド・ファ、ファ、ファ、ファ、ファイズ

ライダースラッシュ

俺はクリムゾンスマッシュをアレックスはライダースラッシュをタイラント擬きに喰らわせた。タイラント擬きの身体からガイアメモリが排出された。

朔夜「今日はいろいろ巻き込んじまって悪かった」

俺はアレックスたちに謝った

アックス「いいよ。気にしてないから」

アレックスはそう言った

鈴「またね。朱愛」

蔡帽「また会いましょう鈴」

二人は仲良くなったらしい

朔夜「今度はダチを連れて来いよ、アレックス。歓迎する」

アックス「そうするよ」

アレックスたちは銀のオーロラにのまれて消えた

リアルバイオ（後書き）

次回もよろしく

久しぶりに行こう。女神が居る世界に（前書き）

書き終えたぜ…

久しぶりに行こう。女神が居る世界に

朔夜「久しぶりに行こうかなＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに」

俺はゲートを開いて俺が三崎亮として生きた世界に行こうとしたら

ラウラ「朔夜居るか？」

ラウラが現れた。何故何時も何処かに行こうとすると毎度現れるんだ

朔夜「え～、異世界に遊びにな」

俺はそう言うと、ラウラは俺に近づいてきた。上目遣いで俺を見て

ラウラ「私も連れて行ってくれないか？」

ラウラはそう言った。やばい！そんな顔されるとことわりにくい。

朔夜「連れていくよ」

了承をしている俺が居た。あの顔を断れるヤツは人間じゃない。

ラウラ「本当か！」

ラウラの顔が不安そうなものから笑顔１００の顔で俺を見ていた。

朔夜「本当だよ。だからそんな顔をするな」

俺はラウラの頭を撫でながらそう言った。ラウラは気持ちよさそう

な顔をしていた。改めてあちらの世界に向かう。

Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄがある世界

朔夜「久しぶりに来たな。さてと、ラウラのものを揃えなきゃ」

俺はラウラがＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄを出来るように準備を始めた。ＰＣはゲーム用のやつをコントローラーとかは俺とお揃いを買った。さてと家に着いたら、いろいろな事をして、さあ始めよう。Ｔｈｅ　ＷｏｒｌｄＲ２を俺は自分のキャラの名前を教えて、先にＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄに入った。この世界もこの感覚も久しぶりだ。俺はぼーとしていたら、後ろから

？「ハセヲか？」

銀髪の眼帯の少し小さめな女の子が居た。名前を見たら。『ラウラ』って満々自分の名前かよ！

朔夜「ラウラか…」

ラウラ「そうだが？」

俺はオーヴァンが俺に言った言葉を言った。

朔夜「ＷｅｌｃｏｍｅｔｏＴｈｅ　Ｗｏｒｌｄ、さてとこの世界を案内するよラウラ。先ずは此処はカオスゲート…」

俺は簡単にカオスゲートについて説明をして、広場に向かう。ラウラはキョロキョロと周りを見ていた。多分他のキャラのログを読も

うとしたんだろう。そういやあラウラのジョブは何だろう？

朔夜「ラウラのジョブは何？」

ラウラ「スチームガンナーだ」

ラウラは無い胸を張りながら言った。

朔夜「此処は広場、ギルドの人が、此処でアイテムを売ったりしている。」

俺が説明をしていると後ろから

？「ハセヲ～」

？2「ハセヲっ！」

二人の声が聞こえた。この口調はあの二人か

朔夜「シラバス、ガスパー」

俺と同じギルドの中間のシラバスとガスパーが居た

ガスパー「久しぶりだぞハセヲ！」

シラバス「本当に久しぶり！なかなか連絡がつかなくて心配したよ」

二人がそう言ってきた。

朔夜「悪かったな。それにしても二人とも元気そうで何よりだ」

俺は二人にそう言った。ガスパーは胸をはり

ガスパー「オラは何時も元気いっぱいだぞ」

シラバス「本当に元気だよねガスパーはそれより後の子は誰？」

シラバスはラウラの存在に気づいたようだ。

シラバス「はじめまして、僕はシラバス、ハセヲの開いているギルドのメンバーだよ」

ガスパー「オラはガスパーなのだ」

二人はラウラに挨拶した。ラウラと言うと、

ラウラ「ラウラだ」

その一言しか言わなかった。まぁ、顔が赤いから恥ずかしいのだろうな。

朔夜「じゃあまた後でな！今はこいつにいろいろ教えなきゃいけないから」

俺はマクアヌを一通り説明したら後ろから、

？「ハセヲさ～ん」

まさか

朔夜「アトリ！」

俺は後を振り向いてそう言った。ラウラはアトリを見て少し不機嫌になる。アトリもラウラを見て不機嫌なった。

アトリ「ハセヲさん、その親しそうな人は誰ですか？」

ラウラ「ハセヲ、その女は誰だ？」

何か凄い威圧感を感じるよ。取りあえず説明をするか

朔夜「アトリ、彼女はラウラ、俺のリアルの友達だ。」

それを聞いたアトリは安堵のため息を吐いて

アトリ「友達ですか…」

朔夜「ラウラ、彼女はアトリ、この世界で一緒に戦った仲間だ」

ラウラ「仲間か…」

ラウラも安堵のため息を吐いていた。

朔夜「それより、ラウラにいろいろ教えなきゃな。戦いかたとか。」

俺がそう言うと、ラウラは

ラウラ「そうだな、そろそろ知りたいしハセヲいこうではないか二人で」

ラウラが二人を強調して言っていた。それを聞いたアトリは。

アトリ「ラウラさん、いい初心者支援ギルドを紹介しますよ？」

アトリは何言い始めたの！そして二人の間には火花が見えるよ

朔夜「喧嘩はやめろ。アトリも行くぞ！」

そう言って、ラウラに自分たちを仲間の誘い方などを教えて、フィールドに行く

朔夜「さてと、先ずは…って何してるの！」

ラウラは真っ先に敵に突っ込んだ。そして敵のリンチを喰らい殺られて居た。何してるんだよ。

朔夜「リプメイン」

ラウラを蘇生させたてさらにアトリが

アトリ「リプス」

体力回復を行なった。

朔夜「ラウラ、戦い方を知らないんだから突っ込むなよ」

ラウラ「すまない」

ラウラは素直に謝った。そして、戦いかたを教えたら、物凄い早さで敵を倒す。流石ラウラだ。

ラウラ「刺突散弾」

ラウラはボスにアーツを放って、ボスを倒した。

朔夜「ラウラおめでとう」

アトリ「おめでとうございます。ラウラさん」

ラウラ「その…ありがとう…」

ラウラは真っ赤夜ななっていた。そこに黒い泡が現れた。ＡＩＤＡか…なら

ポーン

朔夜「来い…来いよ…俺は…此処に居る！」

俺は一息入れて叫ぶ

朔夜「スケエェェェェェェェイス！」

白い三つ目の巨人が現れる。そして俺は鳥型のＡＩＤＡに背中の光の剣を飛ばす。ＡＩＤＡはそれを喰らい、怯み俺はそこに鎌で斬り裂く。ＡＩＤＡは黒い何かを放つが俺は鎌で全て叩き落とす。俺はチャクラムを飛ばして、プロテクトブレイクをしてデータドレインを放つ。

俺はＡＩＤＡは駆除をした。その後はアトリと別れて、ラウラと元

の世界に帰える

久しぶりに行こう。女神が居る世界に（後書き）

次回は未定です。文才が欲しい…

オーズの世界（前書き）

ＭＯＶＥ大戦コア篇

朔夜「さてと…これは…何?…何でみんなが居るんだよ…」

俺の目の前に鈴、箒にセシリア、レイ、ラウラ、ミーナにキラが居た。俺は鈴を見ると

鈴「朔夜ごめん。バレちゃった」

鈴は舌をだしながら言った

箒「鈴を連れていって、私をおいていくとわな、」

レイ「朔夜酷いよね。私をおいていくなんて」

二人は武装展開をしてそう言ってきた

キラ「イロイロキカセテヨサクヤ」

キラが片言で話してきた

ミーナ「朔夜くん?鈴さんと二人で何処に行こうとしたのかしら?」

ミーナがどす黒いオーラを放っていた。マジ怖い…何かヤバイ…

朔夜「取りあえず逃げる!」

俺が逃げ出すと、後ろに銀のオーロラが現れた。そして俺はＩＳの世界から居なくなった。

オーズの世界

朔夜「オーズの世界か…」

俺は何処かの工場に居た。この工場はどこかで見たことが

バコーン！

何かが倒れる音がした。思い出した！ノブナガの欲望だ！

朔夜「行ってみるか」

俺は音のする方に走る。

朔夜「ノブナガとあれは何？」

俺はノブナガともう一つ見たことの無いものを見た。取りあえずは

オーズを助けなきゃ

朔夜「変身！」

クワガタ・トラ・チーター

俺はオーズ・ガタトラーターになる。そして電撃を放つ

英司「子の電撃ってウヴァのやつの…ってオーズ！」

英司は俺を見て驚いていた。まぁいいか。俺はトラクローでノブナ

ガでない方を斬り裂く。

朔夜「ボサッとするなオーズ」

俺はカマキリコアを取り出してメダルチェンジをする

クワガタ・カマキリ・チーター

オーズ・ガタキリーターにチェンジしてカマキリソードで敵を斬る。

ノブナガともう一人のヤツはそこから逃げた。

朔夜「さてと、適当にふらつくかな」

俺はその場を去ろうとしたら

英司「待ってくれ。俺は火野英司だ。君は？何でコアメダルとドライバーを？」

英司は変身を解いて俺に近づいてきた。

朔夜「俺は朔夜、十六夜朔夜。通りすがりの仮面ライダーだ覚えておけ。」

俺は変身を解いて、ディケイドのライダーカードを取り出した。そこに

アンク「英司！此処からコアメダルの気配を感じたんだが知らねーか」

アンクが現れた。英司は

英司「アンク！実はあの子がオーズに変身したんだ。」

英司がアンクにそう言うと、アンクは鼻で笑って

アンク「ばかか！ドライバーを持ってるわけ…何でお前が持っている」

アンクは俺の腰に付いているオーズドライバーを見てそう言った。

朔夜「じゃあ俺は帰る（家は無いけど）からじゃあ」

アンク「まて！貴様は何処でそれを手に入れた。後貴様が持ってるコアメダルを置いていけ。」

アンクはそう言ってきたが俺はそれを無視をして何処かに向かうが

ドバババババババババババ

マシンガンみたいな音がなり、何かが俺を襲いかかる。上を見るとハサミジャガーの両手がマシンガン版が居た。俺はロケランを取り出してハサミジャガーの両手マシンガ版に向かって乱射した。

英司「アンク！見てみろよ！あの子、ロケランを乱射してるよ！」

アンク「ロケランを乱射は物理的無理だぞ英司」

英司のボケをアンクがツッコミを入れる。流石烏印のロケランだ。

相変わらずの火力だ。

朔夜「ちっ！死んでないか、なら」
俺はロストドライバーを取り出して腰に付けてガイアメモリを取り出してスイッチを押す

スカル

朔夜「変身」

スカル

俺はドクロをモチーフにしたライダー・仮面ライダースカルに変身した。俺はスカルマグナムを取り出して、マシンガンジャガーを撃つ。

朔夜「さあお前の罪を数えろ！」

更に俺は蹴りを入れて、マシンガンジャガーを地面に叩きつける。

マシンガンジャガー「がはっ！」

朔夜「俺を狙った事を呪いな！」

スカルマグナムをマシンガンジャガーの腹に叩き込み、ゼロ距離で放つ。

朔夜「そろそろお開きにしますか」

スカル・マキシマムドライブ

朔夜「ゲームオーバーだ」

俺はスカルの必殺技を顔面に放つ。そういや必殺技の名前はスカルパニッシャーだっけ？

朔夜「今度は帰れるな」

しかし、マシンガンジャガーは倒れていなかった。

朔夜「テメーの生命力は黒光りのGか！」

俺はGドライバーを取り出して、ワインを取り出し、

朔夜「俺のビンテージが芳醇の時期を迎える。…変身」

ワインをドライバーに嵌め込みみレバーを傾けた。フォトンブラッドみたいのが俺の身体を包み込む。そして仮面ライダーGに変身をした

朔夜「さてと、殺りますか」

栓抜きみたいな武器を取り出して、攻撃を始める。

マシンガンジャガー「がぁぁぁ

朔夜「がぁぁぁ

目の前にオーズが俺を庇うように立っていた。

英司「大丈夫か？」

朔夜「ああ。後は俺がやる。」

俺は立ち上がりながらそう言った。

英司「そんな体じゃ」

英司は俺を止めようとするが、

朔夜「俺がやる！変身」

仮面ライダーGに変身をした。俺はソムリエナイフを取り出して相手を斬る。さらに俺は蹴りを入れようとするが、うまく蹴れずに空振り、マシンガンジャガーに蹴られそうになるが

英司「やらせない！」

英司が蹴りを受け止め、英司はメダジャリバーでマシンガンジャガーを斬る。

朔夜「喰らえ！」

ソムリエナイフのコルク抜きの部分でマシンガンジャガーを刺す。

そこに、英司はメダジャリバーで斬りまくる。そして、

スキャニングチャージ

俺はベルトから足に力をためるそして、

朔夜「スワニリングライダーキック」

英司「せいやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はスワリングライダーキックを放ち、英司はタトバキックを放ち。
マシンガンジャガーを倒す。それと同時に俺は倒れた

オーズの世界（後書き）

次回は一気に飛んでバース登場

番外編・ＩＳが現れた日（前書き）

気分で書いてみた

番外編・ＩＳが現れた日

１白騎士事件篇

束「これを講してよし、最後にポチッと」

束姉が何かをしていた。そこにテレビから

アナウンサー「大変です。たった今入った情報です。全国のミサイルが日本に接近しています。詳しいことはまた後程に報道します。」

まさかね～。束姉が何かしたか。

朔夜「束姉まさか…」

束姉に俺が聞くと束姉は笑顔で

束「そうだよ。」

やはりか…俺は束姉サイズまで年齢を無理矢理成長させて、ひっぱたいた。束姉は何が起きたか分からずにいた。俺はファイズギアを持って家を出た

ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ

朔夜「やるか…変身！」

ｃｏｍｐｌｅｔｅ

俺は仮面ライダーファイズに変身する。更に俺はファイズブラスターを取り出して

ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ

俺はファイズブラスターにファイズフォンを付けて

Ａｗａｋｅｉｎｇ

ファイズブラスターフォームになる。俺は背中にある。ブースターで空を飛び両肩のバルカンで撃つ。更に後ろから白い騎士みたいな少女が居た。大体１６歳ぐらいの体つきだった。少女は大剣を振るい、ミサイルを破壊していた。あの動きはまさか！

朔夜「姉貴！」

俺の叫び声を聞いて、少女は

千冬「まさか…朔夜！」

姉貴は俺に近づいて話しかけてきた

千冬「何をしている朔夜。危ないだろ」

姉貴は俺に叫んできた。

朔夜「何って束姉の尻拭いだ。それより、このミサイルを全部破壊するよ姉貴。」

俺はファイズブラスターを構えて、俺は前方のミサイルを破壊する。

姉貴はイグニッションブーストでミサイルに近づきミサイルを斬り壊す。

朔夜「そろそろ終わらせる」

Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ

俺はフォトンブラスターを放ちミサイルを全て破壊する。

朔夜「終わったな…」

千冬「そのようだな」

俺たちは一息つこうかと思ったら、戦闘機がやって来た。奴等はミサイルを放ってきた。俺たちはそれを避けて、

朔夜「姉貴やるよ！」

千冬「しかし…」

姉貴は戸惑っていた。当たり前か。人を殺すかも知れないからな。

朔夜「なら姉貴は逃げてくれ。俺が抑える。」

俺がそう言うと、姉貴は泣きそうな声で

千冬「それでは朔夜が…」

朔夜「大丈夫だよ千冬ちゃん。大丈夫だから、絶対に千冬ちゃんの元に帰るから」

俺はそう言って、ファイズブラスターを剣にして戦闘機に突っ込み戦闘機を斬り壊す

千冬「絶対に帰ってこい！朔夜！」

姉貴はそう言って、避難する。

朔夜「絶対に帰るよ。千冬ちゃん」

俺はファイズブラスターを右手に構える。

朔夜「はぁぁぁぁぁぁ！」

俺はフルスロットで戦闘機に突っ込み、すれ違いさまに、戦闘機を斬る。更に左手で殴り壊す。そして、

Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ

クリムゾンスマッシュを戦闘機に喰らわせた。しかし後ろからミサイルが飛んできた。

千冬「朔夜はやらせない」

千冬ちゃんがミサイル斬り、更に戦闘機を破壊する

朔夜「千冬ちゃん！何で…」

千冬「何って、弟を守るのは姉貴仕事だ」

千冬ちゃんはそう言ってきた。しかし、その手は震えていた。俺は千冬ちゃんを抱きしめる

朔夜「なら、俺は千冬ちゃんを守る。可愛い女の子を守るのは男の使命だから。千冬ちゃんが人殺した罪は俺が背負うから。」

そして、俺たちは戦闘機を全て破壊した。そしてこの事件は、白騎士事件又は紅の戦士事件と呼ばれた

序でにこの日を栄えに、姉貴のブラコンが悪化した

番外編・ＩＳが現れた日（後書き）

次回も読んでくれると嬉しいです

誕生現れた（前書き）

やっとかけました

誕生現れた

朔夜「此処は…」

俺は目が覚めた。そこは知らない天上だった。此処はクスシエだっけ？

？「やっとおきましたか」

俺の横には泉比奈が居た。この部屋は英司の部屋か…

朔夜「貴女は？」

俺は泉比奈にそう言った。取りあえず、相手は知らないのでそう言った。だって変人だと思われるじゃん。

比奈「私は泉比奈です。あなたは？」

泉比奈が俺に聞いてきた。

朔夜「十六夜朔夜…じゃあ俺は此処で」

俺はクスシエを出ていった。さて何をしよう。しかしこの辺のことは詳しくない。適当に歩くか…

歩いていると、見慣れた奴が現れた。それは少し落ち込んでいた英司だった。

朔夜「何歩いているんだ？火野英司？」

俺は取りあえず近づいてみた。英司は俺に気づいたらしく。こっちを向いて軽く笑っていた。

英司「起きたんだ。身体は大丈夫か？」

朔夜「まあおかげさまでばっちりだ。」

本当は嘘だ。まだ身体は痛いし。立っているのも少し辛い。

英司「それは良かったよ。それより何故君がオーズになれるんだ？」

英司がそれを聞いてきた。やはり聞いてくるか。

朔夜「それは秘密さ。」

俺はそう言って、近くにある自販機に金を入れてジュースを買う。

何でこの世界に仮面サイダーが？

朔夜「それより、何で落ち込んでいたんだ？」

英司「実は…」

英司は俺に説明してきた。詳しくはノブナガの欲望をヨロシク！

朔夜「そうか…」英司「ノブ君は何でああなっちゃったんだろう…」

それはノブナガが欲望の塊だからだよ。英司よ

朔夜「根気よく話しかければいいと思うよ。きっと心をひらいてくれるよ」

俺はそう言ってベンチから立ち上がり、仮面サイダーのカンを捨てて、その場を立ち去る。少し歩くと、アレは？まさかな…

朔夜「ノブナガか…」

ノブナガがバースドライバーを腰に巻いていた。そして、

ノブナガ「変身！」

ノブナガは仮面ライダーバースに変身をしていた。ノブナガはバースバスターを構えて、プテラノドンヤミーにメダル型のエネルギー弾を当てる。プテラノドンヤミーは空を飛びながら逃げる。バースはそれを追いかける。俺はそれをさらに追いかける。何故ってもらうよ。あいつのセルメダル

朔夜「来い！マシンダーク」

俺は黒いブルースペーダーを呼んであいつらを追いかける。

朔夜「何処に行きやがった」

俺はバースたちを見失うと、物陰からＢＡＳＡＲＡの豊臣秀吉似の奴を見つけた。アレはノブナガと一緒に居た奴だ。俺はデルタギアを出して

朔夜「変身」

ｃｏｍｐｌｅｔｅ

ファイズ系ライダーの原点、仮面ライダーデルタに変身をした。

朔夜「ファイヤー」

俺はデルタフォンをデルタムーバーに取り付けて、豊臣秀吉みたいな奴を撃つ。

豊臣秀吉みたいな奴「がっ！」

あんまりダメージがない。俺はあいつの腹のヘソの一点にデルタフォンを撃つ。更に連謝をする。そして、

朔夜「チェック！」

Ｅｘｃｅｅｄ　Ｃｈａｒｇｅ

俺は豊臣秀吉みたいな奴にルシファスハンマーを喰らわせた。豊臣秀吉みたいな奴は変身が解けて。その姿は木下秀吉であった。

秀吉「くそ！」

秀吉はそう言って、膝をついていた。

朔夜「女の子！」

俺はそう言うと、木下秀吉みたいな奴

秀吉「俺は男だ！」

秀吉みたいな奴そう叫んできた。男だと！正に木下秀吉だな。

朔夜「でお前誰？」

そう言うと、奴は何故か逃げていった。何故逃げる！俺は取りあえず、休む場所を探すか

公演場

俺は取りあえず広くて、休める公演場に居た。そこでは、英司たちが居た。そこにノブナガが女の子に襲いかかる。英司はノブナガを押さえ付けてそのまま何処かに行ってしまった。俺はそのままほっといてみた。何故って、豊臣秀吉みたいな奴が居ないからだ。取りあえず見守るとでもしようかな？俺はマシンディケイダーに股がり、追いかけた。

朔夜「さてと、頑張ってるな英司」

俺は英司たちの所につくと、英司はオーズ・タカトラーターで高速戦闘をしていた。そこに、プテラノドンヤミーが現れて、無差別攻撃をかいしした。ノブナガはその隙に逃げ出した。英司はその攻撃をひたすら避けていた。英司は緑コアメダルを取り出して、スキャンした。

クワガタ・カマキリ・バッタ

ガタガタキリッバ・ガタキリバ

英司はオーズ・ガタキリバコンボにコンボチェンジして、十人ぐらいに分身して、プテラノドンヤミーに取り付いて、攻撃をした。

スキャンニングチャージ！

十人のオーズがプテラノドンヤミーにガタキリバキックを放っていた。英司は着地と同時に倒れかける。しかしそこに、豊臣秀吉らしき奴が現れて、英司に攻撃しようとしたので、俺はライドブッカーガンモードで豊臣秀吉みたいな奴を撃つ。俺はディケイドドライバーを取り出して腰につけてライダーカードを取り出して

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身をした。そして、秀吉の前まで近づき、ライドブッカーソードモードで斬りかかる。秀吉はそれを避けて殴りかかるが俺はそれを避けてカウンターを入れる。さらに、

アタックライド・スラッシュ

俺はディケイドスラッシュを豊臣秀吉に入れる。

豊臣秀吉「やるな…しかしまだだ！」

秀吉は俺を掴もうとしたが俺はバックステップで避けて、ライドブッカーガンモードで豊臣秀吉を撃つ。

朔夜「このカードを久しぶりに使うか」

フォームライド・デストロイ

俺はディケイド激情態になる

アタックライド・ギガント

俺はミサイルを秀吉に放ち、更に俺は

アタックライド・サイドバッシャー

マシンディケイダーをカイザのバイク、サイドバッシャーに変えて乗り、バトルモードにかえて、ミサイルの雨を降らせた。そして俺はディケイドのマークの書いてあるカードを取りだしてバックルに入れた。

ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディケイド

俺は豊臣秀吉みたいな奴にディメンションキックを喰らわせた。そしたら、豊臣秀吉みたいな奴はセルメダルとかした

誕生現れた（後書き）

次回もよろしくお願いします

光、現れる（前書き）

ノブナガ戦

光、現れる

俺は空を見ていた。その空はまるで泣いているようだった。そして目の前には、ノブナガが暴走を初めていて、英司は悲しい顔をして変身をした。

英司「変身！」

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

英司はオーズタトバコンボに変身をした。そこに空から

晃「助けろ！朔夜！」

シャル・レイ「きゃぁぁぁぁぁ」

晃たちが落ちてきた。なんつうタイミングだよ。

晃「来い！幻想殺し」

晃は幻想殺しを展開して、シャルを捕まえて、着地した。

朔夜「ダークウィング！」

俺は闇の力で真ゲッターウィングを作り、レイをキャッチをする。

レイ「ありがとう…朔夜」

レイは頬を赤くしながらそう言った。まぁお姫様だっこしてるからな。

レイは頬を赤くしながらそう言った。まぁお姫様だっこしてるからな。

朔夜「さて、降ろすよレイ」

レイ「うん…」

俺はレイをおろしたら。さて、英司はどう戦うかな?

朔夜「ほう、タカトラーターか…」

英司はタカトラーターで高速戦闘に入り、メダジャリバーで攻撃をしているが、全然本気を出していない。ためらいが見えている。ノブナガが剣を力任せに振り、英司の腹にクリーンヒットする。英司は吹き飛ばされる。そのままノブナガは英司を追撃をした。英司は一方的に攻撃を受ける。しゃあないな〜

朔夜「英司!何をためらってる!戦えよ!ノブナガの最後の願いだろ!そうしなきゃ、ノブナガは一緒救われない!」

俺は英司そう叫んだ

英司「ノブ君が救われない…」

英司はそう呟いて、重量系のコアメダルを取り出して、オーズドライバーに入れてスキャンした

サイ・ゴリラ・ゾウ

サゴーゾ・サゴーゾ！

英司は重量系コンボ、オーズ・サゴーゾコンボになった。

英司「ノブ君、今助けるから！」

英司はノブナガの腹を殴り、そしてまた殴り、さらに、両手で殴る。
そしてスキャナーを取り出して、オーズドライバーをスキャンした

スキャンニングチャージ

英司はノブナガにサゴーゾインパクトを喰らわすはずだったが、何者かが阻止した。

朔夜「何で…シャイニングが…」

そこには光の神が居た。何故此処に…光の神は引き継がれず滅んだはずだ…。シャイニングは左手を振り、何かが飛んできた。俺はそれを受け止めるとそれは烏のコートだった。何か滑りとした感じがあった。まさかな…手を見たら血に塗られていた。まさか烏を…

朔夜「お前がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ライダーインストール・ダークネス

俺は闇の力を開放して仮面ライダーダークネスになり、右手に闇の力をためてダークインパクトを放とうする。

シャイニング「シャイニングブレイク」

シャイニングは光の力を右手に込めて、俺に放ち相殺した。

レイ「朔夜どうしたの！突然攻撃して」

レイが俺の近くにやって来て、質問してきた

朔夜「奴が…奴が！烏を！」

俺は刹那を取り出して、斬りつけようとしが、片腕でとめられた

シャイニング「シャイニングインパクト」

シャイニングは足に光の力をためてそのまま俺を蹴る。俺は吹き飛ばされ、変身が解けて。

朔夜「がはっ！」

どばどば

俺は血を大量に吐き出した。

レイ「朔夜！何でこんな酷いこと！確かに朔夜が最初に襲ったけど、流石にやりすぎだよ」

レイが俺の隣にやって来て、シャイニングにそう言った。

シャイニング「やり過ぎか…だから？そいつは俺の大切な人を殺した！だからそいつの親友を殺し、そいつを殺す！」

シャイニングは変身を解くとそこには相良宗介似の奴が居た。まさか…

朔夜「天城…光…介…」

天城光介がそこに居た。何故やつが此処に居るんだよ。つうか俺はお前の大切な人を殺した覚えはない。まさか…あの事か…あれは誤解だ！

朔夜「あの事か…しかし誤解だ」

俺はそう言うと、光介は

光介「そんな言い訳聞くか！」

ライダーインストール・シャイニング

光介はシャイニングに変身して、俺に襲いかかる。動けばレイが殺られる。どうする…

晃サイド

どうする、あのままだと朔夜とレイが死ぬ。どうすれば良い！もっと力がほしい！力がほしい！

？「力を貸してやろうか？」

晃「誰だ！」

俺はシャルを引き寄せて周りを警戒する。

？「警戒するな」

目の前に足を引きずっている人がいた。あれは朔夜のダチの黒葉烏が居た。

烏「もう一度聞く力が欲しいか？」

烏が俺に聞いてきた。俺は

晃「欲しいさ！朔夜やシャルを大切な人を守る力が欲しい」

シャル「晃…」

烏「なら貸してやるよ。使いこなしてみな」

烏は俺にベルトを渡してきた。確か此れは朔夜の持ってたライダーカードにあった

晃「Xライダーのベルト…」

俺はそれを受け取り

晃「大変身！」

俺はXライダーに変身をして朔夜の元に行く。待ってろよ朔夜

朔夜サイド

光介「死にな」

光介が俺にとどめをさそうとしたら

晃「ロングポール」

目の前にXライダーのライドルが見えた。この声は晃のものだまさか！俺は後ろを見たら。

朔夜「Xライダー。まさか晃？」

後ろにXライダーが居た。Xライダー基晃が俺に近寄り、

晃「大丈夫か？朔夜」

朔夜「何で晃がXライダーに…」

俺は晃に聞くと

烏「俺がツールを渡したからだ」

足を引きずりながら烏が近づいてきた。生きていたか烏

朔夜「烏…」

烏「ああ…」

そこに、光介が立ち上がり、

光介「生きていたか黒葉」

烏「まあな、お前の攻撃ならなんとか耐えられるさ。いくぜ朔夜」

烏がそう言ってきたので俺は

朔夜「分かってるよ」

俺はダブルドライバーを取り出して付ける

グラビティー

ジョーカー

俺は切り札の記憶が入っているジョーカーメモリを取りだし、烏は重力の記憶が入っているグラビティメモリを出す

朔夜・烏「変身！」

グラビティー・ジョーカー

俺は仮面ライダーW・グラビティー・ジョーカーに変身した。

晃「仮面ライダーX！」

晃はライドルホイップで空をXに斬りそう言った。

朔夜「テメーを殴るぜ」

俺は右手に重力をためて殴る。晃は俺と反対側から殴る。光介はそれを避けようとするが、

烏「甘いわ！」

烏は左足で光介を蹴る。そして、俺は左手で殴る。晃は

晃「Ｘキック！」

晃はライドルバトンで回転して身体を大の字にしつ蹴りを放つ。俺たちは

ジョーカーマキシマムドライブ

朔夜・烏「ジョーカー・グラビティークラッシュ」

俺たちの身体を二つに別れ、てボディーサイドで光介を打ち上げてソウルサイドでしたに叩きつける

光介「まだ終わらねー」

光介は立ち上がろうとしたが、

真人「そこまでだ。引き上げる」

真人がやって来て、光介の身体を押さえ付けた

光介「わかったよ」

二人はその場を立ち去った

光、現れる（後書き）

次回はコア戦

番外編・風鈴音との出会い（前書き）

気分で書いた

番外編・風鈴音との出会い

此れは俺が鈴と初めて出会い仲良くなった時の話だ。

６年前

朔夜「俺はまた一人になったか…」

俺は朝目が覚めてそう呟いていた。俺は今一人だ。別に悲しい訳ではない。前からなれていたからだ。でも今まで複数の人といたから、何かが足りない感じがあった。机には置き手紙があった。その内容は見なくても分かる。姉貴からだ。さしずめまた帰りが遅くなるのだろう。俺は飯を適当にすませて、学校に向かう。行きたくねぇ。あそこには楽しみは無いからな～。箒居ないし。

学校

担任「今日は新しいクラスメイトが来ました。風さんお願いします。」

担任の先生がそう言うと、廊下からツインテールの女の子が現れた。

風か…なら中国人か

鈴「風鈴音デス。ヨロシクお願いしマス」

風が片言で言っていた。結構しおらしいな。まあ日本になれてないからかな。ぶっちゃけ俺には関係ないか

担任「織斑くん、風さんをお願いしますね」

ＮＡ☆Ｎ☆ＤＡ☆ＴＯ！俺の隣にくるだと！面倒ごとを押し付けやがって。風は俺の隣にやって来た。

鈴「十六夜サンよろしくお願いシマス」

風が片言で話しかけてきたので俺は

朔夜『よろしく。風さん』

俺は中国語でそう言ってあげた。

鈴『十六夜さんは中国語を話せるの！』

風さんは俺が中国語を話せるのを驚いていた。嬉しさもにじみ出ていた。

朔夜『まあな。』

俺はそれ以降は話をしなかった。風のほうも何を話せばいいか分からないらしい。それにしてもしおらしいな。風は…

女子１「ねぇ風さんは何が好きなの？」

女子２「ねぇ前は何処に住んでたの」

鈴「…」

風は何を話しているのかが分からないらしい。日本語は難しいからな～一応助けるか。俺は紙に何を言っていたかを書いてやった。

『ねぇ風さんは何が好きなの？』

『ねぇ風さんは前は何処に住んでたの？』

鈴『ありがとう』

風は俺にそう言って、片言で女子と話始めた。何故俺は風にあんなことをしたのだろう

鈴サイド

あたしは家の都合で日本にきた。あたしは教室に入ると正直恐かった。そのしてある一人の男の子に目がいった。白髪にルビーのような紅い目の男の子に彼は一人だけ浮いていた。雰囲気が大人びてるし何か孤独な感じがした。その彼と同じ席になった。あたしは彼に馴れない日本語で話すと、彼は中国語で話してきた。あたしは驚いた。まさか此処で聞けるなんて。さらに彼はあたしが聞き取れてない日本語をわざわざ中国語に直してくれた。本当に嬉しかった。彼は何でそこまであたしにしてくれたのだろう？彼のことが知りたい。

朔夜サイド

風が来て数日が経つ。彼女は大分日本語が分かり、読み書きが出来るようになっていた。だがその頃からあるいじめが始まった。

男子1「風お前鈴って言うんだって？ならリンリンだ！パンダみたいだな。パンダは動物園に帰れよ！」

男子2「そうだぞリンリン、パンダ何だから動物園に帰れ！」

そう男子たちが言うと周りのやつらが悪ノリを初めて似たような事を言い始める。

鈴「あたしはパンダじゃないもん！」

風は泣きそうな声で周りに言うが周りは更にエスカレートしていく。
風はその日は泣きながら帰っていった。

次の日

風は暗い顔付きで登校をする、ある男子集団は「パンダのリンリンが登校してきたぜ。」とか「パンダだ！パンダだのリンリンだ」とか言っていた。マジでうぜー。三年前の箒の時と同じだ。俺はやつらには怒りを覚えはじめていた。そして今日の放課後俺は怒りが爆発した。

男子１「リンリンパンダなんだから動物園に帰れ！」

男子２「そうだそうだ」

周りの男子集団がそう言った。風はその中心で泣きながら

鈴「あたしはパンダじゃないもん！人間だもん！」

そう叫んでいた。俺は男子集団の所まで行って、男子に蹴りを喰らわせた。

男子３「何するんだよ！十六夜」

男子の一人がそう言った。何って見てのとうり蹴りを喰らわしたんだろ?

朔夜「止めろ。風が可哀想だろ?何だ?風と遊びたいなら普通に遊べよ。」

俺がそう言うが、奴らはそんなことを聞かずみたいなかんじで

男子4「分かった十六夜はパンダのリンリンが好きなんだ!」

朔夜「お前な~好きかどうかは別として、こんな可愛い子がパンダなはずないだろ?脳がイカれたか?」

男子1「何だと」

男子2「やるのかよ」

男子集団は俺に喧嘩をふろうとしたが俺はやつらを無視して風の手を取り

朔夜「帰るぞ風」

鈴「えっ!」

俺は自分のランドセルを手にして学校を出ていった。俺たちは近くの公園につくと風は俺に話しかけてきた。

鈴「十六夜は何であたしを助けてくれたの」

朔夜「むかついたから」

俺は風の質問に速攻で答えた。

鈴「何で十六夜がむかつの？貴方には関係ないのに」

風がそう言った。確かにそうだな。俺には関係ない

朔夜「可笑しいだろ？女の子を集団で虐めるのがしかも風みたいな可愛い子を」

そう言うと風は顔赤くしていた。風邪か？

風「その十六夜…助けてくれてありがとう」

風がそう言うと、俺は何故か

朔夜「朔夜でいい」

そう言っていた。マジで何言ってるんだ俺は

鈴「え？」

風は理解していないようだ。

朔夜「だから風は俺のことを朔夜って呼んでいいその代わりにお前のことを鈴って呼んでいいか？」

鈴「いいよ朔夜」

鈴が笑顔でそう言った。此が初めて鈴が俺の名前を呼んだ時だった

某部屋

朔夜「ん…夢か…なつかしな…鈴との出会いか…」

俺は上半身を起こしていた。そして俺の横を見ると幸せそうな鈴本人が肌で横に寝ていた。俺は鈴頭を撫でてやった。すると鈴は

鈴「おはよう朔夜…」

眠そうに起き上がる鈴。俺は鈴にキスをして

朔夜「おはよう鈴」

そう言った。

番外編・風鈴音との出会い（後書き）

最後の部分は全く本編とは関係ありません。次回もよろしくお願いします

コアな戦い（前書き）

修正

コアな戦い

英司はノブナガを倒したが、ノブナガの身体から三枚のセルメダルが出ていった。そのまま何処かへ行ってしまった。俺たちはそれを追って走り出す。

風都橋

朔夜「あれは…コアか…」

目の前には巨大なエネルギー体の仮面ライダー、仮面ライダーコアが居た。仮面ライダーコアは亜希子に向かって腕を振るう。

翔太郎「亜希子ぉぉぉぉぉぉ」

フィリップ「アキちゃん！」

竜「所長！」

三人が叫びをあげた。そこに、英司は走り出し、亜希子をたすける。

亜希子「ありが…あなたも仮面ライダー…何で私の周りには仮面ライダーばっかなの！何でお父さんは仮面ライダーになっちゃったのよ！」

亜希子はヒステリックに叫びをあげていた。

英司「それは何かを守りたかったからじゃないかな？」

英司はそう亜希子に言った。守りたいからか…確かにな…本郷さん

も一文字さんも何かを守るために戦った。伍代さんは人々の笑顔の為に、ライダーになった人たちは何かを守るために戦った。

翔太郎「またあったな、オーズ…って朔夜！」

フィリップ「またあったね。闇の神」

二人が俺に近づいてきた

朔夜「翔太郎にフィリップか…久しぶりだな。ライダー大戦以来だな。」

翔太郎「そうだな。それより、いこうぜ」

ジョーカー

サイクロン

翔太郎・フィリップ「変身！」

サイクロン・ジョーカー

翔太郎とフィリップはW・サイクロン・ジョーカーに変身した

英司「変身」

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

英司は仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身した。俺はガタックゼクターを喚ぶ。そして、ベルトを巻いて

朔夜「変身！」

ヘンシン

仮面ライダーガタックになる。俺はゼクターホーンをたたみ、

朔夜「キャストオフ」
チェンジ・スタッグビートル

俺はガタック・ライダーフォームになった。そして、コアに向かって高く跳び、攻撃を始める。しかし

コア「ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

某英雄殺しの雄叫びをあげながら、右手で俺たちを吹き飛ばす。あいつの力は化け物か！確か記憶が正しければ、地球の記憶の泉があるはずだ。

翔太郎「こいつはどうすれば倒せる」

フィリップ「こいつは地球の記憶の泉からエネルギーを吸収している。それを破壊すれば」

フィリップがそう言った。やはり当たってたか。

英司「ならそれを破壊しに行きましょう」

英司は俺たちの方を向いてそう言ってきた。俺はガタックエクステンダーをエクスモードにして飛ぶ。Wはエクストリームに強化変身して、ハードタービュラーに乗る。オーズはラトラータコンボになりトライトベンダーに乗る。

朔夜「マジかよ…」

コアは足をバイク化して俺たちを追いかけてきた。マジキモいわ！そして俺たちは地球の記憶の泉にやって来た。間近で見るとでかいな…俺はガタックゼクターのボタンを押す

ワン・ツー・スリー

俺はライダーキックの体制になる。

トリプルスキャニングチャージ

オーズはタトバコンボになってメダジャリバーをスキャンした。

サイクロンマキシマムドライブ・ビートマキシマムドライブ・ルナマキシマムドライブ・ジョーカーマキシマムドライブ

Wはピッカーチャージブレイクの体制になった。

朔夜「ライダーキック！」

ライダーキック

英司「せいやぁぁぁぁぁ！」

翔太郎・フィリップ「ピッカーチャージブレイク！」

俺たちは必殺技を記憶の泉の結晶を破壊した。

朔夜「此でコアの力は下がったな…」

そこにコアがやって来た。さて、ケリをつけよう。俺はガタックダブルカリバーを構える。オーズはメダジャリバーを構える。Wはプリズムピッカーを構えて、それぞれ攻撃を開始した。しかし、コアにみんな吹き飛ばされた。ヤバイ！クロックアップのスイッチが破壊された。さらにコアが英司に攻撃しようとした。

朔夜「やらせるかぁぁぁぁ！」

俺は英司を体当たりして吹き飛ばし、コアの攻撃を回避したがライダーベルトが破壊され、俺の変身が解けた。そこに

烏「朔夜！新しいメダルだ！受け取れ！」

烏は赤いコアメダルを投げてきた。まさかこのメダルは！俺はオーズドライバーを出して、スキャンした。

ウルトラ・スピア・バイオレンス

ウ・ス・バ・ウスバ・ウ・ス・バ

俺は某赤い通り魔を疑似した姿。オーズ・ウスバコンボになる。英司はオーズ・タジャドルコンボなる。その風を受けて、Wはゴールドエクストリームになる。

朔夜「予想通りだ…烏は何を造ってやがる…」

烏「なにって、赤い通り魔のコアメダルだ」

烏は胸を張りながら言いやがった。もういいや。俺はオースキャナーを持ち。メダルをスキャンした

スキャニングチャージ

英司もオースキャナーでコアメダルをスキャンした

スキャニングチャージ

翔太郎とフィリップも、エクストリームメモリを一回閉じてまた開く

エクストリーム・マキシマムドライブ

翔太郎・フィリップ「ゴールドエクストリーム！」

英司「せいやぁぁぁぁぁ！」

朔夜「喰らいやがれぇぇぇぇぇ！」

翔太郎たちはゴールドエクストリームを放ち、英司はプロミネンスドロップ、俺はウスバキックを放った。コアは此を食らって、爆発した。

朔夜「戻りますか」

俺はそう言うと、周りの奴らは、うなずく。そして、俺たちは地上

に戻る。

地上

朔夜「レイただいま」

レイ「おかえり、朔夜」

レイは俺に抱きついてきた。そこに、

コア「まだだ…まだ終わらない」

コアがやって来た

翔太郎「まだ生きてやがったか。」

朔夜「まったくだ」

するとコアの身体が変化した。あの身体は…許せない…何であいつがあの姿に！

朔夜「何でお前が1号になってるんだよ！」

コアは仮面ライダー新1号になっていた。

朔夜「テメーは許せない！変身」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身して更にケータッチを取りだし

クウガ・アギト・龍騎・ファイズ・ブレイド・響鬼・カブト・電王・キバ

ファイナルカメンライド・ディケイド

俺はディケイド・コンプリートフォームになる。そして、

クウガ・ライジングアルティメット

俺はクウガ・ライジングアルティメットにカメンライドして、コアに暗黒掌波動を放つ。更にライジングアルティメットナックルを喰らわして

ファイナルアタックライド・ク・ク・ク・クウガ

ライジングアルティメットマイティキックを喰らわせた。

コア「くそぉぉぉ！何故勝てない！」

朔夜「理由はひとつ俺を怒らせた。それだけだ」

コアは爆発して消えた。そして、俺たちは元の世界に帰った

コアな戦い（後書き）

次回もよろしくお願いします

妖精の尻尾（前書き）

空刀さんとコラボ

妖精の尻尾

クロスワールド

烏「此でやっと、朔夜と自由に会いに行けるぜ。」

俺は次元封鎖破壊装置をつくっていた。さて～また朔夜とはっちゃけられるな～。そこに

なのは「烏くん、何を作っているの？」

フェイト「烏、何やってるの？」

ヴィヴィオ「烏おじちゃん、何作ってるの？」

朔夜の嫁（自称）と娘がやって来た。説明しよおかな～。言ったら絶対に何かが起こるよな～。その時次元が割けた。俺はとっさに臨戦体制をとる。そして、男が二人落ちてきた。一人はイケメンでもう一人はボカロのレンみたいな奴が落ちてきた。また次元漂流者か…

聖夜「此処はどこだ？瞬無事か？」

瞬「俺は無事だ。聖夜は？」

聖夜「無事だ。」俺はきりがよさそうなので

烏「あんたらは誰？」

俺は二人に話をかけてみた。二人は此方を向く

聖夜「空刀聖夜。フェアリーテイルってギルドに所属している魔導士だ」

瞬「俺は織斑瞬。世界で二番目にＩＳが動かせる男だ」

二人が自己紹介をしてきた。一人はフェアリーテイルの世界から、一人はＩＳの世界からか…でも何故二人はこんなに中が良いんだ？違う世界の住人なのにな？

烏「俺は黒葉烏最高神の使い魔だ。お前らは何でこの世界に来たんだ？」

俺は二人の話を聞くと、聖夜はフェアリーテイルに転生した人で瞬は平行世界の一夏とラウラの子供でフェアリーテイルの世界に飛ばされたらしい。そして二人は何時も通りの生活をおくっていたが突然銀のオーロラにのみこまれたらしい。ついでに此方のことも話した。平行世界についても話したが、その事は知っているらしい。

聖夜「まさか、いろんな世界が混ざりあった世界、クロスワールドか、何か楽しそうだなこの世界は！」

瞬「母さんが違う人にぞっこん何か想像が出来ない…しかし、その人が父さんと同じ立ち位置…」

聖夜は楽しそうだが、何故か瞬は考え事をしている。そうだ！こいつらに、朔夜の所にライダーパスを届けてもらうか。

烏「二人に頼みたいことがあるけどいいか？」

聖夜・瞬「なに？」二人は俺の方を見る

朔夜サイド

俺はオーズの世界から戻ってきたら、まず先に起きたことは女子陣に何故逃げたのか、何故レイがそっちに居るのか尋問された。俺も何故レイが居たのかは知りません

そっちの方が楽しそうだからさｂｙ作者

何か電波がきたが無視だな

朔夜「何をするかな」

俺はゲーセンに入りながらそう呟きながら歩いていた。そして、メル〇ラに向かって歩く。俺は席に付き、金を入れて始める。キャラは、七夜を選択して、戦闘を開始する。相手はシエル先輩だ。１７分割にしてやるよ。俺はシエル先輩をフルボッコにし始めた。そこに突然乱入者が現れた。キャラはシオンか…。そして戦闘が開始した。少しでも気を抜くと殺られる。そして、俺は殺られた。マジかよ…。

乱太「ふっ…弱いな。」

目の前に緑髪でシャナの身長を少し高くした感じの奴がいた。少しヤバめの奴だな。真ショッカーの新手か…

朔夜「少し面をかしな」

俺はシャナ似の奴を外に連れ出した。そして、裏路地に連れてくると

朔夜「お前は何者だ。人には過ぎた力を感じるが?真ショッカーの新手か?」

俺は刹那とダークドライバーを付ける

乱太「だとしたら?」

シャナ似の奴がにやけながらそう言った。誘ってるのか?なら

朔夜「つぶす!」

ライダーインストール・ダークネス

俺は仮面ライダーダークネスに変身をした。俺は刹那で斬りかかる。シャナ似の奴は紙一重で避けるが、俺は右足で蹴る

乱太「がはっ!」

シャナ似の奴の腹にクリーンヒットする。更に俺はアッパーカットを喰らわせた。そして俺は死なない程度にダークインパクトを喰らわせた。そしたら、腹の中から、何かが出てきた。寄生虫みたいな奴が出てきた。こいつがシャナ似の奴を操って居たのか…

朔夜「喰らえ!ダークネスバスター!」

寄生虫みたいな奴は突然俺の視界から消えた。クロックアップか…

なら俺は

朔夜「タイムブースト」

俺はタイムブーストで寄生虫みたいな奴を追いかける。そして俺は刹那で斬りかかる。寄生虫みたいな奴は俺の斬撃を喰らい、クロックアップがきれた。俺は寄生虫みたいな奴をとどめをさそうとしたが、そこにカシスワームがやって来た。俺にハサミみたいなやつで攻撃してきた。くそが！俺は刹那で攻撃したが、逆から寄生虫みたいな奴が攻撃した。本気出すしかないのかな?そこに、

?「ディバインバスタァァァァァァァァ！」

突然俺の視界ピンク色の魔力砲が映る。まさかね…来たのかな?あの子が…

なのは「朔くん助けに来たよ。」

クロスワールドに居るはず高町なのはが居た。

朔夜「なのは…どうしてこの世界に?」

なのは「烏くんが次元封鎖破壊装置を作ったから試しに抜け駆けしてみたの」

烏はとんでもないものを造りやがった。ってことはそのうちにね…大変なことが起こりそうな気がするよ

朔夜「取りあえず、手伝ってくれないかな?」

俺は変身を解いて、ディケイドライバーを取り出す。そして

カメンライド・ディケイド

俺の周りに九つビジョンが現れて、それが俺に重なりそしてプレートが俺の顔にくっつく。俺は仮面ライダーディケイドに変身をした。
俺はカードを取り出した。

ユニゾンライド・ナノハ

なのはは光に包まれて俺の身体に取り込まれる。俺の身体は白になり、目はピンクになる。

アタックライド・レイジングハート

俺はレイジングハートを取り出した。

朔夜・なのは「アクセルシューター」

俺たちは１００以上の魔力弾を生み出して、寄生虫みたいな奴に喰らわせる。そして、新たなカードを入れる

フォームライド・エクセリオン

レイジングハートはエクセリオンモードになり、寄生虫みたいな奴に射し込み、爆発した。俺たちはカシスワームに向かって

朔夜・なのは「エクセリオンバスタァァァァァァァァァ！」

カシスワームにエクセリオンバスターを放ちさらに

ファイナルアタックライド・ナ・ナ・ナ・ナノハ

朔夜・なのは「全力全開！スターライトブレイカァァァァァァァァ！」

カシスワームが爆殺した。

妖精の尻尾（後書き）

次回はコラボの続きです

闇の書（前書き）

空刀とのコラボの続き

闇の書

俺はなのはと倒れたシャナ似の奴を背負いながらＩＳ学園に向かって歩いていた。

朔夜「でもこいつは一体何者何だろうな？何かヤバめな力を感じるしな…」

なのは「そうなの？朔くん」

なのはがそう俺に言ってきた。すると丁度ＩＳ学園についた。取りあえずは部屋に運ぶか。っとその前に姉貴に話を通さなきゃ。俺はケータイを取り出して、姉貴に電話した

朔夜「あっ！姉貴？俺だけど、実は人を一人拾った。そいつを休ませたいから中に入れていい？後友達を一人？何？良いの！ありがとう姉貴！後で何か持って行くよ！」

俺はケータイをしまい、なのはの方を向いて

朔夜「許可は手に入った、入ろうぜ」

俺たちはＩＳ学園の中に入った。

俺の部屋

朔夜「なのは、最近は何か変わったことはないか？」

なのはに聞くと、なのはは可愛く首をかしげながら

なのは「うーん、ヴィヴィオが」

朔夜「ヴィヴィオが？」

なのは「グレートマジンガーを倒したかな」

俺の聞き間違えでしょうか。我が娘は偉大な勇者を倒したそうです。烏よ…あの世界を魔くつに変える気か…半分が優しさで出来た薬が欲しいよ…

箒サイド

箒「あの話は本当なのか…」

私は今朔夜の部屋に向かって歩いていた。まさか、朔夜が外部の女性を連れてくるとわ…イヤ、嘘に決まっている！朔夜に限ってそんなことは無い！そうだ、無いに決まっている！

鈴「ラウラ、中の声はまだ聞こえないの？」

ラウラ「もう少しまて！」

レイ「ラウラ早く！もし大変な状態ならどうするの！」

セシリア「そうですわ！何かがあっては遅いのですわ！」

鈴、ラウラ、レイにセシリア、朔夜の部屋の前で騒いでいた。何をしているんだ？私は近づいて、

箒「貴様らは朔夜の部屋の前で何をしている」

私は鈴たちに話をかけた。

鈴「箒！丁度いいわ！貴女も手伝いなさい！」

鈴は私にいろいろな道具を渡してきた。これって…盗聴と盗撮に使うか器材じゃないのか？まさかな…取りあえず聞いてみるか…

箒「鈴、これらの器材は？」

鈴「見てわからないの？盗聴器材とかよ。朔夜がお、女の子を部屋に連れてきたとか無いとかで気にな…いや此れは幼馴染みとしての義務よ！そう、義務よ」

幼馴染みとしての義務か…そうだな此れは義務だ！朔夜がきちんとやっているかを知るのは幼馴染みとしての義務だ！私たちはドアに近づこうとしたら、ドアが開き、

朔夜「五月蝿いぞ。お前らは何をしているんだ？」

部屋から朔夜が現れた

朔夜サイド

俺はなのはと話していると外が騒がしいため、部屋から出てみると、箒たちが色んなものを持って部屋の前に居た。何盗聴しようとしてるんだ？まあ無理だけどね？

朔夜「何してるんだ？」

俺は近くに居た。箒に聞いてみた。

箒「いや！これは…その…」

口をモゴモゴさせていた。まあ盗聴しようとしてましたなんて言えないよな。そこに

ラウラ「部屋の中が気になって盗聴及び盗撮しようとした」

ラウラが真顔でそう言ってきた。周りのやつらが、ドリフ並のずっこけをしたぜ。

乱太「う、う」

シャナ似の奴が目を覚ますかな

朔夜「まあいいや。俺は中に戻るから、入りたいやつは入れよ。」

俺は部屋の中に入るすると丁度シャナ似の奴が目を覚ました

乱太「此処は…フェアリーテイルの世界じゃないな…」

こいつはフェアリーテイルの世界の住人か…

朔夜「目を覚ました。俺は織斑朔夜だ。君は？」

乱太「蛇川乱太だ。織斑ってことは此処は瞬の世界なのか？」

瞬って誰よ？取りあえず説明をしますか。

朔夜「乱太は平行世界を知ってるか？」

乱太「ああ、知ってる。俺は何度か転生してるからな。」

わお、転生経験ありの人ですか。すると次元が割けた。

朔夜「みんな俺の後には下がれ！」

俺は白式を展開して雪片弐型を構えるすると十四歳ぐらいの男の子が現れた。

聖夜「此処が瞬とは違うＩＳの世界か…」

瞬「全然変わらないな」

朔夜「お前らは何者だ？次元を割きなが来たからにはただ者出はないな」

俺は雪片弐型とアサルトライフル〈霙〉を構えた

瞬「あれは父さんと同じ白式だ…ってことは烏さんが言ってた人はこの人だ」

聖夜「そうだな。あんたが織斑朔夜か？」

二人はそう言ってきた。烏の名前が出てきたな。ってことは敵では無いな。俺は白式を待機状態にする。

朔夜「確かに俺は織斑朔夜だ。お前らは？」

聖夜「空刀聖夜。フェアリーテイルに所属している」

瞬「俺は織斑瞬。平行世界の織斑さんとラウラさんの息子だ（一夏の方だけどな）」

それを聞くとラウラは

ラウラ「私と朔夜の息子か…ってこては朔夜は私のことを選ぶのだな…」

ラウラがトリップしはじめた。

レイ「朔夜がラウラを選ぶの…嫌だな…」

鈴「朔夜がラウラを…」

セシリア「朔夜さんがラウラさんを…」

箒「朔夜がラウラだと…」

あれー？何でみんなは絶望的な状態に陥っているんだ？

聖夜「烏から頼まれたものだ」

聖夜が俺にライダーパスを渡してきた。ああ、確かに烏に貸してたな。俺は受け取り

朔夜「サンキューな」

俺は聖夜にお礼をいた。すると

ドゴーン

外からデカイ爆発が聞こえた。外に出ると闇の書の暴走態を更にまがまがしい感じにした奴が現れていた。更に周りにはロキレプリカが居た。俺はオーズドライバーを腰につけて

朔夜「変身！」

タカ・カマキリ・コンドル

俺はオーズ・タカキリドルになる。俺はカマキリソードを構えて、ロキレプリカに斬りかかる。ロキレプリカは避けるが、俺はコンドルレックからラプタードエッジ出して、真空刃を喰らわせた。更に俺はウナギコアを取り出して

タカ・ウナギ・コンドル

俺はタカウドルになり、ウナギウィプでロキレプリカを引き寄せて更に真空刃喰らわせた。するとロキレプリカは闇の書の暴走態と融合を始めた。外見は変わらないが、オーラが段違いだ。やはりまた、ダークエンドブレイカーで殺るしかないのかな…そこに

なのは「また、自分の命と引き換えにするの？」

なのはが後からやって来た。見抜かれたか

朔夜「ああ」

するとなのはが俺を叩いた。なのはの目には涙が溜まり、肩を震わしていた。

なのは「朔くんは人には無茶するな命大切しろとか言うのに何で自分の命は粗末にするの！朔くんが死んだらみんな悲しむよ！」

朔夜「なのは…でもこれしか思いつかない」

俺がそう言うと、空から

烏「方法なら有るぜ！」

烏が現れた。更に後から六課メンバーと志郎にあやめに雪奈も居た。

烏「全員で闇の書事件の様にやりゃあ良いんだよ。もうダチは死なせたくないしな。」

そこに、

聖夜「俺たちも交ぜてくれ。力になるぜ。」

聖夜、瞬、乱太も力を貸してくれるようだ。更には晃たちで力を貸してくれるようだ。俺は正直、嬉しくて泣きたくなった

朔夜「みんなありがとう」

なのは「どういたしまして。いくよ、ヴィータちゃん、スバルにティアナ」

ヴィータ「任せろなのは！」

スバル「はい！」

ティアナ「分かりました」

なのは、スバル、ヴィータにティアナはそれぞれのデバイスを構える。すると闇の書は四人に触手で攻撃しようとしたが、

レイ「やらせない！」

レイはヘビーアームズのガトリングで触手を全て破壊した

なのは「ありがとう。」

レイ「どういたしまして」

なのは「スターズ1！高町なのはいきます！」

なのははレイジングハートを構えて、

なのは「エクセリオンバスタァァァァァァァァァァ！」

エクセリオンバスターを放つそこにティアナが

ティアナ「ファントムブレイズ！」

ティアナが魔力弾を放つ

ヴィータ「スバル合わせろよ！」

スバル「了解です！ヴィータ副隊長！」

ヴィータ「ギガントシュラーク！」

ヴィータが巨大なハンマーを振り下ろした。そこにスバルはゼロ距離でディバインバスターを放つ

スバル「ディバインバスタァァァァァァァァァァ！」

フェイト「いくよ！エリオ」

エリオ「はい！」

フェイトとエリオはデバイスを構える

フェイト「ジェットザンパー！」

エリオ「サンダーレイジ！」

二人は渾身の一撃を放つ。シグナムが弓を構えている。

シグナム「駆けろ隼！」

キャロ「フリード！ブラストレイ！」

二人の攻撃が当たる。そこに、闇の書は攻撃体制に入ろうとしたが、

セシリア「やらせませんわ」

鈴「まったくね」

二人の攻撃が闇の書を怯ませる

あやめ「いくよ?雪奈」

雪奈「了解」

あやめはマイチェーテディを構えて

あやめ「カウンタースラッシュ！」

雪奈はディエンドドライバーを構えて

雪奈「ディメンションシュート」

二人の必殺技が闇の書をとらえた

志郎「俺も殺るかな?」

志郎が必殺技の体制に入った時に黒い魔力弾が飛んできたが

晃「その魔力(げんそう)を破壊する」

晃は幻想殺しで魔力弾を破壊した

志郎「助かったぜ！ソードピッカー！」

志郎は斬艦刀を投げた。そして

聖夜「雷竜絶牙」

聖夜は雷で爪を作り闇の書をきりさく

瞬「喰らえ！」

瞬はZセイバーで闇の書の触手を斬り裂く

乱太「氷海斬！」

乱太は冷気をまとった刀で闇の書を斬り裂き、闇の書を凍らせた

烏「俺の出番だぜ！アトミックブラスト！」

烏は重力の塊を闇の書にぶつける。闇の書のコアが見え始めた。闇の書は俺に尖った触手を当てようとしたが

箒「やらせない！」箒は空割で触手をさばく。さて俺はクジャクコアを取り出して

タカ・クジャク・コンドル

タ～ジャ～ドール～

俺はオーズ・タジャドルコンボになる。

朔夜「安らかに眠れ」

俺はタジャスピナーにコアメダルを入れてスキャンした

タカ・クジャク・コンドル

ギ・ギ・ギ・ギガスキャン！

朔夜「はぁぁぁぁぁぁ！」

マグナブレイズを闇の書に喰らわせた。すると闇の書のコアが破壊された。

朔夜「さてと、終わったか…」

聖夜「その様だから帰るぜ」

朔夜「ああ、」

俺は銀のオーロラを出して、三人を元の世界に帰した

闇の書（後書き）

次回もよろしくお願いします

朔夜ｖｓ烏（前書き）

タイトルどうりです

朔夜ｖｓ烏

朔夜「眠い…」

俺は黒金カンパニーの社長室に居た。序でに言っておく！黒金カンパニーの本当の名前は黒葉烏ゴールデンカンパニーなのだ！

コンコン

誰かがドアを叩いた。この感じはレイかな

朔夜「あいてるぞー」

俺がそう言うとドアが開いた。やって来たのはレイとキラだ。

キラ「試作装備のテストが終わったよ。はい、此がそのデータだよ」

キラがそう言って俺にメモリーを渡してきた。

レイ「個人的な意見なんだけど、あの装備は遠距離には剥いてないと思うよ？確かに射程距離は有るけど、威力がいまいちかな」

やはりか……ならあのプランに変えなきゃか…

？「朔夜パパ！」

あれ？可笑しいな～この世界に居ない人の声が聞こえたのですが…気のせいだな

？「朔夜パパ！」

気のせいだ！絶対にありえない！

？「朔夜パパ…何で無視するの？ヴィヴィオのこと嫌いになったの？」

流石にやり過ぎたか。俺は声がする方を向いた

朔夜「ヴィヴィオ、久しぶりだね。後何故、聖王モード何だ？」

何とヴィヴィオは１９歳の姿、聖王モードであったのだ

ヴィヴィオ「烏おじちゃんが『聖王モードなら、朔夜が欲情するかもしれないぜ』って言ってたから。朔夜パパよくじょうって何？」

ヴィヴィオが無邪気な笑顔で聞いてきた。烏とは一度Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしないとな

朔夜「ヴィヴィオはまだ知らなくていい。」

俺はそうヴィヴィオに言った。するとレイが、右手にグラビトンライフルを持って俺に近づいてきた。

レイ「その子は誰なの朔夜？さっきからパパとかいってるけど？」

レイよ笑顔はかわいいけど、目が笑ってないからめっちゃ怖い……

……さらにキラは俺の首にビームサーベルを突きつけて

キラ「ハナシテクレルヨネ？サクヤ」

片言でそう言ってきた。めっちゃ怖いよキラ

朔夜「話すから、武器しまおうよ二人とも。」

俺がそう言うと、二人は武器しまう

朔夜「ヴィヴィオも元に戻りなさい。」俺がそう言うと、ヴィヴィオは衝撃な一言を言った

ヴィヴィオ「烏おじちゃんの特製のお薬だから、数日は元に戻らないの」

ＮＡ☆Ｎ☆ＤＡ☆ＴＯ烏の野郎はなんつうものを我が娘に飲ませたんだ。それより、二人に説明するか

朔夜「この子は……」

俺は二人にヴィヴィオの事を話した。そして二人は納得したようだ。

さてと、俺はケータイを取り出して、烏に電話した。

烏『もしもし、ドナルドです。』

朔夜「烏か？」

烏『いえ、ドナルドです』

烏はドナルドの声真似をしてそう言ってきた。

朔夜「取りあえず、ＩＳ学園の第三アリーナに来い！必ずだ！来な

かったら、あやめに秘密をばらず……」

俺は烏をなかば脅迫をした

烏『分かった……だからあやめには言わないでくれ……』

烏は電話を切った。さて、ＩＳ学園に行って烏にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩしないとな？ふふふふ、楽しみだなー

ＩＳ学園の第三アリーナ

俺、ヴィヴィオにレイにキラがアリーナに到着すると観客席にはＮＡ☆ＺＥ☆ＫＡ、光一が居た

烏「よっ！朔夜、来たけど何かようか？」

朔夜「ああ、テメーは人の娘に何を吹き込みやがった！」

俺は烏にブチぎれた！今回はゆるさん！叩き潰す！

烏「お、お、お、落ち着け朔夜！ちょっとした遊び心なんだよ。悪かったから許して」

烏は土下座して俺に謝ってきたが俺はオーズドライバーを取り出して腰につけて

朔夜「許すか！変身！」

ゴッド・ハンマー・マン

ゴッドマーン（子供の声）

俺はゴッドマンをライダー化させた感じの姿、オーズ・ゴッドマンコンボに変身した。何故歌ではなく、台詞か？そっちの方が面白いだろ？

朔夜「ゴッドクラッシュ！」

俺はトゲハンマーを烏におもっいきり叩きつけた。

烏「がっは！」

烏は血を流しながら吐血した。さらに俺は烏の腹に膝蹴りを入れて壁に投げ飛ばす。

烏「くそ！やりたい放題やりやがって！変身！」

烏はＶ３に変身した。なら俺は白のコアメダルを取り出して、ドライバーに入れてスキャンした。

サイ・ゴリラ・ゾウ

サゴーゾ・サゴーゾ！

俺はオーズ・サゴーゾコンボに変身する。そして、俺は烏を殴るが、烏はそれを避けて蹴りを入れてきた。

朔夜「ガバッ！」

俺は受け身をとり、右手にある、バゴーンプレッシャーを放つ。烏

は避けるが

朔夜「バゴーンはもう一つ有るぜ！」

俺は左手のバゴーンプレッシャーを放つ

烏「ガバッ！」

烏は壁に吹き飛ばされた。さらに俺は烏に近づいて、ラッシュを入れた。

烏「ライダー返し！」

俺は烏に回転しながら投げ飛ばされた。そして烏は

烏「Ｖ３反転キック」

俺は烏にＶ３反転キックを喰らわせられた。俺は壁に吹き飛ばされた。さらに

烏「Ｖ３キック！」

烏の跳び蹴りが腹に入った。俺は吐血して、地面に膝つく。

朔夜「ならこれはどうだ！」

プテラ・トリケラ・ティラノ

プットッティラァーノ、ザウルゥース！！！

俺はオーズの紫色のコアメダルのコンボ、プトティラコンボに変身した。俺はメダカブリューを地面から取り出して、メダカブリュー・

アックスモードで烏斬り裂く。更に尻尾で弾き、メダカブリュー・バズーカモードで烏を撃つ。そしてメダカブリューにセルメダルを五枚入れる
プ・ト・ティラーノヒッサーツ

俺は烏に２００ｔｎの威力があるストレインドゥームを撃つ。烏は空高くに吹き飛ばされた。烏は空高くに吹き飛ばされた。

朔夜「やっと終わったぜ」

すると

光一「相変わらず強いな朔夜」

光一が話をかけてきた

朔夜「まあな……今日はきれてたしな」

光一「確かに……」

そんな感じにたわいのない話をした

朔夜ｖｓ烏（後書き）

次回もよろしくお願いします

プールに行こう（前書き）

四巻に入ります

プールに行こう

朔夜「熱い……」

俺は廊下を歩いていた。山田先生にレポートを提出しに行くためだった。

朔夜「失礼します」

俺は職員室に入った。すると、山田先生が此方に向いた

山田「織斑くんですか。レポートですね。此処に置いといて下さいね」

朔夜「分かりました」

俺はレポートを机に置き、職員室を出た。少し歩くと、鈴がものすごく、機嫌良さそうな状態で俺の部屋に向かって歩いていた。俺に何かようなのか？

鈴サイド

やっと手に入れたわ。今年の夏に開園した。ウォーターワールドのチケットをまさか譲ってくれる人がいるとはね。今のアタシは羽が生えた様に軽く感じるわ

鈴「朔夜ー居るー？」

アタシはドアを叩きながらそう言うが何の反応が無かった。アタシはもう一度ドアを叩きながら

鈴「朔夜ー居るー？」

そう言うと

朔夜「何だ？鈴」

朔夜が後から現れた。

朔夜サイド

俺は部屋のドアを叩いた鈴に話しかけた

朔夜「よう鈴。何かようか？」

俺がそう言うと鈴は慌てながら此方を向いた。

鈴「さ、さ、朔夜！」

朔夜「そんなにびびるなよ。」

俺がそう言うと鈴は呼吸を整え始めた。

朔夜「まあ、立ち話もなんだし、部屋に入れよ」

俺は鈴を連れて部屋に入る。

鈴「相変わらず散らかってるわね。」

鈴は俺の部屋を見ながらそう言った。仕方ないじゃん仕事の書類が

あるんだから。後ＩＳを創るための道具とかさ

朔夜「まあ座れ。」

俺は冷たい麦茶を出しながら、鈴にそう言った。鈴はベットに座るとアルバムを見ていた。

鈴「へー、まだやってたんだ。アルバム」

朔夜「まあな、でも去年はやってないぜ。受験生だったし。」

俺はそう言いながら鈴の隣に座る。鈴は楽しそうにアルバムを見ていた

鈴「これってアタシが初めて一緒に撮ったやつじゃない」

鈴がそう言っていたので俺もそれを見た。此れは小４の頃の写真。鈴とツーショットの写真だった。あの頃は鈴はしおらしかったな～。俺は今の方が良いけど。俺は麦茶を飲む。鈴はじーとツーショットの写真を見ていた。

朔夜「その写真欲しいのか？」

そう俺が言うと、鈴は

鈴「良いの？」

朔夜「良いよ二枚あるし、」

そう言うと鈴は華が咲くような笑顔になった。

鈴「ありがとう、朔夜」

朔夜「どういたしまして。」

俺がそう言うと鈴がもじもじしながら、上目遣いで俺を見ながら

鈴「朔夜は明日は空いてる？」

空いてるって予定のことかな？予定なら何も無いはずだ

朔夜「特に何もないが？」

すると鈴は俺に近づいてきた。何だよ！顔近い！つうかこんなキャラだったか鈴は

鈴「なら、明日、二人で此処に遊びに行きましょ」

鈴は俺にチケットを渡してきた。最近出来たウォーターワールドか

朔夜「分かった。明日の朝１０時でいいか？」

そう言うと鈴は思いっきりうなずきながら

鈴「良いわよ。じゃあ、また後でね朔夜！」

鈴は俺の部屋を飛び出して行った。スゲー元気だな。俺といれるのがそんなに嬉しいのか？まああっちは俺に好意を寄せてるからか…

……。本当に俺には勿体無いよな……

次の日

俺は現在校門に居る。服装はシンプルに白のTシャツの上に黒のシャツにジーパン良く周りの奴らにもっと色んな服を着ろと言われるがいいじゃん着れれば。そこに

鈴「お待たせ朔夜」

黒の薄手のパーカーにオレンジのTシャツに短パンの鈴がやって来た。相変わらずの動きやすい格好だな。でも可愛いな。これは内緒だがな。

朔夜「いや待ってないし。それより行こうぜ」

俺たちはウォーターワールドに向かう。

ウォーターワールド

朔夜「しかしでかいな…」

流石テーマパークやはりでかい。そして俺たちは中に入る。俺はさっさと水着に着替えて待ち合わせ場所に向かう。

朔夜「無理だから……」

此で何回目だろうか……逆ナン確か鈴を待って5回はいったはずだ……

鈴「お待たせ朔夜」

鈴が現れた。水着は臨海学校の時と同じタンキニタイプの水着だ。
オレンジ色に黒いラインが入っているのが特徴だぜ。

朔夜「さてと何するか？」

俺が鈴に聞くと鈴はウォータースライダーを指を指す

鈴「あれから乗りましょ」

朔夜「構わないけど？」

そして俺たちはウォータースライダーの所に向かう。そして順番がきた。鈴が俺の膝の上に座る。柔らかいな～って何考えれるんだよ俺！意識するな！意識するな！下半身に血が溜まる。そんなこんなでやばいウォータースライダーであった。その後は競争したり、飯食ったりした。そして突然誰かに声をかけられた

男「すいません。私はこう言うものなのですが」

男は名刺を出してきた。アイドルのプロデューサーが何のようだ？

朔夜「俺たちに何かようですか？」

男「実は此に出てほしいんだ」

プロデューサーはあるチラシを渡してきた。水着カップルコンテスト？

鈴「あのアタシたちカップルじゃないんだけど」

鈴がプロデューサーにそう言った。あら鈴のことだから自ら言わないかと思ったんだけど

男「それでも良いんだ出てくれないか」

朔夜「理由を聞かせてくれ」

男「実は……」

何だか人数があと一人足りないらしく、仲が良さそうに見えた俺たちを捕まえたらしい。

男「頼むこの通りです。」

プロデューサーは土下座までしてきた。流石に断れない……

朔夜「わかったから顔をあげてください。出るだけでますから」

こうして、俺たちはコンテストに出ることになった

司会「エントリーナンバーファイナル！織斑・凰ペアだ！」

司会の言葉と共に俺たちは、会場に現れた。すると周りから甲高い声が沸き上がる。そして、ワンパターンな質問が開始された。そして

司会「最後の質問だ！二人は何故好きになったのですか？」

やばい！俺はどう答えれば良いんだ！

鈴「あ、アタシは小４の頃に……」

鈴は転入して助けた時に俺を好きになったのか

朔夜「好きになるのに理由がいるか？好きになっちまったんだからそれで良くないか？」

俺はそう言った。結果は二番で@クルーズの無料券が手に入った。俺たちは帰りに@クルーズに立ち寄ろうとしたら、@クルーズの周りに警察が居た。そして中心にはメタルドーパントが居た

レイサイド

今日はラウラの服を買いに街まで出掛けに来た。しかし何故か@クルーズで1日バイトをすることになってしまった。バイトをしていると、銀行強盗が銃を持って店に入り、立て籠った。私とラウラで強盗を倒すが、強盗のリーダーがＵＳＢメモリーみたいのを取り出して、腕に押し付けた。すると、化け物になった。

ラウラ「朔夜に連絡をいれなければ」

ラウラがそう言った。確かにやらないとだけど、話す暇あるかな？すると、マゼンタ色バイクが化け物にぶつかった。

朔夜「ふー、ありゃレイにラウラじゃん」

バイクに乗っていたのは朔夜であった。朔夜の後にもう一人人がいた

鈴「まさか二人がいたとは」

鈴が乗っていた。鈴抜け駆けしたんだ。後で話を聞かせてもらわな

きゃ

朔夜サイド

俺はマシンディケイダーから降りて、ディケイドドライバーを腰につけてライドブッカーからカードを取り出した。

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身をした。その時に、上から

？「朔夜さん退いて下さい」

誰かが落ちてきた。格好はアクセル・アルマーにメガネをつけて、南光太郎の服を着させた感じだ。まさかこいつは！

朔夜「ＲＸなのか……」

ＲＸ「はい。朔夜さん」

ＲＸは礼儀正しくそう言った。序でに説明しよう。ＲＸは烏のライダーツールに宿っている人格の一つだ。後人格は３つある。Ｖ３にストロンガーにアマゾンだ。

ＲＸ「実は宿主はあやめさまと楽しんだそうで動けなくなったそうです。昨日あれほど今日は朔夜さんに届けものがあるからやるなと言ったのに……それよりあれを殺るか。変…身！」

RXに変身した。RXはリボルゲインを取り出して、メタルドーパントに斬りかかる。俺もライドブッカーで斬る。さらに蹴りをいれた。俺はカードを取り出してドライバーに入れた

アタックライド・スラッシュ

俺はスラッシュのカードで斬撃の威力を上げて攻撃した。更に、カードを取り出した

カメンライド・ファイズ

俺はファイズにカメンライドした。しかし、メタルドーパントに吹き飛ばされた

RX「朔夜さん！」

RXが叫んだが、RXもメタルドーパントに吹き飛ばされた

鈴サイド

アタシはあの戦いを見てることしか出来なかった。アタシは戦いたい。好きな人の朔夜の力になりたい。あの背中を守りたい。アタシはそう強く願った。すると一枚のカードが生まれた。このカードは朔夜の使ってるカード。

鈴「朔夜！これ！」

アタシはカードを朔夜に投げた。

朔夜サイド

俺は鈴が投げたカードを受け取り、ドライバーに入れた

ユニゾンライド・リン

すると鈴が光に包まれて、俺の中に入った。すると身体は紫色に変わり、肩には龍砲が付く。此が仮面ライダーディケイド・甲龍フォームだ。

鈴『これは…』

鈴は俺とユニゾンして驚きが隠す事が出来ないようだ

朔夜「いくよ鈴」

俺がそう言うと鈴は

鈴「分かったわ」

俺たちは龍砲を連謝しながら、近づいて、近づくと、メタルドーパントを斬る。更に

ファイナルフォームライド・ア、ア、RX

RXを巨大なリボルゲインにして、メタルドーパントを斬るさらに、

ファイナルアタックライド・リン

俺は龍砲を撃ち俺はそれに突っ込んで身体にまとい

朔夜・鈴「龍砲ライダーキック」

メタルドーパントに龍砲ライダーキックを喰らわせる更に

ファイナルアタックライド・ア、ア、ア、ＲＸ

朔夜・鈴「リボルクラッシュ！」

メタルドーパントにリボルクラッシュを喰らわせたら、爆発して、人間に戻った。俺はラウラとレイを拾い、一緒に学園に帰った

プールに行こう（後書き）

次回もよろしくお願いします

４０年の復讐（前書き）

レッツゴーオールライダー篇です。

４０年の復讐

ある世界

龍一「此処は…俺は確か蓮と零と風紀委員の仕事をしていたはずだが……」

俺は周りにを見渡しながら、歩いていた。すると目の前に二十代前半の男が現れた。俺は知らないよ！紅何とかって知らないよ！

紅渡「初めまして、不音龍一さん。僕は紅渡。織斑朔夜の仲間です。」

目の前の男、紅渡がそう言った。朔夜の仲間？朔夜ってあの後書きに一回やって来たあの織斑朔夜！あいつライダーなのか！

渡「不音くん貴方にはある世界を救って欲しいのです。」

俺が世界を救う？無理だぜ。俺には力は無いぜ

渡「貴方に此を授けます」

紅渡は俺にＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮのロゴが入ったアタッシュケースを渡してきた。確か音無が持っていた奴だよな…

渡「では異世界に行ってもらいます。」

龍一「ひとつ聞いていいか？」

俺は紅渡にそう言った。すると紅渡は首を傾げながら

渡「何ですか？」

龍一「何故俺なんだ？他に強いやつとか他に居るだろ？何故他の奴らにしないんだ？」

俺がそう言うと、紅渡は微笑しながら

渡「貴方が闇の神、織斑朔夜と会ったことがあるからですよ。それに此れは貴方にしか出来ないことですから」

そう俺に言ってきた。俺にしか出来ないことか……蓮に零、俺は世界を救いに行くぜ。

龍一「説明ありがとう。」

俺はそう言って、目の前にあるゲートをくぐった。

朔夜サイド

俺は部屋で動画を見ていた。内容は死後の世界で反逆を起こす話だ。すると目の前にあるデータが送られてきた。此れは！真ショッカーの奴らは！俺はゲートを開いてある世界に向かう。頼む生きていてくれよ英司

０００の世界

俺は過去の旅から帰って来ると、世界は変わってしまっていた。そして俺は子供３人を連れて逃げるが、敵の幹部ジェネラルシャドー

に追いつめられた。どうする。

？「ダークインパクト！」

黒い何かが、ジェネラルシャドーを襲った

？「大丈夫か？」

この声はまさか……

英司「朔夜！」

俺がそう言うと、朔夜は

朔夜「英司！」

俺の名前を呼んだ。久しぶりだな

朔夜サイド

この世界がまさか俺が前に来た世界だとはな……。すると上から何かが落ちてきた。毎度よく上から何かが落ちてくるよな

？「退いてくれえええええええええええええええええええええええええええええ！」

上から文月学園の制服を着た一夏が落ちてきた。まさかあいつは

朔夜「不音龍一！」

そう、バカとテストと召喚獣　～罪と偽善と不幸の少女～ね世界の重要人物、不音龍一が落ちてきた。何故だ？

龍一「いてて……まさか空から落ちる事になるなんて……紅の野郎後で殴ってやるからな」

龍一はそう呟いていた。渡が連れてきたのか……渡よ他の人をつれてこようよ……。俺は取りあえず刹那を構えて

朔夜「ウェェェェェイ！」

ショッカーの戦闘員を斬り倒す。更に追加でジェネラルシャドーを踏みまくり

ジェネラルシャドー「やめっ！痛い・やっ！……あれ？何だか段々……気持ち良く……」

ジェネラルシャドーが一線越え始めたよ……

朔夜「今の内に逃げるか……」

英司「そうだね……」

龍一「関わらないほうがいいな…」

三人の意見が一致したので俺たちは逃げ出す。すると目の前にデンライナーが現れて俺たちを連れ去った。

４０年の復讐（後書き）

次回は龍一君が変身します。

青き閃光現わる（前書き）

龍一変身

青き閃光現わる

デンライナー

朔夜「助かったぜ。幸太郎」

俺は幸太郎にそう言った。すると幸太郎は微笑しながら、

幸太郎「別に良いって、友達だろ」

幸太郎がそう言ってきた。相変わらず元気そうだな。

龍一「まさか本物のデンライナーに乗るなんてな…」

龍一はめちゃくちゃ複雑な顔をしていた。

英司「どうして、世界があんなことに…」

英司がそんなことを言うと幸太郎が

幸太郎「実はショッカーがコアメダルを開発していたんだ。しかし、ショッカーメダルだけじゃ何も起こらなかった。しかしあんたの相方が落としたセルメダルを使って、ショッカーメダルは反応を起こし、ショッカーグリードが生まれ、仮面ライダー1号・2号を倒して、世界征服したんだ。」

幸太郎が説明した。説明ありがとう。それを聞いた英司は表情を暗くした。

英司「俺のせいで世界は……」

モモタロス「お前のせいじゃない。鶏冠野郎のせいだ。」

モモタロスはそう言って、ふんぞり反った。そういりゃ良太郎が居ないな……聞くのは野望か

朔夜「さてとオーナー、行こうぜ。４０年前の更に一分前に行ってセルメダルの回収にな」

オーナー「行きましょう４０年前の更に一分前にレッツラゴー」

龍一「４０年前まで行くのか楽しみだなー」

龍一は物凄く楽しみにしていた。４０年前か…1号・2号の初めて誕生した日か……

幸太郎「遊びに行くわけじゃないんだぜ。不音」

龍一「分かってる」

改めて俺たちは４０年前に向かう。

４０年前

英司たちを元の世界に戻し、俺たちはデンライナーから降りた。そして、セルメダルを回収して、デンライナーに戻るとアンクがセルメダルを取り返そうと暴れ始めた。

朔夜「静かにしやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

俺はぶちギレた。そしてディケイドドライバーを取り出した

朔夜「静かにしないと破壊するぜ」

すると周りは静かになったが遅かった。アンクはガラスにぶつかり、セルメダルを四枚ばらまいてしまった。

朔夜「くそ！光太郎！回収に行くぞ！」

幸太郎「分かってる」

俺と幸太郎、イマジンズはデンライナーから飛び降りた

龍一「俺も行くぜ」

龍一も飛び降りた。少し歩いていると、テディが

テディ「皆セルメダル三枚目を破壊したそうだ。残りは此方だけだ」

三枚破壊したかなら残りは此方だけだな。すると、自転車に乗った少女の足下で止まった。

幸太郎「すまないそのメダル俺たちのものなんだ。返してもらえないかな？」

すると少女は逃げ出した。何故だ！

朔夜「待ってってくれ！」

龍一「話を聞いてくれ！」

俺たちは追いかける。すると少女の目の前にミツルとナオキが立ち塞がる。そして言いあいが始まり、セルメダルの奪い合いが始まった。

朔夜「やめなさい！」

俺の本日二度目の叫びが響き渡る。すると、セルメダルが落ちて、転がる。

ショッカー戦闘員「きっ」

戦闘員がブラック将軍にセルメダルを渡した。

ブラック将軍「とうとう手に入った。大首領様が欲しがっていた物が」

ブラック将軍は高らかに叫んでいた

朔夜「ブラック将軍よ返してもらうぜ！」

俺はブラック将軍が持っていたセルメダルを蹴り飛ばした。そして回し蹴りを入れた。

朔夜「ほれ！龍一ガキを連れて逃げろ！」

龍一「わかった。」

俺は龍一たちを避難させて俺と幸太郎は変身ツールを出した。

朔夜・幸太郎「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

ストライクフォーム

俺は仮面ライダーダークネスに変身し、幸太郎は仮面ライダーＮＥＷ電王ストライクフォームに変身した。俺は刹那を構え、幸太郎はマチェーテディを構えてショッカー戦闘員を斬り倒していく。更に、幸太郎はブラック将軍に斬りかかるが、ブラック将軍は斬撃を避けて幸太郎に自分のサーベルで攻撃した。

幸太郎「くっ！」

モモタロス「幸太郎！」

モモタロスは幸太郎に近寄る。俺も近寄ろうとしたら、目の前に光の束が過る。まさかな…俺は横を見ると、シャイニング…天城光介が居た

光介「行かせるかよ」

朔夜「光介……」

龍一サイド

俺は子供を連れて逃げるが、廃工場でショッカーの戦闘員とガラガランダーとイカデビルに挟まれた。逃げ場無しか……

少女「もう逃げられない……終わりだわ……」

ミツル「終わりだ……」

少女とミツルがそう言った。確かに終わりだな……するとナオキが

ナオキ「あきらめちゃ駄目だ！最後まであきらめちゃいけない！」

ナオキが周りに聞かせるようにまた、自分に聞かせるように言った。最後まであきらめちゃいけないか……俺は自分の手にあるものを見た。ＳＭＡＲＴ　ＢＲＡＩＮのロゴが入ったアタッシュケース。俺はそれを開き、ベルトを巻いた。すると何故か使い方が頭の中に入ってきた。俺は水色のファイズフォンに４０４と入力して、ケータイの形をデルタフォンの形に変えて

龍一「変身！」

デルタムーバーみたいな奴にはめるするとｕｎｌｏｏｋ

ｕｎｌｏｏｋの音声とともに水色のフォトンブラッドに包まれて。俺の外見はカイザの頭のＸが二重になり、身体はデルタとサイガをたした感じな姿にかわった。

ミツル「あんたも……仮面ライダー……」

ミツルが俺にそう言ってきた。俺も仮面ライダーになっちまったんだな……

ガラガランダー「貴様は何者だ！」

ショッカー軍団は臨戦体制をとっていた。

龍一「俺はフォース、仮面ライダーフォースだ！〈スラッシュ〉」

俺はフォースフォンに音声入力をして、フォースムーバーに射し込み、ミッションメモリーをムーバーに付ける。すると、水色のＺセイバーみたいなのになった。俺はショッカーの戦闘員を斬り裂く。

少女「助けて！」

ショッカーの戦闘員が少女を襲おうとしたので、俺は

龍一「〈ファイヤ〉」

俺はフォースムーバーをバーストモードに変えて、戦闘員を撃つ。

ガラガランダー「喰らえ！」

ガラガランダーは俺に攻撃したが俺はそれを避けて、フォースムーバーバーストモードでガラガランダーを撃つ。

龍一「〈ディバイド〉」

俺はフォースフォンで音声入力をする

Ｒｅａｄｙ

音声がなった後に俺はフォースムーバーを足に付けてＥＮＴＥＲキーを押す

Ｅｘｃｅｅｄｃｈａｇｅ

俺の右足にフォトンブラッドが集まり、俺はクウガの強化マイティキックを放つ感じで蹴りの体制をとる。ガラガランダーは光の渦で動きがとれなくなり、俺はガラガランダーに蹴り放つ。

龍一「マリンブレイク！」

ガラガランダーは青色の炎をあげながら爆発した。すると

イカデビル「動くな！」

イカデビルは子供を人質に取っていたが、後から仮面ライダー1号・2号の攻撃を受ける。俺は子供たちを逃して、フォースムーバーバーストモードでイカデビルを攻撃した。俺はフォースフォンのＥＮＴＥＲキーを押して、イカデビルにロック弾を撃つ。1号・2号は

1号・2号「ライダーダブルキック！」

二人はダブルキックを放つ。俺はそのままスピンがかかったエネルギー弾。〈スピンブレイク〉を放った。イカデビルは青色の炎をあげながら爆発した

青き閃光現わる（後書き）

次回もよろしくお願いします。コラボをまだ募集してます。

吹雪が訪れる日（前書き）

空刀の聖夜が参戦します

吹雪が訪れる日

烏サイド

さてと、渡に話して、不音龍一を朔夜の手伝いで、異世界に送ったのはいいが、まさか光の破壊者が現れるとはな、どうするか……もう一人手伝いを送ろう。まずはロストドライバーにあのメモリを見つけなきゃな。俺は倉庫に向かう

ＩＳ（朔夜）の世界

鈴サイド

また朔夜がどっかに行ってしまった。アタシたちと居るのがそんなに嫌なの？

箒「朔夜はまた、異世界に行ってしまった。私たちより異世界の方がいいのか」

レイ「何かいい方法は無いかな？」

ラウラ「朔夜を軟禁でもするか？」

セシリア「流石にやりすぎですわ」

ラウラ「やはりか……」

アタシたちはどうにかして朔夜の気をひく作戦を考えていると、突然周りが宇宙に変わった。まさかこれって……

渡「はじめまして、皆さん。僕は紅渡。朔夜さんと同じ、仮面ライダーです。」

朔夜と同じ仮面ライダーですって！なら、朔夜の居場所もきっと！

鈴「あんたは朔夜居場所を知っているの？なら連れて行ってほしんだけど？」

アタシは紅にそう言うと、やはりかみたいな顔をしていた。やはり朔夜が何処に居るかを知っている

渡「朔夜さんは今ある世界で戦っています。」

箒「異世界で戦っているってなぜ朔夜が異世界で戦っているんだ。前々から思っていたが何故朔夜が戦わなければならない。」

箒の言葉に皆がうなずく。アタシも前々から気になっていた。何故朔夜が異世界の為に戦っているのかを

渡「それは人が神になったからですよ。朔夜さんは人から神になりました。闇の神の使命は冥界を統べるのと異世界のパワーバランス調整です。朔夜さんはそのために今も戦っています。」

アタシたちは初めて朔夜の戦う理由を知った。朔夜がもともと人間では無いことは知っていた。でも戦う理由は知らなかった。

鈴「今すぐアタシを朔夜の元に連れて行ってよ！力になりたい！」

アタシはそう紅に言った。しかし紅は首を横に振る。

渡「無理です貴女方では力になれません。」

ラウラ「なら何故私たちの前に現れた。」

確かに何故紅はアタシたちの前に現れたの

渡「それは朔夜さんが今なにをしているかを伝えるためです。」

紅が去ろうとしたからアタシたちは紅を捕まえて

箒「朔夜の元に連れていくまでこの手は離さん！」

セシリア「そうですわ！朔夜さんの元に連れていってくださいませ」

そうすると、紅は両手を上げて

渡「分かりました。連れていきます。ただし、朔夜さんに合流するまで彼の言うことを聞いてくださいよ。」

すると目の前に銀のオーロラが現れて、そこから空刀聖夜が現れた。

聖夜「黒葉の野郎が今度会ったらただじゃおかねえからな！」

空刀がぐちぐち言いながら立ち上がる。

渡「それでは僕は此処で、皆さん頑張って下さい。」

紅はそう言って消えた

朔夜サイド

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はシャイニングに刹那で攻撃するが、シャイニングはシャイニングインパクトで俺の攻撃を相殺した。

光介「あまいぜ十六夜！シャイニングバスター！」

光介はシャイニングバスター（白色のディバインバスター）を放ってきた。

朔夜「ダークシールド」

俺は闇の力で黒い盾を作り防ぐ。そして俺は斬撃をシャイニングに向かって放つ

光介「ところがぎっちょん！」

シャイニングは斬撃を全て紙一重で避ける

光介「シャイニングブレイク！」

シャイニングは必殺の蹴り、シャイニングブレイクを放ってきた。

朔夜「ダークネスブレイク！」

俺はシャイニングブレイクに対抗して必殺の蹴りダークネスブレイクを放つ

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

光介「でやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

反発するエネルギーが爆発した。俺は変身がとける。そして膝をつきながら前を見る

光介「ハァ……ハァ……」

シャイニング……光介も変身が解けて膝をつきながらこちらを見ていた。そして、光介はその場を去った。

龍一サイド

俺は子供たちとショッカーの戦闘員から逃げていた。流石に全てを倒すのはキツい！すると、目の前では、野上とモモタロスが見えない何かと戦っていた。すると野上はダメージを喰らいすぎたのか、ベルトが外れて変身が解けた。

ヒルカメレオン「とどめだ！仮面ライダー！」

駄目だ変身が間に合わない！すると突然

ブリザード・マキシマムドライブ

？「ブリザードキック」

見た目は水色のジョーカーが、ヒルカメレオンを襲う。

？「ちっ！はずしたか」

水色の何かはロストドライバーからメモリを引き抜く。すると変身が解けた。見た目はレンの髪が黒いバージョンだ。

龍一「お前は誰だ！」

俺はフォースギアを腰につけて、何時でも変身を出来る状態にしていると、黒髪のレンが此方を向いてきた。

聖夜「俺は空刀聖夜。織斑朔夜の仲間だ。」

朔夜の仲間だとなら問題はないか、俺は臨戦体制をとるのをやめた時、

ナオキ「セルメダルがない！」

後からそう言う声が聞こえた。セルメダルが奪われただって！

幸太郎「ヒルカメレオンのやつか……最後の最後でやってくれるな」

モモタロス「ちくしょう！あの緑野郎！」

本郷「大丈夫だ。奴が持っていたのは偽物だ。」

一文字「本物はこっちさ」

1号・2号がそう言ってやって来た。流石元祖ライダーだな。短時ですり替えるなんて。そこに

朔夜「皆無事か～」

朔夜が走ってやって来た。あいつは無事だったか

朔夜サイド

俺が皆が居る所に行くと、聖夜が居た。

朔夜「聖夜！お前も居たのか！」

聖夜がため息を出しながら

聖夜「黒葉に無理矢理な。後俺だけじゃないぜ」

聖夜がそう言うと、

鈴「さ～く～や～」

セシリア「朔夜！何故勝手に居なくなるのですか！」

レイ「リユウキカセテヨサクヤ」

ラウラ「夫を置いて行くとは嫁の自覚が足りないぞ朔夜」

箒「さて朔夜、いろいろ話したいことがあるのだが？」

あれ？何故こいつらが居るんだ？つうか俺、無事に生きていられるかな？取りあえず

朔夜「みんな……落ち着こうな？」

箒・鈴・セシリア・レイ・ラウラ「問答無用！」

みんながＩＳを展開して俺を襲ってきた。

朔夜「何故こうなるぅぅぅ

吹雪が訪れる日（後書き）

次回もよろしくお願いします

潜入（前書き）

やっと終わったよ……書く暇がなかったぜ……

潜入

朔夜「生きているって素晴らしい……」

俺はみんなの攻撃を避けて、みんなの機嫌を何とか治して一息をつく俺、織斑朔夜です。

鈴「朔夜、行くなら、今度から、アタシに一言言ってから行きなさい。」

箒「私に言ってから行けくようにな。分かったか？私に話してから行くようにな！決定事項だ」

セシリア「今度からわたくしに一言かけてから行ってくださいませ」

レイ「私に一言かけてから行ってね。私にだからね」

ラウラ「今度異世界に行くときはわたしを連れていけ」

あれ？何ですか一人称を強調してるんだ皆。つうか怖いよ。みんなが怖いよ。

朔夜「分かったから。それより此からどうするんだ？」

俺はそう言った。結局ショッカーを倒さなきゃいけないし、何より天城光介がこの世界のこの時間にいると言うことは、真ショッカーが関わっていると言うことだ。結局セルメダルを取られようが取られまいが、ショッカーグリードが現れると言うことだ。

本郷「大丈夫だ。奴等の偽物のセルメダルに発信器を付けておいた。」

流石だよ本郷さん。流石俺の惚れの人だよ。

龍一「ならさっさと行って終わらせようぜ。俺は早く元の世界に戻らないと蓮たちが心配してるかも知れないしな。」

龍一は空をみながらそう言った。そういや、蓮って奴は龍一の事が好きだしな。龍一早く気づけよ……

鈴「朔夜が今考えてることは、貴方が言えることじゃないわよ。」

何で鈴が俺の考えてる事が分かるんだよ！

箒「顔に出ているからな。」

マジすっか！顔に出ていたのか。何という事だ！俺は空を見る。は～空が青いぜ……

朔夜「さてと早く行こうぜ。主に俺のわがままで……」

一文字「分かった行こう」

俺たちはデンライナーに乗って、ショッカーの秘密基地に向かう。

さてと何が起きるのかな？

ショッカー秘密基地

朔夜「まさか湖の中に秘密基地があるとはな」

現在湖の中にあるショッカーの秘密基地に潜入している。不気味だな。何かが確実に起こるぜ此れは……

龍一「気味悪！絶対に何かあるパターンだよな」

聖夜「確かに……つうか確実に起こるぜ此れは」

俺、龍一、聖夜は原作メンバーから少し離れてそんな話をしながら歩いていた。

本郷「此処が首領の居場所だ」

朔夜「いらっしゃいませぇぇぇ

んだからよ。」

モモタロスと幸太郎がそう言ってきた。

朔夜「俺を慰めないで……本当に」

俺はそう言って、ディケイドライバーを腰につけて

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身して、ライドブッカーをガンモードにして、
周りを警戒しながら歩く。すると
ブラック将軍「引っ掛かったなライダーの諸君。」

ブラック将軍改め変人のおっさんがセルメダルをかかげながら笑っていた。

ブラック将軍「本物のセルメダルは落とす前にすり替えて置いたのさ。」

俺はため息を吐きながら、ライドブッカーをセルメダルに照準をして

朔夜「大体分かってたし、じゃあ破壊するか」

アタックライド・ブラスト

俺はディケイドブラストを使ってセルメダルを破壊した。

ブラック将軍「セルメダルが！って言うと思っていたか？」

ブラック将軍がそう言うと、横から、セルメダルが飛んできた。俺はその方向を見ると

朔夜「天城……光介……」

光の破壊者天城光介が立っていた。やはり真ショッカーが関係していたのか。するとブラック将軍はショッカーメダルを投げた。するとセルメダルが常食して鳥型のグリード、ショッカーグリードが現れた。

幸太郎「現れたか……」

モモタロス「やってやるぜ！」

幸太郎とモモタロスはショッカーグリードに向かって走り出した。俺はシャイニングに走り出した。

龍一サイド

俺と空刀と再生怪人と戦っていた。再生だから余り強くないな。俺はフォースムーバー・スラッシュモードで再生怪人を斬り倒していた。すると、

横から、金色の刃が俺を襲ってきた。あれは

聖夜「まさかのオーガかよ……」

ファイズ系ライダーの最強ライダー、地の帝王オーガが居た。さて

俺と空刀で倒せるのかな

朔夜サイド

朔夜「くっ！」

俺はライドブッカー・ソードモードでシャイニングの攻撃をいなす、俺はそのままライドブッカー・ソードモードでシャイニングに攻撃をする。

光介「ふっ！」

シャイニングはバックステップで避けて此方に手を向ける

光介「シャイニングバスター！」

光介はシャイニングバスターを放ってきた。俺はライドブッカーからカードを取り出して、ドライバーに入れた。

アタックライド・インビシブル

俺はディケイドインビシブルでシャイニングバスターを避けて、ライドブッカー・ガンモードでシャイニングを撃つ。しかし、当たらなかった。神相手にはディケイドじゃ無理か、しかし、今からダークネスに変身は間に合わない。やるだけやるしかないか。なのはにフェイトはいないから、ユニゾンは無理か……いやいけるか！一人いるじゃんか！しかし使いたくないな……巻き込む訳にはいかないなら

フォームライド・デストロイ

俺はディケイド激情態になった。そして俺はアタックライドを入れた

アタックライド・クロックアップ

朔夜「いくぜ……」

俺はクロックアップ空間に入りライドブッカー・ソードモードでシャイニングを斬り裂く。さらに俺は蹴りを入れようとしたら、

光介「ハイパータイムブースト」

奴はハイパークロックアップ並のスピードを出して攻撃してきた。

朔夜「ちっ！厄介だな……なら」

アタックライド・ハイパークロックアップ

俺はハイパークロックアップで対抗した。

ファイナルアタックライド・ディ・ディ・ディ・ディ・ディケイド

俺はディメンションキックを放つ

光介「シャイニングブレイク！」

奴はシャイニングブレイクを放ってきた

潜入（後書き）

次回もよろしくお願いします。

RXの相談所（前書き）

番外編

RXの相談所

RXのお悩み相談室
＜
＜RX「…と、言うことで主に言われて、皆さんのお悩みを聞く相談室を六課内に造りました……主に主の独断で…」
＜コンコン
＜
＜RX「はい、どうぞ」
＜がちゃ
＜扉があいて、そこにたっていたのはフェイトだった
＜フェ「アクス（RXの事）居る？」
＜
＜RX「あ、フェイトですか、どうしたんですか？」
＜
＜フェ「ちょっと、相談したい事があって、」
＜
＜RX「私と貴女の中じゃないですか、遠慮しないでください」（RXとフェイトは親友です）
＜
＜フェ「実は……最近朔夜のところに呼ばれなくて、どうしたらいい？アクス」
＜RX「そうですね……主に頼み込んでみますよ、親友の頼みですからね」
＜
＜フェ「本当！ありがとうアクス、今度食事を奢るよ、それじゃまた」
＜男なら誰でもときめいてしまうような笑顔を見せて、フェイトは相談室から去った

＜
＜バタン
＜
＜ＲＸ「フェイト……朔夜さんに会えますよ絶対」
＜
＜コンコン
＜
＜ＲＸ「はい、どうぞ」
＜がちゃ
＜こんどはオレンジ色の髪の少女が立っていた
＜
＜ティ「アル、相談したい事があって来たんだけど？」
＜ＲＸ「はい、それでティアナさんのお悩みと言うのは…」
＜
＜ティ「出番がないのよぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」
＜ティアナさん大絶叫
＜ティ「なのはさんとかフェイトさんとかは異世界に行って兄さんと一緒に戦ってるけど、何で、私は異世界に飛ばされ無いのぉぉぉぉぉぉぉ出番ほし、」
＜其処まで言うとＲＸに口を押さえられた
＜ＲＸ「ティアナさん！！それ以上言うと…」
＜ＲＸは指である方向を指したティアナが目でおうと
＜
＜ティ「！！」
＜其処には、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、シャマル、はやて、鍵、木場、恋姫メンバー達が青筋をたてながら覗いていた、はっきり言って怖い
＜
＜ＲＸ「これ以上言うと本当に貴方の命に関わります、それに、番外編に出れてるだけましですよ？」

＜ＲＸがそこまで言うとティアナは残像が出来るほど首を縦に動かし
＜
＜ティ「あ…ああ、ありがとうアル」
＜震えながら相談室を出ていった
＜バタン
＜
＜ＲＸ「ティアナさん……強く……生きてください」＜
＜コンコン
＜
＜ＲＸ「どうぞ」
＜がちゃ
＜ＲＸ「おや？エリオにキャロどうしたんですか？」
＜
＜エ「兄さん…僕達は兄さんやおじさんの役に立ってますか？」
＜キャ「兄さま答えて下さい」
＜二人の目は真剣だ
＜
＜ＲＸ「何故、そんな事を」
＜ＲＸが聞くと
＜
＜エ「おじさんに愛しているんです、主達と一緒に戦って行く事だけが『役に立つ』と言う事じゃありませんよ？主が家に帰って来たとき『おかえり』と言ってあげるだけでも主の力に成ります仲間と言うのはただ一緒に戦うだけじゃないんですよ共に支え合えるのが仲間なんですよ」＜ＲＸが其処まで言うと二人はＲＸの胸で声を上げて泣き出した
＜
＜数分後
＜エ「ありがとうございます兄さん」
＜キャ「お陰で、なんだか元気になりました」

＜
＜ＲＸ「二人が元気になってくれて嬉しいです、また何かあったら来てください、仲間なんですからね」
＜
＜エ「はい、兄さん」
＜キャ「わかりました兄さま」
＜バタン
＜
＜ＲＸ「頑張って下さい、私の可愛い弟と妹……さて今日はこれで終りですね、家に帰って夕飯を作らないと」
＜そう言ってＲＸは相談室を出た、どこか満たされた顔をして
＜ＲＸ「今日は主の大好物でも作りますか、」
＜と、ＲＸは家へと帰って行った

RXの相談所（後書き）

次回は龍一がメインかな

脱出（前書き）

本編書き上がりました

脱出

龍一サイド

龍一「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

聖夜「おらぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はフォースムーバー・ソードモードでオーガを斬ろうとし、空刀が左フックをくらわせようとするが、

オーガ「ふっ！」

オーガは腰に付いていたオーガストランザーを手に取り、オーガフォンからミッションメモリーを取り、

Ｒｅａｄｙ

オーガストランザーから、黄金の刃が作り出し、俺たちをなぎはらう。

龍一・聖夜「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺たちはオーガの一撃を喰い、壁まで吹き飛ばされた。パワーはやはり、向こうが上かなら、

龍一「〈スピード〉」

俺はフォースフォンに音声入力をした。すると装甲が展開した。フォトンブラッドが金色に近いかい銀色に変わる。此がフォーススピ

ードフォームになる。序でにこの姿でいられるのは七秒までだ。まぁファイズアクセルよりは速いがな

龍一「いくぜ」

俺はオーガに向かって走り出した。通常の１５００倍のスピードだ。オーガは俺の反応についてこれずに一方的に殴られる。更に空刀がオーガを殴る。俺はオーガの腹に蹴りを入れる。

聖夜「喰らえ！」

空刀はオーガの腹にボディーブローを入れる。さてとどめをさすかな。

Ｔｉｍｅ　ｏｖｅｒ

龍一「ヤバイ！」

スピードフォームが解除された。あれ？身体中力が抜ける……俺は膝をつく。するとオーガはオーガストランザーを振り上げて俺にとどめをさそうとしてきた。

ブリザード・マキシマムドライブ

聖夜「喰らいやがれ！」

オーガの後から、空刀、ブリザードが水色のオーラをまとった拳をオーガにぶつける。オーガはブリザードにより、何処かに飛ばされた。

聖夜「今のうちに逃げるぞ！このままだとお前がヤバイ！」
俺は聖夜の肩を借りて、外に出る。俺だせー、年下に助けられるなんて……
幸太郎サイド
俺とモモタロスは再生怪人を倒しながら、ショッカーグリードと戦っていた。クソ！どんだけ強いんだよ！だけど倒さなきゃ……
幸太郎「いくぞ…テディ！」
テディ「分かった、幸太郎」
モモタロス「いくぜ！いくぜ！いくぜ！」
モモタロスはモモタロスウォードを振り回しながら、走り出す。俺はマチェーテディを持ってショッカーグリードに向かって走り出す。しかし、ショッカーグリードはメダル型の弾丸は飛ばす。
幸太郎「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
俺はそのエネルギー弾を喰う。
モモタロス「幸太郎！」
モモタロスがそういった瞬間にショッカーグリードのメダル型の弾丸が飛んできた。
モモタロス「がぁぁぁ！」
モモタロスはメダル型のエネルギー弾を喰い、吹き飛ばされた。

幸太郎「モモタ、がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺がモモタロスを呼ぼうとしたら、ショッカーグリードの攻撃を喰い、吹き飛ばされて、壁に当たり、変身が解けた。

ショッカーグリード「ショッカーに刃向かうものには死を」

ショッカーグリードが腕を振り上げて俺にとどめを刺そうとしてきたが、黒い何かがショッカーグリードを吹き飛ばされた。助かった……取りあえず、モモタロスを連れて逃げる。

烏サイド

ふ～、何とかあり得ないはずの展開は阻止できたな。さてと、俺は後ろを見ると敵のオンパレードだぜ。さてとクロウドライバーを取り出す。そして変身ポーズをとり、

烏「変身！」

俺は仮面ライダークロウになる。俺はクロウセイバーを取り出して相手を斬り裂く。さらに蹴りを放つさらに左手を前方に振りかざし、重力の塊を放つ。そこに、

真人「久しぶりだな、黒葉烏」

邪神ロキと融合した真人が居た。さてと俺勝てるかな。

烏「会いたくなかったぜ、真人……」

俺はクロウセイバーを真人に向けて、一閃する。しかし、真人はそ

れを避けて、黒い雷を放ってきた。俺はそれを紙一重で避けて重力の塊を放つ。しかし、真人は重力の塊を素手で破壊して俺に殴りかかるが

烏「グラビティーブラスト」

真人に重力波を放つ。ふ～此で何とかなったかな……

烏「な……に……」

俺の目の前にはアナザーアギトを更にまがまがしくして黒くした感じの奴が居た。

烏「仮面……ライダー……ロキ……」

俺の目の前には破滅を司る仮面ライダー、仮面ライダーロキが居た。

烏「ちっ！アトミックグラビティー！」

俺は自分の最大技を放つが真人、仮面ライダーロキは腕を振るっただけで、俺のアトミックグラビティーを打ち消した。

烏「アトミックグラビティーが……」

ロキは俺に手を向けて電撃を放ってきた。俺は避けようとしたが、

烏「がぁぁぁぁぁぁぁぁ」

く……そ……さ……くや…気おつけろ……

朔夜サイド

俺ダメージを喰い、地面を転がる。そして、地面に血を吐いた。

光介「お前がディケイドに変身したのがお前の敗因だ。」

光介がそう言った。確かに俺の敗けの敗因だな……

光介「さて死にな」

光介はそう言って、光で作った剣を俺に向かって振り上げてきた。

俺は死ぬな……その時誰かの顔が頭に浮かんだ

まだ死ねない…俺はまだ

朔夜「死ねない！」

俺が立ち上がるが、光介が先に攻撃をしようとしてきた。避けきれない

セシリア「朔夜さん！」

セシリアがスターライトｍｋ３で光介に攻撃してきた

朔夜「セシリア！何で……」

セシリア「わたくしだけではありませんわ」

さらに後からレールガンと、ビームがとんできた

レイ「あんまり心配をかけさせないでよ」

ラウラ「全くだな」

朔夜「レイ！ラウラ！」

更にレイとラウラがやって来たってことはまさかな…。朱と紫色の何かが、光介を斬り裂く

鈴「まさか、朔夜が此処までやられるなんてね」

箒「強敵というわけだな」

朔夜「箒に……鈴……何で……」

俺がそう言うと、鈴が近づいて

鈴「スケイスから連絡がきたのよ。だからか来たのよ。全く、本当に心配かけさせないでよ」

鈴いや周りのみんなが泣きそうになっていた。本当に悪いことしたな……

朔夜「みんな……ごめん……」

俺はみんなに謝り、光介を見る。俺はあるカードを取り出す。倒せなくても振りきればいい。しょうがない、鈴が目でうったえてるしな

朔夜「やるぜ鈴！」

鈴「何時でも！」

ユニゾンライド・リン

俺は鈴とユニゾンして、ディケイド甲龍フォームになる。そして蒼天月我で光介に攻撃をした。しかし、光介が防御してきた。けど俺は肩の龍砲を放つ。そして蹴りを入れる。そして、俺はみんなを連れて基地から脱出した

脱出（後書き）

次回もよろしくお願いします

戻る世界（前書き）

書き終わった……

戻る世界

俺は鈴たちを連れて上に戻る。流石に疲労が限界だ……まぁ死なないが、鈴たちが危ないな。すると目の前に幸太郎たちが走っていた。後にはショッカーグリードが攻撃をしていた。ヤバイな……俺はライダーパスを取り出した。ネガタロスに体んかして戦わせれば俺の疲労は関係ないか……

朔夜「変身！」

ネガフォーム

ネガタロスは俺の身体に憑依して、オーラスキンが俺の身体にくっつきさらに紫色のオーラアーマーにデンカメンがくっつき、仮面ライダーネガ電王になる

ネガタロス「俺の強さは別格だ！本当の悪の力を見せてやるよ」

朔夜『それは良いから、早く殺れよ……幸太郎たちが危ないから……』

俺がそう言うと、ネガタロスはデンガッシャーをソードモードに組み立て、ショッカーグリードに斬りかかる。

モモタロス「あっ！偽物野郎！何俺より……いててて……」

モモタロスは何かを言おうとしたが、傷口が開いたのか、痛がっていた。

ネガタロス「俺より弱いやつが何言ってる！」

ネガタロスはモモタロスにそう言って、デンガッシャーソードモードでショッカーグリードを斬ろうとしたが、ショッカーグリードは斬撃を避けて右手でネガタロスを攻撃した。

ネガタロス「やりやがるな！なら……此れでどうだ！」

ネガタロスはデンガッシャーをソードモードからガンモードに変形させてショッカーグリードに射ち始めた。しかし、ネガタロスの攻撃はことごとく避けられる。

ドゴーン！

爆発した音が聞こえたから、後を見るとカメバズーカー「カーメー」

カメバズーカーがデンライナーを攻撃していた。

ナオミ「皆さん早く乗ってください！」

ナオミさんが、ドアから叫んでいた。やばいな……ネガライナーは整備中で使えないし……早く乗らなきゃ、でもショッカーグリードを此処で叩かなきゃ、未来は救えない。すると

本郷「十六夜は早く戻れ！此処は俺たちでやる」

一文字「本郷の言うとおりだまかせろ！」

二人はそう言ってきた。俺はネガタロスの憑依を解く

朔夜「でも……それじゃあ……本郷さんたちは！」

俺はそう言うが、本郷さんたちは笑いながら

本郷「そう簡単には敗けはしない。」

一文字「俺たちを信じてくれよ」

そう言って二人はショッカーグリードに向かって走り出した。それを見た龍一はダブルライダーを追いかけようとしたが、俺は龍一の動きをとめた。

龍一「何故とめる！二人がこのままだと！」

龍一はそう言って叫ぶが俺は低い声で

朔夜「知っている……でも二人は俺たちを逃がすためにわざとやっているんだよ。俺だって助けたいんだよ。でもそしたら、二人は何のために……」

俺はそう言ってデンライナーに走る。そして乗り込んだ。そして次々とみんながのるがナオキが突然デンライナーから降りた。

ミツル「ナオキ！何してるんだ！戻れ！」

しかし、ナオキはダブルライダーの所に走る。するとテディは

テディ「私が行こう」

テディはデンライナーから降りてナオキを追いかけた。そして俺たちは元の世界に戻った。

元の世界

俺たちは元の世界に戻った。すると映司がオーズラトラータコンボでトライトベンダーに股がって暴れていた。何処にライドベンダー合ったんだ?するとデンライナーが更に爆発がひどくなった。俺はダークウィングを展開して龍一を抱えて飛び出す。鈴たちはＩＳを展開して、脱出、幸太郎は映司がオーズタジャドルコンボが救出、聖夜は普通に飛び降りていた。

すると映司が着地に失敗して変身、解けてオーズドライバーが外れた。幸太郎はライダーベルトが何処かに落ちた。さらに、龍一もフォースドライバーを落としたらしい。すると

ジェネラルシャドウ「ほほう……此がオーズドライバーか…後此がフォースドライバーか」

変態親父のこと、ジェネラルシャドウがいた。するとアンクがオーズドライバーを回収していた。抜け目ないな～、するとショッカー戦闘員が攻撃を開始した。俺は刹那で攻撃さばいた。アンノウン攻撃が龍一を襲う。

朔夜「龍一！逃げろ！」

間に合わない！

龍一サイド

俺の目の前には何かが飛んできた。俺は死ぬのか…此処で…死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくないシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイシニタクナイ

ドックン

俺の中の何かが反応した。すると俺の身体は灰色の龍の怪物に変わっていた。まさか……俺はオルフェノクに……俺は取りあえず攻撃を避けて、アンノウンを攻撃した。俺は……人じゃなくなった……

朔夜サイド

龍一がオルフェノクになった。通りでファイズ系ライダーになれるわけか……しかし龍一は放心状態になっていた。取りあえず

朔夜「鈴！龍一を連れて逃げろ！」

俺は刹那を奮ってそう言った。

鈴「分かったわ！」

鈴はそう言って逃げ出した。さてと俺はどうなるかな？

鈴サイド

アタシたちはショッカー戦闘員から逃げながらある場所に来ていた。

モモタロス「天丼は無事なのか……」

手だけになったモモタロスがそう言っていた。すると

アンク「テディって奴なら居るぜ」

アンクがそう言ってアタシたちに近づいてきた。アタシたちはアンクの後についていくと、さびたマチェーテディが地面に突き刺してあった。モモタロスはそれに近づいて、叩くがうんとすんとも言わなかったまさか……

ラウラ「死んでいるのか」

ラウラが周りに衝撃の一言を言った。

レイ「見て、地面に何かがあるよ。」

ミツルたちが地面をほると空き缶が埋まっていた

セシリア「これは……？」

箒「タイムカプセルなのか？」

二人はそう言って首をかしげていた。ミツルが空き缶を開けると、少年ライダー隊の制服と手紙が入っていた。ミツルはそれを読んで泣いていた。なにせ、その手紙はナオキからの手紙だったからだ。読み終わると、ショッカーの戦闘員がやって来た。

鈴「みんな逃げるよ！」

アタシはそう言って、逃げ始める。するとモモタロスはアンクにとりついて

モモタロス「此処は俺がおさえるみんなは行け！」

モモタロスはショッカー戦闘員に走り出した。

戻る世界（後書き）

次回もよろしくお願いします

蘇る戦士たち（前書き）

書き終わった……やばい……内容薄っ！

龍一サイド

俺は何故生きている……何故あの場所から逃げてきた……

俺はもう……

龍一「……人じゃない……」

俺がそう呟いた瞬間に頭に衝撃が走った

鈴「あんたはなに黄昏てるのよ！」

凰鈴音がそう言って頭を叩いていた。何故叩かれた？

龍一「何するんだよ凰鈴音……」

俺がそう言うと凰鈴音はため息を吐きながら

鈴「どうせ人間じゃなくなったからって落ち込んで死にたいとか思っているんでしょ。」

そう凰鈴音が言ってきた。俺の気持がわからないくせに

龍一「分からないくせに！」

俺は怒りまかせに凰鈴音の胸ぐらを掴む。

ラウラ「鈴音！」

レイ「鈴！」

向こうから、ボーデビッヒとデュノアが近づこうとしたが、

鈴「大丈夫」

凰鈴音がそう言った。凰鈴音は此方を向き

鈴「わからないわよ。アタシはアンタじゃないし。でもアンタと同じ立場の人なら知っているわよ。」

凰鈴音はそう言った。俺と同じ立場？まさか……

龍一「織斑朔夜……」

俺はそう言うと凰鈴音はうなずく

鈴「そうよ。あいつは……朔夜は人じゃないわ。でも朔夜はそんなことで落ち込んではないわよ。それにアンタが少し特種になったぐらいで周りの人たちが貴方を拒むと思っているの？拒むならそいつは本当の友達じゃないわよ。少なくともアタシたちや朔夜は貴方のことを受け入れるわよ。」

凰鈴音が俺にそう言ってきた。俺は蓮たちの事を思い出す。そして凰鈴音の胸ぐらを掴むのをやめた。

龍一「ありがとう。さて、朔夜たちを助けに行こうぜ」

俺がそう言うとみんながうなずく

朔夜サイド

現在俺は貼り付けにされている。さてと脱出は無理かな～。

モモタロス「幸太郎……天丼は……」

幸太郎「分かってる。俺たちの絆はそう簡単には切れない。どんな時にだって」

幸太郎はそう言っていた。絆はそう簡単には切れないか……俺は周りを見ているとある動きを見つけた。あれは……成るほどな……やるきか……

シャーク将軍「哀れな人間ど……」

ドーン

シャーク将軍がしゃべっている時に雷が落ちた。これは

朔夜「聖夜！」

聖夜の雷が広場を襲うそれが合図になり、ドラゴンオルフェノクのこと、龍一と少年ライダー隊の制服を着た子供たちが突っ込んできた。無謀なことを始めたな。すると周りの人たちも走り出した。そこにダブルライダーが現れた。

ナオキ「仮面ライダー！思い出して！ナオキの言葉を仮面ライダーは絶対に負けない！仮面ライダーは正義の味方だって事を！」

そうナオキはダブルライダーに叫んだすると

ダブルライダー「ははははははは！」

ダブルライダーは笑いだし、ショッカー戦闘員を殴り飛ばした

本郷「その通りだよナオキ君」

一文字「俺たちショッカーを倒すまで死なないぜ」

シャーク将軍「何故お前たちは我々に逆らえる！洗脳は！」

本郷「心あるショッカーの科学者が洗脳を解いてくれたのさ」

一文字「そしてチャンスを狙ってずっと待っていたのさ！屈辱をたえながらな！」

そして人々は俺たちの拘束を解いてくれた。俺はダークドライバーを出して

朔夜「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

俺はダークネスに変身した。俺は刹那を取り出して、ジェネラルシャドウを斬る。その時、ジェネラルシャドウはフォースドライバーを手放す。

朔夜「龍一！」

俺は龍一にフォースドライバーを渡す。

龍一「サンキュー！朔夜、空刀、いくぜ！」

聖夜「ああ」

龍一・聖夜「変身！」

ｕｎｌｏｏｋ

ブリザード

二人はフォースとブリザードに変身した。

映司「変身！」

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

映司はオーズタトバコンボに変身した。

モモタロス「幸太郎、天丼じゃなくて悪いな」

幸太郎『いいさ。テディは４０年前で頑張ったんだ。俺は今で頑張んなきゃな。モモタロスじゃ物足りないけどな』

モモタロス「はっ！此方だって良太郎じゃないから物足りないぜ！変身！」

ストライクフォーム

モモタロスはモモケンに変形して幸太郎が握るそして、シャーク将軍に斬りかかる。

ジェネラルシャドウ「たった七人で何が出来る」

ジェネラルシャドウはそう言ってきた。たった七人か…本当にそうかな

風見「とう！」

仮面ライダーＶ３のこと風見さんがやって来た。すると続々とライダーが現れた。サブライダーたちも

ジェネラルシャドウ「何故ライダーがやって来る。」

烏「それはな……こう言う言葉があるんだぜ。『人々がライダーを必要とするなら仮面ライダーは何度でも蘇る』ってな」

烏が足を引きずりながらやって来た。何で烏はボロボロ何だ?すると烏の後から、

テディ「４０年ぶりだな幸太郎」

テディが現れた。さらに

良太郎「お待たせモモタロス」

モモタロス「りょーたろー！会いたかったぜ！」

モモタロスは良太郎に抱きついていた。感動の再会か……

烏「不音だっけ?受け取りな!」

烏はファイズブラスターを丸くした感じの強化ツール、フォースブレードを龍一に渡した。龍一はフォースブレードにコードを打ち込み

Ａｗａｋｅｉｎｇ

装甲を少し厚くした感じのフォース、フォース・ブレードフォームになる。そして、オーガと向き合い、戦いを開始した。

龍一サイド

俺はオーガと向き合い走り出した。オーガは俺を殴ろうとしたが俺は腹にカウンターを入れる。更にもう一撃を入れて回し蹴りを入れた。更に地面を蹴り、飛び蹴りを入れた。そして、俺はコードを入力した。

Ｅｘｃｅｅｄｃｈａｇｅ

龍一「ロストブレイカー」

俺はマリンブレイクの強化版ロストブレイカーをオーガに放つ。オーガは必殺技のオーガスラッシュを放ってきた。互いの技がぶつかりあうそして、徐々に俺が押していき、そしてオーガを貫いた。

聖夜サイド

俺はショッカー戦闘員を倒していた。すると、横からナイフみたいな物が俺を襲う、横を見ると仮面ライダーエターナルが居た。俺は拳を構えて、殴りかかる。更に蹴りを入れるがエターナルは俺の攻

撃を避ける。なら俺はアクセルドライバーとトライアルメモリを取り出した。

聖夜「変……身！」

トライアル

俺は仮面ライダーアクセルトライアルに変身した。俺はエンジンブレードで斬りかかる。更に百発蹴りを入れる。そして俺はトライアルメモリをストップウォッチ型に変えてスイッチを押す。そして数万発の蹴りを入れる。

トライアル・マキシマムドライブ

聖夜「9・3秒それがお前の絶望までのタイムだ」

エターナルはマシンガンスパイクを喰い爆散した

朔夜サイド

ジェネラルシャドウが逃げ出したか。だが

朔夜「逃がさないぜ。ヒーローはライダーだけじゃない」

ＢＧＭ駆けろスパイダーマン

志郎「はーははははっ！はーははははっ！」

変態ヒーロースパイダーマンのこと志郎が現れたさらに

レッドマン「レッドファイト！」

鬼畜の赤い通り魔が現れる更にはゴッドマンにグリーンマン、ゾーンが現れた。何鬼畜が集まってるんだよ。

レッドマン「レッドアロー！」

ゴッドマン「ゴッドマン超音波」

グリーンマン「グリーンマンスティック！」

ゾーン「ゾーンミサイルマイト！」

志郎「ソードピッカー」

それぞれの必殺技がジェネラルシャドウにぶつかる

ジェネラルシャドウ「かっ快感！」

ジェネラルシャドウは最後まで変態のようだった……俺のせい……

朔夜「さてと後は大首領だけか……」

すると大首領の頭から何かキモイ物が現れた。さてと此処は映司に任せますかな……

「タカ！」・「イマジン！！」・「ショッカー！！！」…「タ・マ・シー　タマシィィー　ライダー魂！！」

映司はオーズ・タマシーコンボになるそして大首領に魂ボンバーを放った。大首領は爆発した。しかしその中から黒い仮面ライダー1号が現れた。

大首領「ハハハ！我こそは最強のライダー。仮面ライダーショッカーだ！」

そして黒い何かを飛ばしてきた。俺たちはそれを喰い。みんなの変身が解けた。

大首領「序でにこのライダーは全ライダーの力を持っている。」

何処のツクヨミだよ。あっ！あれはスーパー1までか！なら俺はディケイドライバーを出しながら立ち上がった。

朔夜「士悪いわ使わせてもらうぜ」

士「使うからには勝てよ。俺の力なんだからな」

士は笑いながらそう言ってきた。

朔夜「もち！変身！」

カメンライド・ディケイド

俺は仮面ライダーディケイドになる。すると色んなカードが現れた。

此れはみんなとのユニゾンライドか……

朔夜「いくぜ……烏！」

烏「オッケー親友！」

ユニゾンライド・カラス

俺は烏とユニゾンして全身真っ黒なディケイドになる。そして俺は重力を操り、仮面ライダーショッカーに重力を当てる

大首領「貴様は何者だ！そんなデータはないぞ！」

朔夜「何って通りすがりの仮面ライダーだが？」

俺は重力を大首領に喰らわせる。

朔夜「さてと幕引きにするかなっとその前に」

ファイナルフォームライド・フォース

朔夜「くすぐったいぜ」

龍一「何を！うわっ！」

俺はフォースをフォースブラスターにファイナルフォームライドさせた。形はゾルダのギガランチャーに似た感じな形だな

朔夜「今度こそとどめだ」

ファイナルアタックライド・フォ・フォ・フォ・フォ・フォース

朔夜「喰らいやがれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

俺はフォースバスターを放つ感じとしては水色のビームを放つ感じだ。

大首領「我は必ず蘇る！ライダーを倒し、世界を征服するために！」

大首領は爆発した。ライダーはバラバラに去っていた。俺もＩＳの世界に帰った。龍一と聖夜を元の世界に帰して

蘇る戦士たち（後書き）

次回は本編な戻ります。

筱ノ之神社（前書き）

書いてみた。短い……

筱ノ之神社

筒サイド

私はある場所に来ていた。その場所は筱ノ之神社、私の前に住んでいた場所だ。何故来たかと言うと、筱ノ之神社で年の一度の夏祭りがあり、今日がその日であるからだ。この場所に来るとやはり思い出すな……朔夜との思い出を

昔の思い出

筒「此で良いのか？」

朔夜「もうちょい力を抜いて……そうそんな感じ」

回想終了

筒（そう言えば昔から朔夜に世話になっていたな……少しは朔夜の役に立つことは出来たのかな……そうだ少し恥ずかしいが朔夜に私の舞いを見てもらおう）

朔夜サイド

朔夜「仕事がやっと終わった……さてと何やるかな～狩に生きるか、インフィニティーな物語をやるか」俺がポータブルなゲーム機を起動させようとしたら、

♪～♪～

誰からか、電話がきた。ディスプレイを見ると

筱ノ之箒

箒からか……俺は電話にでる

朔夜「何だ箒？」

箒『さっ朔夜か！私だ。今から暇か？』
おどおどしながらそう言ってきた。

朔夜「暇だけど？」

箒「暇なのだな！」

箒は突然明るくなりながらそう言ってきた。

朔夜「あ、ああ」

俺がそう言うと

箒「ならば、筱ノ之神社まで来てくれないか。」

筱ノ之神社にか？この時期に？まさか！夏祭りか！

朔夜「分かった。」

箒「そうか。ただし、誰も喚ぶなよ。誰もだ。わかったな。」

箒はそう言って電話切った。

朔夜「夏祭りか……」

俺は上着を持って、筱ノ之神社に向かう。さてと何があるかな～

筱ノ之神社

俺は筱ノ之神社やって来たが箒はまだ来てない。さてと少し待つかな。すると後から

箒「朔夜」

箒が巫女装束でやって来ていた。正直にめっちゃくちゃ可愛いつうか綺麗だった。

朔夜「箒か、で喚んだ用件は何？」

俺が箒にそう言うと、箒はもじもじしながら

箒「実はな……今日、此から神楽舞いを踊るんだが、それを見てほしいんだ後、良ければ一緒に祭をまわらないか？」

朔夜「良いよ。」

俺がそう言うと、箒は枯れた花がうるおいが戻ったかのような表情になった。

箒「それではまた後でな。」

箒は走って向こう側に行ってしまった。元気だな～。そして時間がたち、神楽舞いが始まった。その時の箒はとても神秘的に見えて見

とれていた。

時間が経ち神楽舞いが終了

朔夜「箒、スゲー綺麗だった。正直見とれた」

俺は神楽舞いが終わった箒にそう言った。すると箒は

箒「朔夜が私に見とれていた……朔夜が……」

箒がトリップ誌始めた。

朔夜「箒～箒さ～ん」

俺がそう言うと、箒は現実に戻ってきた。

朔夜「それよりまわろうぜ」

俺たちは屋台を見てまわった。そして花火のベストスポットにやって来た。

朔夜「変わらないな～」

箒「ああ、此処も変わらないな……」

俺たちは夜空を見ていた。

箒「朔夜は、私の事を一人の女として好きか？」

箒は真剣な目で俺を見ていた。俺は……

朔夜「分からない……まだ分からない……少なくとも大切な存在ではあるが、一人の女として好きかと聞かれたら……正直分からない……」

俺がそう言うと

箒「そうか……私は前に言った通り、朔夜の事が好きだ……一人の男して好きだ。」

箒が真剣な目でそう言って、更に俺にキスをしてきた。本当に告白してから行動が大胆になったよな……

朔夜「覚えておくよ。」

箒「覚えておくといいそして私を好きにさせてみせる」

その言葉と共に花火があがった。やはりその姿も神秘的に見えてしかたがなかった

筱ノ之神社（後書き）

次回は朔夜の自宅の話

番外　可哀想な烏（前書き）

連続更新！番外だー

番外　可哀想な烏

＜オーケイ、それじゃ行くぜ
＜
＜烏の過去
＜
＜
＜鈴「あれ？何かしらこれ」
＜鈴が朔夜の部屋をあさっていたら（朔夜外出中に）アルバムのようなものが出てきた
＜鈴（朔夜のアルバムかぁ……見ちゃお）
＜鈴が、欲に負けてアルバムを開こうとしたとき
＜朔「鈴、何をしてる」
＜
＜朔夜が帰ってきた
＜鈴があわててアルバムを後ろに隠すと、一枚の写真がアルバムから落ちてきた、朔夜がそれに気付き
＜
＜朔「まさか…見たのか？」と鈴に聞くが
＜
＜鈴「見てないわよ、もしかして朔夜…アルバムに見られたら困る写真でもあるの？」
＜鈴がそう聞くと、朔夜は首を横にふり
＜朔「違うよ、そのアルバムには烏の可哀想な写真が入ってるんだよ」
＜朔夜がそう言うと、鈴は落ちてきた写真を拾って見た、すると
＜鈴「何……これ……」
＜写っていたのは、死にそうなぐらいに、顔が白い烏に点滴のチュ

ーブがたくさんつけられている光景だった
＜鈴「どうゆうこと？」
＜朔「知りたいか？」
＜
＜朔夜が言うと鈴は
＜
＜鈴「教えて」
＜と短く言った
＜
＜朔「わかった、あれは……俺が神になりたてだった時……」
＜
＜◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
＜烏「最高神様、ジャンプばっかり読んで無いで仕事してください」
＜烏が書類の山を片付けながら、うらめしそうに言うが
＜最「お前がやっとけよ～使い魔だろお前」
＜最高神はだるそうに、ジャンプを読みながら、言いどこかに行った、すると、今度は、金髪の女性が
＜ア「烏君、この仕事お願いね～」
＜ドサッ
＜ドサッドサッ
＜ドサッドサッドサッ
＜烏「あっ、ちょっとアテネさん」
＜烏に書類の山を押し付けて去って行った、更に
＜ハ「烏、これも頼む、嗚呼それから、神界と、各次元世界の見回りを、頼むと最高神とアテネからの伝言だついでに冥界も頼む」
＜そう言うと黒い長い髪をなびかせハーデスは帰って行ったそれだけでなく
＜「手続きしといて」
＜「代わりに仕事してくれ」

＜「腹へったからなんかつくって」
＜「女の子紹介して」
＜「てか、むしろ神界の仕事全部任せたわ」
＜
＜と、烏に続々と仕事を押し付けて行く神々、
＜烏は、それを1日で終わらせていた、睡眠時間は十分程度の事もあった
＜なぜここまで烏に、仕事を押し付けて行くのか、それは、烏が優秀だからである、一時期、神になるための試練を受けようとしていたが
＜最「あいつが使い魔じゃなくなったら楽ができない」との理由で、神になるための試練を、受ける権利を剥奪された事が、あるほどである
＜烏「仕方ない、早く書類を終わらせて、見回り行って……」
＜
＜そんなことが続いたある日
＜バタ
＜
＜最「ん?おい、何寝てんだよ、起きろ、起きて書類やっ……おい、起きろ、おい!、くそ、いいやほっとこ、書類はこいつの机の上に置いとくか」
＜最高神が、そう言って去ると
＜
＜ポ「む、大丈夫か?」
＜
＜銀髪の男性が、烏に声をかけた、神界で数少ない真面目な神の1人、ポセイドンである
＜
＜ポ「すぐに、医療の神に見せなければ」

＜ポセイドンはそう言って烏を担ぎ上げ医療の神の所に急いだ、
＜ポ「アイビ、いるか？」
＜
＜アイビ「はい……ってその人」
＜アイビと呼ばれた医療の神は、烏を見て青ざめて言った
＜
＜アイビ「神力が、弱まってその他の力も危険状態、直ぐに治療します」
＜
＜数時間後
＜
＜烏「ここは…」
＜烏は自分がどこにいるか、何故、身体中に、チューブがつけられているのか、解らなかった
＜ガチャ
＜ポ「起きたか」
＜アイビ「死ぬとこだったんだよ？」
＜ポセイドンと、医療の神が、入って来たが状況が把握出来ていない烏は、
＜烏「あなた方は？」
＜と聞いた
＜
＜ポ「俺はポセイドン、この腰に付いている刀は斬艦刀だ」
＜アイビ「私はアイビ、医療の神だよ」
＜二人が自己紹介すると
＜烏「俺は、黒葉烏と言います、最高神様の、使い魔です」
＜烏も自己紹介をした、するとポセイドンが
＜ポ「うむ、烏と言うのか、どうして、あの様な所に倒れていたのだ？」
＜と、聞いてきた、そして烏は、事情を説明して、二人と仲良くな

った
＜それから烏は、疲れたらアイビの所で休み、ポセイドンの所で剣術を学んだ
＜朔夜が、まだ修行中の時の事である
＜
＜◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇
＜朔「それで、俺が修行を終えて烏と一緒に仕事をして１５００回位、烏が倒れて、ある日また倒れて起きたら…ああなったんだ」
＜
＜鈴「そ……そうなの……」
＜烏の昔の話が終わると鈴の顔がひきつっていた
＜
＜鈴「でも、何で朔夜がその話知ってるのよ、それに何で写真まで？」
＜
＜朔「俺の修行中の担当がポセイドンだったんだ、写真はアイビが撮ったのを後でもらったんだ」
＜朔夜はそう言ってアルバムをしまった、そして
＜
＜朔「烏の前で『召し使い』とか『家政婦』とか言うなよ」
＜と、朔夜が言うそれを聞いた鈴は、
＜鈴「どうして？」
＜と聞いたすると朔夜は暗い顔をして
＜朔「発狂する」＜と短く答えた、鈴は面白半分でやって見ようと、思ったが朔夜の、暗い顔を見て、やめた
＜鈴「皆に話して置いた方が良いんじゃない？」
＜鈴がそう言うと
＜朔「嗚呼、そうだな」
＜と朔夜は、鈴と一緒に部屋を出た
＜それから、みんなの烏を見る目が変わったと言う。

番外　可哀想な烏（後書き）

次回こそ、朔夜の自宅の話

夏休み……短かったな……（前書き）

今回で四巻が終了か……

夏休み……短かったな……

レイサイド

私はある場所に来ていた。目の前には織斑と書いてある看板がある。因みに此処は学園の学生寮ではなく外の朔夜の実家なんだよな～。朔夜は居るよね。女子の話じゃ家に帰ったっていってたよね。私は朔夜の家のインターホンを鳴らした。何と言えばいいんだろ？お日柄も良くって！姉さんと同じになるじゃない！もっと他のがあるはずだよレイ！そこに

オレンジ色の髪の少女「は～い。どちら様ですか？」

オレンジ色の髪の少女大体私と同じぐらいの少女が朔夜の家から出てきた。誰なんだろ後で朔夜に……キカナキャ……

ティアナサイド

あたし、ティアナ・ランスターは休暇をとり、義理の兄、織斑朔夜の所に遊びに来た。

朔夜「此が此処にきて、此があっちで……」

兄さんは何か必死で造っていた。確かＩＳって言ったけ？

朔夜「グレンラガン造るの面倒だな……螺旋力に耐えられる駆動系が面倒だな……ディス・アストラガンよりかはましだけど……」

兄さんはそう言って机に突っ伏した。

ティアナ「兄さん。何か飲む」

あたしは兄さんにそう聞くと、兄さんは此方を向いて

朔夜「ファ○タグレープ。冷蔵庫にあるから」

兄さんがそう言うと

ピーンポーン

インターホンがなった。

朔夜「ティア、頼めるか？」

ティアナ「良いよ兄さん。任せて」

あたしはそう言って、玄関に向かった

ティアナ「は～いどちら様ですか？」

あたしはそう言って、玄関をあけると、金髪のスタイルが良いあたしと同じぐらいの女の子が居た。誰なんだろ？

ティアナ「どちら様ですか？」

あたしはそう女の子に聞く。沿い言えば何処かで見覚えがある感じがする

金髪の少女「私はレイ・デュノア。織斑朔夜さんのクラスメートです。朔夜は居るかな？」

兄さんのクラスメートか……ならいいか。

ティアナ「兄さん！お客さんが来たよ。デュノアさんだって」

そう言うと、兄さんが居間からやって来た。

朔夜サイド

俺はティアに呼ばれて玄関に行くとレイが居た。

朔夜「レイどうした？」俺はレイに聞くと

レイ「あの……その……来ちゃった（何言ってるの私いいいい

ティア目が笑ってないよ笑ってない

朔夜「分かったから……」

俺は取りあえず説明した。二人つうか、何時ものメンバーが互いに闇の書みたいな奴と戦う時に力を合わせて戦ってたこと言ったら、思い出したそうだ。

朔夜「納得しましたか、お二人様」

俺がそう言うと二人はうなずく。俺は立ち上がり

朔夜「何か飲み物取ってくるわ」

俺は台所に向かうとインターホンがなった。なんだろう?無性に嫌な感じしかしない。俺の本能が叫ぶ、出るなと!しかし俺は玄関に向かい、開けると、

セシリア「お久しぶりですわ。朔夜さん。」

鈴「遊びにきたわよ!ありがたく思いなさい」

ラウラ「ほう、此処が朔夜と教官の家か」

箒「この家も久しぶりに来たな。」

セシリア、鈴、ラウラ、箒がやって来た。何でみんながやって来るだ?しかも連絡なしで?

朔夜「取りあえずあがってくれ……」

飯どうしよう？どうせみんな食ってなさそうだし……蕎麦で良いかな？

朔夜「レイ！ティア！箒たちが来たぜ」

箒たちがそれを聞くと不機嫌になる。

鈴「……レイも来てたのね……」

箒「油断もすきもない……」

セシリア「やはり考えてることはおなじですわね……」

ラウラ「部屋にいないから何処に行ったと思えば此処か……」

みんなが何か言ってるよさてと、俺は奴に連絡をいれるか。俺はケータイを取り出して

朔夜「烏か？俺だ。朔夜だ。頼みたいことがあるんだが……」

俺は烏と電話をし、そして、居間につくと

朔夜「今からクロスワールドに行くぞ」

俺がそう言うと、ＩＳメンバーが

ＩＳメンバー「クロスワールド？」

頭に?を出しながらそう言ってきた

朔夜「クロスワールドは前に俺が居た世界だよ。さて行くぜ」

俺は銀色のオーロラを出してクロスワールドに向かう

クロスワールド

朔夜「久しぶり来るなこの世界」

俺たちは機動六課の隊舎前に現れたすると

フェイト「朔夜！」

フェイトが走って俺に抱きついてきた。

朔夜「うお！」

俺は倒れそうになるが、踏みとどまり、しっかりと、フェイトを受け止めた

朔夜「久しぶり、フェイト」

フェイト「久しぶりだね朔夜」

俺たちはそう言いながら、一回離れた。すると、後から、

なのは「朔くーん」

なのはたちが現れた。更に

鍵「心配したぞバカ野郎！生きてるなら、会いに来い！」

鍵と千鶴さんがやって来た。

志郎「数日ぶりだな朔夜」

志郎と深夏が現れた。さてと、とりあえずはあれまでは時間があるから、あそこととあそこにに行くかな

朔夜「みんな、また後でな！」

俺たちはある場所に向かう

ある場所

俺たちは……

……

烏の工房に来ていた。あり得ねー！何でガンなバスターやバトル７更にはグレートな冥王にゲッターのアークが置いてあるんだ

烏「赤いバルキリーには触るなよ」

烏が殺気を放ちながら言ってきた。

鈴「本当にあれがあの黒金を立ち上げた張本人？」

レイ「全くわからないよ？」

鈴とレイがそう言ってきた。俺は

朔夜「イカれてるけど、あれが立ち上げた張本人だ」

俺は二人にそう言った。するとラウラは

ラウラ「ＩＳのコアをどうやって造ったんだ？」

ラウラがストレートに烏に聞いた。すると烏は

烏「まずはラップとビー玉にメモリーカードを用意して、お湯が沸騰した鍋に入れてよくかき混ぜれば、ほら完成」

烏の手にはＩＳのコアが握られてた。俺以外の奴等は顔をひきつっていた。あれを見れば誰だってそうなるよな……

烏「それと朔夜のデバイス。修理しといたぜ」

何時の間にだよ烏！さっきまで持っていたのに！

烏「俺は不可能を可能にするからな！後見てみろ此が俺のデバイス『インフィニティーフリーダム』だ」

そう言って烏はデバイスを起動させると格好がモンハンのビストロ装備になり、両手にはお玉とフライ返しが握られていた。

烏「此が第一形態だ。此が第２形態だ」

烏の格好はハゲヅラに腹巻きにハリセンを持っていた

烏以外「何処のドリフ……」

烏「此がフルドライブだ！」

そう烏が叫ぶと烏の格好がスーツにトレンチコートに日本刀であった

朔夜「何で最後だけまとも！」

烏「最後だからまともなのさ！まともじゃなきゃ戦えないし」

烏はそう言って、部屋を出た

箒「やはり今一わからない奴だな……」

俺たちはもう一つ場所に向かう

朔夜「久しぶり。みんな！」

俺は軽音部に顔を出した。

光一「久しぶり朔夜」

光一がやって来た。さらに

梓「お久しぶりです。朔夜先輩」

梓に他のメンバーも現れた。

朔夜「みんなさ後で宴会に来るか？」

すると唯が

唯「いくいく！」

唯が速攻で反応した。

律「まあ行くかな？光一は？」

光一「行くけど」

この二人もくるか

紬「私も行きたい」

ムギもかとなると強制的二人も来るのかな？

澪「私も行こう。律が暴れないようにな」

梓「先輩がたが暴れないようにしないといけませんし」

朔夜「そうか、じゃあ時間は後で知らせるから」

俺たちは部室を出た。

鈴「朔夜って女の知り合い多くない？」

朔夜「そうか？」

箒「確かに多いな」

箒もそう言ってきた。なら多いいのかな～。まあ良いかな。俺たち

は六課に向かう。そして宴会が始まった

フェイト「さ～く～や～。いつになったら私としてくれるの～」

突然フェイトが胸元を開きなが俺に抱きついてきた。更に反対側からは

梓「朔夜先輩！私の気持を何時になったら気づいてくれるんですか！私は！私は……すう……」

梓が俺の横で叫びながら寝てしまった。

澪「朔夜……私は……私は……」

澪も寝ながら何か言っている

鍵「モテモテだな朔夜」

鍵がそう言ってジュースを飲んでいた。つうか何でこいつら酒臭いの

朔夜「酒臭くないか？」

鍵「確かに」

すると志郎が近づいてきて

志郎「烏が周りの奴等に酒飲ませやがった」

マジかよ。だからフェイトは絡んでくるし、梓と澪は寝ちまったわ

けか……。するとRXがやって来て

RX「少し主と話してきますね」

RXが烏の元に行き、烏の悲鳴が聞こえた。烏よ永遠に……

……

夏休み……短かったな……（後書き）

次回からは五巻だな……

青いＩＳとの出会い（前書き）

四巻に入るかな？

青いＩＳとの出会い

朔夜「わが社に依頼！」

俺は思いっきり叫んだ。目の前にいるとある会社の社長さんが口を開き

社長「はい……貴方に頼みたいのです……黒金はＩＳ開発から警備までやってくれると聞いたので」

確かにそうです。うちの会社は幅広くやっていますからね。

朔夜「その依頼内容は何ですか？」

俺が社長さんに聞くと社長さんは口を開き

社長「我が社の新型第三世代型ＩＳ〈大和〉の護衛です。」

ＩＳの護衛ですか……俺は心の中でため息をはき

朔夜「分かりました。受けましょう」

俺はそう言って、社長さんを帰した。なんだろうな。明日はの依頼は俺自ら行かないと行けない気がするな……何かヤバい気がする。俺はそう思い部屋を出た。

次の日とある会社

俺は黒いスーツを着て依頼のあった。会社に向かう。すると後から

？「ちゃお？朔夜くん」

朔夜「楯無か……」

更織楯無が青いドレスを着て後に立っていた。

楯無「朔夜くんも喚ばれたの？」

朔夜「ああ、依頼でな……楯無だって依頼だろ？」

俺がそう言うと、楯無は扇子を出して口を覆い

楯無「そうよ。うちも依頼を頼まれたの。」

更織にまで頼むのかよ。何か匂うな……まあいいか

朔夜「さてと俺は行くから」

俺は手を上げなら去ろうとしたら、肩を捕まれて

楯無「あら、エスコートしてくれないの？こんなに可愛い子を目の前にして」

楯無は何故か俺を睨みながらそう言ってきた。

朔夜「わかったよ……ではそこの美しいレディー行きましょうか」

俺は楯無の手を握り、中に入る。楯無の顔が少し赤かった。恥ずか

しいなら頼むなよ……

パーティー会場

取りあえずお偉いさんの話を聞きながら、俺は隅っこで水を飲んでいた。一応未成年だからな。すると反対から

楯無「楽しんでる？」

楯無が料理を食べながらやって来た。よく食うな……

朔夜「楯無よ、食べながらやって来るなよ。それに楽しむことなんか出来るかよ。仕事だぜ？」

俺はそう言って、お偉いさんの顔見る。そしてまた移動した。すると誰かとぶつかった。

朔夜「すいません。大丈夫ですか？」

目の前には二十代半ばの女性がいた

？「大丈夫よ。君こそ大丈夫？」

女性は逆に俺の心配をしていた。俺は

朔夜「私は大丈夫です。」

俺がそう言うと、女性は微笑みながら

？「それは良かったわ。」

しかし、女性の服が俺の水で濡れていた

朔夜「服が濡れているな……少しついてきてもらってもよろしいですか？」

俺はそう言って、女性の手を引いていった。

朔夜「失礼ながらお名前は？名前を知らないと呼びにくいので、よろしければお名前を」

俺が名前を聞くと

？「スコールよ。スコール・ミューゼルよ。織斑朔夜君」

女性は自身のフルネームを言いながら、俺の名前を言ってきた。何故俺の名前を……俺は平常心を保ちながら

朔夜「何故名前を？」

するとスコールさんは

スコール「有名でしょ？黒金社の社長に、男で世界最初のＩＳを起動させた人で有名でしょ？」

確かに……俺はスコールさんに替えのドレスを渡して、パーティー会場に戻る。そして適当に何かを食っていると

司会「大変お待たせしました。我が社の第三世代型ＩＳ〈大和〉の登場です。」

すると会場が暗くなるその時

パリーン

ガラスが割れ、何者かが現れた。そこには青いＩＳでフルフェイスの少女、大体１６歳ぐらいである。その少女は大和に向かって突っ込んでいく。大和を着けている少女は反応できずに大和を奪われた。

朔夜「来い！白式！」

俺は白式を起動させて、青いＩＳの少女に突っ込み蹴りを入れる。すると〈大和〉を落とす。更に俺は雪片弐型で青いＩＳの少女を斬るが少女は避けて何かを捨てて逃げる。するとアーナロイドが大量発生した。面倒だな……俺は白式を解除してＳＰライセンスを取り出して

朔夜「エマージェシー、デカレンジャー！」

俺はデカレッドになる。俺はディーマグナムを取り出して、アーナロイドを射ち倒し始めた。すると後から何かが飛んできた。

後を見るとディエンドが居た。

海東「君のディケイドライバーをいただくよ。闇の神」

アタックライド・ブラスト

海東はディエンドブラストを放ってきた。俺はディーマグナムで全て撃ち落とす。

海東「闇の神にそう簡単には当たらないか。なら」

カメンライド・Gデンオン

カメンライド・ドレイク

海東はG電王にドレイクを召喚してきた。面倒な事をそこに

楯無「朔夜くん無事？」

楯無がやって来た。何で危ないところに来るのかね？

朔夜「下がってろ楯無。危険だから」

俺はディーマグナムを構えて、G電王とドレイクに撃つ。しかし、攻撃は当たらなかった。俺はデカレッドの変身を解き、俺はオーズドライバーを取り出してコアメダルを入れてスキャンした。

ライオン・カマキリ・チーター

俺はオーズ・ラキリータになる

朔夜「はぁぁぁぁぁぁ」

俺はライオンネイルを発動し相手の目を鈍らせて、G電王を斬り裂く。更にチーターの加速力を使い更に斬り裂く。俺はカマキリソードに力を送り渾身の一撃を放つ。

G電王「があああああ！」

G電王は爆散した。俺はドレイクに向き直る

クロックアップ

ドレイクはクロックアップをしてきた。なので俺はチーターレッグに力を送り、更に加速する。そしてドレイクは俺にドレイクゼクターからタキシオン粒子の弾丸を放ってきた。俺はそれを避けて斬りかかる。更に蹴りを入れる。とどめに右ストレートを咬ましてやり。左手のカマキリソードで斬り倒した。そして海東に向き直ると。何かが現れた。

朔夜「ライオンファンガイアか……」

俺は白と黒のコアメダルを取り出して、スキャンした。

ヒーロー・ヒューマン・ゼブラ

ヒヒー・ヒヒゼ・ヒヒゼブラ！

俺はモノトーンからやって来たヒーローをモチーフにしたコンボ

オーズ・ヒヒゼブラコンボになる

朔夜「ゼブラースクリューパーンチ！」

ライオンファンガイアにスクリューアッパーを咬ましてやり、更に

朔夜「ゼブラーバックキック！」

ライオンファンガイアにバックキックを咬ます。

スキャニングチャージ

朔夜「とう！」

俺は高く跳び上がり

朔夜「ゼブラスクリューキィィィィック！」

回転キックをライオンファンガイアに喰らわせて爆散した。海東はいつの間にか消えた。それより青いＩＳの少女は俺に殺意が全開だった。何故だ？取りあえず護衛は終わったし帰ろう

青いＩＳとの出会い（後書き）

次回もよろしく！

学園祭？準備期間（前書き）

5巻に入ったぜ

学園祭？準備期間

朔夜「甘い！甘いぞ！リンディー茶に練乳を入れるほどに甘い！」

現在俺は１・２組との合同授業で現在俺は鈴と戦っている。使用ＩＳは〈ディス・アストラガン〉だ

鈴「その機体に勝てるわけないでしょ！エネルギーは無限にあるし。エネルギーを使わないバリアがあるし。」

鈴は俺のガンスレイブをひたすら避けていた。俺はＺＯサイズを取り出してバリア貫通攻撃をした。

鈴「くっ！」

鈴は双天月牙で受け止めるが、俺は両脇からメスアッシャーを取り出して

朔夜「さいなら？」

俺はメスアッシャーをゼロ距離で放つ。鈴は逆さで落下していった。しゃあないな～俺は鈴に向かって瞬間加速をして、鈴を抱える。それと同時に周りから叫び声が上がる。

食堂

朔夜「なぁ～晃」

晃「何だ朔夜？」

俺は晃話しかけると、晃は焼きそばを掻き込みながら此方を向いた。

朔夜「お前は楽器使える？」

晃「ドラムが出来るが？」

俺は速攻晃の肩を掴み

朔夜「一緒にバンドしよい。学園祭で！決定事項だ！」

俺は飯を食べる。すると、鈴は頬をふくらまし。

鈴「ずるわよ。朔夜の機体はエネルギー無限なんて。」

朔夜「だってねー、そう言う機体だし。白式でも勝てないじゃん。鈴。」

レイ「朔夜事態がチートだしね……」

俺そこまでチートか？俺はカツをかじりながら

朔夜「確か烏が言ってたな……近々にまたタック戦があるって」

俺がそう呟くと一斉に

箒「私と組め朔夜！紅椿と白式は絵になるし相性がいい」

鈴「アタシと組みなさい朔夜！白式とは近距離と中距離をこなす甲龍と相性がいいのよ」

セシリア「なら遠距離からブルーディアーズを推薦しますわ」

レイ「ならわたしも遠距離からビルトファルケンを出すよ」

ラウラ「私と組め朔夜それでいいだろう」

五人がそれぞれそう言ってきた。あの呟きがみんなに聞こえてるだと！どんな地獄耳だよ……俺はそう思いお茶を飲む。そして午後の実戦のために更衣室に向かう。

朔夜「楯無、ついてくるなよ。気配バレバレだ」

俺がそう言うと物陰から

楯無「バレてたかー、朔夜くんにはかなわないかー」

楯無が現れた。俺はため息を吐きながら楯無の方向き

朔夜「急いでるからようがあるなら後でな」

俺は第三アリーナに向かう

千冬「朔夜！遅いぞ！」

俺がアリーナにはいると姉貴が怒鳴ってきた

朔夜「姉貴、何で名前で呼ぶんだ？」

何故か姉貴は俺を名前で呼んでいた

千冬「何、朔夜を私のものだというアピールをしているだけだ。」

箒「織斑先生その意見は断固認められません」

箒そう言って怒鳴り出す

千冬「小娘に朔夜を渡すか！力ずくで奪ってみせろ！」

すると姉貴ｖｓ箒・セシリア・レイ・ラウラの戦いが始まった。今日の午後は授業じゃないな……空が青いな……

俺はそう思い、姉貴たちの戦いは授業終了まで続いた。

次の日

ＳＨＲと一限目の半分を使って全校集会が行われた。楯無の話を聞かされるのか

俺は重い足取りで、体育館に向かう

体育館

スゲー騒がしいわこの場所……此が女子のあれか……妙なテンションか……

司会「今から生徒会長からの説明です」

楯無「やあみんな、おはよう」

楯無がクスクス笑いながら卓上にやって来て

楯無「さてさて、今年はいろいろとたてこんでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後よろしく」

楯無の微笑みと同時に熱っぽいため息が聞こえた。同性愛に目覚めた奴がいるよ

楯無「さて、今月の一大イベント学園祭だけど、今回は特別ルールを導入するわ。それは」

楯無が扇子を横にスライドさせると空中ディスプレイが表れて

楯無「名付けて『各部対抗織斑朔夜争奪戦』」

ディスプレイに俺の顔写真がデカデカと写し出された。

そして体育館には叫び声が上がり体育館が揺れた。そして一斉に俺を見た。

楯無「静かに……」

楯無が説明を始めた。女子のオーラが半端なかった。

楯無「……織斑朔夜を、一位の部活に強制入部させましょう」

再度雄叫びが上がる

「うおおおおっ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる……やぁぁぁぁぁぁぁぁってやるわ！」

「今日から準備始めるわよ！秋季大会？ほっとけ、あんなもん！」

大会をあんなもん呼ばわりするなよ！それより

朔夜「楯無！何勝手に決めてやがる！」

俺は卓上に上がり、楯無の前まで来た

楯無「あはっ？ごめんね。事情があるのよね。」

楯無が可愛く言ってきた。俺は下を向きさらに前を見て

朔夜「却下！ヤダね。絶対にな！なら勝負しようぜ。」

俺は白式を見せる。しかし楯無

楯無「朔夜くんと戦いと負けそうだから遠慮するね。此れは会長権限だから変えられないから」

楯無はその場から立ち去った

学園祭？準備期間（後書き）

次回はクラスの出し物の内容決めだ。後文化祭篇にこんなキャラ出してくれとが大募集！こんな奴がこんなことをしたら最高とか内容を書いて感想やユーザーメールで送ってください。よろしくお願いします

文化祭の出し物……まともなものがいいな……（前書き）

やっと書き終わったよ……仕事が忙しい……

文化祭の出し物……まともなものがいいな……

朔夜「あのさ……まともないの？」

俺はみんなの前に立ちながら腕を組ながらそう言った。

朔夜「何故『男子とポッキーゲーム』『男子とツイスター』『男子のホストクラブ』『男子と王様ゲーム』とかでてくるのよ！誰が嬉しいんだよ！」

すると大音量でブーイングが響く

「私は嬉しいわ。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

朔夜「そんな義務はない！」

「織斑朔夜と黒島晃は共用財産である」

シャル「さっき晃を共用財産って言ったの誰？少し……オハナシシヨウカ」

シャルは女子を引き連れて廊下に出た。ご愁傷さまだな……

「それより他のクラスからいろいろ言われてるんだってば。うちの部活の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

何だよメシアって……キリストでも連れてこいと……周りには助けはいないし、晃は機能してないし……姉貴は敵にまわって、ポッキーゲームに投票しようとしてるし……マジで弟を売るきかよ……

朔夜「取りあえず普通の意見を出してくれ！」

ラウラ「ならメイド喫茶はどうだ」

何とラウラがそう言ってきた。メイド喫茶？

ラウラ「客受けはいいだろう？それに飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるのだろ？休憩所としての需要も少なからずあるはずだ」

ラウラがいつもと変わらない口調で話していた。ラウラのキャラじゃないよラウラ……まわりが理解してないよ。時間が止まってますよ？

朔夜「取りあえず採用でいいか？」

するとレイが

レイ「良いと思うよ？朔夜は執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよね」

ラウラの援護射撃をしたと思われる言葉は女子全員にヒットした

「織斑くんの執事姿！」

「メイド喫茶にしよう。服はどうするの？うちは裁縫だから用意は出来るけど？」

ラウラ「つてがある。それに聞いてみよう。」

つてってあそこか……どうなるかな……

朔夜「内容はメイド喫茶な！決定だ！姉貴もそれでいいか？」

千冬「いいだろう。さて解散の前に外部から一人客が喚べるから好きな奴を喚んでこい」

姉貴はそう言ってチケットを置いていった。さてと奴の所に行くか

一年六組

朔夜「一夏居るか？」

俺は一夏の居る六組に行った。

一夏「朔夜何かようか？」

一夏がそう言って俺の方を向くと俺は一夏に近づき

朔夜「一夏、楽器何か弾けるか？」

俺がそう言うと、

一夏「一通り弾けるが」

そう言った瞬間俺は一夏の両肩をつかみ

朔夜「バンドやろう」

俺がそう言うと、一夏は後に下がり

一夏「何故に？」朔夜「何って学園祭でライブやりたいからだ。頼む！バンド組んでくれないか？」

一夏に頭下げてそう言うと一夏はため息を吐きながら

一夏「わかったよ。組むよ」

朔夜「サンキュー！」

俺は一夏の首を掴み音楽室に引きずって行った

音楽室

朔夜「さてとみんな集まった事だし、何を弾くか」

一夏「Ｇｏｄ　ｋｎｏｗｓ．．．は？」

朔夜「晃がわからないだろ？この世界の曲じゃないから」

鈴「確かにね。晃はわからないわよね」

一夏「つか凰は知ってるんかよ！」

一夏はそう言って突っ込みをいれてきた。

朔夜「俺が歌ったりしてるから知ってるんだよ。鈴は」

俺はそう言って晃にＧｏｄ　ｋｎｏｗｓ．．．の楽譜をわたした。

一夏「結局弾くかよ」

朔夜「おう！晃も大丈夫か？」

俺は晃に聞くと晃は

晃「構わないが？」

晃はそう言って楽譜を読んでいた。さてと後二曲は何にするかな～

一夏「ふわふわ時間は？」

鈴「あんな恥ずかしい歌詞を誰が歌うのよ。」

確かにアレは二度と歌いたくない……アレは澪が歌えばいいんだ！

一夏「朔夜だろ？俺は歌は苦手だ」

晃「確かに朔夜は歌うまいしな」

鈴「そうね。朔夜が無難ね」

勝手に決まっちまったよ……なら最後は何を歌うか……

朔夜「最後の一曲はＡｓｈ　Ｌｉｋｅ　Ｓｎｏｗな」

俺はそう言ってみんなに楽譜を渡す

朔夜「まずは楽譜を覚えてくれ。楽器は学校のものを使う。いやなら、自分のを持ってくることな。」

一夏「了解。序でに俺は何弾けばいいんだ？」

一夏は俺に聞いてきたので

朔夜「ベースだ」

俺はそう言った時視線を感じたので俺は静かにその場から立ち去った。

屋上

朔夜「出てこいよ亡国企業」

俺がそう言うと、女性がわんさかと現れた。

「一緒に来てもらいます。織斑朔夜」

マスカレイド

バット

女性のほとんどがマスカレイドドーパントになりリーダー格はバットドーパントになった。やはりバックには真ショッカーがいるか……俺はファイズギアを取り出して腰に巻きファイズフォンにコードを入れる

ｓｔａｎｄｉｎｇ　ｂｙ

朔夜「変身！」

ｃｏｍｐｌｅｔｅ

俺は仮面ライダーファイズに変身した。俺はコードを入れてオートバジンを喚び俺はファイズエッジを取り出してマスカレイドドーパントに斬り倒し始める。十体ぐらい倒すとバットドーパントが俺に翼で攻撃してきた。不意打ちを喰らったためにもろ直撃を喰らった。俺は腕時計型のファイズアクセルのミッションメモリをファイズフォンにセットしファイズ・アクセルフォームになる

朔夜「さっさと終わらせる」

俺はファイズエッジを構えて千倍のスピードでバットドーパントに斬りかかる。バットドーパントはボロボロの状態になるすると

ヴァンパイア

どこからかガイアスパーが響くするとバットドーパントにガイアメモリが取り込まれる。バットドーパントはヴァンパイアみたいなドーパント、ヴァンパイドーパントになった。ヴァンパイドーパントは俺に血の塊を俺に放ってきた。俺はファイズエッジで切り払う。

しかし全ては弾ききれずにファイズフォンに直撃を喰い変身が解けた。

朔夜「くっ！」

俺は膝をつきながらヴァンパイドーパントを睨む。どうするかな？
俺はダークドライバーを取り出して

朔夜「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

俺はダークネスに変身し、刹那を取り出して、ヴァンパイドーパントを斬り裂く、更に蹴りを入れ、そしてアッパーを喰らわせる

朔夜「ダークインパクト」

俺はヴァンパイドーパントに闇の力を込めたストレート、ダークインパクトを喰らわせる。するとヴァンパイドーパントからはメモリは排出されず使用者ごとちりとかした。証拠隠滅か……真人も考えたな。俺は空を見ながらそう思った

文化祭の出し物……まともなものがいいな……（後書き）

次回もよろしくお願いします

た～て～な～し～何してやがる！（前書き）

修正

た～て～な～し～何してやがる！

俺は亡国企業の奴らを倒しいや殺したのか。俺は部屋に戻ると、あり得ない光景をみた。

楯無「お帰りなさいあなた。ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

俺は何を見ているのだろう？目の前に楯無の裸エプロン？夢だな。うん夢だな幻覚だ。一回ドアを閉じよう。俺はドアを閉じて。もう一度ドアを開くと

楯無「おかえ……」

俺は速攻でドアを閉じて、その場から立ち去った。廊下を歩いていると

一夏「朔夜どうしたんだ？廊下歩いていて」

目の前に一夏が現れた。

朔夜「一夏か……実はな楯無が俺の部屋で裸エプロンしてやがった」

そう言うと一夏はほっと何かを思い出した顔をした

一夏「あそこの話か……となると朔夜安らかに眠れ……」

一夏が哀れむような顔をして俺を見た。何があるんだよ

朔夜「一体俺に何が起きるんだよ！」

一夏「このままだと筱ノ之に殺されるぜ。部屋に更識が居るからしかも裸エプロンだからな」

何だと！確かに箒にばれたら！あいつのことだから問答無用で……

……

朔夜「タイムブースト！」

俺はタイムブーストで逆送を開始した。頼む間に合ってくれ

箒サイド

箒「ふふふ、此で朔夜も少しは認めるに違いない」

私は重箱を持って朔夜の部屋に向かっていると突然白い何が私に向かって来ていた。こんなことをする奴は一人しかいない……朔夜だ。すると朔夜は私を抱えて走り出した。

朔夜サイド

俺は箒を連れて一夏の部屋に入った

箒「朔夜、説明してほしい。何故織斑の部屋に連れてきた。しかもタイムブーストを使ってまでだ。」

箒は俺を軽く睨みながら俺にそう言った。

朔夜「実はな……俺の楯無が居た……」

すると箒は日本刀を取り出して

箒「天誅！」

俺に刀を振りかぶってきた。俺はライドブッカー・ソードモードで斬撃を受け止めて

朔夜「俺が入れた訳じゃない！あいつが勝手に入っただけだ！」

箒「にしても物凄く仲良さそうだったな。生徒総会などで話していたときとかな」

箒はさらに力をいてれ刀を降るってきた。

朔夜「まあ昔から楯無と妹の簪とは遊んでいたからな」

俺はライドブッカー・ソードモードで斬撃を受け止めて、刀を奪い取った。そして箒を椅子に座らせて

朔夜「落ち着け箒。そんなに怒ってばっかだと可愛い顔が台無しだぞ」

箒「か、かわ、可愛いだと……私が可愛い……」

箒がトリップを開始した。何故またトリップに入ったんだ？

一夏「は～駄目だこいつ……皆さんご愁傷様だな……」

一夏は俺見てあきれてるし一体全体何があった？

朔夜「取りあえず、楯無を追い出したいから、手伝ってくれ」

すると二人はうなずく。俺たちは俺の部屋に向かう

俺の部屋の前

朔夜「開けるぞ。」

俺はドアを開けると

楯無「お帰りなさいあなた、私にします?私にします?それともわ・た・し?」

朔夜「オール却下だ!」

俺はそう叫び、一夏と箒は楯無を捕まえる

朔夜「楯無、どういうつもりだ。人の部屋に勝手に入りやがって。」

俺が殺気混じりの声で話すと

楯無「いや~朔夜くんと親密なかん……朔夜「つまみ出せ」ちょ!」

俺たちは外に楯無を出す。すると後から

千冬「よくも私の朔夜を誘惑しようとしたな。よし、貴様には特別補習をしてやろう」

楯無「ちょっと待ってください！織斑先生」

楯無は大量の汗をかきながら後退りをはじめた

千冬「遠慮するな更識。楽しい楽しい補習だよ」

千冬ちゃんは目が笑わない笑顔で楯無に近づいた。

朔夜「あの～千冬ちゃん……やり過ぎるなよ……」

千冬「安心しろ朔夜更識と少し……ほんの少しだけＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩをするだけだ」

千冬ちゃんはそう言って楯無の首を掴み引きずろうとしていた。

朔夜「ち、千冬ちゃん！お話の発音が違うよね？違うよね！」

俺がそう言うと千冬ちゃんは笑顔で此方を見て

千冬「間違ってないさ」

千冬ちゃんは笑いながら楯無をどっかに引きずって行った。楯無よ無事でな……そして楯無の悲鳴が響き渡るとかないとか噂が流れた。

次の日

朔夜「？～？～」

俺、鈴、晃と一夏で音楽室で練習をしていた。

朔夜「恥ずかしい……」

俺は歌い終わった後にそう言った。すると

晃「どんまい」

晃は笑いながらそう言った。歌わないからって笑いながらそう言うなよ

一夏「それにしても朔夜の歌は上手いな。」

一夏はそう言って俺を誉めた。

鈴「それにしてもみんなたった1日でよくこけまで来たわよね。」

確かにたった1日でここまで出来るとはある意味すごいな……

朔夜「次弾くよGod knows...な」

俺は息を吸い、歌い始めた。

朔夜「?~?~」

God knows...は余り恥ずかしくはないな

晃「朔夜」

晃は練習が終わると話かけてきた

朔夜「何だ?」

晃「俺と戦ってくれないか？」
は？何だと？晃が俺に戦いを申し込んできた？

朔夜「何故に？」

晃「何処まで強くなってるかを知りたい」

朔夜「成る程わかった」

俺たちは第三アリーナに向かった

朔夜「準備はいいか？」

晃「いいぜ」

晃はXライダーに変身をしていた。俺はモーバイレーツを取り出して、レンジャーキーを取り出して

朔夜「豪快チェンジ」

ゴーカイジャー

俺はゴーカイレッドに変身した。

朔夜「派手にいくぜ！」

俺はゴーカイサーベルを取り出して晃に斬りかかる。晃はライドルロッドで受け止めるが俺はゴーカイガンで晃の腹を撃つ。

晃「がっ！」

晃は吹き飛ぶ

朔夜「まだまだいくぜ！」

俺はレンジャーキーを取り出してモーバイレーツに差し込む

朔夜「豪快チェンジ！」

ゲーキレンジャー

俺はゲキレッドに豪快チェンジした

朔夜「いくぜ！」

晃に殴りと蹴りを喰らわすまくる

朔夜「もう終わりか？」

俺は晃の目の前に立つ晃はライドルロッドを杖にしながら立ち上がる

朔夜「まだたつか」

晃「まだ終わってない……」

朔夜「なら」

俺はレンジャーキーを取り出して

朔夜「豪快チェンジ！」

ターイムレンジャー

俺はタイムレッドに豪快チェンジした

朔夜「ダブルベクター」

俺はスパークベクターとアローベクターを取り出して斬りかかる。
更に蹴りを入れる。

朔夜「ベクターエンド・ビート3」

俺は晃を十字斬りさいた。

朔夜「まだまだだな。もっと強くなれよ」

俺はその場から立ち去った

た～て～な～し～何してやがる！（後書き）

特には無い！

学園祭前日（前書き）

書けたぁぁぁ

学園祭前日

朔夜「♪～♪～」

俺たちは今日も音楽室で練習をしていた。大分うまくなったよな～。
さてと明日は本番だから気合いをいれてやらないとな。

晃「最後にあの歌をやってから終わりにしようぜ」

晃がこちら向いていってきた。あの曲かいいな

朔夜「いいぜ。みんなもいいか？」

鈴「いいわよ」

一夏「構わないが」

二人に了承をもらい、

朔夜「♪～♪～」

君だけを守りたいを歌い始めた。何故この歌を歌うことになったかは、前に歌っていたらこの歌にしようってことになった。ふわふわ時間の代わりに

朔夜「ふ～、そろそろ飯に行くか」

すると目の前が歪みはじめ、四つの人影が現れる。また厄介ごとか
……俺はオーズドライバーを構えてみんなを下がらせる。

龍一「ここどこだ？」

龍一とアスラクラインの夏目智春みたいな奴とシャル似の女子にとあるの垣根帝督みたいな奴らが現れた。何だこのイケメンのオンパレードは！

？「何だ此処は！せっかく茜〇にそまる坂をやろうとしていたのに」

何だろうかっこいい外見なのにさっきのセリフで残念だな？

？「あれ？龍一くんが二人居る！」

シャル似の女子確か、天草蓮だっけ？が物凄く驚いていた。確か驚くよね……

？「……余り驚かないで天草くん」

アスラクラインの夏目智春似の男子が静かにそう言った。確か東条零だな。キャラが全然違うのか？原作知らないからいいけど

朔夜「龍一か～何しに来た？お前次元渡る能力無いだろ？」

俺が龍一にそう言うと、龍一はため息を吐きながら

龍一「赤髪の男が現れてそのままらちられた。」

はいわかりました。烏だよ。何やってるのあの子

？「お前何親しそうに話してるんだ？」

垣根帝督みたいな奴が言ってきた。確か未元物質使いだよな垣根帝

督って。キャラが被るな潰すか?俺は闇の力を右手に込めはじめる

龍一「おい!朔夜!何零司に攻撃態勢とってるんだ!」

朔夜「何ってこいつ垣根帝督だろ?未元物質使いだろ?俺とキャラが被るだろ?だから消すんだ。俺……闇の神だし……」

零司「何言ってるんだこいつ?闇の神?頭狂ってるのか?」

よし!殺すか?いいよな?答えは聞かないけど。俺は更に力を込める

天草「龍一くん……」

龍一「やめてくれ……蓮がおびえてる」

龍一がマジな顔でそう言ってきた。ならやめるか……仕方ない……命びろいしたな垣根帝督……

朔夜「つか、垣根帝督みたいな奴だれ?」

龍一「こいつは天宮零司。同じ風紀委員だよ。」

同じ風紀委員か~。

朔夜「天宮ってエロゲ好きか?さっき茜〇に染まる坂やりたいとか言ってたし」

俺がそう言うと龍一が

龍一「ああ。風紀委員のパソコンにエロゲを隠してるしな……マジで」

天草「天宮くんってそうだったの！」

天草は顔を赤くしてそう言っていた。流石に女子の前で話す話じゃ無いな……それより最近何だろう？鈴を見ると何か不思議な感じがするな。周りの奴等と少し違う感情が生まれる。俺はそう思い鈴を見た。

鈴「何よ朔夜」

鈴は顔を赤くしながらそう言ってきた。

朔夜「嫌別に、なにも……」

俺はそう言って龍一を連れ去った

鈴サイド

朔夜がジーとアタシを見ていた。アタシは不覚にもドキッとしてしまった。だって好きな人に見つめられたら誰でもそうなるでしょ

天草「凰さん？少しいいかな？」

天草さんがアタシに質問してきた。

鈴「何？天草さん」

天草「凰さんは織斑……二人居るから朔夜さんでいいか。朔夜

さんの事が好きなの？」

鈴「……うん……朔夜のことは好きよ。一人の男として。でも向こうは恋愛って感情が欠落してるらしいのよ。」

アタシは何故か天草さんにそんなことを話していた。何故だろうね。はじめて会った人にこんなことを話すなんて。

天草「向こうも……朔夜さんも凰さんのこと意識してると思うよ。だってさっきの朔夜さんの目一瞬いとおしいものを見る目だったよ。本人は気づいてないけど」

朔夜が無意識でアタシをいとおしいものとして見ていた。ってことは朔夜アタシのことを……何だろうさらに恥ずかしくなってきた。

朔夜サイド

朔夜「龍一、お前天草と何処までいった？」

俺は龍一にそう聞くと

龍一「何処もいってない。つうかそんなことを聞くなよ。」

俺は龍一にヘッドロックを喰らいながらそう言われた。

朔夜「分かったから離せ。それより明日は暇か？」

俺は首を回しながら聞くと

龍一「特に予定はない。」

朔夜「なら、うちの学園祭を見ていかないか？」

龍一「学園祭か～。いいな。見ていこう。近々うちも学園祭あるし参考になるしな」

龍一はそう言って了承してきた。さてと戻りますか。俺たちは学園祭の話をするとみんなも賛成した。すると周りが突然歪み。どこかの海岸になった。

鳴滝「闇の神貴様は此処が墓場だ」
鳴滝が現れた。うざいな～鳴滝だぜ？

天宮「何あれ？某仮面なライダーに出てくるあれな奴に似てるんだけど」

龍一「まんま彼奴だろ？鳴滝じゃねーか」

天宮にツッコミを入れる龍一。

朔夜「はいはい……鳴滝は相変わらず飽きないな～。諦めろ。貴様じゃ俺には勝てない。」

俺は鳴滝にそう言うが鳴滝はライダーを喚び出す。王蛇にサイガにサガかよ。

朔夜「みんな下がってくれ」

俺はディケイドドライバーを取り出す。すると龍一も俺の隣にやっ

て来てフォースフォンを取り出す

龍一「俺もやるぜ」

朔夜「助かる」

俺はディケイドのカードを取り出して

朔夜・龍一「変身！」

カメンライド・ディケイド

ｕｎｌｏｏｋ

俺はディケイドに龍一は仮面ライダーフォースになる。

朔夜「王蛇相手にはこいつだな」

カメンライド・リュウキ

俺は仮面ライダー龍騎にカメンライドして、ドラグセイバーを取り出して王蛇に斬りかかる。王蛇はベノサーベルを取り出して俺に斬りかかる。

朔夜「テメーはさっさと牢屋に帰れ！」

王蛇「戻るか！」

アドベント

王蛇はアドベントでベノスネスイカーを喚び出してきた。

朔夜「ならこいつだな」

アタックライド・アドベント

俺はドラクレッターを喚び出した。ベノスネスイカーとドラクレッターはにらみ合い突撃を開始した。俺は王蛇に斬りかかる。王蛇は斬撃を受け止めるが、俺は王蛇の腹に膝蹴りを入れる。王蛇は怯みその隙に龍一の紋章が入ったファイナルアタックライドのカードを入れる

ファイナルアタックライド・リュ・リュ・リュ・リュ・リュウキ

俺はドラゴンライダーキックを王蛇に喰らわせる

龍一サイド

俺はサイガに向かってフォースムーバ・ソードモードで斬りかかる。サイガもトンファーエッジで受け止めてきた。

龍一「ファイヤー」

俺はフォースムーバ・ガンモードにしてサイガに放つ。サイガは怯まずに俺に突っ込んできた。

龍一「ショット」

俺はパンチ力を上げる〈ショット〉を発動しサイガの腹に叩き込む。サイガは吹き飛び更にＥＮＴＥＲキーを押し

Ｅｘｃｅｅｄｃｈａｇｅ

右手にフォトンブラッドが溜まりそのままサイガに叩き込む。

龍一「オーシャンスマッシュ」

サイガはそのまま爆散した。

朔夜サイド

俺は王蛇を倒し、サガに向く。俺はライドブッカー・ソードモードで斬りかかるがジャコーダーで受け止め来た。俺は左手で殴る。サガは後に下がる。更に俺は追撃するが奴は鈴を人質に取った。

サガ「言いたいことはわかっているか？」

朔夜「ちっ！外道が」

俺は変身をとくが

サガ「ご苦労さん」

サガは鈴の首を強打した。するとぐらりと倒れた。まさか鈴が死んだ？あれ？何だろう？今まで大切な人が死んだ時でもこんな感情はなかったのに……やっとわかった……俺は……

……

……

……鈴の事が好きな

んだ。一人の女の子とし愛していたんだ。何で失ってから気づいたんだろう。許さない……絶対にゆるさない

朔夜「……変身……」

ライダーインストール・ダークネス

俺はダークネスに変身した。俺はゆっくりサガに近づき。通りすぎる。するとサガの腕が消えていた。

朔夜「お前は許さない」

俺は更にサガの足を消した。

サガ「助けてくれ！頼む！」

サガが命ごいをするが

朔夜「許すかよ。大切な人を殺したのだから」

俺はサガと言う存在を消した。

朔夜「鈴……」

俺は変身を解きその場に立っていると

龍一「朔夜！ちょっと来い！」

龍一が俺にそう言うと俺は龍一の近くに行くと

鈴「ううううん」

鈴がうめき声をあげる。まさか！

鈴「アタシは……」

鈴がめを覚ました

朔夜「鈴！」

俺はそのまま鈴に抱きついた。

朔夜「良かった。本当に良かった。」

俺は泣きながらそう言った。

学園祭前日（後書き）

次回から学園祭だ

学園祭の始まりだ！（前書き）

本日二度目の更新

学園祭の始まりだ！

朔夜「始まったか……」

今から学園祭が開幕する寸前の状態である。いや～始まる寸前なのに女子の熱気はやばいわ

龍一「なあ朔夜」

朔夜「何？」

隣に居る龍一が話かけてきた

龍一「何で俺がスーツ着てるんだ？」

そう龍一と零そして零司は執事姿なのだ。

朔夜「気にするな。もう少しで始まりだ。」

それと同時に学園祭が始まった。しかし開店前から三時間まちは凄くないか？俺が外を覗くと

「あっ！織斑くんだ！」

「しかもスーツ姿だ」

バレたか……俺はすぐに戻る

？「そこの執事、テーブルに案内しなさよ」

この声は……鈴か……俺は鈴の方に振り向くしかし何時もと服が違った。チャイナドレスだった。物凄く可愛い。鈴の事が好きだと気づいてから物凄く意識してしまう

鈴「何よ黙ったままで」

鈴にそう言われ、俺ははっと我に返り、

朔夜「悪いつい見とれちまって……すぐに案内する」

鈴（朔夜がアタシに見とれてるなんて……）

俺は鈴をテーブルに案内した。しかし本当に可愛いな今の鈴。つうか新しい姿で新鮮だよな～

朔夜「お嬢様、メニューは此方です。」

俺がそう言って、鈴にメニューを見せると鈴は何故か立ちろぎ

鈴「お、お、お嬢様！」

鈴が真っ赤になっていた。そして鈴が

鈴「この『執事にご褒美セット』って何よ？」

それを頼むか！頼ません！何があっても頼ません！

朔夜「当店おすすめのケーキセットはいかがですか？」

鈴「おいこら、誤魔化そうとしたでしょ」

朔夜「とんでもございません。お嬢様」

鈴「じゃあ『執事にご褒美セット』をひとつ」

……すり替えるか

朔夜「『メイドにご褒美セット』をひとつですね？」

鈴「朔夜。あんた、自分絡みでしょ」

朔夜「お戯れを、お嬢様」

鈴「お嬢様言うなら言うこと聞きなさいよ」

上目遣いで言ってきたので流石に逆らえずに執事にご褒美セットを持ってきた。まさか鈴にあーんしてもらうなんて内心嬉しいのは内緒だ。そして鈴にあーんされた後、後から

烏「よう朔夜！相変わらずハーレムしてんな～」

Ｖ３「何で俺まで……」

ストロンガー「俺までかよ……」

ＲＸ「私もですか……」

アマ犬「わん！」

烏とライダー人格が現れた。何故アマゾンが犬なんだろうな?

朔夜「ハーレム言うな烏……」

俺は烏にジャーマンスープレックスを咬ましてやった。

朔夜「少し離れるわ。鈴、晃行くよ。時間だ。」

俺は鈴と晃を連れて、店から離れた。

第三アリーナ

朔夜「みんなー集まってくれてサンキュー!」

俺は観客に向かってそう言っていた。今俺たちは第三アリーナで楯無に許可をもらいライブを開いていた。

朔夜「一曲目はＧｏｄ　ｋｎｏｗｓ．．．だ!」

俺はギターをかき鳴らし始め、鈴のなだらかなキーボードに一夏の安定したベースに小刻みなドラムが鳴り出し

朔夜「♪」

俺は静かに歌い出す

♪

そして一気にアップテンポになり

♪

一気に歌い出す。すると周りが一気にのりだした。

朔夜「さてと一曲終わったところで、先ずはメンバー紹介でベースは一年六組の織斑一夏」

一夏「よろしく」

一夏がベースを軽く弾く

朔夜「次にドラムは一年一組の黒島晃」

晃「楽しんでくれ」

晃がドラムを叩く

朔夜「キーボードは一年二組の凰鈴音」

鈴「楽しんでってね」

朔夜「そしてギター兼ボーカルは俺、織斑朔夜だ。二曲はＡｓｈＬｉｋｅ　Ｓｎｏｗだ」

そして二曲目も歌い出す。二曲目も終わり三曲目を歌い出す。

♪

三曲目の君だけを守りたいを歌い出す。

♪
」
一気に一番を歌い、二番も歌った。君だけを守りたいを歌い終わると、烏とＶ３とＲＸが現れて

烏「みんな代われ？次は俺たちがやるぜ？朔夜いいか？」

烏は準備しながらそう言ってきた。拒否権ないじゃん

朔夜「いいよ……曲はあれか？」

烏「あれだ？」

朔夜「さてと次の曲はＦＵＬＬ　ＦＯＲＣＥだ」

前奏がなりばじめる

朔夜「♪」

一気にテンションが上がりだし

朔夜「♪」

一番が終わり、二番に入るそして歌い終わった。やっぱいいなＦＵＬＬ　ＦＯＲＣＥは

学園祭の始まりだ！（後書き）

次回は奴が歌うよ

まだまだ続くよライブは（前書き）

書き終わったよ。

まだまだ続くよライブは

朔夜「次の曲はＳＴＲＡＩＧＨＴ　ＪＥＴだ」

俺がそう言うと前奏が流れ始める

♪

俺は目を瞑りながら歌い出す。

♪

そこで目をあける俺更にテンションが上がり始まる

♪

俺は更にテンションが上がり、会場のテンションも上がり始め、観客も腕を降り始めた

♪

一番が歌い終わり、一呼吸おき、二番を歌った。すると烏が指をならすと、龍一と天宮が現れた。何故に二人を喚んだ?

烏「次は不音龍一と天宮凍司によるデュエットだ！」

龍一「聞いてねーぞ！」

凍司「理由を言え！」

二人が烏に向かってそう言ってきた。烏は笑いながら、

烏「楽屋ネタになるから勘弁な？さて曲はＬＯＲＤ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＳＰＥＥＤだ。どうぞ」

前奏が鳴り始める。二人は半ばやけになり

♪

二人は歌い出す。しかし上手いな～しかもカブトの挿入歌を歌えるとわ……烏が教えたのかそれとも二人は元々知っていたのか？

♪

烏「いや～うまいな～。そうだ！次はデュエットしようぜ」

烏がにやけながらそう言ってきた。何を歌うか……

♪

二人は一番を歌いきり、二番を歌う

龍一「聴いてくれてサンキュー！」

めっさテンション高っ！

凍司「こんなものかな」

何クールに決めてるんだこいつ……

烏「次は織斑朔夜と凰鈴音のデュエットだ！曲はライオンだ」

何だと！俺と鈴がライオンだと！まてよ！確か鈴とのデュエットは魅力的だよ？でもね？何と言うかアレだよね？アレだよ、アレ。恥ずかしいんだよ。うん

鈴「行こうよ？」

アレ？おかしいな？何で鈴が昔の鈴みたいな雰囲気＋上目遣いだよ。断れないじゃん……

朔夜「わかったよ……歌うよ」

前奏が鳴り出した。恥ずかしいな……

♪

鈴が物凄いノリノリで歌っている。うわー楽しそうだな。俺も楽しいけどさ。なんかな……

♪

サビに入り、一気にテンションが上がる。楽しくなってきた！

♪

一番を歌えると烏がニヤリと笑い出す。この反応は嫌な感じがするな……まさかな……

烏「此処で俺、烏から物凄いニュースだ！」

物凄いニュース？何だろうな？

烏「織斑朔夜に好きな奴が出来た。」

「「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！」」

「誰？誰！」

烏ううううううううううう！何を言ってやがる！確かに居るけどさ。まだ言うきないからね。そして何故知ってるんだ？

烏「その名はごはべば！」

俺は烏の顔面を殴り言わせなかった。

朔夜「はー、はー……何言ってやがる……烏……次は殺るぞ」

俺は刹那を烏の首に突き付けた

烏「悪い……マジで悪い。だから刹那を首から離して」

烏は俺に土下座をしながらそう言ってきた。俺は刹那を首から離した。しゃあねえな

朔夜「さっきの話はなしな。ガセだ。」

しかし周りは話せ、話せと言ってきた。言わなきゃ駄目なのか？絶

対にヤダね。

朔夜「さてと終わりと言うことで」

俺はそのまま逃げていった。このままだとやばい！

朔夜「はー、はー、やばかったぜ。女子どもが……」

俺は屋上でウーロン茶飲んでいた。

龍一「災難だな、朔夜」

龍一が屋上にやって来た。

朔夜「龍一か、あれ？他のやつらはどうしたんだ」

俺は龍一に聞くと、龍一は苦笑いしながら

龍一「ああ、男子たちは逃げ出してわからないな。蓮は何故か黒い笑みを浮かべながらどっかに行った。」

うわ天草こわっ！女子の皆様南無……

朔夜「さてとどうするかな？戻るやばいしな～」

俺はそう考えているとケータイが鳴り出す。レイからか……出たくないな……

朔夜「もしも……レイか……」

レイ『朔夜！早く来て！お客さんから朔夜がいないって苦情が来てるんだよ！』

苦情か……いろいろやばいよな～

朔夜「了解！今から行くよ。」

レイ『後……ライブの事をキカセテホシイナ……』

怖い……マジで怖い……

朔夜「分かった。すぐに行くから」

俺がそう言うと、

レイ『分かった。待ってるからね』

花が咲くような声でそう言ってきた。

朔夜「行かないとか……」

龍一「どんまい。」

龍一が俺の肩に手を置いてそう言ってきた。

朔夜「お前も行くんだよ！」

俺は龍一の肩を掴みながら、教室に戻っていた

まだまだ続くよライブは（後書き）

次回は何を書こうかな～

自由時間（前書き）

うん、久しぶり更新だな

自由時間

朔夜「何だこの列……」

俺が教室の前に行くと何と行列が二個ほど出来ていた。マジで何事？

レイ「朔夜やっと来た。早く店に入ってよ。お客さんが待ってるよ」

朔夜「了解！じゃあやりますかな」

俺は教室に入り、接客を開始した。しかし疲れて暑いな……。

俺は上着を脱ぎ、ワイシャツになり、腕捲りをし、第2ボタンまで外し、髪をかきあげた。あ～涼しい

箒「朔夜！何勝手に服装を変えている。」

朔夜「何って暑いから脱いだ。」

箒が俺に軽く睨みながらそう言ってきた。いや、何故睨む？いや睨むなよ。更に軽く顔を赤くするなよ。

「織斑くんの肌よ。軽く引き締まってる～」

「軽くエロいよね」

何か聞きたくない事が聞こえたんだけど……まあいいや……

…俺は一時間ぐらい働き続けるとやっと客も減り、休憩がとれるらしい。店を一回しめてまた再開のために準備を開始する。さて何をしようかな～。

箒「さ、朔夜！私と一緒にまわらないか？」

セシリア「箒さん！何を抜け駆けを！」

ラウラ「そうだ箒！朔夜はわたしの嫁だ！朔夜、わたしと学園をまわるぞ！」

レイ「わたしも行くよ！行こ朔夜」

四人が俺に近づき、俺にそう言ってきた。この人数で移動か……流石に無理かな？さてどうするか……

龍一「一人ずつ時間をわけて順番にまわって行けばいいんじゃないか」

龍一がそう言った瞬間

箒・セシリア・レイ・ラウラ「じゃーんけーん！」

順番決めのジャンケンが始まっていた。早っ！なんつう早さだよ！

箒・セシリア・レイ・ラウラ「ぽん！」

三人がパーで一人がチョキ

レイ「えへへへ……？」

レイがニヤニヤしながらそう言っていた。

朔夜「レイは何処に行きたいんだ」

レイ「軽音部かな～？何かカッコいいし（今日の演奏で朔夜の演奏すごかったし……隣で一緒にやりたいな～）」

鳴るほどな～、典型的な感じだな～

朔夜「成る程、さて行くか」

俺たちは音楽室に向かう

「あっ！織斑くんに一度男の子だった、デュノアくんだ！」

軽音部の部員が現れた。レイは苦笑いしながら

レイ「ど、どうも」

朔夜「あ、どうも」

「執事とメイドの秘密の逢い引きかな？」

レイはその言葉を聞いた瞬間、顔が真っ赤になり、ぼんって言う音が聞こえた気がするんだけど

「それより見学かな？楽器いじっていきなよ」

部員がそう言ってきたので、レイはベースを抱いて弾こうとしたが

レイ「朔夜、どうやって弾くの？」

そこからか～、俺はレイの後に周りは、レイの手の上に俺の手を乗っけた

レイ（朔夜と密着してるよ……恥ずかしいよ～。心臓の音聞こえてないよね？大丈夫だよね？可笑しなところないよね？）

朔夜「取りあえず、このコードの弾きかたはこうなってな」

俺は楽譜に書いてあるコードの弾きかたを教えた。そんなこんなことでレイとの見学が終わった。

ラウラ「遅い！」

ラウラが腕組みをしながら廊下で待っていた。

ラウラ「大体お前は何時も時間に関してはきっちりしているハズだろ！」

朔夜「悪かったよ。それより早くしないと、時間が無くなるぜ」

俺がそう言うと、ラウラは下を向きながら

ラウラ「それは嫌だな。」

朔夜「なら行こうぜ」

俺はラウラの手を握り、歩き出した。

ラウラ「さ、朔夜何をする！」

ラウラは顔を赤くし、俺を睨む

朔夜「あっ！悪い。今手を離す」

俺がそう言って手を離そうとするが、ラウラは俺の手を握り、

ラウラ「別に離さなくていい。別に嫌なわけではない……むしろ……」

そう言って俺の手を離そうとしなかった。嫌じゃないなら良いけど

朔夜「確か茶道部に行くんだっけ？」

ラウラ「ああ。アレは良い。更に顧問が織斑教か……いや織斑先生だ」

ああ、千冬ちゃんか……理由がそれか～

「織斑くんだ～。写真撮らせて～」

俺が行く先には何故写真を撮られるんだ

「茶道部は今抹茶の体験教室をやってるよ。こっちの茶室へどうぞ」

やっぱ施設は充実してるな～。流石世界中から生徒がやって来るＩＳ学園だな

「じゃあ、こちらに正座でどうぞ」

俺たちは言われるままに、正座していた。さてと目の前に着物を着た部長さんがやって来て目の前に正座し

「うちはそんなに作法にうるさくしてないから気軽にしていってね」

目の前に茶菓子が置かれる。俺はそれを受け取り一口食べる

朔夜「なかなかうまいなこれ。ラウラも食べろよ」

俺がそう言うが、ラウラは茶菓子を食べようとしなかった。

ラウラ「うう……どうやって食べればいいのだ……」

ラウラが手に取っていたのは白餡で作った、ウサギ型の和菓子なのだ。愛嬌たっぷりの顔でラウラを見ているのだ。

朔夜「ラウラ、食べないと茶が飲めないよ？」

ラウラ「分かっている」

ラウラは決意をしてウサギ型の和菓子を食べた

ラウラ「やはり和菓子は美味い」

ラウラが幸せそうな顔でそう言っていた。さっきまでのあれは何だ？そんなこんなでラウラとの時間が終わった

朔夜「そう言えばセシリアってバイオリンが弾けるんだっけ？」

セシリア「ええ。ピアノも多少」

朔夜「流石だなセシリア。」

俺がセシリアにそう言うと、セシリアは頬赤く染めて

セシリア「朔夜さんも楽器弾けるし歌も歌えますじゃない」

朔夜「確かにそうだがな、俺が弾けるのは弦楽器にピアノと打楽器ぐらいだな。」

セシリア「でしたら、此方に行ってみせんか？」

セシリアは吹奏楽部を指差す。吹奏楽か～良いかもな

朔夜「良いな。行こうか」

俺たちは吹奏楽部の部室に入る

「おお！おお！、やっと六人目のお客さんだ！さあさあって織斑くん！写真撮っていい？」

朔夜「はあ、まあ、」

「やたっ！」

俺はまた写真を撮られた。もう馴れたよ……

朔夜「トランペットか……吹いて良いですか？」

「構わないよ」

俺は許可をもらったのでイチローさんの見よう見まねに吹いてみた。
イチローは野球じゃないぜキカイダーの方だ

「筋がいいね。うちに入部しない」

朔夜「遠慮します。」

「ちぇっ！」

朔夜「それより、セシリアも吹いてみろよ」

俺はセシリアにトランペットを渡す

セシリア（朔夜さんと間接キス……）

「あっ今変えるから」

セシリアの手にあったトランペットは部長さんが回収し新しいのをセシリアに渡した。セシリアは部長さんをずっと睨んでいた。

セシリア「気がきかないですわ」

セシリアとの休憩がこれにて終了

箒「何故私が最後になったんだ……」

箒がぶつぶつ何かを言っていた。

朔夜「それよりどうする？何処に行く？」

箒「特には……」

朔夜「なら剣道部に行くか」

俺がそう言うと、箒は嫌そうな顔をしていた。

朔夜「早く行くよ」

俺は箒の手を握りながら剣道場に向かう。

「あっ！織斑くんに幽霊部員の筱ノ之さんだ」

剣道部部長さんらしき人が現れた。

箒「部長何ですかこれ？」

確かに剣道場に占いの道具を送って何よ……

「いや～剣道の体験じゃあれだし、占い館にしてみたんだけど、人が来ないのよね……」

来るわけないでしょ……

朔夜「ご愁傷様……」

俺は哀れな目で部長さんにそう言ってその場を去った。

朔夜「次は何処に行く？」

箒「何処でも良いな……」

俺たちは、適当にぶらつきながら、たわいのない話をしていた。

屋上

朔夜「やっぱ、一人は良いな～」

俺は残りの時間は一人で屋上に居た

朔夜「♪」

俺は歌を歌っていると

楯無「朔夜、ちょっと手伝ってほしいんだけど」

楯無が後からやって来た

自由時間（後書き）

次回は演劇だよ

始まる劇（前書き）

学園祭終了

始まる劇

龍一「朔夜、何で俺が此処に居るんだ？」

朔夜「楯無に聞いてくれないか？俺も詳しくは知らないから」

すると、ナレーションが流れ始めた

楯無「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」

シンデレラか……普通だよな？普通だよね！

楯無「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号……それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」

やっぱりですよね～！楯無が普通なことやるはず無いもんな！

楯無「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちの夜がはじまる。王子たちの冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

龍一「やばい気がするんだけど」

朔夜「同感だ。」

すると、俺の顔に何かが飛んできた。あれって飛刀が飛んできた。

朔夜「のわ！」

俺はマトリックスみたいな感じで避ける。すると目の前には、俺が大好きな人、鈴が飛刀を持ってやって来た。鈴の格好はシンデレラドレスにガラスの靴。正直に言ってめっちゃくちゃ可愛い、理性がもつか危うい。だが理性は持つよ。だってさ……飛刀が俺を狙っているのだから

朔夜「何しやがる！」

鈴「寄越しなさいよ！」

鈴は更に飛刀を俺に投げてきた。何があった！

朔夜「死んだらどうするだよ！」

鈴「朔夜は闇の神で不死でしょ！問題ないじゃない！」

ごもっともです！俺はそう簡単には死にません。

鈴「だりゃあ！」

鈴が俺に蹴りを喰らわそうとしてきた。俺はそれを避ける。鈴相手には攻撃ができないな……すると赤い光線が俺を狙っていた。まさかな……スナイパーか……差し詰セシリアか……俺は全力で逃げる。龍一はどうなったかと言うと

蓮「龍一ハヤラセナイヨ……ククククヤラセナイ、トラセナイヨ」

シンデレラドレスを着た黒蓮が包丁で次々とシンデレラ達を倒して

いた。黒蓮は何者何だよ！めっさ怖いんだけど！つうか楯無後で覚えてろよ！俺は遮蔽物に隠れる。しかし、直ぐにセシリアによって追い出される。

朔夜「行き止まりか……」

まさか俺をわざと追い込むためか……セシリアめ……

レイ「朔夜！」

レイがシールドを持って俺の目の前に現れた。レイもシンデレラドレスか……金髪はシンデレラドレスが似合うな～文化の違いなのか？

レイ「早く逃げて朔夜」

朔夜「分かった。」

レイ「待って！あの……」

朔夜「何だ？」

レイ「出来れば王冠を置いていってくれないかな」

朔夜「構わないが？」

俺が王冠を話そうとすると楯無のアナウンスが入る

楯無「王子様にとって国とは全て。その重要機密が隠された王冠を失うと、自責の念によって電流が流れます」

はあ?すると俺の体に電流が流れる

朔夜「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

さらに俺は無意識また王冠をはずそうとしていた

朔夜「あがあがあがあがあがあがあがあがが」

楯無「ああ！　なんということでしょう。王子様の国を思う心はそうまでも重いのか。しかし、私たちは見守ることしかできません。なんということでしょう」

楯無後で覚えていろよ

朔夜「レイすまん」

俺はダッシュで逃げ出す。

レイ「ま、待ってよ朔夜！」

すると俺の目の前には黒髪と銀髪のシンデレラが現れた。

箒「朔夜！そこに直れ！」

ラウラ「王冠は私がいただく」

無茶苦茶だよおい。どうせ戦闘行動すれば電流が流れるんだろ?電流流れる装置は服か王冠なら着替えればいい。俺は一瞬で私服に着替える。そして芥骨を取り出して二人の攻撃を受けとめ、壁まで押

し返し、逃げる。すると更にシンデレラが押し寄せてきた。俺は更に逃げるとある女性が俺の目の前に現れた。

？「貴様の白式をいただく」

女性の背中から鋭い爪がが現れて俺を襲う。亡国機業かよ！

朔夜「白式！」

俺は白式を喚ぶすると白式の形が何時もと違っていた。画面を見ると

白式・第２形態『雪羅』

と書いてある。第２形態ね～

俺は目の前の女性に向かって叫ぶ

朔夜「貴様は誰だ！」

オータム「亡国機業の一人オータム様と言えばいいか？」

更に爪で攻撃しながら、足から銃を撃ってきた。俺は雪片弐型で銃弾を弾き、雪羅でオータムを撃つ。

オータム「あめーよ」

オータムは荷電粒子砲を避ける。オータムは爪で攻撃してきたが、俺は雪片で全て斬り裂く。俺はイグニッションブーストで一気に近づき、零落白夜を発動しオータムの首に突き付けた。

朔夜「話してもらうぜ、何故一年前に俺を誘拐したのかおな」

するとオータムはにやけながら何かを取り出して

オータム「誰が話すかよ」

スパイダー

朔夜「ガイアメモリ！」

オータムの右手にはガイアメモリが握れていた。更にオータムは右肩にガイアメモリを押し付けてスパイダードーパントになった

龍一サイド

俺は蓮により何とか逃げていると、一人の男が現れた

男「不音龍一、貴様には此処で死んでもらう」

男はムカデみたいなオルフェノクに姿に変わった。フォースギアは今はないのに！俺は体をドラゴンをモチーフにしたオルフェノクに姿を変えてムカデみたいなオルフェノクに襲いかかる。

龍一「はっ！」

俺はムカデみたいなオルフェノクに殴るしかしムカデみたいなオルフェノクはそれを避けるさらにムカデみたいなオルフェノクは俺にカウンターを入れる。俺はそれを喰い吹き飛ばされる。俺は舞台まで飛ばされた。

「「きゃあああああああ」」

舞台に居た参加者及び観客は俺を見て悲鳴を上げた

ムカデ「おら！」

ムカデみたいなオルフェノクは俺の腹に一撃入れる。すると、俺はオルフェノクから人の姿に戻る

蓮「龍一が……化け物……」

俺の目の前にはシンデレラドレスを着た蓮が居た。見られた。一番見られたくない人に見られた。

龍一「蓮……」

蓮「名前で呼ばないで！私を騙していた化け物！」

蓮がヒステリックに叫んだ。するとムカデみたいなオルフェノクは蓮に向かって攻撃をした。俺は蓮の前に立ち、攻撃を喰う。

龍一「がぁぁぁ！」

蓮「何で私を庇うの？何で？」

蓮が俺に質問をしてきた。それは……

ドゴーン

何かが壊れる音と共に蜘蛛みたいな奴が飛んできた。

？「うなもんは単純明白で大切な奴だからだろ？」

朔夜がＩＳ・白式を身にまとって現れた。

朔夜サイド

朔夜「天草、お前は龍一と言う人間だから受け入れたのか？それとも龍一と言う存在を受け入れたのか？」

天草「龍一と言う存在……」

天草は何かを呟きながら考えていた

朔夜「たかが少し力を手に入れただけだぜ龍一はそう簡単には存在は変わらない。だから受け入れてやれ。龍一が変わっていたら、天草をかばうことなんてしないぜ？」

天草「うん。龍一は龍一だもんね。龍一は変わらない」

天草は龍一と言う存在を受け入れたみたいだ。俺はスパイダードーパントに向き、

朔夜「貴様は越えちゃならない一線を超えた。更に話してもらうぜ、それを何処で手に入れたのか、そして俺を誘拐した理由を！」

俺はＳＰライセンスを出し

朔夜「エマージェシー！デカレンジャー！」

俺はデカスーツを身にまといデカレッドになる。そしてディーマグナムを取り出して撃つ。朔夜「ちっ！やっぱり難しいな一人だと」

すると、後から、何かが現れた

烏「待たせたな！朔夜！」

ＳＰライセンスを持った。烏、晃、シャル、あやめが現れた。

朔夜「烏？何があった！ＳＰライセンスなんか持って？」

烏「何って戦隊ものっつたら五人だろ？不音、これ使え！」

烏が龍一にブレスロットルを渡す。そしてみんなが変身する。そしてみんなが一ヶ所に集まり

朔夜「一つ！　非道な悪事を憎み！！」

烏「二つ！　不思議な事件を追って！！」

晃「三つ！　未来の科学で捜査！！」

あやめ「四つ！　よからぬ宇宙の悪を！！」

シャル「五つ！　一気にスピード退治！！」

龍一「６つ！無敵がなんかイイ！！」

みんなが名乗りさらに

朔夜「デカレッド！」

烏「デカブルー！」

晃「デカグリーン！」

あやめ「デカイエロー！」

シャル「デカピンク！」

龍一「デカブレイク！」

朔夜・烏・晃・あやめ・シャル・龍一「特捜戦隊デカレンジャー！」

バックに何故か爆発が起きて、ポーズを決め、龍一以外はスパイダードーパントに龍一はセンチピードオルフェノクに向かう

龍一サイド

龍一「オラオラオラ！」

俺はセンチピードオルフェノク〈朔夜が言うにはな〉連続パンチを入れる。更に俺はブレスロットルのレバーをひねり

龍一「光速拳ライトニングアッパー！」

センチピードオルフェノクを打ち上げて更に蹴りを入れるそして

龍一「電光拳プラズマフィスト！」

俺はセンチピードオルフェノクに電光拳プラズマフィストを入れる。
するとセンチピードオルフェノクは爆散した。

朔夜サイド

朔夜「オラオラオラ！」

俺がディーマグナムを連射しあやめとシャルがディースティックで打撃を喰らわし烏と晃がディースナイパーとディーブラスターで撃つ。そこの俺のジュウクンドーで殴りと撃ちのオンパレードをする。

朔夜「マフィー！」

俺はディーボーンを使いマフィーをディーバズーカに変形させれば

朔夜「パニッシュ！」

ディーバズーカを放つすると何かがスパイダードーパントの前を過り当たらなかった。くそっ！取り逃がしたか……

屋上

鈴「用って何？」

俺は学園祭が終わり、龍一たちが帰った後、鈴を屋上に喚んだ。

朔夜「実はな……鈴の事が好きだ。一人の女の子として愛している」

俺がそう言うと、鈴は息を飲んでいた。

朔夜「だからあの時の答えです。俺と付き合ってください。いや……俺の隣にずっと居てください」

鈴は更に涙を流していた。そしてとびっきりの笑顔見せて

鈴「喜んで」

そう言って俺の口にキスをしてきた。スゲー幸せだな

鈴「朔夜、浮気は許さないからね。後、他の子を抱いちゃ駄目だから。後……今夜一瞬寝て良い？」

貴女は一体何を言っていらっしゃるの！そんな顔しないで！断れないじゃん！結局俺は鈴と一緒に寝て更に愛し合った。序でに学園祭の第一位はいつの間にか開かれた。ＲＸの相談所でした。何があった！つうかいつの間に！

始まる劇（後書き）

次回はライダーらしく異世界篇だ！

異世界への旅（前書き）

修正

学園祭が終わり、俺は鈴と付き合うことにした。まあ周りには内緒にしているがな。鈴は二人っきりなると、物凄く甘えてくる。またそこがいとおしいんだけどね。

鈴「さ～く～や～？」

鈴が後から抱きついた。

朔夜「何だ鈴？」

俺は鈴を前につれてきて、抱き寄せた

鈴「呼んだだけ？えへへへ」

朔夜「呼んだだけだ」

鈴「うん。呼んだだけ」

鈴はそう言って更に甘えてきた。やっぱ可愛いいな～。

朔夜「鈴、少し離れてくれないか？」

鈴「何で？」

朔夜「仕事したいから」

俺がそう言うと鈴は笑顔で

鈴「嫌だ」

朔夜「何故に！」

俺が理由を聞くと鈴は上目遣いで

鈴「朔夜と居たいから」

朔夜「わかったよ。」

あんな顔されたら、どかせないよな。まあ俺も一緒に居たいし、少しやりづらいが、役得だし

朔夜「さてとやりましか」

俺は神界の書類を片付け始める。相変わらず適当な奴があるな……

……ハデス後でお仕置きだな……

鈴「これ何の書類なの朔夜？」

朔夜「本職の書類だよ。俺は冥界のトップだからな。ちょっと電話するな」

俺はケータイを取り出して、ハデスに電話する

朔夜「ハデス？」

ハデス『朔夜か？何だ？』

朔夜「仕事ちゃんとしてないだろ？何だこの書類は？」

ハデス「いや……これは……」

ハデスは口ごもる。そして俺は更に

朔夜「次はちゃんとやれよ。じゃないと……ね？」

ハデス「分かったから……分かったからそね言い方はやめてくれ」

朔夜「じゃあちゃんとやれよ」

俺はケータイを切り、仕事をまた始める。するとケータイが鳴り出した

？～？～？

ディスプレイを見ると『黒葉烏』と書いてあった

朔夜「なんだ烏？」

烏『今から屋上に来てくれないか？』

朔夜「何故？」

烏『来ればわかるさ』

烏は笑いながらそう言ってきた。嫌な予感しかしない

朔夜「じゃあきるぜ」

俺がそう言うと烏

烏『凰もつれてこいよ』

何故にだ?まぁいいや……とりあえず行くか……

朔夜「鈴、屋上に行くよ」

俺はそう言って先に行く。鈴も俺の後に続く。

屋上

俺たちが屋上に着くと、放送器材が全て揃えて烏が腕組みしながら立っていた。何事よ……

烏「待ってたぜ朔夜!さてと、始める」

烏は放送器材に電源を入れる。

烏『さてと全校生徒のみんな~聞いてくれ朔夜の一生に一度の大舞台!それはふぁ……ごば!』

烏が突然倒れた。その後ろにはRXがリボルゲインを持っていた。

つうか何で烏が知ってるんだよ!

RX「何してるんですか主?人の恋愛でいじるなんて?」

RXはリボルゲインでグサグサ烏を刺していた。

RX「朔夜さん、鈴さんの目を隠してください」

俺はRXの言われた通りに手で鈴の目を覆う

RX「ボルティックシューター！」

烏を滅多撃ちにし更に

RX「バイオサーベル！」

落ちてきた烏を斬り裂く、そしてRXはリボルゲインを取り出して

RX「終わりです。リボルクラーシュ！」

烏「こばみじん！」

烏にとどめをさした。

RX「此でいいでしょう。お二人ともお幸せに」

RXは去っていた

朔夜「何だったんだ？」

鈴「さあ？」

烏「死ぬかと思ったぜ」

朔夜・鈴「復活早っ！」

烏がいつのまにか復活していた。

烏「さてと、お前ら二人も異世界に連れていくから」

烏が唐突にそんなことを言い出した。何故にだよ

烏「お前らには拒否権はない。いくぜ！」

烏はマラカスを取り出して降り始めた。すると俺たちの周りが光出す。そして光がおさまると、知らない場所に俺たちは立っていた。
更に

晃「シャル無事？怪我やおかしな場所はない？」

シャル「特にはないよ。晃は？」

晃「無事だ。」

シャルと晃がそこには居た

朔夜「晃にシャルが何で此処に居るんだ！」

烏「まきこんじゃったみたいだな？」

朔夜「かぁぁぁ

俺は物凄い叫びを上げていた。すると隙間から何かが現れた。外道のナナシか……俺はモーバイレーツを取り出してレンジャーキーを取り出す

朔夜「鈴、晃にシャルは下がっていろ」

すると鈴は首を横に降る。

鈴「あたしも戦いたい。朔夜に守ってばっかしじゃやだ！あたしも戦いたい！朔夜の隣に立ちたい！」

鈴は意思の強い目で此方を見ていた。この状態の鈴は絶対に意思を変えないからな……俺の負けかな……

朔夜「わかったよ……何があっても俺が守る。だから鈴は俺を守ってくれよ」

俺はそう言って鈴にモーバイレーツとレンジャーキーを渡した。

朔夜「晃とシャルも序でだ手伝って来れ」

俺は二人にモーバイレーツとレンジャーキーを渡し、烏もレンジャーキーを取り出して

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

ゴォォォォカイジャー

俺たちはゴーカイジャーに豪快チェンジした。俺はレッド、烏はブルー、鈴はピンクに晃はグリーン、シャルはイエローだ

朔夜「派手にいくぜ！」

俺たちはゴーカイサーベルとゴーカイガンを持って、ナナシたちに突撃した

シャル「はっ！やっ！鈴！銃貸して」

鈴「なら剣かしてよシャルロット！」

二人は武器交換してナナシを蹴散らす

晃「おら！そら！喰らえ！」

晃は普通にナナシ蹴散らす。うわ本当に普通に倒してるよ

烏「ドラドドラドドラド

メエエエエエエエガレンジャー

俺たちはメガレンジャーに豪快チェンジをして、固有武器でオボロジメに次々と攻撃していった。

烏・鈴・晃・シャル「マルチアタックライフル」

烏たちは固有武器を合体させてライフルを作る

朔夜「ドリルスナイパーライフルカスタム」

俺はドリルスナイパーライフルカスタムを構えて俺たちはオボロジメに放つ。そしてオボロジメは爆発したが二の目になった。めんどいな～

朔夜「烏なにかないか？」

すると烏は何かを取り出す。それは……ダンクーガだった……作品ちがくない？まあ良いけど。俺たちはダンクーガに乗り込み、オボロジメを殴り更に蹴りを入れる。

鈴「武器は無いの？早く倒したいんだけど」

すると烏は断空剣を取り出した

烏「朔夜！殺れ！」

マジかよ、仕方ない……

朔夜「愛の心にてあしき空間を断つ！名付け断空光牙剣！やぁぁぁぁぁぁぁてっやるぜぇぇ」

オボロジメを一刀両断した。

異世界への旅（後書き）

次回もサービス、サービス！

侍現れる（前書き）

題名どうりシンケンジャーが出てきます。少しだけ

侍現れる

朔夜「な～烏……」

烏「何だ？」

朔夜「……何でダンボールで移動しているんだ？」

俺たちは現在志葉家に潜入中だ。しかしな、何故かダンボールに入っているからなんだ

烏「知ってるだろ？ダンボールは最高のステルス誇ってるんだぜ」

それはメタギの某伝説の傭兵だけだ！

烏「ついたぜ。」

鈴「本当だ」

何故に鈴たちまで居るんだよ……本当に……

白石茉子「丈瑠！」

丈瑠が丁度部屋から出て去るところだった。ってことは、丁度ばれてようなしになったところか……さてと、入りますかな

朔夜「ようなしになったからって追い出すのは無いんじゃないか？」

俺はダンボールから出て、堂々と、部屋に入る

丹波「誰だ貴様は！」

丹波つうおっさんが叫んできた。俺はディケイドのカードを取り出すと、丹波と薫以外の顔がかわる

朔夜「通りすがりの仮面ライダーであり、スーパー戦隊の力を使う奴だ！」

俺はそう言って、その場に座る。そして、

朔夜「にしても、本当にあれだな、何故お前らは追いかけないだ？」

そう言うと、周りの奴等は、下を向き息を飲む

朔夜「仲間だろ？何故止めなかった？影武者だから止めなかったのか？そしたらお前らはそこまでの人間何だな」

俺はそう言ってその場から去る。

朔夜「烏、みんな行くよ！」

俺はある場所に向かう、

第三者サイド

池波流之介たち志葉丈瑠に仕えていた家臣たちは下を向いて黙っていた。

丹波「何を暗くなっている。本物に仕えられるんだぞ」

花織ことは「そう言うことでは無いんです。うちは……」

谷千明「そう言うこと、俺が仕えていたのはあいつなんだ。あの通りすがりの言うとうり、志葉丈瑠に俺は仕えていた。」

そう谷千明が言うと、花織ことはと共に屋敷を出たすると白石茉子も立ち上がり

白石茉子「ごめんなさい。私も二人と同意見なんです。」

白石茉子もその場から去る。池波流之介はその場でうつむいていた。そして何かを決意した顔になり、

池波流之介「すいません！この池波流之介は少し用があるので失礼いたします」

池波流之介は立ち上がり、走って去っていた。

丹波「この不忠義者目！」

丹波はそう言っていた。志葉薫は扇子で丹波の頭を叩く

志葉薫「仕方がないだろ。私たちは初対面なのだ影とは本当の仲間だったのだ。仕方がない……」

志葉薫はそう言って目を瞑る。

朔夜サイド

俺たちはある場所……志葉丈瑠のいる場所に向かっていた。しかし、

朔夜「なんでゼニットが居るんだよ！」

目の前にはゼニットと大群が居た。マジでウザいわ！俺たちはモーバイレーツを取り出して

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

ゴォォォォォォォォォォォカイジャー！

俺たちはゴーカイジャーに変身した。ゴーカイサーベルを取り出して、ゼニットを斬り裂く。しかし全く減らないし、斬った感覚がない……まさか幻術か……なら何処かに術者が近くにいるはずだ！しかし気配は無い……いや気配が有りすぎて分からない

鈴「どうにかならないの朔夜！」

シャル「此じゃ逆にボクたちが殺られるよ！」

二人がそう言って敵の攻撃を避けていた。さてとどうするかな……面倒だ

朔夜「こいつで一気に殺る！」

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

ガァァァァァァオレンジャー

カオレンジャーに豪快チェンジをして破邪百獣剣を造り、ゼニットたちを一気に凪ぎ払う。

？「やるなだが此れはどうかな？」

フードを被った男が何かを放り投げた。すると何かが解凍される音がなった。

ジャグル「俺はタイムレンジャーに倒されたんじゃ？まあ解放されたからいいか……」

ジャグルが解放された用だな……確かあいつはタイムレッドのアーマを壊す程の怪力を持ってたよな。まあいい、今は倒して進むことだけを考えよう

朔夜「一気に決める！」

俺たちはレンジャーキーをゴーカイガンに差し込みファイナルウェーブを発動させた。

朔夜「ゴーカイブラスト！」

ジャグルに放つが、余り喰らっていないようだった。流石ベクターエンドビート１２を連続で喰らわさ、更に必殺技を喰らわせなきゃ倒せない奴だな。なら……これなら

朔夜「豪快チェンジ！」

ゲェェェェェェキレンジャー

俺はゲキレッドに豪快チェンジをして、殴りと蹴りを入れるが余りダメージが無いようだ。ならこいつなら

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

ダァァァァァァァァァイレンジャー

俺たちはダイレンジャーに豪快チェンジをする

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「気力弾！」

一斉に気力弾を放つがダメージが余り無いなら

朔夜「ならあれやるぞ！」

鈴・烏・晃・シャル「おう！」

俺たちは手に気力を溜める

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「気力ボンバー！」

俺たちは気力ボンバーをジャグルに放つ。ジャグルは思いっきり吹き飛ぶ更に俺はジャグルに近づきスターソードとスターカッターでジャグルを斬る。そこに

朔夜「天火星稲妻炎上波！」

俺は稲妻と炎をジャグルに食らわせた。そして、稲妻と炎がやむとそこにはボロボロのジャグルが居たそして俺たちはゴーカイジャーに戻り、ゴーカイサーベルにレンジャーキーを差し込む

ファイナルウェーブ！

朔夜「ゴーカイスラッシュ！」

一斉にジャグルに斬撃を喰らわせた。ジャグルは思いっきり爆発して倒れた。すると後ろからはシンケンジャーたちが現れた。

朔夜「お前らか……答えをみ……」

俺が喋りきるまえにシンケンマルで斬りかかる。何故だ！

朔夜「何しやがる！」

しかし無言でシンケンジャーたちは攻撃してきた。まさか操られているのか？

侍現れる（後書き）

次回はゴーカイジャーＶＳシンケンジャー（レッド抜き）です

幻影現る（前書き）

矢代さん先に謝ります。すいません！フォースをつかわさていただきました。

幻影現る

さて現在俺はシンケンジャーたちと戦っている。操っている奴は何処に居るんだが……

朔夜「ちっ！面倒」

俺はゴーカイサーベルでシンケンブルーの斬撃をいなしそのまま蹴りを入れるそして一旦離れてゴーカイガンで撃つ。しかし面倒だ。何でライダーに変身しないんだ俺は？さてライダーになるかな？いやならなくていいや。俺はレンジャーキーを取り出して

朔夜「豪快チェンジ！」

カァァァァァァァァクレンジャー

俺はカクレンジャーに豪快チェンジしカクレマルで斬りかかる、更に影分身し斬る。しかし侍だけであってなかなか刀どうしだからうまくいかない。なら此方に土俵でいくか

朔夜「豪快チェンジ！」

ジェェェェェェェットマン

俺はレッドホークになり空を飛ぶそしてバードブラスターを連射した。卑怯？しょうがないじゃん！相手は接近特化何だし！

朔夜「さてとさっさときめるかな？」

俺がそう言うと丁度みんなが集まり、向こうも集まっていた

朔夜「とどめだな」

俺たちはレンジャーキーを取り出してゴーカイガンに差し込む

ファイナルウェーブ！

朔夜「ゴーカイブラスト」

俺たちはシンケンジャーに向かってゴーカイブラストを放つ。シンケンジャーは変身が解けて倒れる。まさかの圧勝！まあ烏が作ったからな……チートだよ

朔夜「ケアル」

俺はシンケンジャーにケアルをかける。すると

白石「ここは？私たちは一体……」

白石たちが目を覚ます。

朔夜「起きたか。」

源太「お前たち！通りすがりの野郎か！」

鈴「それより何であたしたちを狙ったのよ！大体は予想つくけどね。」

鈴はそう言って変身を解く。そして俺たちも変身を解く。

谷「確か、丈瑠を追いかけて、走ってたら、フードを被った男が目の前に現れて、それからが記憶に無いんだよな……」

フードか……まさかさっきのあいつか……

朔夜「フードってまさか黒色か？」

花織「ええ、黒色だと思います」

やっぱりか……この世界ないイレギュラーは基本は真ショッカーしか無いからな……後はそいつは何者かを確かめないとな……とりあえずは志葉丈瑠の所に行かないとか。俺たちは更に奥、志葉丈瑠の所に向かう。

朔夜「此処か」

俺たちは奥に行き、志葉丈瑠と十蔵が戦っていた。そして、志葉丈瑠が勝利をおさめると、後から、モールイマジンズが現れた。そして志葉丈瑠を襲いかかる。

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺は仮面ライダーディケイドに変身する

志葉「あいつが門矢と同じ姿になっただと！あいつは何者だ？」

志葉は俺の姿を見て驚いていた。俺はライドブッカー・ソードモードでモールイマジンズを斬り裂く。そして、モールイマジンズを蹴

りを入れる。そして志葉の前に立ち

朔夜「とりあえず下がっていろ」

俺はライドブッカーからカードを取り出す。

ヒーローライド・シンケンレッド

俺はシンケンレッドに変身する。すると周りの奴等は驚いていた。
更にカードをディケイドライバーに差し込む

アタックライド・レッカダイザントウ

俺は烈火大斬刀を喚び出す。そしてモールイマジンを斬り裂く。そろそろ飽きてきたな。

ファイナルアタックライド・シンケンジャー

朔夜「大筒モード！」

俺は烈火大斬刀を大筒モードに火炎弾を放つ。これ連射してるよな……、連射するものなのか？

するとフードを被った男が現れた。俺は烈火大斬刀大筒モードをフードを被った男に向ける

朔夜「お前は何者だ？」

？「俺か？俺はお前と同じ存在だよ。闇の神。」

するとフードを被った男は何かを解放した。此れは神力！まさかこいつも神なのか！しかし男なのには声高くないか？

？「俺は幻影の神、イニュージョンだ。以後よろしく。」

幻影の神はフードを外す。するとその顔はファンタシースターポータブル2インフィニティーのナギサに似ていた。眼帯は無いがな。

朔夜「女の子！」

俺は驚いていた。まあ驚くよな？今まで男だと思っていたし、一人称が俺だし。

イニュージョン「今日は顔合わせだけだから、此で帰るから、此れは置き土産だよ」

オーロラからはシームーンファンガイアと牛鬼が現れた。まさかのこの2体かよ。俺はライダーカードをディケイドライバーに差し込む

カメンライド・フォース！

俺は罪を背負うライダー、仮面ライダーフォースになった。

アタックライド・フォースムーバー

俺はフォースムーバーを喚び出し、ソードモードでシームーンファンガイアをに斬りかかる。しかしうまく当たらなかった。ならどうするかな？ならあれでやるか！俺はフォームライドのカードをライドブッカーから取り出した

フォームライド・ソニック

俺はスピードに長けたフォーム、仮面ライダーフォース・ソニックフォームになる。

朔夜「喰らいな！」

俺はフォースムーバー・ソードモードでシームーンファンガイアを斬り裂く。そして殴り、ファイナルアタックライドのカードを取り出す。

ファイナルアタックライド・フォ・フォ・フォ・フォ・フォース

俺はフォースムーバーを足に取り付けて、ジャンプし、シームーンファンガイアをロックし、フォースの必殺技『マリンブレイク』を放つ。

朔夜「先ずは一体」

俺はディケイドに戻り、そしてあるカードを取り出して、ディケイドドライバーに差し込む

ユニゾンライド・リン

俺は鈴とユニゾンし、仮面ライダーディケイド・甲龍フォームになる

アタックライド・ソウテンゲツガ

俺は蒼天月牙を取り出す。そして、牛鬼に斬りかかるが、牛鬼は片

腕で蒼天月牙を受けとめる。流石は牛鬼、俺は両肩から龍砲を放ち、距離をとる

鈴『どうする？朔夜、接近戦はキツイわよ？』

朔夜「ああ、だが、鈴となら勝てるさ。」

鈴『そうね』

俺たちは、蒼天月牙を構え直し、斬りかかる、しかしまた受け止められるが、俺たちはもう片方の手に蒼天月牙を取り出して斬り裂く。そして蹴りを入れ、そして龍砲を放ち、ファイナルアタックライドカードを取り出してドライバーに差し込む

ファイナルアタックライド・リ・リ・リ・リン

朔夜・鈴「龍砲ライダーキック！」

俺たちは牛鬼に必殺技を喰らわせた。牛鬼は爆散した

幻影現る（後書き）

次回もよろしくお願いします

本当の絆（前書き）

書き終わりました

本当の絆

志葉「みんな、何で……」

白石「わたしたち、仲間でしょ？」

志葉「だが俺は……」

谷「影だろうが何だろうが関係無いだろ」

花織「うちらは殿様やから、ついてきたんや。」

志葉「千明、ことは……だが」

すると池波が志葉の首元を掴み

池波「志葉丈瑠！お前は、私たちの命を預かるといったな。なら最後までやりとげてもらわなければ困る！そして私は志葉丈瑠に忠誠を誓った。だから、私は最後まで、貴方についていく」

志葉「流之介」

そして俺が変身を解きながら、志葉に近く。

朔夜「いい加減に素直になれよ……」

志葉「お前はさっきの……」

朔夜「織斑朔夜だ。志葉丈瑠、お前はこいつらをどう思っているん

だ？ただの偽りの主従関係だったのか？」

志葉「いや……そんなわけないだろ！」

朔夜「なら否定するなよ！本音を告げろよ！」

志葉は息を飲む。そして、下を向き

志葉「みんな……また俺に力を貸してくれないか……」

志葉がそう言うと、みんなが、うなずき、また忠誠を誓っていた。

良いものだね。こういう光景。あれ烏がバケツを持って吐いてるよ。

烏「忠誠をおえっ……誓っている……おえ……見ると……嫌なものおえっ……思い出す……」

ああ……お疲れ……最高神ね。

朔夜「さてと、これにて一件落着じゃないな……此れは外道衆の気配か……」

志葉「みんなは姫の元へ！俺は……此処を抑える」

目の前に現れた。ナナシを睨んでいた。さてと、俺らもやるか俺はオーズドライバーを腰に付ける。そしてメダルを入れる

タカ・クジャク・チーター

俺はオーズタジャータに変身をする。俺はメダジャリバーを取り出して、ナナシを斬り裂く。そして、俺は志葉にあるものを渡してみ

た。

朔夜「受けとれ志葉！」

志葉「ケータイに……シンケンレッドの人形？」

俺は志葉にモーバイレーツとレンジャーキーを渡した。

朔夜「さっさとカギを差し込め」

志葉「あ、ああ」

志葉はモーバイレーツにシンケンレッドのレンジャーキーを差し込む

シィィィィィィィンケンジャー！

志葉はシンケンレッドに豪快チェンジした。

志葉「シンケンレッドになれただと……しかも獅子ディスクに恐竜まで……」

朔夜「さっさといくぜ！烏はみんなをつれて先に行け」

烏「了解！バティ！」

烏はみんなを連れて、山から降りる。さて、

朔夜「鈴、何で居るんだ？」

鈴「何でって、朔夜の隣で戦いたいから。朔夜の近くに居たいから。

」

鈴はそう言って俺の隣まで歩いてきた。まあしょうがないか……

朔夜「わかったよ。さてと、お掃除しますかな。」

俺はメダジャリバーでナナシを斬り、タジャスピナーで火炎弾を撃つ。志葉は烈火大斬刀で回転しながらナナシを蹴散らした。

朔夜「さて、まだまだいくぜ！」

鈴「弱すぎよ！」

鈴と俺は、ナナシを蹴り飛ばす。すると、

風のエル「力あるものに死を」

風のエルが現れた。あらめんどくさい……さてと殺るかな？俺はコアメダルを取り出す。

シャチ・カマキリ・チーター

俺はオーズ・シャキリータになる。そしてカマキリソードを展開し、斬りかかる。しかし、俺の攻撃当たらなかった。空戦かよ……

なら！

プテラ・トリケラ・ティラノ

プットッティラァーノザウルゥース！！

俺はオーズ・プトティラコンボになる。俺は地面からメダガブリューを取り出す。そして、アックスモードにして風のエルに斬りかかる。そして風のエルは空に避けるが、エクスターナルフィンで空を飛ぶ。そしてテイルディバイダーで風のエルを地面に叩きつけ、メダガブリューで斬る。

鈴「喰らいなさい！」

鈴がゴーカイサーベルで更に斬りかかる。その横から、ハイパーシンケンレッドがキョウリュウマルで風のエルを斬る。まさかのこのパターンができるとはな……

朔夜「早く終わらせたいから、やっちまうか……」
俺はメダガブリューにセルメダルを五枚入れると

ごっくん

メダガブリューがセルメダルを飲み込む。俺はメダガブリューをバズーカモードにして、風のエルに構える

プットティラーノヒッサーツ！

俺は風のエルにストレインドゥームを放つ。風のエルは逃げようとするが逃げきれずにストレインドゥームに当たり、爆散する。しかし黒い何かが現れた。

ハイパークロックアップ

するといつの間にか、風のエルにストレインドゥームが当たる前に戻っていた。まさか……ハイパークロックアップ……誰だ。

カブトかガタック、コーカサスだけだ……俺は目の前を見ると、黒色のカブトハイパーフォームが居た。まさか……仮面ライダーダークカブトのハイパーフォームだと……真人のヤローまた面倒な奴を連れてこさせやがって……俺はオーズの変身を解いて、カブトゼクターを喚び出す。俺はカブトゼクターを右手で掴み、

朔夜「変身！」

俺はライダーベルトにカブトゼクターを付ける

ヘンシン

俺は仮面ライダーカブト・マスクドフォームになる。更にゼクターホーンを左に傾ける

朔夜「キャストオフ」

キャストオフ・チェンジビートル

仮面ライダーカブト・ライダーフォームになり、左腰にハイパーゼクターを付けてハイパーフォームになり、ダークカブトに殴りかかる。ダークカブトは避けてカウンターを入れようとしたが、俺がそのままの体制でクナイガン・クナイモードで斬る。ダークカブトは怯む、更にクナイガン・クナイモードでダークカブトを斬る。さてとまだまだいくぜ！

朔夜「オラ！」

俺はパーフェクトゼクターでダークカブトを斬る。ダークカブトからハイパーゼクターが外れた。俺はパーフェクトゼクターに何も付

けずに、赤いボタンを押してダークカブト斬る。するとダークカブトは爆散した。後は風のエルは逃げようとするが、俺が

ワン・ツー・スリー

朔夜「ハイパーキック」

ライダーキック

俺がそういいって、ダークカブトにハイパーキックを喰らわせた。

本当の絆（後書き）

次回は敵であの人があわれます

現れるドウコク（前書き）

やっと書き終わったよ……

現れるドウコク

朔夜「あいつらを追いかけるか」

俺は変身を解いて、烏たちを追いかけた。すると烏たちがボロボロで倒れていた。目の前には

ドウコク「今のシンケンジャーはこんなものか」

イニュージョン「使い魔と神の徹底的な差を知ったかな」

ドウコクとイニュージョンが立っていた。先ずは逃げることを考えよう。俺はブレイバックルを取り出して、腰に巻く。

朔夜「変身！」

ターンアップ

俺は仮面ライダーブレイドに変身した。そして俺はスペードの１０、タイムスカラベをブレイラウザーから取り出してラウズする

タイム

俺はタイムスカラベでドウコクとイニュージョンの動きを封印するが

イニュージョン「甘い」イニュージョンはタイムスカラベの効果を打ち消した。マジで！なら、

アブソーブ・クイーン

エボリューション・キング

俺は仮面ライダーブレイド・キングフォームになる。俺はキングラウザーを取り出して、イニュージョンに斬りかかる、しかし、イニュージョンはその斬撃を避ける。やはり当たらないか……なら

スペード４・ハート４・ダイヤ４・クラブ４・スペードＡ

フォーカード

俺はフォーカードを放ち、その場から、みんなを連れて逃げた。

志葉の屋敷

朔夜「まさか、此処までボロボロかよ。」

烏「神には勝てるかよ……テンパのせいでよ……」

最高神よ……お前は……

晃「くそ！もっと力があれば……」

晃はＸのベルトを見ながらそう言っていた。神には勝てないよ晃……

シャル「晃……」

シャルは晃を心配しながら見つめていた。

朔夜「さてと、此からイニュージョンと戦って来ますかな」

俺はその場から立ち上がると、扉が開き、志葉とその家臣達が現れた。てことは志葉は正式に１９代目になったわけか……

志葉「お前が行くなら、俺たちも行かせてもらう。目的は同じだろうからな」

志葉がそう言うと俺は志葉の横を通りすぎて

朔夜「好きにしな。」

俺はそのまま最終決戦地（仮）に向かう。

最終決戦地（仮）

朔夜「さてと居ないな……まあ良いがな」

すると大量のナナシが現れた。更に後にはドウコクとイニュージョンが居た。

志葉・池波・谷・白石・花織「一筆奏上」

梅森「一貫献上」

みんなが変身した。

朔夜「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

俺は闇の力を開放してダークネスに変身しイニュージョンに向かって走り出す

第三者サイド

六門船から血祭ドウコクが飛び降りる。
ドウコク「シンケンジャー……」

レッド「血祭ドウコク！」
ドウコクの胸には封印された傷跡が残っていた。

レッド（確実に封印の傷跡を狙う！）薫《志葉家のモヂカラは、破壊的だ。お前がというよりディスクを持たない。使えるのはおそらく……1回だ》
レッド「1回……」

レッドはインロウマルにディスクをセット。スーパーシンケンレッドとなる。

レッド「流ノ介」

ブルー「はっ！　茉子、ことは。殿の進路の確保を……源太は後ろを守れ！」
ゴールド「よっしゃ！」
イエロー「はい！」

ピンク「了解」

ゴールド「任せとけって」

ブルー「千明は私と！」

グリーン「丈瑠の盾になるんだろ！？」

ブルー「ああ……」

レッド「狙うは血祭ドウコク！　行くぞ！！」

シンケンジャーが猛スピードでナナシ連中に挑む。

レッド（この一撃……絶対に！）ブルーたちは一気にナナシ連中やノサカマタを一掃。

ドウコク「来い……絶望ってのを……教えてやる」

ピンク「丈瑠！」

イエロー「今です」

ドウコク「はっ！」

ブルーとグリーンがレッドの盾となり、ドウコクの攻撃を受ける。

レッド「志葉家１９代目当主……志葉丈瑠、参る！！」

レッドのスーパーシンケンマルがドウコクの封印の傷跡を突き刺す。

グリーン「行け！」

レッド「はあっ！！」

ドウコク「なるほど……ちったぁ、考えてきたらしいな……」

レッド「え？」

ドウコク「が、こんな程度じゃ俺は倒せねぇぜ……でやあっ！！」

レッド「うわあっ！」

ドウコクがレッドを投げ飛ばす。
一同「丈瑠！（丈ちゃん！）」「殿！」
ブルー「失敗か……」
ドウコク「所詮てめぇらは偽者ってことだ……」
するとレッドのディスクが砕ける。

ドウコク「さぁて……てめぇらが泣き叫ぶまでどれくらいかかるか……はぁっ！！」

ドウコクの衝撃波によりダイゴヨウが吹き飛ぶ。

ゴールド「ダイゴヨウ！」

ドウコク「さあ、泣け！　はぁ！！」

一同「うわあああっ！！」
ドウコクの猛攻により変身が解除。
丈瑠たちは倒れる。ドウコクの猛攻により変身が解除。
丈瑠たちは倒れる。
ドウコク「ああ？　聞こえせいぜい楽しみに待ってることだな」
ドウコクはその場を去る。
丈瑠「ま、待て……」
丈瑠は気を失う。

朔夜サイド

朔夜「せい！」

俺は刹那をイニュージョンに振るが、当たらなかった。また振るが、当たらない。イニュージョンは俺の攻撃を避けることしかしない。

朔夜「逃げてばっかりじゃ、俺は倒せないぜ」

イニュージョン「なら、こっちもいきます」

何故か敬語のイニュージョンが分身し、俺を攻撃してきた。どれが本体だ！気配が全くわからない……

朔夜「くっ！」

俺はイニュージョンの攻撃を喰らう。さっきより強い……さらにイニュージョンは何かを取り出してきた。まがまがしい剣を取り出してきた。それは

朔夜「ダーインスレイヴ……」

イニュージョンが持っていたのは魔具の一つダーインスレイヴであった。あれは神も殺せる剣じゃんか……

イニュージョン「喰らえ！」

イニュージョンはダーインスレイヴを俺に向かって振る。俺はそれを避ける。チャンスだ！俺はイニュージョンに刹那を振るう。しかしイニュージョンの姿はなく。そこに居たのは……

朔夜「鈴……」

俺の恋人の凰鈴音だった。鈴が俺にダーインスレイヴを突き刺してきた。何で鈴が？すると鈴の姿がぼやけて、イニュージョンの姿になる。考えたなくそったれ！やばいな……ダーインスレイヴに

血を吸われて段々体が……

烏サイド

この感じは！朔夜がヤバイ！俺は布団から立ち上がる

鈴「烏何立ってるのよ！安静にしなさい！」

烏「離せ！朔夜が！朔夜が！死にそうなんだよ！」

俺がそう言うと、鈴の顔が真っ青になる。

烏「あいつをもう死なせたくないだ！もう二度と大事なダチをもう……」

俺は志葉家の屋敷を出て朔夜の気配がある場所に向かう

烏「うじゃうじゃとナナシどもが！」

俺が走っていると目の前にはナナシが大量に居た。

烏「邪魔なんだよ！」

俺は重力波で敵を潰して、朔夜探す。すると

烏「さ……くや？」俺は血の気が全く感じられない朔夜の体があった

烏「間に合わなかった……」

俺はその場に膝をつきながら、唖然としていた。朔夜を助ける方法はあるが……あれはかなりむずいな……

鈴「烏……早すぎ……って……さく……や……イヤ！イヤァァァァァァァァ」

鈴が錯乱状態になりかける。俺は鈴の肩を掴み

烏「落ち着け！今から朔夜を助ける。だから落ち着け」

俺は鈴にそう言うと、鈴は目に涙をためながらこっちを見て

鈴「本当なの」

烏「本当だ。だからそこでまっていろ」

俺は朔夜に近づき、手を置くと魔法陣が浮かび上がる。そして俺は詠唱を始めた

烏「我が名により答えろ……」

そしてさらに魔法陣は光だし、その光は朔夜に吸い込まれる。そして俺の意識がとおざかる

現れるドウコク（後書き）

次回デシンケンジャー篇終了

最終決戦だぁ！（前書き）

書き終わった……何回寝落ちしたっけ……？

最終決戦だぁ！

此処は？俺は一体……俺はとりあえず前を見た。すると

朔夜「か……ら……す？」

烏が息をしないで倒れていた。いわゆる死体だ。烏が死んでいた。
何故？それに何で俺は生きている？まさか……烏は！バカだよ！

朔夜「烏の馬鹿野郎！何でやっちまったんだよ！何で自分の命を引き換えに俺を助けたんだよ！」

俺は泣いた。泣きじゃくった。すると鈴が近づいて来た。しかし鈴は何も言わずにいた。数分経つと鈴が口を開き

鈴「烏は助けられないの？」

烏を助ける？方法は……ある。一つだけある。
しかしそれは違法だ。しかし俺は烏を助けたい！

朔夜「あるよ。烏を助ける方法はあるよ。だから俺は烏を助ける！」

俺は烏に近づき、体の中から神の因子を少し取り出して、烏に近づけようとしたら、

最高神「何をしようとしている！」

最高神が現れた。まさかのご登場ですか？

朔夜「何って蘇生だよ烏の？神力を持ってるやつの蘇生方法でやってるだけだけど？」

最高神「それがどれだけの禁忌か知ってるだろ！神を生むことになるんだぞ！」

朔夜「それが……どうした……それがどうした！此処で親友を失うよりましだ！」

俺は手を天にかざし、烏に手を置こうとする、

最高神「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

最高神は止めようとするが、俺はそれを無視して、烏に触った。すると烏の体が青く光る

烏サイド

あれ？此処は？確か俺は朔夜を助ける為に死んだよな？何で冥界に居ないんだ？つうか此処どこ？

烏？「此処はお前の精神空間だ」

目の前に俺が居た。

烏「お前は？」

烏？「俺はお前だ。さて話をしよう」

話？何だ？

烏？「此から、お前は神になる。朔夜によってな。しかし、ながらお前が神になるのは最高神が拒んでな、さてお前はどうする？神になるか、ならないか、なるなら、試練があるぜ」

神になれるか……

烏「やってやる！俺には会いたい人がいる！」

烏？「ならやれってみな試練は簡単だ。この剣を抜け」

俺はどこのアルトリアルだ？だが引き抜いてやる！俺は剣を引き抜こうとするがなかなか抜けない！抜くんだ！抜いてあいつらに！

烏「あうんだよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

渾身の力で剣を抜く。

烏？「合格だ。お前ははれて天の神だ。後は頑張ってくれ」

自分の分身が去り、俺は光がある方に歩く

朔夜サイド

烏「此処は……戻ってきたのか？」

烏が立ち上がった。

朔夜「バカ烏が！お前はバカだよ！何俺の為に命をかけてるんだよ

！」

俺はそう言うと、烏も

烏「オメーも何俺の為に禁忌を犯してるんだよ。」

朔夜「だな。さてと行こうぜ。相棒」

烏「ああ、バディ」

鈴「アタシも忘れないでよ。二人とも」

鈴はそう言っていた俺たちの間に入ってきた。

朔夜「忘れてないよ鈴。さてて気を取り直して行くか。」

俺たちはドウコクの向かった場所に行く。

志葉「織斑」

俺たちが走っていると志葉ご一行が居た。

朔夜「志葉か……行けるのか？」

志葉「いけるさ。後丈瑠で構わない。」

朔夜「なら、朔夜だ」

俺たちが更に進むと丹波が立っていた。すると丹波が丈瑠に秘伝ディスクを渡した。

丹波「此は姫が渾身の力で作ったディスクです。更にこちらは」

丹波は懐からもう一枚の秘伝ディスクを取り出した。

丹波「丹波がもっとも得意とするモジカラを込めたディスクでございます」

丈瑠「ありたがく使わせてもらう」

丹波「御武運を」

丹波は頭を下げていた。更に

晃「俺も行くぜ。寝てられないからな。」

シャル「ボクもね」

晃とシャルが来る。本当に良いやつらだよな……

朔夜「助かるよ」

ドンドン

太鼓の音がなる。まさかのこの中に入るとはな……

ドウコク「てめぇら……待ってろと言ったはずだぜ！？」

源太「わりぃな……俺たちもせっかちでな……」

丈瑠「その先へは行かせない……お前を倒し……必ずこの世を守る！　シンケンレッド、志葉丈瑠！」

流ノ介「同じくブルー、池波流ノ介！」

茉子「同じくピンク、白石茉子！」

千明「同じくグリーン、谷千明！」

ことは「同じくイエロー、花織ことは！」

源太「同じくゴールド、梅盛源太！」

丈瑠「天下御免の侍戦隊！」

一同「シンケンジャー、参る！！」

朔夜「ゴーカイレッド」

烏「ゴーカイブルー」

シャル「ゴーカイイエロー」

晃「ゴーカイグリーン」

鈴「ゴーカイピンク」

一同「海賊戦隊ゴーカイジャー！」

シンケンジャーたちは刀を構えてナナシに斬りかかる。俺たち、ゴーカイジャーはゴーカイサーベルとゴーカイガンを構えてナナシに

突っ込む

丈瑠・龍之介・茉子・千明・ことは「一筆登場」

源太「一貫献上」

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

ゴォォォォォカイジャー！

俺たちは変身して、ドウコクに立ち向かうが、ドウコクの目の前にタイマーのバクトフージＥＲが現れた。面倒くさいな……

朔夜「時間には時間だ！」

俺たちはタイムレンジャーのレンジャーキーを取り出した

朔夜・烏・鈴・晃・シャル「豪快チェンジ！」

タァァァァァァァァイムレンジャー！

俺たちはタイムレンジャーに豪快チェンジした。俺たちスパークベクターとアローベクターを取り出してタイマーのバクトフージＥＲを斬り裂く、しかしタイムリバースで時間を巻き戻される。厄介だよ……だが胸の針を壊せばきっと……

朔夜「喰らえ！ベクターエンド・ビートクロス」

俺はベクターエンドを放つ。するとタイマーのバクトフージＥＲはタイムリバースを俺に放つ。狙い通りだ！

烏・鈴・晃・シャル「喰らえ！」

四人がダブルベクターでタイマーのバクトフージＥＲの胸を攻撃して、針を破壊した。

朔夜「さてととどめをさすかな？」

一同「ボルテックバズーカ！」俺たち、ボルユニットを合体させてバズーカを作る。そしてタイマーのバクトフージＥＲに狙いを定めて放つ。するとタイマーのバクトフージＥＲは瞬間冷却された。

シンケンジャー「うわぁぁぁぁぁぁ！」

シンケンジャーたちはドウコクの攻撃を喰らい、吹き飛ばされる

朔夜「丈瑠！」

俺はシンケンジャーの方を見ると

ドウコク「余所見する暇があるのか小僧」

ドウコクが俺たちに斬撃を飛ばしてきた。

ゴーカイジャー「うわぁぁぁぁぁぁ！」

俺たちはドウコクの攻撃で吹き飛ばされる。ドウコクってこんなに強かったけ？

朔夜「さっさときめる！豪快チェンジ！」

ガァァァァァァァァオレンジャー

俺はガオレッドに豪快チェンジした。俺は爪でドウコクを攻撃する。

朔夜「ライオンファング」

俺はガオレッドの固有武器、ライオンファングを半分に分離させて

朔夜「ブレイジングファイヤー」

俺はドウコクを斜めに斬り裂く

ドウコク「ぐっ！」

丈瑠「はあぁぁぁぁぁぁ！」

丈瑠が二本の烈火大斬刀でドウコクを斬る。

朔夜「とどめといくか」

鈴「そうね」

丈瑠「ああ」

俺たち、ゴーカイジャー組はレンジャーキーをゴーカイサーベルに差し込む

ファイナルウェーブ

朔夜「ゴーカイスラッシュ」

俺たちはドウコクにゴーカイスラッシュを喰らわせた。丈瑠たちは烈火大斬刀を砲筒モードにして秘伝ディスクを放つ。するとドウコクは爆破した。俺たちそれに巻き込まれ、変身が解けた。するとドウコクは二の目になる丈瑠たちはサムライハオーに乗る。俺たちどうするかな?とりあえず見守るか

第三者サイド

ドウコクの猛攻に怯むサムライハオー。
ドウコク「へっ。無駄にでけぇなりしやがって。てめぇらに勝ちはねぇんだ!　はぁっ!!」
ドウコクの猛攻がサムライハオーを吹き飛ぶ。
コックピットがボロボロになる。
ことは「やっぱり……2の目になっても強い!」
茉子「力ずくって言っても……そうは持たないかも」
源太「それでも倒す。はぁっ!!」
丈瑠「待て!　モヂカラを使うな……」
5人「え?」
丈瑠「小出しにするな……残ったモヂカラ全部……一撃に集中する!」
千明「一撃!?　外れたら終わりか……」
丈瑠「だから絶対はずさない至近距離まで突っ込む……どんなに攻撃されても……バラバラになっても……たとえ折神1体になっても突っ込む!」
流ノ介「なるほど……わかりました!」
茉子「覚悟はできてる」

千明「いけるって。ジイさんたちに飯、約束したしな!」
丈瑠「いくぞ!　全員モヂカラを集中しろ!」
サムライハオーが前に進む。

ドウコク「とっとと倒れちまえ。はぁっ！！」
ドウコクの猛攻にサムライハオーから烏賊、海老、牛折神が分離。
テンクウシンケンオーとなる。
ドウコク「てめぇら……何の真似だ？」
ドウコクの猛攻が続く。
源太「みんな……がんばれ！」
テンクウシンケンオーから兜、舵木、虎折神が分離。
シンケンオーのみとなった。
ドウコク「この……なんでてめぇらはあきらめるってことを知らねぇ？　はあっ！！」
ドウコクの猛攻によりシンケンオーのコックピットはすでにボロボロ。
丈瑠「今のうちに言っておく。お前たちと……一緒に戦えてよかった。感謝している」
丈瑠の一言にハッとする５人。
千明「何だよいきなり……？」
流ノ介「殿……私の方こそ！」
ことは「うちもです……」
茉子「６人一緒だから、戦ってこれたんだし」
源太「丈ちゃん……巻き込んでくれてありがとな」
千明「っしゃあ！　行こうぜ。最後の１発だ！」
一同「はあっ！！」
ドウコクの剣がシンケンオーの胴を突き刺す。
６人が剣を抜くとダイシンケンにモヂカラが注入。
一同「はあっ！！」
シンケンオーがドウコクに斬りかかる。

朔夜サイド

シンケンオーがドウコクを斬った。するとドウコクは爆破したが、

何故等身大で立っていた

龍之介「何だと……」

茉子「そんな……倒せなかったの」

千明「そんなのありかよ……」

シンケンジャーたちは絶望していた。更にこいつらはモジカラを使い果たして立てない状態だが、丈瑠は何とか立ち上がり、ショドウフォンを取り出して

丈瑠「一筆登場」

シンケンレッドに変身した。

シンケンレッド「いくぞ！」

しかし、ドウコクが一発攻撃をするとシンケンレッドは丈瑠に戻る。

丈瑠はまた立ち上がる

ドウコク「何故お前は立ち上がれる！」

ドウコクは丈瑠にそんなことを聞いた。

朔夜「それはお前に負けない。この世を守るって気持だろうな。」

俺が代わりに答えた。俺は腰にディケイドドライバーを付けて

朔夜「丈瑠まだいけるか？」

丈瑠「ああ、ドウコクを倒すまでな」

丈瑠そう言ってショドウフォンを構えた。

ドウコク「貴様は何者だ！」

朔夜「全てを破壊する闇の神だ！覚えて死にな！変身！」

カメンライド・ディケイド

俺は仮面ライダーディケイドに変身した

丈瑠「一筆登場」

丈瑠はシンケンレッドに変身。するとライドブッカーから一枚のカードが現れた。それは

ディケイド「シンケンレッドのＦＦＲか……少しくすぐったいぞ」

ファイナルフォームライド・シ・シ・シンケンレッド

俺はシンケンレッドの背中を押すとシンケンレッドは烈火大斬刀に変る

ディケイド「指図、レッドレッカダイザントウかな？いくぜ！」

俺はドウコクをレッドレッカダイザントウで斬りかかる。ドウコクは剣で受け止めるが、俺は剣ごとドウコクを斬る。更に横からまた

斬る。

朔夜「とどめだ！」

ファイナルアタックライド・シ・シ・シンケンジャー

俺はレッドレッカダイザントウに火を灯して、ドウコクを斬る。名前はディケイドフレイムかな？レッドレッカダイザントウからシンケンレッドに戻る

ドウコク「俺がいなくなっても……いつかてめぇらも泣く時がくる……三途の川の隙間は……開いてるぜ……」

ドウコクはそう言って爆散した。

朔夜「終わったな」

丈瑠「ああ……お前たちのお陰で倒せた。感謝している」

鈴「良いわよ。困ったときはお互い様よ」

源太「何時でも来いよ。今度は俺の寿司を食わせてやるよ」

晃「楽しみにしています。」

シャル「ありがとうございます」

そう言って、俺たちは元の世界に帰った。

最終決戦だぁ！（後書き）

次回もオリジナルだよ。

お知らせ（前書き）

題名どおりだ

お知らせ

ふと天さんの作品を見ていて思いついた。天さんはライダー（怪人あり）のトーナメントを書いている。なら俺は何でもありのトーナメントを開きたい！なので皆様良ければ、参加してください！原作キャラ、オリキャラ何でもいいです。ライダー？戦隊？魔法使い？異能使い者？どんとこいやー！（無能力者もあり。武器と戦闘方法を教えてくだされば）お待ちしています。能力とかは、ユーザーメッセージで送ってください。

烏「参加楽しみにしてるぜ！」

お知らせ（後書き）

参加お願いします

トーナメント開幕するのかな？（前書き）

募集〆切ました。

トーナメント開幕するのかな？

朔夜「ふわ～、眠い……」

俺はベットから立ち上がりそう呟いた。すると隣がモゾモゾ動き出した

鈴「……もう朝？」

鈴が目を擦りながら起きた。現在鈴の格好は一糸も纏っていません。

朔夜「おはよう鈴」

俺はそう言って鈴の頭を撫でた。鈴は小動物みたいに気持ち良さそうに目を細めた。

鈴「おはよう朔夜」

鈴はそう言って俺にキスをしてきた。今日も頑張っていきますかな

食堂

朔夜「う～ん、此は……」

俺は現在みんなと朝食をとっていた。俺の右にレイで左に鈴、向かい側に、箒、ラウラ、セシリアだな。そして鈴は何だか不機嫌で黒いオーラを出しているように見えた。

朔夜『鈴何でそんなに不機嫌何だ？』

俺はプライベートチャンネルで鈴に話しかける。すると鈴は

鈴『朔夜と二人っきりで食べたかった。』

鈴はすねながら、そう言ってきた。二人だけで食べたかったのね。

なるほど……

朔夜『昼は二人で食べような。今は我慢してな？今からみんなから離れるのはまずいしさ。』

鈴『わかっわよ』

鈴も納得したようだ。

箒「朔夜ひとつ聞きたいのだが？」

箒が箸を置きながら俺を見て質問をしようとした。何だ？

朔夜「何だ？」

箒「数日間居なかったんだが、何処に行っていたんだ？」

その事ね

朔夜「烏のせいでな……異世界へ飛ばされてたんだよ……まあいろいろあったな」

鈴「本当にいろいろあったわね。烏が神になるしね」

レイ「何で鈴がそこまで知ってるの！」

レイが机を叩きながら立ち上がる。

鈴「ふふーんアタシも朔夜と一緒に飛ばされたからね」

鈴は顔をにやけさせながら、みんなにそう言った。さてと、飯も食ったし教室に行くかな

箒「少し話をしようか。朔夜」

レイ「オハナシショウヨ……サクヤ」

ラウラ「少し話をしようか……身体でな……」

セシリア「さあ、朔夜さんお話しましょう。」

何故か四人は武装を展開し俺に向けてきた。やばいな……とりあえず説明しないとな。

朔夜「……と言うわけだ。」

俺が説明すると周りが納得した。するとチャイムがなり、俺たちは急いで教室に向かう。

教室

烏「さてと、みんなアリーナに来い。以上だ」

烏が教壇に乗ってそんなことをほざいていた。

朔夜「こらまて烏！何をたくらんでいる！」

俺は烏に向かってそう言うと烏は溜め息を吐きながら俺に近づき

烏「来てからのお楽しみだ」

烏はそう言ってアリーナに向かう。

千冬「みんなアリーナに向かうぞ」

千冬ちゃんはそう言って生徒たちをアリーナに向かわせようとした。

ちょい待て！

朔夜「姉貴よ何をしようとしている？授業は？」

千冬「たまには奴を信じようではないな」

あれ何か可笑しいな～姉貴が有り得ないことを言ってるよ

朔夜「千冬ちゃん、何か烏に言われたか、何かもらったのか？正直にいってくれないかな？」

俺が千冬ちゃんの目を見ながらそう言うと、千冬ちゃんはしぶしぶと何か言い出した

千冬「朔夜の……着替えとシャワーの生写真」

買収したのか烏は！とりあえず締め上げるか……

俺たちは第三アリーナに向かう。

第三アリーナ

朔夜「何だこれ？」

アリーナにつくと、居るはずのない人がわんさか居た。聖夜に龍一、凍司に零、音無？後は誰ですか？知らない人が数名居るんですけど？

朔夜「烏、この人たち誰？」

烏「俺が勝手に拉致って来た」

烏ううううううううううううう！何やってるんだよおい！

志郎「これより、集まれ！強者たち！最強王者決定戦を開始する！」

うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

志郎「お静かに！ルールが無いのがルールだ！楽しんでくれ！」

志郎がノリノリで司会をしていた。

朔夜「龍一、聖夜、お前らは何か話を聞いてる？」

龍一・聖夜「全くだ！」

二人は声を揃えてそう言った。ですよねー

零「……不音君……僕は連れてこられた意味あるのかな？」

凍司「確かに」

龍一「足元見ろよ」

零・凍司「え！」

二人が足元を見るとタイガのカードデッキとオーガギアがあった。

多分烏か……

音無「今度はどんな世界だ？日向たちは何処に行ったんだ？つうか女子の人工率高いな……」

音無はそう言いながら、周りを見ていた。何であいつがバジンにファイズギアを持ってるんだ？すると龍一は音無に気づき

龍一「音無！」

音無「不音！何で此処に！」

二人は知り合いらしいな、久しぶり会うらしいな、なら俺は居なくなりますかな。少し歩くと

？「此処は何の世界か分かる？創記」

？「俺も知らない世界だよ龍美」

男女のペアが居た。知らない世界ね……

朔夜「此処はＩＳの世界だよ旅人たち」

俺はそう言って二人に近づきそう言うと二人はこっちを振り向く

朔夜「俺は織斑朔夜だ。仮面ライダーだよろしく。後烏のせいで変なことにまきこんでごめん」

創記「いいよ。あっ！俺は神矢創記、仮面ライダーだよ。じゃあ君がこの世界を守る仮面ライダーか？」

龍美「わたしは真理龍美。創記君と旅してる仲間だよ」

朔夜「まるでディケイドだな。」

創記「そうだな」

朔夜「また後で会うぜ」

俺はそう言って、神矢たちのところを去る

？「また他の世界に飛ばされたよ……つうかあの黒いの誰？」

俺より少し年上の人がそう言って座っていた。

朔夜「大丈夫ですか？」

？「ああ、君も飛ばされてきたのか？」

朔夜「俺は此処の世界の住人です。俺は織斑朔夜。あなたを飛ばしたのは俺の親友です。まことに申し訳ありません」

ライ「俺はライ、今は他の世界でストライクウィッチーズに所属している。」

ストライクウィッチーズに所属しているのか～

朔夜「へ～、あのパンツをズボンにしてる世界か～」

ライ「そうなんだよな～」

ライとそんな話をして、俺は他の所に向かう。

？「転生した次は異世界に飛ばされたのかよ……」

あら転生者ですか……確かに周りの奴等より、少し違う感じだな

朔夜「お前は誰？」

俺は自分と同じぐらいの男に話かける

齋郷「俺は齋郷英樹。お前こそ誰？此処は何処なのよ？」

朔夜「俺は織斑朔夜だ。そして此処はＩＳの世界だよ。」

俺は齋郷に一通り説明した。齋郷はすんなりと理解した。まあ転生者だからかな？

朔夜「……って訳だ。俺の親友のせいだ。だちの代わりにすまない」

齋郷「気にしないでくれ」

齋郷がそう言うと

ピンポンパンポン

志郎「まもなく前座戦が始まります。後選手の皆さんは控え室に向かってください。」

朔夜「また後で会うぜ。齋郷」

齋郷「ああ、織斑」

俺は控え室に向かう。

控え室

俺は画面に映る。前座戦を見ていた

志郎「青コーナ！次元一のバカ！コクヨォォォォォォォカラスゥウウウウウウウ！」

すると烏がキタキタオヤジの格好で現れた。何やってるんだよ……

……

志郎「そして相方は青いツナギをきて幾つもの美男子を食らってきた奴その名は阿部高和」

阿部「おえっ！女ばかりだと！」

阿部は青ざめていた。ご愁傷様だな……

志郎「赤コーナ最強のサイヤ人ブロリー！と災厄のセイントデスマスクだ！」

ジャンプキャラで組ませたのかよ……

志郎「試合開始！」

志郎がそう言った瞬間に阿部ブロリーの後ろに回り込む。はやっ！ブロリー反応してないぜ

阿部「や・ら・な・い・か」

阿部はツナギを脱ぎ出して、ブロリーを精的な意味で食い始めた。女子が大半が桃色な空気を出し始めたよ……烏はデスマスクをキタキタ踊りで倒すしさ、何でだよ……

志郎「阿部はこの試合の為に3日男を食わなかったそうです。」

志郎要らない情報ありがとう

志郎「勝者。青チーム」

こうして前座戦が終わった

オマケ

烏「これがテニプリの世界1ヶ月の旅チケットだ。これがあれば、幾ら食ってもバレない」

阿部「ナイスだ。烏。ありがたくもらう」

こうしてテニプリの世界に青い良い男が現れたりしなかったりだそうだ

トーナメント開幕するのかな？（後書き）

次回からトーナメント開幕します。

トーナメント一回戦（前書き）

やっと書き終わった……

トーナメント一回戦

志郎「さて前座戦も終わりましたので一回戦いってみようか！幾度の異世界の危機を救うフラグマスター！織斑朔夜！」

朔夜「志郎……潰すよ？」

俺は志郎に殺気放つ。すると志郎は少し震えながら

志郎「悪い……だがこの台本通りに読んだだけなんだ」

朔夜「なら読まなきゃいいだろ？」

志郎「そうする……相手はバカテスの世界から、風紀委員の東城零！」

東城「……僕か……一回戦で敗退かな？」

東城はタイガのカードデッキを右手で持って現れる。俺は何でいこうかな？俺は龍の紋章が入ったカードデッキを取り出す。

志郎「試合開始！」

朔夜・東城「変身！」

俺は漆黒の龍の騎士、仮面ライダーリュウガに変身する。東城は白い虎の戦士仮面ライダータイガになる。

ソードベント

ストライクベント

俺はドラグセイバーを取り出す。タイガはストライクベントでデストクローを喚び出す。

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁ」

俺はドラグセイバーでタイガを斬ろうとするが、

タイガ「喰らわないよ……」

タイガは左のデストクローで受け止めて、右のデストクローで俺の腹に刺してきた。油断した！俺は直撃を喰らい、後ろに飛ばされる。

朔夜「なら此だ！」

ストライクベント

俺は左手にドラグセイバーを移し、ストライクベントのカードをドラグバイザーに入れてドラゴンクローを取り出して構えるが

フリーズベント

突然ドラゴンクローが凍りつき砕ける。

タイガ「やらせないよ……」

マジかよ……なら

アドベント

俺はドラグブラッカーを喚ぶ。するとタイガもあるカードをベントした。

アドベント

タイガはデストワイルダーを喚び出した。互いのモンスターはにらみ合い、叫び声をあげる。スゲー迫力だな～

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は右ストレートを喰らわせるが、タイガはカウンターで左ボディーブローを入れようとしてきた。

朔夜「喰らうかよ！」

俺はバックステップで間合いをとり、ドラグセイバーを右手に持ちタイガに斬りかかる、タイガは白召機デストバイザーで受け止めてきた。パワーが違う……烏め、どんだけチートを造るかな？なら容赦なしでやってやるよ。俺はカードデッキから一枚カードを引くと、蒼い炎に包まれ、更にドラグバイザーが銃の形に変わり、ドラグバイザーツバイになる。俺はドラグバイザーツバイにカードを入れた

サバイブ

俺はサバイブ―蒼炎―を使ってリュウガサバイブになった。俺はカードデッキから一枚カードを抜きベントする

ソードベント

ドラグセイバーでタイガ斬る。更に斬る。

シュートベント

俺はタイガにメテオバレットを放つ。そして

朔夜「とどめだ」

ファイナルベント

俺はダークドラグランザーに股がり、ドラゴンファイヤーストームを喰らわせた。タイガはその場に倒れて変身が解ける。

志郎「勝者織斑朔夜！辛くも、勝利を掴み取りました。」

俺はその場を去る

控え室

俺は控え室に入ると

鈴「お疲れさま朔夜、はいスポーツドリンクで良いよね」

鈴が控え室に入っていて、俺にスポーツドリンクを渡してきた。俺はスポーツドリンクを受け取り

朔夜「ありがとう鈴」

俺はお礼を言って、椅子に座る。するとモニターを見ると

志郎「次は異世界を旅をし罪を背負うライダー５５５の事音無」

音無「まさかこんなことになるとわな……」

音無は溜め息を吐きながら入場してきた。

志郎「音無の相手は、不幸だが幸運を手に入れた！最近は出番がない！Ｘライダー、黒島晃」

晃「こんなことして何の意味あるんだよ……」

晃も溜め息を吐きながら入場してきた。可哀想に……

音無・晃「変身！」

二人は変身して戦闘を開始した。

Ｘライダー「ライドルウィップ！」

晃はライドルウィップで斬りかかるが、音無はファイズエッジで受け止める

ファイズ「喰らわないぜ」

晃「だよな。ライドルロングホーン」

晃はライドルロングホーンで音無の顔面を狙う

ファイズ「うわっ！」

音無は予想外の攻撃のようで、直撃を喰らう。だよな～、更に晃はライドルスティックに変えて追撃をしていく、音無はファイズエッジで何とか受け止める。

ファイズ「間合いがうまく取れない」

晃「とらせるか！」

晃は音無に間合いをとらせないようにつめたりする。音無の声は物凄く余裕がないようだった。

音無「なら」

音無はファイズフォンをバーストモードにして晃に放つ。

晃「ぐっ！」

晃は直撃を喰らい、膝をつく。立場が変わったな。晃の負けだな。

晃「負けるかよ！」

音無「こっちも負けられるか！」

二人はそう言って、殴り始める。あれ？最初はやる気無さそうだったのに今はスゲーやる気に満ちてるし。

朔夜「何だろう。この戦いが熱血格闘マンガに見えるんだけど……」

……

鈴「そうね……アタシにもそう見えるわ」

俺と鈴はやつら二人の試合を見ながらそう言った。だってやるな～とか負けるか！とかフラフラしながら立ち上がって笑ってるんだぜ？そう思っても良いよな？

晃「喰らえ！ライドルロープ！」

晃はライドルロープで音無の動きを封じる。そして空高くに跳び上がる。まさかあの体制は！決める気だな……晃。晃は空中で一回転して、体で一回Xを描いて

晃「Xキーック」

晃はXキックを音無に放つ。音無は直撃を喰らうが辛うじて、立ち上がる。それと同時に、ロープも外れた。音無はファイズポインターにミッションメモリを付ける。更にアクセルのミッションメモリをファイズギアにつけるとファイズアクセルに変わり、アクセルギアのスタートスイッチを押して、高速戦闘に入る。音無は晃を殴り更に蹴り上げる。晃が空中に舞うと、晃の周りには赤い何が無数に現れて、晃を貫く。アクセルクリムゾンスマッシュだ。すると晃の変身が解けて地に落ちた

志郎「勝者！音無」

それと同時に志郎の声がアリーナに響く

トーナメント一回戦（後書き）

次回もよろしくお願いします。

もうそんな時期なんだな……（前書き）

本編です。トーナメントは番外として書きます。中々そっちは更新は出来ないと思います。主に私の文才が無いため……気長にまってくださると嬉しいです

もうそんな時期なんだな……

俺はパソコンを開き、情報収集を開始した。すると昨日アメリカの軍事基地でファントムタスクが襲撃をしていることを知った。やはり襲ったはサイレント・ゼフィルスで奪おうとした機体はシルバリオン・ゴスペルか……俺はパソコンを閉じて、朝飯を食べに学食に向かう。今日は何かあるかな～

・
・
・

時間が経ち夕食

レイ「えっ！？朔夜の誕生日って今月なの！？」

朔夜「あ、ああ」

学食俺はいつものメンバーで夕食をとっていると、レイが机を叩きながら立ち上がる。何故驚きながら立ち上がる？

レイ「い、いつ！？」

朔夜「9月の27日だ。少し落ち着けって」

レイ「う、うん」

レイは椅子に座る。何があったんだよ。

レイ「それって日曜日だよね」

朔夜「ああ。」

レイは立ち上がりはしないが、身を乗り出して聞いてきた。だから何でそんなに興奮してるんだよ。

レイ「そっか……うん、そうだよね。うん！」

つぶやき、うなずくレイを見ていると、ビーフシチューを食べているセシリアがパンを置いて話しかけてきた。

セシリア「そう言う大事なことは早く教えてくださらないと困りますわ」

セシリアは純白の革の手帳に俺の誕生日の日に赤で二重丸をつけていた。そんなに重要なのか？

ラウラ「お前はどうしてそう言うことを黙っているのだ」

ラウラは少しむすっとした口調で告げてきた。

朔夜「別に大したことじゃないからな」

ラウラ「ふん。しかし、知っていて黙っていたやつも居ることだしな。」

鈴・箒「う！」

ラウラに一瞥された、恋人と幼なじみが固まる

箒「べ、別に隠していたわけではない！聞かれなかっただけだ」

鈴「そ、そうよそうよ！聞かれもしないで喋るとＫＹになるじゃない！」

箒と鈴がそんなことを言って、ご飯を頬張る。言い訳するなよ……

……

セシリア「とにかく！９月２７日！朔夜さん、予定を空けといてくださいな！」

朔夜「お、おう。一応中学の時のダチが祝ってくれるから俺の家に集まる予定だが来るか？」

レイ「行く！行くよ！何時から！」

朔夜「四時だな。ほら、当日はあれだし」

俺がそう言うと、みんなが、そう言えばと言う顔をする。当日はＩＳ高速レースバトル『キャノンボール・ファスト』。本来なら国際大会として開かれるものだが、何故だか市の特別イベントとして開かれている。うちの学生は参加することになっている。まあ、専用機持ちが圧倒的に強いため、『訓練機部門』と『専用機部門』に別れるんだがな。学園外でやるため、市のＩＳアリーナを使用する。そのアリーナがめちゃくちゃ広いんだよね。２万は軽く入るらしい。そして明日からは、キャノンボール・ファストの為の授業に入る

朔夜「ガタックハイパーフォームで出ようかな？」

俺がぼそっとそう言うと、ラウラが

ラウラ「それは反則だろう、時を越えるって、有り得ないだろ。」

ラウラに突っ込まれた。良い案なのにな……ハイパークロックアップ

朔夜「何使うかな？」

ニルヴァーシュか？ブラックサレナ？何使うかな？

朔夜「そういや、みんなは部活はどうしたんだ？」

俺はみんなに聞いてみた。楯無が生徒全員強制入部にしたらしい。まあ俺は社長だから、入れないと言って帰宅部のままだ。

箒「私は前から剣道部だ」

幽霊部員だけどな。まあ最近はよく顔を出してるらしい。

鈴「ラクロスよ。」

ラクロスか～どんな競技だっけ？確か、棒を使うはずだったよな？まあ良いか、後で鈴に聞くか。

朔夜「レイは？」

レイ「軽音部だよ。」

朔夜「軽音か～」

まさかのレイが軽音ね～

朔夜「セシリアは？」

セシリア「英国がさかえさせたスポーツテニスですわ」

セシリアは胸を張りながら言ってきた。相変わらず似合うよな。

ラウラ「わたしは茶道部だ。」

朔夜「ラウラは日本文化が好きだよな。まて、確か茶道部の顧問は……織斑先生だ」

ラウラ「教か……織斑先生だ」

だよな～。めっちゃイメージが浮かばないや。和服で茶を入れる千冬ちゃんが

朔夜「ごちそうさま」

俺はご飯を食べ終わったので学食を出た。

外

俺は気分転換に外に出た。すると

ゴロゴロピッシャーン！！！

雷が落ちてきた。何だよこれ！何で雷が此処に落ちるわけ？

烏「失敗したか」

烏お前かよぉぉぉ

楯無「ふーん見たんだ？」

朔夜「ああ。全く興味無いけどな。」

俺は椅子に座りながらそう言う。

朔夜「要件は？ただ遊びに来た訳じゃないんだろ？」

楯無「非公式情報なんだけど……朔夜「アメリカが襲われたんだろ」そう、だから朔夜君もきおつけてね」

朔夜「はいよ」

そう言うと

こんこん

誰かがノックしてきた。

レイ「朔夜居る？」

レイがやって来たのか

朔夜「入っていいぞ」

レイ「お邪魔……会長が何で居るの！」

レンは楯無を見た瞬間そう言った。そこまで驚くか？

楯無「レイちゃんが来たか～ならお姉さんは退場しますかな」

楯無はそう言って部屋からいなくなった。レンは俺を軽くにらむ。

何故に！

朔夜「それよりレイさんは何のご用件ですか？」

俺が聞くとレイはあっそうだみたいな顔をして

レイ「あのさ、朔夜からペンダントをもらったじゃない。だから朔夜に誕生日プレゼントにアクセサリーをあげよと思ったんだけど、どうかな？」

アクセサリーのプレゼントか～、あんまり興味無いんだよな……

朔夜「アクセか～、興味ないんだよな……此もあるし」

俺は待機状態の白式を出す。

レイ「じゃ、じゃあ」

レイは俺に近づき、腕を出す

朔夜「時計とかは便利だよ」

朔夜「時計か……確かに便利だけどケータイがあるしな……」

あるえ？レイがふくれてるんだけど？

レイ「朔夜、かっこいい男子になりたいなら、時計は必須だよ」

かっこいい男子に必要か……鈴に釣り合うようになるために買うか。

朔夜「なら行くか」

レイ「本当！なら、週末に！約束だからね！」

レイはそう言って部屋から飛び出た。

もうそんな時期なんだな……（後書き）

次回も本編です。

行軍訓練今日は寝れないじゃん……その後に穴堀だよ（前書き）

タイトル関係なし。作者がこれからやる仕事の内容

行軍訓練今日は寝れないじゃん……その後に穴堀だよ

鈴「朔夜～さっきレイが部屋から出るのを見たんだけど何してたのよ？」

レイと入れ違いで鈴が入ってきた。

朔夜「いや、一緒に買い物しないかと言われて構わないと言っただけだが？」

それを聞いた鈴は少し不機嫌になる。まあ恋人が他の異性と一緒に居るのは気持ちが良いわけではないしな。周りは俺たちの関係は知らないからな……

鈴「アタシも行くわ。」

やはり予想通りだよまあ俺は嬉しいけど、レイはまあ問題ないだろ。人数が多いい方が楽しいし。

鈴（悪いわねレイ、朔夜とイチャイチャさせないわよ。朔夜はアタシの恋人なんだから）

何だ鈴が何かに燃えている気がする

朔夜「鈴は高機動パッケージはどうなったんだ？」

鈴「届いたわよ。見てなさいアタシが絶対に優勝してみせるから」

鈴は胸を張りながらそう言った。まあ俺は負けるきはないがな、そ

して俺たちはいちゃついて寝た。

次の日

朔夜「ふわ～」

俺は目が覚めて周りを見ると鈴が居なかった。部屋に帰ったのか。
さてと着替えて、鈴とレイと買い物に行くかな

レイサイド

可笑しくないよね。私可笑しくないよね。私は４５分前から集合場所にいて髪を見たりしていた。

レイ「早く来すぎたかな？」

私は手鏡を仕舞って時計を見ると４０分も時間があった。少しリラックスしよう。

チャラ男１「ねえねえ、カーノジョっ？」

チャラ男２「今日ヒマ？今ヒマ？どっか行こうよ～」

ナンパの人たちが来たよ～面倒くさいな～

レイ「約束ありますから」

チャラ男１「えー？いいじゃん、いいじゃーん、遊びに行こうよ」

あーどうやってこの人たちを倒そうかな？

？「俺の連れに何してるんだ」

朔夜がチャラ男2を殴り飛ばしていた。するとチャラ男1がうずくまっていた

鈴「レイこう言うやからは問答無用でたおさなきゃ」

鈴が居た。何で鈴が居るの？

朔夜サイド

チャラ男ズが警察に捕まり、連行去れるのを見送るとレイが口を開き

レイ「何で鈴が居るの？」

朔夜「レイが居なくなったあとに鈴がやって来てな、それで鈴が何でレイが俺の部屋から出てきたのかを聞いてきてな」

鈴「なわけでよろしくレイ」

鈴は物凄い笑顔でそう言った。レイは少し喰らい顔つきになる。

朔夜「さてと何処からまわるか？」

俺たちが歩いているとあれ？何処かで見た顔だよな？あれってまさか。俺はそこに向かって歩いた

鈴「さ、朔夜！」

レイ「どうしたの？」

朔夜「お～い蘭！」

蘭は俺の声を聞いてびくんっと背筋をのばして驚いていた。

蘭「え！？さ、朔夜さん！？」

蘭は手に取っていた下着を背中に隠して数秒固まる。何だろう？後からの視線が痛い。

蘭（見られた！？私、ぱ、ぱ、パンツ選んでる所を見られた。）

蘭が真っ赤になったよ……何があったんだ？あ！そう言う事か！

蘭（ど、ど、どうしよ！？とりあえず、これを戻してっと……って、え？朔夜さん、女の子連れてる……？しかも……鈴さんとうわ……綺麗な金髪……モデルみたいな人だ……）

蘭が何か考えてるみたいだな？何考えてるんだ？

蘭「こんにちは朔夜さん」

朔夜「ああ、こんにちは蘭。今日は一人か？」

蘭「あ、はい。ぶらっと買い物に」

朔夜「そうか。」

俺と蘭が談笑しはじめると、後から何だか負のオーラを感じる

レイ「あの、朔夜？」

朔夜「ああ！悪いな。紹介しなきゃな」

俺はそう言って会話を切り上げた。レイは何が嬉しいのか物凄い上機嫌だった。鈴が更に機嫌が悪くなる。レイと蘭は互いに自己紹介をしている。俺はその隙にに鈴の所に近づき、謝罪の意を込めて頭を撫でた。鈴は少し嬉しそうにしていた。

レイ「あっ朔夜～蘭ちゃん来年にＩＳ学園受けるんだって」

朔夜「そうなんだ蘭。頑張れよ」

蘭「はい！」

鈴「ふ～、入学出来たらアタシが直々に教えてあげるわよ」

蘭「いいです」

鈴と蘭がまたにらみ合いをしはじめる。相変わらず中が悪いよな…

……

朔夜「ケータイ出しなよ。学園に入学する予定なんだよな？なら此見に来なよ」

俺は蘭のケータイにダイレクト接続にしてチケットのデータを転送

する

蘭「此って……」

朔夜「今月行われるキャノンボール・ファストの特別指定席だ。良かったら見に来なよ。参考になると思うから」

蘭「はい！ぜひ！」

蘭は物凄く喜んでいた。そんなに嬉しいとは、あげてよかったな

蘭「あの、私も一緒にまわって良いですか？」

朔夜「構わないが？」

俺が即答すると蘭が倒れそうになった。鈴とレイが蘭を受け止める。それから、鈴たちが俺の誕生日プレゼントを選びに行く。俺は暇だ。するとケータイが鳴り出した。ドリフターズのテーマまさか！

朔夜「何のようだ烏」

烏「いや～誕生日プレゼント何が良いか聞きたくてな」

朔夜「何でも良いよ。欲しいの無いしな」

烏「分かった！何でも良いんだな楽しみにしていろ！」

烏は電話を切る。何か嫌な予感がするんだがまあ良いか

鈴「お待たせ朔夜。」

鈴たちが戻ってきた。レイが俺に箱を渡す

レイ「開けてみて」

レイに言われたので箱を開けると中からは漆黒の時計が出てきた。
白式とは正反対だな。それも良いな

朔夜「ありがとう」

俺はそう言って、お礼を言う。そのあとは昼食を食べたり、ゲーセンに行ったり楽しむ

朔夜「楽しかったな」

蘭「はい！久しぶりに楽しみました」

レイ「私もこんな生活は久しぶりだよ。」

そう言って歩いていると何かが横を過りビルを破壊する。あれはオウムヤミーなんで此処に居るんだよ！敵さんには休暇は無いのかよ……

蘭「な、何ですかあれ……」

蘭は初めて怪人を見たため腰が抜けていた。

朔夜「鈴、レイ、蘭を頼む」

俺はオーズドライバーを腰に巻いてコアメダルをドライバーにセッ

トして、スキャナーでスキャンした

タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

俺はオーズ・タトバコンボになる。

蘭「朔夜さんの姿が変わったな。何ですかあれ……」

蘭は俺の姿が変わったことに驚いていた。俺はトラクローを展開し斬りかかる。更にバッタレックで蹴りを入れようとするがかわされる。俺も空を飛ぶか。俺は金色コアを取り出してスキャンする

タカ・グリフォン・バッタ

俺の胴体はカマキリの腕の部分が羽根に変わり、カマキリの絵がグリフォンそして金色になっている。そして背中から翼を出して飛ぶ。

オウムヤミー「そんなコアは知らんぞ」

朔夜「知らないだろうな」

俺は羽型の短剣グリフォンダガーを出して斬り裂く。

スキャニングチャージ

俺はグリフォンダガーに力を貯めてオウムヤミーに投げつけた。オウムヤミーは爆散する。

朔夜「結局やつは何がしたかったんだ?」

俺は地面に着地して変身を解く

蘭「朔夜さん……さっきのは……」

朔夜「秘密だよ蘭。さてと帰りますか」

俺たちはそれぞれの場所に向かう

レイ「朔夜、蘭ちゃんに……」

朔夜「教えていないさ。蘭を危険にさらわしたくないからな」

俺はそう言って学園の中に入ろうとした。

箒「朔夜何処に行っていたのだ」

朔夜「あ！箒か。鈴とレイと買い物だ」

箒「そうか……なら今度は誘ってくれないか（ちっ出遅れてしまった）」

朔夜「了解。」

行軍訓練今日は寝れないじゃん……その後に穴堀だよ（後書き）

次回もよろしくお願いします

なぜなにナデシコ……なわけないだろ？（前書き）

途中からオリジナル

なぜなにナデシコ……なわけないだろ？

朔夜「さてと、烏何故……俺の部屋に居るんだ？」

烏「お前が一人部屋だからだ。」

現在俺は烏と一緒に居た。せっかく鈴といちゃつこうとしたのに……。まあ毎日来てたら怪しまれるから良いか

烏「さてと、これ、新しい白式のパーツ＞疾風＜だ今までの五倍の速さは出るぜ」

朔夜「サンキューじゃあ大会で使うわ」

俺がそう言うと烏は笑いながら

烏「俺も大会に出るからゲッターで」

はい？今何て言った？大会に出るから？ゲッターで？空耳だよな？嘘だよな？

朔夜「マジかよ……」

烏「マジだ。さてと俺は寝るぜ」

烏はそのまま寝た。俺も寝るかな。俺も深い闇に意識をはなした。

次の日

千冬「では今日はキャノンボール・ファストに向けての訓練を開始する。先ずはオルコット、朔夜後は黒葉おまえたちが先ずはやってみろ」

セシリア「はい！」

山田「まずはオルコットさんの説明です。高速機動パッケージ『ストライクガンナー』を装備しています。」

セシリアはストライクガンナーを装備したブルーディアーズを展開した。俺と烏は

朔夜「マジでやるのかあれ？」

烏「当たり前だろ？何で渡したかわからないだろ？」

朔夜「はいよ……発進する」

俺はブラックサレナを展開して、発進準備をする。烏はニルヴァーシュを展開していた。

山田「織斑くんと黒葉くんは説明が出来ません。あれは」

山田先生は若干涙目でそう言っていた。まあ確かに何とも言えないよな……そして俺たちはコースを一周して、調整を開始する。しかしあれだな、クロックアップより断然遅いな……

烏「俺がツッコムのは久しぶりだが、クロックアップと一緒にするなよ……あれは普通のスピードの千倍以上なんだからよ……」

あら烏にツッコミ入れられたよ。そんなこんなで授業が終わってしまった。

夜

朔夜「一夏、飯を食いに行かないか」

俺は一夏を飯を食いに誘った

一夏「いいが、お前が俺を誘うとは珍しいな」

朔夜「まあな、気にするな」

そして俺たちは食堂に向かう。俺はカツ定食、一夏カルボナーラを頼んで席に座る。

朔夜「一夏……お前は誰かと付き合わないのか？」

俺の一言に食べていたカルボナーラを吐き出す。

一夏「けほ、けほ、何を言い出すんだよ朔夜！俺は特定誰かと付き合う気はない！」

朔夜「でも最初はハーレム作る気だったんだろ？」

一夏「確かにそうだけど今は無いよ。むしろ独り身の方が今は良いかな？」

一夏はそう言って、またカルボナーラを食べ始めた。今は独り身が

良いか……まあ一夏が良いなら良いか

一夏「朔夜はどうなんだよ?好きな奴はいないのか?」

朔夜「お、お、俺は……」

一夏の質問に俺はめちゃくちゃたちろいだ。正直に話すか話さないか……

朔夜「まあ……いるけどさ……言いたくない……」

一夏「ならいいや」

一夏は食べ終わったフォークを置いていた。そしてお茶を飲み始めた。そんな感じて飯は終わった。

次の日

朔夜「なんじゃこりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

俺は仕事で遅くなり、二時間目から授業を受けることにした。そして教室に入ると烏が授業をしていた。何故にＬＢＸ!

烏「此がこうなるわけだ。分かったか?」一同「わかりました。黒葉先生」

朔夜「何やっとるんだ!」

俺は伝家の宝刀『ＨＡＲＩＳＥＮ』で烏をひっぱたく。すると烏の

頭が吹き飛んだ。

烏「痛いだろうが」

烏はそう言って首に大豆を乗っけて頭を再生させる。

朔夜「いや、もう神なんだし普通に再生させろよ。」

烏「こっちの方がしっくりくるんだよ」

烏は笑いながらそう言ってきた

朔夜「しっくりって黒いわ！何触手出しながら再生してるんだよ！周りから見たら黒いわ！近づきたくないわ！」

烏「今度からは控えるわ」

朔夜「つうかやるな！てか何でＬＢＸを教えてるんだよ！」

烏「自習だからさ！」

烏は笑いながらそう言ってきた。もう頭が痛いよ……今日早退して良いかな？

烏「それよりもお前も受けろよ。ほれＬＢＸ」

烏は俺に桜零号機を渡してきた。何故に桜零号機？俺はフェンリルかイフリート派だ！

烏「さて続きだが」

朔夜「授業しろ！」

俺は桜零号機でツッコミを入れた。疲れたよ……母さん……

烏「わかったよ。授業するよ……」

朔夜「てか何でお前が教師やってんの？」

烏「何故ってコアを作れるからだろ？」

やはりか！俺はあれ……何だか体に力が……

？「起きてください！」

誰だろ？何処かで聞いたことある声だ？

？「起きてください！」

朔夜「うお！」

俺が起きるとそこは木造の別荘みたいな場所だった。あれ？これ何

処かで見た覚えが有るんだけど?あっ!なのはのＶＩＶＩＯの世界
そしてルーテシアの別荘か……何故に俺が此処に居るんだ?

ルーテシア「大丈夫ですか?」

ルーテシアが目の前に居るよ……とりあえず返事しとくか

朔夜「ああ、問題ない。」

俺はそのまま立ち上がり、外に出ると

ヴィヴィオ「なのはママ、倒れていた人が起きたよ」

なのは「あっ!本当だ。君調子悪いとこ無い?」

なのはにそう聞かれた。

朔夜「問題な……く!」

頭が痛む……何故だ!確かに何も異常は無いはずなのに!くそ!

ヴィヴィオ「大丈夫ですか?」

ヴィヴィオが俺に近づけてきた。やっと痛みが引いたか……

朔夜「すまない……君は誰だ?」

俺は知っているがむこうが知らないから、とりあえず名前を聞く

ヴィヴィオ「わたしは高町ヴィヴィオだよ。君は?」

朔夜「織斑朔夜だ国立ＩＳ学園の一年だ。後世話になった。帰るわ」

ヴィヴィオ「ちょっと！」

俺は周りの奴等を押し退けて帰ろうとしたが

朔夜「次元オーロラが出ない……あれ次元通信も出ない……」

ヴィヴィオ「何やってるの？」

朔夜「帰ろうとしただけだ。」

すると、ウニアルマジロヤミーが現れた。

アインハルトや元六課メンバーが現れた

フェイト「何事ヴィヴィオ」

ヴィヴィオ「フェイトママあれ」

ヴィヴィオはウニアルマジロヤミーを指差す

スバル「あなたは何者……」

スバルが言い終わるまえに、スバルを気絶させる。そのまま、エリオつうかなのは、フェイト、アインハルト、ヴィヴィオ以外を気絶させる。手際よすぎだろウニアルマジロヤミー

なのは「みんな！」

フェイト「許さない！」

アインハルト「あなたを倒させていただきます。」

ヴィヴィオ「いくよ！」

みんなは戦闘態勢に入り、攻撃するがウニアルマジロヤミーはダメージが余り無いようだ。

朔夜「どけ！俺が殺る」

俺はポケットに入れておいたオーズドライバーを腰につけて、メダルを入れてスキャンした。

クワガタ・トラ・コンドル

俺はオーズガタトラドルになり、トラクローで斬り裂くながらラプタードエッジで真空刃で斬る。しかし余り利いていないようだ。なら

朔夜「これならどうだ！」

タカ・クジャク・コンドル

タ～ジャ～ドル～

俺はオーズ・タジャドルコンボに変身した。火炎弾を放ち、そのままタジャスピナーを回転させてウニアルマジロヤミーを斬り裂く。

スキャニングチャージ

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁ、せいやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はプロミネンスドロップをウニアルマジロヤミーに喰らわせて爆散させた。

なぜなにナデシコ……なわけないだろ？（後書き）

アンチスパイラルとの戦いが終わった大グレン団しかしゼントラーディとの新たな戦いが始まる

次回ピタゴラスイッチ『愛、覚えていますか』お楽しみに

朔夜「嘘だ！！」

天現れる（前書き）

書き終わった。仕事が忙しい……

天現れる

俺はとりあえず事情を話受け入れて貰った。しかし一つやばい事態が起きた。それは神力が解放出来ず、ダークネスに変身が出来ないのだ。神力が解放出来ない。俺の身体は現在普通の人間より頑丈なだけ、つまり現在オーズのコンボの連続使用に身体が耐えられないのだ。序でにライダーツールはオーズ呑み

朔夜「やっていけるのかな?この体で…」

俺は夜空を見上げながらそんなことを考えていると

ヴィヴィオ「朔夜さんどうしたんですか?」

ヴィヴィオが俺に近づいてきた。俺はヴィヴィオの方を振り向き、

朔夜「まあちょっとね……」

俺はそう言って座り込む。ヴィヴィオも俺の隣に座る。そしてヴィヴィオは

ヴィヴィオ「話してはくれないのですか?」

朔夜「まあ俺の問題だし、話しても何も変わらないからいいよ。」

ヴィヴィオ「そうですか……」

ヴィヴィオは悲しそうな顔をした。異世界でも自分の娘にそう言うのは辛いな……

朔夜「ヴィヴィオ、俺の後に居ろ。」

俺は敵の気配を感じて、オーズドライバーを腰につけて、メダルをセットする。すると現れたのはテラードーパントにスミロドンドーパントだ。

朔夜「変身！」

タカ・ウナギ・チーター

俺はタカウーターに変身し、ウナギウィップで電流を流しながら、スミロドンドーパントを叩く。しかし余り効いていない。なら、コイツでぶちのめす！俺はコアメダルを入れ換えてスキャンした。

タカ・ゴリラ・チーター

俺はタカゴリータになり、ゴリラバゴーンで殴り飛ばす。チーターの能力でスミロドンドーパントの後に回り込み更に殴り飛ばす。更にアームハンマーを喰らわせて、スキャナーでメダルをスキャンする。

スキャニングチャージ！

俺は腕に力を溜めてロケットパンチを喰らわせてスミロドンドーパントを撃破する。するとテラードーパントは黒いドロドロの物を地をはわせて俺に近づけてきた。あれはやばい。空飛ばないと！俺はクジャクコアとコンドルコアを取り出してスキャンする。

タカ・クジャク・コンドル

タ～ジャ～ドル～

俺はタジャドルコンボになり、空を飛んで攻撃を回避する。しかし黒いドロドロした何かは俺を追尾し空に上がってくる。俺は回避したが、足を捕まれ、叩きつけられた。クソ！抜かったか！更に精神攻撃を喰らう。

朔夜「がぁぁぁぁぁぁぁ！頭が！止めろ！そんな目で俺を見るな！止めてくれ！止めろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

俺は変身が解けてその場に倒れた。クソ！よりにもよってあれを思い出したのかよ！ヤバイ……力が入らない。するとヴィヴィオが大人モードでテラードーパントを殴ろうとしたが、テラードラゴンの体当たりを喰い吹き飛ばされる。そのまま大人モードが解けた。

朔夜「ヴィヴィオ！」

クソ！護れないのか！例え違う世界のヴィヴィオだけど護れないのか！クソ！神力が無ければこの様か！力が、力が欲しい！誰かを、大切な物を守る力が！

ズシン！ズシン！

俺が力を求めていると、ズシン！と言う音が聞こえた。まさかね……音がなる方を見ると両サイド三編みで紐パンで胸を張りながら歩いてくる変た……烏が歩いてきた。あいつは恥ずかしくないのか？つうかどうやってやって来たんだ？

烏「待たせたな朔夜！」

紐パン烏が俺に近づき手を差し伸べてきた。俺はこんな変態を仲間にした覚え無いんだが……

朔夜「何でお前はそんな格好なんだよ！」

俺は怒り任せで烏を殴る。すると何故か闇の力が発動していた。まさか力が戻ってたのか？まあ烏のおかげだな。俺は闇の力でダークネスドライバーをだします。烏もクロウドライバーを出した。

朔夜・烏「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

ライダーチェンジ・アマツ

俺はダークネスに烏は俺の知らないライダーに変身をしていた。遊戯王の孤高のシルバーウィンドをライダー化させて、肩、腕、脚にはゼオライマーのパーツが付いている。

烏「天から舞い降りしライダー！仮面ライダー天（アマツ）！」

烏は変なポーズをつけながらそう言っていた。烏は天に人差し指をさしているとその指に雷が落ちてきて電気が溜まる。その指をテラードラゴンに向かって指す。

烏「サンダーブレェェェェェク！」

烏はそのまま雷を放った。何処の偉大な勇者だよ。テラードラゴンは雷もといサンダーブレイクを喰い地面落ちる。烏は空を飛び、胸

の前で拳を打ち付ける。

烏「塵までも分解してやるよ！メイオウ攻撃」

テラードラゴンに大量のエネルギーが放たれた

烏「ハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！」

烏が狂い笑う。何がコイツに起きたんだ？

朔夜「まあいいか……」

俺はテラードーパントに拳を構えて殴りかかる。テラードーパントは俺の拳をもろに喰い吹き飛ぶ。

朔夜「例え違う世界のヴィヴィオだが、俺の娘に手を出した罪その身で償え！」

俺は更に回し蹴りを放ちそのまま回転しながら

朔夜「ダークネスインパクト！」

俺は闇の力を込めた拳をテラードーパントに放つ。テラードーパントは吹き飛び爆発した。あら呆気ないな。俺はヴィヴィオを抱き抱えながら、家に戻る。そして帰ることを伝えると、アインハルトが一戦まじえたいと言い出した。な訳で

朔夜「2対6の模擬戦開始だ。」

俺と烏対なのは、フェイト、ヴィヴィオ、アインハルト、キャロ、エリオだ

烏「さてと何が出るかな？」

烏はフライパンとフライ返しを持って、フェイトに突撃した。はやっ！そのままフライパンで

烏「ターンオーバー！」

フライパンでフェイトを打ち飛ばす。あーフェイトが星になった！

烏「キラッ？」

烏がランカのキラッ？をやったよ……するとなのはが震え出した

なのは「よぉぉぉぉぉくもー、うちの嫁に手をー、出したな～」

あるえ？声としゃべり方がバルバトスになってないか？

なのは「今日の俺は紳士だ！一撃でしとめてやるよ！ジェノサイドブレイバァァァァァァァァァ！」

なのははエクセリオンバスター（ジェノサイドブレイバー）を放ってきた。烏はマンボウを出して打ち返した

なのは「なんだとぅ！」

そのまま烏はなのはに近づき

烏「マンボウラッシュ！」

なのはをマンボウで殴り付けた。なんでマンボウ……すると横か

らヴィヴィオとアインハルトが俺を殴ろうとしたが俺は紙一重で避けてヴィヴィオの拳がアインハルトに当たり、アインハルトの拳がヴィヴィオに当たる。俺は白式を展開して雪羅を構えてカノンモードで攻撃する。二人はそれを避けるが雪片弐型で俺はヴィヴィオを斬る。そのまま俺はアインハルトに向かってヴィヴィオを蹴り飛ばした。俺はイグニッションブーストでエリオに近づき、

朔夜「喰らいな」

俺はエリオを袈裟斬りにする。その時には烏はキャロを倒していた。なんつう早さだよ……。そんな感じの一方的な戦いだった。

天現れる（後書き）

ＲＸ「ＲＸのなぜなにアールエーックス！はい始まりました。なぜなにＲＸ！此は私、ＲＸが皆様の質問に答えるコーナーです。まあこの作品のキャラについての質問しか答えませんが……はい今日のゲストはフェイトです」

フェイト「どうもフェイトですアル私が出てもいいのかな？」

ＲＸ「大丈夫ですよ。フェイト。さて最初の質問はＩＳ学園お住まいの金髪英国少女さん。セシリアさん……変なペンネームにしましたね『ＲＸさんこんばんわですわ』はいこんばんわ『烏さんはどのぐらいの強さなんですか？』主の強さですか？朔夜さんなら解ると思います。朔夜さん」

朔夜「烏の強さは、俺よりワンランク下だな。俺が本気出すと次元崩壊だから、烏は次元の半壊かな？」

ＲＸ「だそうです。次はこれもＩＳ学園お住まいの中華娘さん。まんま鈴音さんですね……『ＲＸこんばんわ』はいこんばんわ。『朔夜の誕生日プレゼントは何が良いかな？後朔夜との結婚式はウェディングドレスが良いかな？』誕生日プレゼントは心がこもってれば良いと思います。後結婚式はまだ早いで……フェイトどうしました？」

フェイト「朔夜との結婚式ってどういうことかな？アルは知ってるんだよね？」

ＲＸ「それはその……（この事は言えない）すいませんフェイト」

フェイト「待ちなさいアル！」

朔夜「そんなことでなぜなにＲＸは終わり。キャラなどの質問がありましたら、ユーザーメール、感想に書いて下さい！次回もサービス！サービス！」

女の戦い（前書き）

書き終えたよ。プロアクが壊れた

女の戦い

俺は異世界から自分の世界に戻る。

鈴「何処に行っていたんだバカぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は部屋に入ると鈴に思いっきり蹴られた。何でだよ……

鈴「朔夜！あんた何処に言ってたのよ！心配したじゃない！またいっぱい傷ついてきて……」

鈴は涙を浮かべながらそう言ってきた。鈴に凄く心配かけちまったな。俺は鈴を優しく抱き込む

朔夜「心配かけてごめんね鈴。大丈夫。俺は死なないし、鈴の側に居るから。むしろ俺は鈴が居ないと困るし。」

そう言うと鈴が真っ赤になるのがわかった。そして俺たちは見つめあってそのままキスをしそのまま愛し合った。しかし俺たちは知らなかった。それを覗いていた一人の女がいたことを

箒サイド

嘘だ！アレは嘘に違いない。私は断じて認めない！朔夜が鈴とあんなことをするなんて私は断じて信じられない！きっと鈴から迫ったのに違いない。何せ朔夜は色んな女と肉体関係を持っているしな、しかしあの朔夜の目と表情本当にいとおしいものを見る目であった。やはり朔夜……嫌だ！あの目は私に向けてほしい！やるなら私一人にしてほしい！私以外の女と付き合わないで欲しい！私は朔夜の部屋の前から走り去り、剣道場に向かった。私は剣道場につくと、

竹刀を持って一心不乱に振り始めた。さっき見た光景を思い出さないように、忘れるようにと。しかし忘れられない、思い出してしまう。すると一人の女が現れた。

？「お前は、凰鈴音が憎いか？」

箒「ああ、鈴は私から朔夜を奪った。だから憎い。」

？「なら奪い返したいか？」

箒「ああ、奪い返したい。そして二度と私から離れないようにしたい。」

？「ならその願い叶えよう。」

すると女は私にＵＳＢメモリを渡してきた。此は朔夜が使ってたものとにてる。これさえあれば負けない。誰にも負けない。

朔夜サイド

さて、事が終わり、鈴と布団の中でまったりしていた。そして適当な話をしていた。そして俺たちは布団から出て朝食を食べに学食に向かう。すると学食の入り口に箒が腕を組んで立っていた。何だ？箒は鈴を思いっきり睨んでいた。

朔夜「おはよう箒。」

箒「ああ、おはよう朔夜。少し鈴をかしてくれないか？二人で話をしたい。」

鈴と二人で話したい？何でだ？まあ良いが

朔夜「良いけど？」

そして鈴と箒は学食から出ていった。まあ暇だし、部屋で飯でも作って待ってようかな？俺は鈴にメールを入れて学食を出る。すると

イニュージョン「久しぶりだな。闇の神」

イニュージョンが木に寄り掛かっていた。こいつは何の用なんだ？俺はダークネスドライバーを出して臨戦体制に入るが

イニュージョン「俺はお前と戦う気はない。それより早く愛しの鈴音の所に行きな。早くしないと死ぬよ」

鈴が死ぬ？何でだ？まさか！俺は鈴の気配を探しながら走り出した。無事でいてくれ

鈴サイド

アタシは箒に連れられて、人気の無いところに来た。

鈴「箒何のよう？アタシ、お腹空いてるから用件は手短にして欲しいんだけど？」

箒「大丈夫だ。用件は短い。……

……

……死んでくれ」

ジェラシー

突然箒はガイアメモリを取り出して、スイッチを押す。何で箒がガイアメモリを持ってるのよ。朔夜が渡すわけ無いし。烏は流石にそこまではしない。箒はジェラシードーパントになる。アタシはモーバイレーツとゴーカイピンクのレンジャーキーを取り出す。朔夜からもらっといて良かった。

鈴「何でアタシが死ななきゃいけないわけ？てか笑えない冗談ね」

箒「冗談ではないからな。」

箒……ジェラシードーパントは禍々しい剣を出して、アタシに斬りつけてきた。アタシはモーバイレーツにレンジャーキーを差し込み

鈴「豪快チェンジ！」

ゴォォォォォカイジャァァァ！

アタシはゴーカイピンクに豪快チェンジをして攻撃を弾く。アタシはゴーカイガンを出して射つが全て弾き返していた。箒あそこまですごかったけ？しかし、なんとかしないと、アタシの勘が告げている。このままジェラシードーパントのまんまにしたら箒が死ぬ。アタシはゴーカイサーベルで斬りかかるが剣で受け止められ、お腹を蹴られる。

箒「鈴、貴様がうらやましい！そして憎い！それも朔夜からもらったのだろ？」

鈴「ええ。そうよ」

箒「貴様は朔夜に愛される。それがうらやましい！憎い！」

箒は剣を私に振りかぶってきた。アタシはゴーカイサーベルで受け止め、ゴーカイガンで箒のお腹を撃つ。箒は怯み後退する。

箒「鈴御前は朔夜と付き合っているのか？正直に言え！私は昨日お前と朔夜がしているのを見た。」

嘘！昨日の事を見ていたの？箒が！言いたくないけど言うしかないのかな？

鈴「ええ、朔夜はアタシの恋人。将来を誓ったなかよ。」

アタシがそう言うと、箒から禍々しいオーラが膨れ上がる。

箒「貴様が憎い！キサマヲコロス！」

箒がアタシに斬りかかる。怒りで動きが単調で簡単に避けられる。アタシはバックステップで避けるが、黒い何かがアタシを襲う。アタシはとっさに防御するがアタシは吹き飛ばされる。すると

朔夜「りーん無事かー！」

朔夜が現れた。すると、朔夜はジェラシードーパントを睨む。

朔夜「お前が鈴を傷つけたな。それと箒をどこへやった。」

鈴「あのドーパントが箒よ」

朔夜サイド

えっ！あのドーパントが箒……何でどうしてなんだよ……

朔夜「何で……何でガイアメモリに手を出したんだよ箒！」

箒「リンガウラヤマシ。ニクイ。チカラガアレバ、サクヤヲワタシノモノニデキル」

荒んじまってるな……それと俺が箒を選ばなかったからか……しかし俺は鈴が好きだ、愛している。こればかりは譲れない。ならメモリブレイクするしかないか……

鈴「アタシに倒させて、此はアタシと箒の問題だから」

鈴はゴーカイサーベルを構えて立ち上がる。仮面越しだが強い意思が伝わってきた。

朔夜「なら勝ってこい鈴」

鈴「当たり前よ」

鈴は笑いながらそう言う。今の鈴なら勝てるかな？

鈴「往くわよ箒！」

鈴は地面を蹴り駆け出した。それと同時に箒も駆け出す。鈴はゴーカイサーベルで胴を斬ろうとする。しかし箒の剣が鈴の首を狙う。鈴はしゃがみながら箒を斬り裂く。更に空いた手でゴーカイガンで背中を撃つ。鈴はゴーカイベルトからレンジャーキーを出す

鈴「豪快チェンジ！」

シィィィィンケンジャァァァァァ！

鈴はシンケンピンクに豪快チェンジする。鈴はシンケンマルに亀ディスクを付けてディスクを回転させる。

鈴「シンケンマル天空の舞」

鈴は箒に天空の舞を喰らわせる。箒は元の姿に戻り、ガイアメモリが体内から排出される。鈴は倒れそうになる箒を受け止めた。

女の戦い（後書き）

ＲＸ「ＲＸのなぜなにアールエックスー（やる気なし）」

箒「どうしたＲＸ？やる気なさそうに？」

ＲＸ「主が…」

箒「そうか…ではさっそく手紙を読む次元の一角にお住まいの彩々輝龍からの質問です。『一夏（転生者）に質問…どっかの話で「特定の娘と付き合う気はない」みたいな事言ってたけど、正直言って…気になる娘は居る？』です」

ＲＸ「その質問ですか？それは本人に聞かなければわかりませんね」

箒「そういう訳で本人を呼んでみた」

一夏「どうも。」

箒「貴様には好きな人はいないのか？」

一夏「いないな。みんなあれだし。みんな外見だけで心から好きだと思ってないからな。」

箒「なるほどな、ここの学園は男に植えてるからな」

ＲＸ「彩々輝龍さんわかりましたか？」

RX「次の質問はクロスワールドお住まいの金の死神の質問です。…フェイトあなたは…『烏の年齢は何歳なの』主の年ですか?私もわかりません。」

箒「わからないのか?朔夜ならわからないのか」

RX「いえわかりません。朔夜さんと主は生きてる年が違いますから。朔夜さんはトリップを繰り返して、生きてる年数が違うんでわからないらしいです」

箒「そうなのか…」

一夏「そういう訳でなぜなにRX次回もサービス!サービス!」

キャノンボールファスト（前書き）

書き終えたぞ

キャノンボールファスト

さて、箒の件があり、いろいろ説明をして飯を食って俺たちはキャノンボールファストが行われる会場に向かう。箒に鈴と付き合ってるから諦めてくれと言ったら、逆に諦めないと言われた。さて何で俺の周りにはこういった女しか居ないのだろう?俺は会場に入ると?「さて始まりましたキャノンボールファスト!司会は『友の応援の為にはるばるやってきた男スパイダーマッ!』が司会実況します」

志郎が司会と実況をしていた。

朔夜「志郎ぅぅぅぅぅぅぅぅぅ!お前は何やってるんだよ!」

志郎「さてキャノンボールファストのルールは先にゴールにつけば勝ち。妨害はあり、コースアウトは失格になります。」

志郎は俺の叫びには気づかず司会を続けていた。俺は諦めて選手控え室に入った。俺は着替えて、迷う、スコープドックにするか白式を使うかそれとも違うものにするか、何にするか……もういいや!目をつぶって選ぶ。俺はありったけのＩＳを出して目をつぶって選ぶ。手にとったのは……マジかよ……俺は選んだＩＳを手に持って後はしまい、会場に出た。

朔夜「何か凄いな観客の数が」

鈴「そんなんで驚かないの朔夜」

朔夜「まあ確かになもっと人数が多いのがあるしな。これは学校行

事だし」

俺たちはそんな話をしていると

セシリア「鈴さん！抜け駆けは許しませんわよ！」

ラウラ「鈴！わたしの嫁をとろうとは万死にあたいする」

レイ「ずるいよ鈴！朔夜をとるなんて！」

箒「朔夜は鈴にホントひいきだな……まあ理由はわかっているがな……」

専用機メンバーが現れてきた。すると後から

簪「久しぶり……朔夜……」

更識簪が現れた。こいつも専用機持ちだったんだ

朔夜「久しぶり簪。元気にしてたか？」

簪「……うん、元気にしてた……」

そう言って顔を赤くしていた。すると周りから物凄いオーラを感じる。特に斜め後と隣から（斜め後は箒、隣は鈴）やばいな、斜め後から日本刀を抜く音が聞こえるし、隣からはモーバイレーツの起動音が聞こえるよ。

朔夜「箒？鈴？何をしているのかな？」

鈴「いや、ちょっと朔夜におしお……いやお話をしようと」

箒「私は調ｋｙ……いやＯＨＮＡＳＩしようと思ってな」

何かとてつもなく怖いことを言ってるんだがこの二人は。更にそれを聞いた周りの方々（簪以外）は各々武器を構えて俺に近寄る。俺死ねるんじゃね？なら最終奥義だ。まわりの奴等は俺に武器を振りかぶる。

朔夜「ひさぶりの晃シールド！」

晃「何でこんなことに！」

シャル「晃ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は晃をシャルに返してその場から逃げる。死ぬこのままだと死ぬ何か考えなきゃ死ぬ！説明しても聞いてくれなさそうだし。まあ鈴は聞いてくれそうだがな……俺は時間になるまで逃げていた。鈴に簪との関係を話して。まあ関係は昔遊んだ仲なだけだがな。

鈴「朔夜そのＩＳは何？」

朔夜「何ってうーんスコープドック」

俺はスタート場所に居て鈴と話していた。俺が装備したのはスコープドックＬＲＳ（ラストレッドショルダー）を装備していた。結局こいつを手に取ってしまったのだ。更にコイツは空が飛べない。まさにやばい機体だ。更に烏はブラックゲッターだし、一夏はミーティアＳＦ（ストライクフリーダム）だし晃はファイナルダンクーガ擬きだし。みんなキャノンボールファスト使用だし、飛べるし、みんな撃ち落とすか。すると

恭介「負けるなよ理樹！」

あれ？何か恭介が居るよ？真人がでっかい旗に『理樹ファイトだ』とか旗に書いて振ってるし俺、疲れてるんだよな……しかし見間違えじゃないし、沙耶が一番上からドラグノフ構えて周りの奴等を邪魔しようとしてるし鈴何か(リトバス)『負けるな理樹』とか言いながら猫とじゃれてるし葉留佳はシャカシャカヘイ！してるし小毬はワッフル食べて幸せそうにしてるし佳奈多はまあ普通に応援してくれてるな姉御は『理樹くんが何処まで行けるか楽しみだな』とか言って笑ってるしな

志郎「提供はバンダイと黒金カンパニー、起動六課とローレライ教団以下の提供でお送り致します」

いろいろ可笑しいんですが？気のせいだよな？気のせいだろ？そして俺たちはスタートした。みんな爆走を開始したが、俺はそれに続いて走り出した。俺はガトリングを構えてレイに撃つ。レイはビルトファルケンを使ってるからなかなか当たらない。俺はミサイルを乱射する。レイはそれに気づきミサイルを放ち相殺するそれにより爆風が起きてみんな吹き飛ばされる。約一名例外がいるが、俺は壁走りをして、みんなを抜く

鈴「行かせないわよ」

鈴は衝撃砲を放つが俺はそれを感で避けて更に加速する。やばいやばいあれに当たったら落ちるところだったぜ……スコープドックは極端にシールドエネルギーが少ないからな～俺は烏の横に並び烏に向かってマシンガンを連射するが烏はゲッターマシンガンで俺の放った弾を撃ち落とす。なかなかだよ。俺はミサイルを放つ。烏はゲッタービームで撃ち落とす。クソ！弾が無くなる。すると後から

ビームとミサイルが大量に飛んできた。まさか！ミーティアフルバースト！一夏か！俺は地上に降りて回避烏も回避した。俺はありったけの弾をミーティアに放つ。ミーティアは爆発したが、本体のSフリーダムは残っていた。くそ！勝てる気がしない！残り武器はナックルだけだ……俺は壁走りをまたしはじめる。走ってSフリーダムに近づき蹴りを入れるが、相手はPS装甲攻撃は通らない。普通に考えればSフリーダムは最強だもんなエネルギー切れは無いし。するとコースが突然爆発した。そして上空にはグルンガスト弐式、ヒュッケバイン、ヴァイサーガが居た。何このスパロボ！その後にはサイレントゼヒィルスが居るよ。

グルンガスト「ヒャッハー！居るぜ居るぜ！メインヒロインたちが」

ヒュッケバイン「誰にする？僕はシャルとそれに似た子」

ヴァイサーガ「俺は箒だ」

グルンガスト「俺は鈴とラウラだ。あいつらを俺の奴隷にする」

何言ってるんだコイツら？鈴を奴隷にするだと？すると一夏が前には出てクスヒィアスを放つ。

一夏「こいつら、俺に殺らせてくれないか？見てて昔の俺を見てる気がしてやなんだ」

一夏がビームライフルを構えてそう言った。

朔夜「グルンガストは俺に殺らせてくれるなら」

一夏「上等！」

晃「俺も混ぜろ。誰かがシャルを奪うとか言い出したから」

すると晃も乱入してきた。いいじゃん、俺らはそれぞれの敵に向かう。

晃サイド

俺はヒュッケバインにダイガンを放つ。奴はシールドで防御する。

ヒュッケバイン「君に興味ないよ。僕はシャルにようがあるんだ。あ～早くシャルを僕の物にしたい」

晃「あいにくシャルは俺の彼女だ諦めろ」

ヒュッケバイン「なら君を殺して僕の物にする」

ヒュッケバインはビームライフルを放ってきた。俺は断空剣で裁く。

晃「シャルは渡さん！断空剣！はぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はヒュッケバインを十字に斬り裂く。そして

晃「断空光牙剣！」

ヒュッケバインを真っ二つにして破壊した

一夏サイド

ヴァイサーガ「どけよ転生者！貴様に用はない！」

一夏「お前は無くても俺はある！貴様の愚かな行為を止める！」

俺はビームサーベルで斬る。ヴァイサーガは水流爪牙で受け止める。俺は蹴りを入れてカリドゥスを放つ。ヴァイサーガはマントで受け止める、そしてクナイを連射してきた。やばい！あそこには逃げ遅れた子が！俺はその子の所まで行き、シールドで防御する。

？サイド

クナイ見たいのが私の所まで飛んできた。私は死ぬの助けてニール兄さん。すると天使見たいな機体が私をかばってくれた。確かこの機体は同じクラスのの織斑一夏のＩＳ

一夏「大丈夫か？」

？「あっ！はい」

一夏「それは良かったよ。そこでじっとしとけよ？」

彼はそう言って、また飛び出した。少しかっこよかったな～、今の時代にあんな優しい男の子いたんだ～

一夏サイド

一夏「何関係無いやつを巻き込みやがる！」

ヴァイサーガ「はっ！モブキャラなんかどうでもいいじゃん」

モブキャラがどうでもいい？この世界にモブキャラは居ない！せい

っぱい生きてるんだ！俺がスーパードラグーンで蜂の巣にする。そしてフルバーストを放つ。ヴァイサーガはそれを喰い爆発した

朔夜サイド

どうしてやるか、どうしてやるか？コイツは俺の前で言っちゃならないことを言った。俺は白式を展開した。俺は雪片を構えて零落白夜を発動した。

グルンガスト「何故貴様が白式を！」

そう言ってマキシブラスターを放ってきた。俺は雪羅で弾き、雪片弐型で斬り裂く

グルンガスト「俺みたないな主人公が乗る機体だ！よこせ！」

ブーストナックルを放つが俺は雪羅カノンモードで破壊し、雪片を奴の心臓部分に刺す。そのまま斬り上げる。グルンガストは爆散した

キャノンボールファスト（後書き）

ＲＸ「なぜなにＲＸ～」

鈴「また元気に無いわね」

ＲＸ「はい……主が……」

鈴「苦労してるわね今回のお便りは凍司さんから『数々の女性達にフラグを建て、ハーレムとなって男の敵に成り果てたが、一人の女性に決めた事は賞賛に値する織斑朔夜さんについて質問です。数々のフラグを建ててきましたが、全部で何人になりましたか？　また、使えるライダーや戦隊などの能力はどのくらいあるのですか？』だそうです。確かに気になる」

ＲＸ「主によると、フラグは２００ぐらいですかね？その世界のメインヒロインは落とすので、ライダー達の能力は全部使えます。基本はダークネス、ディケイド、オーズぐらいしか使いません。ノリでカリス、ジョーカー（Ｗ）とかを使います。スーパー戦隊はマジで遊び半分でしか使いません」

鈴「フラグを２００も！朔夜どんだけよ！」

ＲＸ「でも鈴さんは２００の中で唯一選ばれた人ですから幸せものですよ」

鈴「確かに……」

ＲＸ「では次回もサービス！サービス！」

誕生日だっけ今日（前書き）

六巻終了

誕生日だっけ今日

俺たちはキャノンボールファストが中止俺たちは事情聴取されて開放されたのは４時過ぎだった。俺は先に実家に帰り、私服に着替えて部屋で動画を観る。アンクが！アンクが！死んじゃったよぉぉぉ

俺は居間に入り箱を開けると白いチョーカーが入っていた。真ん中には銀の十字架がついていた。俺はさっそく着けてみる。まさかのチョーカーか……

鈴「気に入らなかった？」

鈴が俺に不安そうに聞く。止めろ！俺のライフ（精神的に）がゼロになる！

朔夜「気に入らないわけがないだろ？鈴がくれたものだぜ？嬉しいさ」

俺がそう言うと、鈴は安心したらしく、キッチンに入る。俺は居間でＤＶＤを観始める。中身はどこぞの宇宙人が『僕と契約して魔法少女になってよ』て言ってくる作品。こいつをフルボッコにしに行こうかな？死人ゼロにしに行くために烏が行ったら笑いながらメイオウ攻撃しそうだよな……

ピンポーン！

またインターホンがなったよ。俺が出ると、ラウラとレイ、晃とシャルがやって来た。こいつらも早いな。

レイ「お邪魔します」

ラウラ「入らせてもらうぞ」

シャル「お邪魔します」

晃「入るぞ」

そして数分ごとにみんながやって来た。そして5時ぐらいになってから

シャル「せーの！朔夜、お誕生日おめでとう！」

シャルの合図でクラッカーがなる。

朔夜「やはりこうなったか……」

現在起動六課にいる。だってさ、専用機持ちと五反田兄妹に御手洗和馬に烏、更にリトバスメンバーに起動六課メンバーだからな……

……

啓吾「久しぶりだなこんなにさわがしいのは」

朔夜「確かにな……しかしみんな楽しそうにしてるよな……」

そうみんなどんちゃん騒ぎをしているのだ。恭介は何かやろうと考えてるし、専用機持ちは専用機持ちで何か話してるし。烏は何か企んでるし……弾たちからは説明しろと言われるし、答えなかったけど。すると蘭がケーキを持ってきてやって来た。

蘭「あの、さ、朔夜さん此食べてもらえませんか？」

そう言ってケーキを俺に渡す。手作りみたいだな？

朔夜「まさか手作りか？」

蘭「はっはい！」
俺が聞くと、声を裏返しながらそう言った。そこまで裏返す必要ないんじゃないか？俺はケーキをさっそく食べる。なかなか美味いな。
朔夜「料理美味いな。いい嫁さんになるな」
蘭「お、お嫁さん／／」
蘭は顔を赤きしてうつむく。すると鈴がどんぶりを持ってきて俺に渡す。
鈴「さっき仕上がったやつよ。麺まで手作りよ」
へ～麺まで手作りか。それは楽しみだ？何より鈴の手作りだし？俺はラーメンを勢い良くすする。これは海鮮メインのラーメンか。麺とスープが嫌味なく広がり美味い。麺は噛みごたえがあり噛む度にぷつっと切れる度にぷるんと弾む
朔夜「また腕を上げたな」
鈴「専用機持ちでも花嫁修行はするのよ」
花嫁修行か～っておい！やばい！一瞬俺の頭が大変やばくなりそうだった。更に顔が熱い！鈴も顔が赤くなってるし！
啓吾「理樹どうした？顔が赤いぞ？」
朔夜「気のせいだ啓吾。」
恭介がやって来て

恭介「理樹何かおもしろいことやらないか？」

朔夜「遠慮するわ。」

俺はそう言って少し離れる。するとセシリアがやって来て

セシリア「お誕生日おめでとうですわ」

そう言って小さな箱を渡してきた。

朔夜「ありがとう。」

俺は箱を開けるとティーセットが入っていた。めっちゃ高そうなやつだ。

セシリア「コホン！これはイギリス王室御用達のメーカー『エインズレイ』の高級セットでしてよ。それとわたくしが普段愛飲している一等級茶葉もお付けしますわ」

朔夜「サンキュー。大切にするわ」

セシリア「い、いえ、このくらいはなんでもありませんわ。そ、それよりも、今度一緒に……」

楯無「朔夜くーんちゃんと食べてるー？」

楯無が俺にダイブしてきたので俺は避ける。楯無は受け身をとる。

楯無「酷いよ朔夜くん避けるなんて！」

朔夜「抱きついてくるな！」

俺はそう言ってその場を離れるとなのはが近づく

なのは「朔くん！お誕生日おめでとう！」

朔夜「ありがとうなのは」

なのは「本当なら誕生日プレゼントを用意したかったんだけと……

……」

朔夜「良いよ、なのはの気持ちで十分だから」

俺はなのはの頭を撫でながらそう言う。そこにラウラがやって来た。

ラウラ「朔夜此をやる」

そう言ってラウラは俺にナイフを渡してきた。何故にナイフ？

ラウラ「自分の武器を渡すと言うのはな……」

何かブツブツ言っていたが上手く聞き取れなかった。結局何を言っていたんだ。すると今度はフェイトがやって来た。するとなねはが何処かへ行く。

フェイト「誕生日おめでとう朔夜」

朔夜「サンキューフェイト」

フェイトが笑顔でそう言ってきたから、俺も笑顔でかえした。する

とヴィヴィオがやって来て

ヴィヴィオ「お誕生日おめでとう朔夜パパ」

ヴィヴィオが俺にそう言って画用紙を渡してきた。そこには俺の絵が描いてあった。手作りか～スゲー嬉しいな。俺はヴィヴィオを抱き抱えて

朔夜「ありがうヴィヴィオ」

フェイト「ヴィヴィオが今日朔夜の誕生日だってしって一生懸命に描いたんだよ」

朔夜「あの短時間で描いたのか凄いなヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオの頭を撫でるとヴィヴィオはくすぐったそうにした。

箒「朔夜良いか？（何だ？この家族みたいな三人は？）」

すると箒がやって来た。何かデカイ包みを持っていた

朔夜「おう良いが？」

すると箒は俺に包みを渡す。俺はヴィヴィオを降ろして包みをもらい開けると、そこには着物が入っていた。

朔夜「サンキューこんな高価なものをもらっちまって」

箒「気にするな、実家にあった布でつくってもらったものだ。」

朔夜「そうか、なら今度着てみるわ」

箒「なら着たときに見せてもらうぞ」

朔夜「ああ」

そして俺はもらったものを次元庫にしまう。

外

朔夜「誕生日の主役を買い物に行かせるか？」

鈴「そう言わないの朔夜」

俺と鈴はじゃん拳に負けてジュースを買いに出ていた。すると見覚えのある顔があらわれた。いや、見覚えのあるものじゃない

朔夜「姉貴……」

鈴「千冬さん……」

俺と同じ年齢の少女は昔の姉貴に異常に似ていた。

少女「いや」

少女は口を開く。少女の笑みは姉貴とは似ても似つかない

少女「私はお前だ、織斑朔夜」

朔夜「なに言ってるんだ」

少女「今日は世話になったな」

鈴「サイレントゼフィルスの！」

少女「そうだ」

そう言って俺に近づく少女

少女「私の名前は―」

少女「織斑マドカだ」

アヴェンジャー

そしてガイアメモリの無機質な音が聞こえた

誕生日だっけ今日（後書き）

ＲＸ「ＲＸのなぜなにＲＸ～（やけくそ）」

烏「元気だな～ＲＸ」

ＲＸ「さて今日の質問は龍一さんからのお便りです『賞賛に値しようかと思ったけどフラグ数を見てやっぱ殺そうと思った朔夜さんについて質問です。どんな作品のキャラにフラグを建ててきたのですか？把握しているのを教えてください』」

烏「フラグね～作品名を俺が知ってる限りを上げると、真恋姫無双、リトバス、なのは、戦極姫、けんぷファー、テイルズオブジアビス、・　ｈａｋｃＧＵ　後は青空が見える丘にけいおんか？まあ基本あいつは主人公の立ち位置に居るしあの性格だからフラグを建てちまうんだよな？恋姫ではバカ以外はフラグはほとんど建ててるし、なのはは三人は以外は建ててない（なのは、フェイト、ティアナ）戦極姫は武田の二人しか建ててない（信玄と幸村）それ以外は全て建ててるな。後は知らない。」

ＲＸ「めちゃくちゃ建てていますね」

烏「そうだな。次回もなぜなにＲＸをよろしくな」

アンク～！死んじゃったよ～！俺はこんな結末認めたくない！（前書き）

書き終わったぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

アンク～！死んじゃったよ～！俺はこんな結末認めたくない！

アヴェンジャー

何でこいつがガイアメモリを！しかも復讐の記憶！少女……マドカは紅いマダラ模様が描かれた堕天使型のドーパント、アヴェンジャードーパントになる。俺は直ぐ様オーズドライバーを取り出して、コアメダルを取り出す。

朔夜「変身！」

タカ・トラ・バッタ
タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ・

俺は仮面ライダーオーズ・タトバコンボに変身する。俺はアヴェンジャードーパントを殴る。しかしアヴェンジャードーパントは片腕で受け止めて俺を投げ飛ばす。俺は受け身をとり、地面からメダカブリューを取り出す

朔夜「俺が何をした！」

マドカ「貴様が知る必要は無い」

アヴェンジャードーパントは黒い塊を放つ。俺はメダカブリューで斬り裂き破壊する。するとアヴェンジャードーパントは空を飛びながら黒い塊を放ってきた。俺はそれを避けながらメダルを取り換えてスキャンする。

タカ・クジャク・コンドル

タ～ジャ～ドル～

俺はタジャドルコンボになり、クジャクウィングを展開して空を飛びながら戦う。俺はメダカブリューをバズーカモードにしてアヴェンジャードーパントに撃つ。アヴェンジャードーパントは素手で弾き返した。コイツは規格外過ぎないか?メダカブリューのエネルギー弾を弾き返したよ素手で!俺はメダカブリューを捨てて、オースキャナーを手に取り、オーズドライバーをスキャンする

スキャニングチャージ!

俺の足が変化し、プロミネンスドロップの体制になる。アヴェンジャードーパントも足に負のエネルギーを溜める。

朔夜「はぁぁぁぁぁぁぁぁ!」

マドカ「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!」

二つの必殺技がぶつかり合い、巨大な爆発が起きる。すると何かが起きて意識が消えた。

?「朔……きて……や……お…て」

誰かが俺を呼んでいる。俺は目を覚ますと目の前に鈴が居た。確かにアヴェンジャードーパントと戦ってプロミネンスドロップを咬ましてそれから……

朔夜「此処は何処だ?」

鈴「分からない？解る事はアタシたちの世界じゃない事ね」

鈴はそう言って俺を立たせるために手を差し出してくれた。俺はその手を取り立ち上がる。しかし此処は何処なんだ？すると

プテラ！・トリケラ！・ティラノ！

プットッティラァーノザウルゥース！！

するとちょうど映司がオーズ・プトティラコンボに変身していた。確か最終回近くだよな？うっし！なら未来を変えよう！俺が飛ばされたと言うことは何かしらの異変があることだしな。

朔夜「うし！ちゃっちゃと終わらせて帰るか！」

俺はディケイドドライバーを出して走り出す。するとダブルバースは俺に気づく

後藤「おい！お前！危険だ！」

伊達「早く逃げろ！」

二人はそう言ってきたが俺はディケイドドライバーを腰に付けてライドブッカーからディケイドのライダーカードを取り出してドライバーに差し込む。

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身して恐竜グリードに殴りかかる。恐竜グリードは後に吹き飛ばされる。

映司「君はいったい……」

俺を知らないオーズの世界か……なら名乗ろう

朔夜「俺か？俺は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えなくていい。」

俺はライドブッカーからカードを一枚取り出してドライバーに差し込む

カメンライド・オーズ

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバタ・ト・バ

俺はタトバコンボになる。俺はトラクローを展開して恐竜グリードを斬り裂く。更に周りは驚いていた。

映司「あれはオーズ……」

後藤「しかしベルトは変わっていない」

伊達「何だあいつ」

真木「実に興味深いですね。コアメダル無で変身するとは」

俺はアタックライドカードを取り出してまたドライバーに差し込む

アタックライド・メダジャリダー

俺はメダジャリダーを出して恐竜グリードを斬るが片手で受け止められる。

真木「さっきは驚き攻撃を喰らいましたがそうはいきませんよ」

恐竜グリードは俺の腹を殴ってくる。俺はとっさにガードをしたが、吹き飛ばされ、ディケイドに戻る。俺は真木を凝視する。すると真木の身体の中にはコアメダルが三枚づつ入っていた。マジすか！まさか誰かが……まあわかってるがな。俺はケータッチを取り出す。

クウガ・アギト・リュウキ・ファイズ・ブレイド・ヒビキ・カブト・デンオウ・キバ

ファイナルカメンライド・ディケイド

俺はケータッチのクウガ～キバまでの紋章をタッチして最後にディケイドの紋章をタッチして、仮面ライダーディケイド・コンプリートフォームになる。俺はファイズの紋章をタッチする。

カメンライド・ブラスター

俺の横に仮面ライダーファイズブラスターフォームが現れた。俺がライドブッカーからカードを取ると、ファイズブラスターも俺の動きをトレースする。そしてドライバーに差し込む

ファイナルアタックライド・ファ・ファ・ファ・ファ・ファイズ

俺とファイズは恐竜グリードにフォトンブラスターを放つ。すると

向こうも良くわからないものを放ってきた。互いの攻撃がぶつかり合い。爆発が起きる。俺は吹き飛ばされる。そのまま変身が解ける。ちっ！ディケイドドライバーが故障したか……やはりダークネスで行けば良かったよ。しかし向こうもタダでは済まず、ボロボロであった。すると映司はメダカブリューで恐竜グリードを斬ろうとしたが、恐竜グリードは思いっきり弾く。すると映司は吹き飛ばされ変身が解けてしまう。ダブルバースはバースバスターを射つがダメージが無く、恐竜グリードが後退する。すると人に疑似したウヴァが要る。恐竜グリードがバッタコアをウヴァに投げてウヴァが完全態になる

ウヴァ「力が！力がみなぎる！」

ウヴァに向かってダブルバースが走り出すが、ウヴァが一凪ぎするとダブルバースは吹き飛び変身が解ける。俺は立ち上がり、フラフラしながらロストドライバーとエターナルメモリを取り出して変身する

エターナル

俺は仮面ライダーエターナルになり、ゾーンメモリを出して、マキシマムスロットに差し込む

ゾーン・マキシマムドライブ

俺は伊達と後藤を安全な場所に飛ばす。俺はエターナルエッジを出して、ウヴァを斬る。しかし上手くダメージを与えられない。そして斬り合いをしていると伊達たちの居る場所に来ていた。マジで！場所の選定ミスをしちまったか……すると、ドシン！ドシン！と音を響き鳴らせながら映司が歩いてやって来た

アンク～！死んじゃったよ～！俺はこんな結末認めたくない！（後書き）

RX「RXのなぜなにRX～」

朔夜「やつれてるな……」

RX「はい……」

朔夜「後で飲みに行くか？」

RX「……はい……」

朔夜「……最初の質問は次元の裂け目に住んでる聖夜からのお便りだ『質問があるが・・俺は創造神だが、朔夜の強さの秘密を知りたい。』強さの秘密ね……特には無いな。強いてあげるなら地獄の特訓かな」

RX「地獄の特訓ですか？」

朔夜「ああ、神界で神の修行でな、初めてやった修行が全能力封印でアンノウクラスのバルバトス、ブロリー、悟空を三体づつ倒せだとよ……途中で男塾の校長まで追加されたし……よく俺生きてたよな……」

RX「……そうですね。次の質問は紅蓮さんのお便りです。『ファーストキスは何味でしたか』です」

朔夜「メンマと酒だ。」

ＲＸ「絶対にありえないと思いますよ」

朔夜「星（恋姫の趙雲）とキスしたからな酒飲んだ後にだからメンマと酒の味」

ＲＸ「鈴さんとのキスの味は？」

朔夜「幸せが広がる味なのかな？／／いや味はないが、こう胸がギュッとするがこう安心感が広がって幸せが広がって／／こう……」

ＲＸ「朔夜さんが壊れたのでなぜなにＲＸは終わります。朔夜さん以外の質問も送ってくださいね！朔夜さんへの質問もまってますよ」

トーナメント一回戦弐（前書き）

久しぶりに書き上げました

トーナメント一回戦弐

音無が勝ったか……中々強いなさてと次の試合は龍一ｖｓ雨宮だった。まさかの親友対決か……龍一は絶対に容赦なしでボコるよな。そう思い画面を見る。

龍一はフォースに変身して拳を構える。凍司はオーガになってオーガストランザーを構えていた。龍一は凍司に向かって走りだし、ハイキックを放つがオーガストランザーを思いっきり振り龍一を吹き飛ばす。更に縦にオーガストランザーを振り下ろすが、龍一はフォースムーバーをソードモードにして受け流してフォースムーバー横に振る。しかしオーガにはダメージが無いようだ。

龍一「やはりオーガにはダメージは与えられないか。なら」

龍一はフォースブレード出して強化変身しつてフォース・ブレードフォームになる。そしてフォースブレードで凍司に斬りかかるが凍司はオーガストランザーで受け流して龍一の腹にボディーブローを入れる。

龍一「がはっ！」

龍一はもろにボディーブローを喰い吹き飛ばされ、うめく。凍司は更に追い撃ちをかけようとして走り出すが龍一はフォースムーバーを抜き、バーストモードにして凍司に放つ凍司はそれを避ける

凍司「ちっ！」

龍一「まだまだ！」

龍一はフォースブレードで凍司を斬る。そのまま回し蹴りを放った。
やばい！男の大事な場所に入ったじゃん！ありゃあ痛いぜ……

凍司「ど……こ……ねら……って……
……や……がる……此処は……無い……だ
ろ……」

凍司は男の大事な場所を押さえながら言った。オーガの姿であのポーズは無いな。俺はそれを見てそう思った。鈴は何が起きたか全くわかっていないようだ。まあ女には分からない痛みだしな。

龍一「悪い……わざとじゃないからな……」

そう言いながらも、フォースブレードで斬りかかる。しかし、凍司も落ちていたオーガストランザーで受け流して、横凪ぎに振るう。そしてミッションメモリをオーガフォンに差し替えてシングルモードで撃つ。

龍一「喰らうか！」

龍一はそれを避けてフォースブレードを変形させてキャノンモードにする。形はゾルダのギガランチャーみたいな感じで。しかし二人の攻撃は全く当たらず暫く撃ち合いが続く。そして龍一はフォースブレードを元に戻して走り出す。すると凍司もオーガストランザーを展開して走り出した

龍一「とぉぉぉぉぉぉぉじぃぃぃぃぃ！」

凍司「りゅうううううううういちぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

二人の剣がぶつかり合いつばぜり合いが始まった。そして龍一の剣が宙をまった。すると龍一はジャンプして必殺技の態勢に入る

龍一「ロストブレイカァァァァァァァ！」

龍一はロストブレイカーを放つ。すると凍司は直撃を喰らって変身が解けて倒れた

志郎「勝者！不音龍一！」

龍一の勝利で終わった。次の試合は齋郷と神矢の試合か。ライダーとあいつは何を使うかな？

神矢「変身！」

カメンライド・ディアス

神矢はディケイド系ライダー、ディアスになる。齋郷はデュランダルを取り出す。さてこの戦いは面白そうだな。

神矢「せい！」

神矢は両刃の斧ライドブラッシュを縦に振り降ろす。齋郷はそれをデュランダルで受け流しそのまま神矢の胴体を斬るが、ディアスの装甲には傷がつかなかった。まあライダーですから

齋郷「生半可な攻撃じゃあダメか……なら！」

齋郷はエクスカリバーを出して斬りかかる。するとディアスの装甲

に傷がつく。流石エクスカリバー。切れ味半端ないな。更に斬りかかる。神矢はライドブラッシュで受け流してカードホルダーからカメンライドカードを出す

神矢「織斑さんから借りたカードを使いますか」

カメンライド・アクセル

ディアスはエンジン音を鳴らしてアクセルにカメンライドする。そしてアタックライドカードをディアスドライバーに差し込む

アタックライド・エンジンブレード

Dアクセルはエンジンブレードを構えて齋郷に斬りかかる。齋郷はエクスカリバーでつばぜり合いを始めた。Dアクセルは回し蹴りを放つ。そして踵落としを放つが齋郷はゲートオブバブロンで銃を出して乱射しはじめだ。神矢はDアクセルからディアスに戻る。神矢はカードホルダーから新しいカメンライドカードを取り出す。

カメンライド・ギャレン

神矢はDギャレンにカメンライドする。Dギャレンはカードホルダーからアタックライドを取り出す。

アタックライド・アッパー

Dギャレンはパンチ力を上げるアッパーのカードを使うそしてDギャレンはアッパーを放つが、齋郷は何かの呪文を唱える。すると不可視の剣を持っている少女が現れ拳を受け止める。

齋郷「セイバー頼む」

セイバー「わかりましたエイキ」

齋郷は右側に廻りを、セイバーは左側に廻る。Dギャレンは新たにアタックライドを取り出す。

アタックライド・ジェネミ

Dギャレンは二人に別れて、分身の方はセイバーと闘う。本体の方は齋郷と戦っていた。分身はアタックライド・ファイヤーとバレットを使ってバーニングショットを放つ。セイバーは不可視の剣で受け止める。しかし、Dギャレン（分身）はファイナルアタックライドのカードを取り出してバーニングスマッシュを放つ。セイバーはエクスカリバーを放つ。すると二人は消滅していた。

神矢「次はこいつだ」

カメンライド・バース

神矢はDバースになる。すると更にアタックライドを使う

アタックライド・クレーンアーム

アタックライド・ドリルアーム

Dバースはクレーンアームとドリルアームを展開して遠距離から攻撃する。齋郷はゲートオブバブロンを展開して防具を放ってきた。Dバースはドリルアームで弾く。しかし、数発当たってしまう。Dバースは新たにアタックライドを取り出して使う。

アタックライド・バースバスター

Dバースはバースバスターを使って乱射する。更にDバースはファイナルアタックライドのカードをホルダーから取り出す。

ファイナルアタックライド・バ・バ・バ・バース

神矢「セルバースト！」

すると齋郷はエアを取り出して真名を開放する

齋郷「エヌマ・エリッシュ」

二人の必殺技がぶつかり合い、爆発が起きた。煙が晴れて立っていたのは

志郎「勝者！神矢！」

神矢が立っていた。

トーナメント一回戦弐（後書き）

次回は本編です

朔夜の過去（前書き）

際どいシーンがあります。

朔夜の過去

此はまだ俺が神界に来て間もない頃の話。俺が闇に呑み込まれていた時の話だ。

朔夜「甘い！甘いんだよ！」

俺は力が制御出来るようになって、俺は任務につくことになった。主に平行世界の極悪組織の制圧。秩序を乱す転生者の殺害などが主な任務。そして俺はそいつらを残虐に殺していた。その時の俺は力に酔いしれ全てを無に還していた。そして俺はその時は邪神と呼ばれていた。そして俺はある任務についた。それはある組織の壊滅だった。そしてその組織は俺の両親を殺し、妹をレイプしようとした組織だった。だから俺はこの力で血祭りにいや……跡形も塵も残さずに殺そうと思いながら、その世界に向う。俺はそいつらのアジトについた。俺は闇の力でダークネスドライバーを出して変身する

ライダーインストール・ダークネス

俺は仮面ライダーダークネス。いやまだその時は仮面ライダーとは名乗ってなかったな。俺はダークネスに変身して警備の奴等をダークシューターで四肢を貫き、声を奪い、喋れなくして指を第一間接から破壊していった。手を全て無に還してから足も同様に破壊した。そして胴体を下半身から破壊し始める。奴等は何かを言おうと必死だった。しかし奴等は声が出ないから俺は何を言っているかは知らない。多分命乞いだろうな。俺は笑いながら

朔夜「あぎゃぎゃぎゃ！お前らは命乞いした奴等も殺してきたんだ

ろ？そいつらの気持ちを味わいながら死にな！あぎゃぎゃぎゃ！」

俺はゆっくり、それはゆっくりと腹から心臓にかけて刹那で斬る。その時の俺は楽しくて楽しくてたまらなかった。自分が優位にたち、人を見下し、恐怖に怯える相手を見るのが余りにも楽しくてたまらなかった。そんな感じで俺は奥に進む。ある部屋に入ると、十人ぐらい女がボロボロ服、いや服だったものをはおって部屋の奥で震えていた。女たちは身体のあちらこちらに傷やアザがあった。こいつらまさかレイプされてたんじゃないのか？すると数人の足音が聞こえた。俺は直ぐに隠れた。男たちは女たちの居る部屋に入る

男１「さてと今日はお前で楽しませてもらうぜへへへへ！」

男１は十代前半の少女の髪を引っ張り立ち上がらせて自分の下半身に近づける

少女「嫌だ！止めて！助けてお母さん！」

そう叫んでいた。俺はそれを見捨て去ろうとしていた。しかし去れなかった。あの姿が妹とダブって見えてしまった。俺は無言で男１の首を斬り落とした。そして首から下を真っ二つにしてやった。俺はホントに何をしているんだか……

男２「貴様！何者だ！」

男３「どうやって入ってきた！」

男４「答えろ！」

答えろって？何でそんなことしなきゃならないんだよ！まあいいや……何て名乗るか……めんどくせー俺は適当に思

いついたことを言う

朔夜「通りすがりの闇の使者だ冥土の土産に覚えておきな」

俺はそう言ってタイムブーストを使い一気に近づき男2、3、4の四肢を斬り裂く。そして回し蹴りを放ち倒して声を奪う。そして苦痛を味あわせる。女たちはそれを見ておびえだした。俺は女たちを見て拘束具を外すと女たちは逃げるように去っていた。ただ十代前半の少女は俺を見ていた。確かに怯える目で俺を見ていたが口を開き何かを言い出した。

少女「あり……がと……う」

そう言ってこの部屋から去っていた。ありがとうか……何を言ってるんだろ。俺の気まぐれで助けただけなのにさ……。俺はこいつらに最大限の苦痛をあじあわせて殺してからその部屋を出た。すると二つの異形の影があった。それは

本郷「君は虐殺を行なって楽しいのか？」

一文字「お前は虚しくないのか？」

ダブルライダーが居た。俺は刹那を構えて無言で構えていた。正直イライラする。人の気持ちも知らないでしゃあしゃあと綺麗事を言いやがって！俺はあいつらを殺す気で闇の刃を飛ばすが、一文字は裏拳で弾き返した。何で弾き返せるんだよ！

朔夜「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺はダークネスインパクトを放つ。本郷はもろに喰い吹き飛ぶ。殺

ったな。しかし

本郷「それで終わりか？」

何故たてる！何故ダメージがない！何故だ！

朔夜「な……ぜ……立てる……何故だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

俺は刹那で斬りつける。すると一文字が刹那を受け止めながら

一文字「簡単だ。お前の攻撃は魂がこもってない。そんなを幾ら喰らってもダメージなんかあたえられないんだっぜ！」

一文字は俺にライダーパンチを喰わせた。何だよ！一発でこの威力……化け物かよ。

本郷「俺たちはある人に頼まれてお前を止めに来た。今のお前は悪魔だと。だから闇から救って欲しいとその依頼者はお前の妹だ」

桜の依頼……

一文字「昔はあんな優しかった顔が今じゃ狂喜満ちちまってる。だから昔のお兄ちゃんに戻してって泣きなが言ってたぜ。」

桜がまさか今の俺を見て怯え恐がっていた。何してるんだか……唯一の家族恐がらせるなんてな……

朔夜「すいません。本郷さん一文字さん……目が覚めました」

一文字「その言葉は妹に言ってやりな」

朔夜「わかりました。」

本郷「新しい仮面ライダーになれたな」

突然本郷さんがそう言い出した。俺が仮面ライダー？いや無いだろ！

朔夜「いや無いでしょ。俺、邪神って呼ばれて恐怖の象徴的存在なんですよ？」

一文字「そりゃ過去の話だろ？今からは違うんだろ？あの返事は嘘か？」

朔夜「ちがくないです！」

一文字「ならお前は恐怖から弱きものを護る仮面ライダーだ。」

朔夜「はい！では俺はまだミッションがあるので」

俺はそう言ってリーダーの所まで走っていた。俺はリーダーの所まで行くと

リーダー「貴様か侵入者は」

朔夜「ああ。貴様を殺しに来た。今まで貴様に殺されてきたもの代わりにな……」

俺は刹那を構える。そして走り出す。すると向こうは手に何かを持

っていて勢いよく手に押し付けると姿が変わった。何だよあれ！しかし姿が変わってもやることは変わらない！俺は刹那で身体を斬る更に１８０度回転してもう一度今度は刹那を振り降ろす。こいつに攻撃はさせない。すると化け物は全身からレーザーを放った。すると何故かドアの影には俺が助けた少女が居た。何で此処に！俺はタイムブーストを使って少女を助けながら本郷に連絡して迎えに来てもらう。俺は化け物を向き

朔夜「貴様はやっちゃならねーことをした。女たちを自分たちの快楽だけを得るためにらちってボコり性欲処理など道具に使い、今だってレーザーが当たるとこだった。」

怪物「知ったことか！それより貴様は何者だ」

知ったことかだと……コイツは潰す

朔夜「通りすがりの全てを無に還す仮面ライダーだ！覚えておきな」

俺が初めて仮面ライダーを名乗ったときだ

朔夜の過去（後書き）

今日もなぜなにＲＸはお休みです

あの名シーンに乱入しましょ！（前書き）

書き終わりました

あの名シーンに乱入しましょ！

映司は空から落ちてきたコアメダル三枚を手に取りそれをオーズドライバーに入れてオースキャナーでスキャンする

映司「変身！」

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ

映司はオーズ・タトバコンボになる。オーズはウヴァにボディーブローを放つ。更に裏拳を放つ。そしてメダジャリバーとメダガブリューを取り出して斬り裂く。すると何者かが間に入る。あれは！

朔夜「ライジングアルティメット……」

そう全てを超越するライダー、仮面ライダークウガライジングアルティメット（ブラック）がオーズの攻撃を片手で受け止めていた。ライジングアルティメット（ブラック）はオーズを投げ飛ばす。俺は何とか受け止めてみるが一緒に飛ばされた。流石にエターナルじゃ無理か……いやエターナルが悪い訳じゃない。今の身体の状態がヤバイのだ！どうする？相手は全てを超越した奴だ。俺はエターナルエッジを逆手に構えて考える。そして俺はライジングアルティメット（黒）に斬りかかる。しかし向こうは暗黒雷掌破を放ってきた。俺はエターナルローブで防ぎ距離を取る。今手元にあるメモリはゾーン、ジョーカー、サイクロン、メタル、ヒート、トリガー、ルナ、ナスカ、アクセル、ユニコーンか……これでどうにかするしかない。俺はあるメモリを全てメモリスロットに入れる

アクセル・マキシマムドライブ
サイクロン・マキシマムドライブ
ジョーカー・マキシマムドライブ
ヒート・マキシマムドライブ
メタル・マキシマムドライブ
ルナ・マキシマムドライブ
トリガー・マキシマムドライブ
ナスカ・マキシマムドライブ
ユニコーン・マキシマムドライブ
ゾーン・マキシマムドライブ

そして俺はエターナルエッジにエターナルメモリを差し込む

エターナル・マキシマムドライブ

そうするとエターナルエッジが虹色に輝き出す。するとクウガライジングアルティメット（黒）も手が燃え始める。俺は態勢を低くして走り出す。クウガライジングアルティメット（黒）も俺に向かって拳を突き出す。俺はクウガライジングアルティメットの手に向かってエターナルエッジをぶつける。するとエターナルエッジに輝が

入る。もってくれ！奴を斬るまではもってくれ！するとクウガライジングアルティメットの手に亀裂が入り始めた。もってくれエターナルエッジ！

朔夜「はあああああああああああ！」

俺は更に力を込める。するとクウガの手が斬れ始めた。そのままライジングアルティメットを斬り裂くがその時真木がライジングアルティメットに向かってコアメダルを数枚投げる。するとライジングアルティメットの体内に吸収される。ついでにウヴァはご臨終されました。そしてライジングアルティメットは手から風を放ってきた。まさかコアメダルの力を引き出しているのか！俺は突然の出来事に対応出来なく直撃を喰らい変身が解けてしまう。しかし真木とライジングアルティメットはその場を去っていた。助かったのか？俺はそのまま意識を手放した。

朔夜「知らない天井って天井無いし！外じゃん！てか何だか柔らかいな頭の部分が」

俺は目が覚めると夜空を見ていた。すると突然鈴の顔が現れた

鈴「約束をまた破ったはね朔夜」

鈴が怒っていた。約束？あっ！確か鈴と無茶をしないって約束していたよな……

朔夜「……ごめん……」

鈴「何であんたは毎回無茶ばかりするのよ……何で……」

朔夜「……ごめん」

鈴「お願いだから無茶しないでよ……」

鈴は泣きながらそう言ってきた。俺は立ち上がり鈴の前に立つ。そして鈴を抱き寄せて耳元で言った。

朔夜「ごめん。その約束は守れない。だけど絶対に鈴の元に帰ってくるから。俺の帰る場所は鈴の隣だから。それだけは何があっても守るから。」

鈴「……プロポーズみたい……」

朔夜「だってプロポーズしてるからな。俺、鈴が居ないと生きていけないから。」

鈴は真っ赤になった。そんな鈴の顔がいとおしく見えた。そのままお互いの顔が近くなると

映司「目が覚めたみたいだね」

映司たちが近づいてきた。空気読んでくれよ……

朔夜「ああ。」

映司「それと話は鈴音ちゃんから聞いてるよ。」

鈴が説明しといてくれたのか。さてどうするか……アンクを生きさせるか源作通りにするか。正直揺れるな……

アンク「それで此からどうするかだ。真木の野郎には知らない奴がいる。あれは正直ヤバイ」

朔夜「そいつの相手は俺がする。あいつを倒すのは俺の役目だ。だから二人は真木の相手をしてくれ」

映司「わかった。そっちは任せる」

そんな感じで話が終わり、街を歩くと。ビルや車がセルメダルに変わっていた。まさかライジングアルティメットがメダルの暴走で！俺たちは走り出す。するとクズヤミーとグロンギの大群が暴れだしていた。俺はダークネスドライバーを出して変身する

朔夜「変身！」

ライダーインストール・ダークネス

映司はオーズドライバーに紫のコアメダルを入れてオースキャナーでスキャンする

映司「変身！」

プテラ・トリケラ・ティラノ

プットティラーノザァァァルース

映司はオーズ・プトティラコンボに変身した。アンクはグリード態になる。鈴は泉の護衛として置いてきた。正直には鈴をこの戦闘に巻き込みたくないだけ。俺は刹那でグロンギたちを斬り裂く。オーズとアンクは素手でヤミーたちを凪ぎ払う。するとダブルバースがバースバスターを構えて現れた。

後藤「此処は任せろ火野！」

伊達「そう言うことだ行ってこい！」

俺たちは空を飛んで真木の所まで行く。真木に近づくと格闘戦に入る。映司が殴り、俺が蹴りを入れアンクが殴る。真木もそれを避けて反撃をしてきた。そんな行動が二十、三十と続き、映司は真木を地面に叩きつけた。そして起き上がり、メダカブリューで真木を斬ろうとしたら真木の腕が英司を貫いた。すると映司は自分と真木の足を凍らせて体内から大量のセルメダルを出してメダカブリューに入れた。そして真木を斬り裂くが、真木は片腕で受け止めて映司を吹き飛ばす。映司は変身が解けてしまった。

真木「なかなかおもしろいことを考えましたね。だがあまいですよ」

映司にとどめを刺そうとする真木に映司はプトティラに変身しようとする。

アンク「映司！これを使え！」

アンクは自分のコアメダルを映司に投げ渡した。俺はそれを止めようとしたが止められなかった。それは二人の友情などを汚す行為なのだから

映司「わかってるよアンク。お前が本当にやりたいことなんだろ？」

映司はそう言いながらコアメダルを一枚づつオーズドライバーに入れる。そして最後にタカコアを入れてスキャンする

タカ・クジャク・コンドル

アンクの声で辺りに響き渡る。そして映司は真木を殴るがはずれるしかし突然アンクが現れて真木を殴る。しかしアンクの拳もハズレた。そこに俺が回し蹴りを放つ。それもハズレた。映司が蹴りを入れるが真木は避ける。アンクが殴りかかるが外れて真木は空を飛んでコアメダルの器まで飛んで行った。映司は紫のコアメダルをタジャスピナーに入れて真木を追いかける。俺も後を追う。器の中に入ると真木が居た。真木は映司に紫エネルギー弾を放ってきた。アンクと俺がそれを防ぎ、アンクは火炎弾、俺はダークネスオーバーロードの態勢に入り、映司はギガスキャンをして一斉に放つ。真木はそれを喰い、コアメダルを吸い込んで爆発した。勿論映司のメダルも吸われた為に変身が解けて落下している。俺も爆発に巻き込まれて変身が解けた。俺は映司と話終わったアンクに話しかけた

朔夜「アンク後どんくらいもつ？」

アンク「後十分ぐらいだな？何故聞いた」

俺は上を指す。そこには全てのグリードの特徴をもった存在が居た。

映司は後藤の手を掴み着地した。さて俺は自由落下を楽しむすると

鈴「朔夜！」

ホワイトスワンに豪快チェンジした。鈴が手を伸ばしていた。俺はそれを掴む。

朔夜「サンキュー鈴」

鈴「どういたしまして」

俺は着地してボロボロのタカコアを手に取り映司にトラとバッタのコアを渡した

映司「なんでトラとバッタのコアメダルを！」

朔夜「そんなのは後だ！最後の敵が来るぞ！」

俺は即席で直したディケイドドライバーを付けて臨戦態勢になる。すると全てのグリードの特徴をもつ敵が着地していた。名前融合グリードでいいか。

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイド激情態になる。映司もメダルを入れてオースキャナーでスキャンして変身した。

タカ・トラ・バッタ

タ・ト・バ・タトバタ・ト・バ

映司はオーズ・タトバコンボに変身した。映司はトラクローを展開して斬りかかる。俺はライドブッカー・ソードモードにして斬りかかる。しかし融合グリードは衝撃破を放ち俺たちは吹き飛ばされる。俺たちは立ち上がり融合グリードに突っ込む。

融合グリード「甘いでね」

融合グリードは真木の声で水流を放ってきた。まさか真木の意思が入ってるのか！俺たちは水流を喰らい変身が解けた。

真木「まずはあなた方を消してから終末を迎えましょう。」

真木は俺たちに歩みよる。するとアンクのメダルが真木に突撃して、真木の体内に入った。

アンク「映司……今のうちに……とどめを刺せ！……俺の意識が……あるうち……」

アンクが真木の身体を乗っ取りながらそう言った。

映司「アンク……わかった……朔夜……紫のコアメダルある？」

映司がそう言ってきたから俺は無言で紫のコアメダルを投げ渡した。

泉「止めて映司くん！そんなことしたらアンクが！」

泉が必死に映司を止めにいく！しかし映司は泉の腕を振り払ってド

ライバーに紫のコアメダルを入れて変身した。

プテラ・トリケラ・ティラノ

プットティラーノザァァァルース

映司はオーズ・プトティラコンボになり、メダカブリューにセルメダルを五枚入れて融合グリードに『グランド・オブ・レイジ』を放つ。するとアンクが「ありがとう」と言っていた気がした。すると全てのコアメダルが破壊された中アンクのタカコアだけが二つに割れて残っていた。俺はそれを見て映司に二つに割れたタカコアを渡した。映司は俺に紫のコアメダルを渡してきた。俺は鈴を連れてその場を去る。正直にはこの場には居られなかった。この空気に耐えられなかった。俺たちはこの世界から立ち去った

あの名シーンに乱入しましょ！（後書き）

ＲＸ「ＲＸのなぜなにＲＸ～」

シャル「ＲＸ無理にテンション上げなくても……」

ＲＸ「やはりそうですか……今回のお便りは雨宮凍司さんから『この作品のオリキャラは何歳？』だそうです」

シャル「確かに……朔夜って一体何歳なんだろ？」

ＲＸ「朔夜は肉体年齢は１６ですね。実年齢はわかりません。主は肉体年齢は２０前半ですね。実年齢はわかりませんが。志郎さんは１７ですね。レイは今年で１６です。一夏さんも今年で１６で晃さんも１６です。」

シャル「凍司さんわかりましたか？」

ＲＸ「ＲＸのなぜなにＲＸ～次回もよろしくお願いします。」

シャル「お便りお待ちしてます。次回もサービス！サービス！」

超人！無敵！斎藤！（前書き）

ひっさしぶりの更新

超人！無敵！斎藤！

朔夜「断る！」

楯無「どうしてもお願い！」

楯無が頼みに来た。その頼みごとは簪と今回の専用機持ちのタッグトーナメントに参加して欲しいと言うことだ。俺はもちろん断った。元々鈴と出ようと思っていた。すると楯無は更に言ってきた

楯無「だって朔夜じゃなきゃ組んでくれそうな人居ないし、わたしだと……」

そうこの姉妹仲が悪いのだ。正確には簪が楯無に劣等感を抱いていて心を開こうとしないだけなんだがな。

朔夜「いや、あいつ友達ぐらい居るだろ！」

楯無「それはそうだけど……」

朔夜「それに俺はパートナー決めてるから！」

今回は譲れない。何せ鈴が何してくるかわからないから！何されるかわからないし……

朔夜「そういう訳ですまないが簪とは組めない」

そういう楯無はしぶしぶ帰っていった。悪いな楯無……俺は少し罪悪感に浸る。そして俺はベットの上に寝っ転がりそのまま寝た。

次の日

俺は久しぶりに早起きをしていた。そして俺は屋上に出て軽くシャドーボクシング的な事をしていた。そう言えば今回のタッグトーナメントは何使うか……手元に残しておいた機体は白式にディス・アストラナガンにスコープドックだしな……後は試作段階のグレンラガン。あれはロボットだな人間サイズの更に二人乗りも可能だ。

朔夜「とりあえず寝よう。」

俺はそのまま布団に入ってめんどいからつぶる。次の日俺は早く起きてしまったのでそのままある場所に向う

朔夜「この場所久しぶりだよな……」

俺が向かったのは俺が初めて仮面ライダーとして戦った場所だ。そのまま中に入る。

朔夜「あの時のままだな」

そう俺が壊滅させた時のままだった。そして歩いていた。

朔夜「あの時の俺はホントにヤバかったな……」

烏「確かにな！」

後から烏の声が聞こえたので後を振り返ると烏と鈴が居た。烏はともかく鈴は何故に！

烏「鈴が朔夜が居ないって俺に言っきたからよ。連れてきた。確か

にあの頃の朔夜はヤバかったな」

朔夜「確かに」

俺は苦笑しながらそう言った。鈴は一人わからず頭に?を浮かばしていた。

烏「さてと後は夫婦仲良く話してな」

烏はそのまま帰っていった。すると鈴が

鈴「あの頃って何?」

朔夜「あの頃はあの頃だな……邪神って呼ばれていた時の俺だよ……人殺しを楽しんでた頃の俺……」

鈴はそれを聞いて顔色が変わった。

朔夜「やっぱそうなるよな……」

俺はそう言って奥に進む。鈴もそれに付いてきた。奥まで着くと鈴は口を開く

鈴「話して朔夜のその時の話。」

鈴はそう言ってきた。少し予想外だっな。俺はその話をした。話終わると

鈴「変わらないね。今の朔夜と過去の朔夜は」

朔夜「変わりすぎじゃん」

鈴は首を横に振りながら言い出す

朔夜「根本的なところがよ。困っている人が居ると優しくしてあげる所が」

朔夜「そうか？」

鈴「そうよ！話を聞いてもそうだし、アタシを救ってくれた時もそうよ」

鈴は恥ずかしそうにそう言った。俺は少し嬉しかった。すると後から足音が聞こえたので後を見たら、何処かで見たことのある少女が居た。

朔夜「あの時の子？」

少女「あの時の……人ですか？」

俺が助けた少女が居た。何年か経ってたから少しわからなかったがあの時の子だ

少女「あの時は助けてくれてありがとうございます」

少女は俺にまたお礼を言ってきた。俺は明後日の方向を向いて、

朔夜「気まぐれで助けただけだ。だから礼を言われる筋合いはない！」

鈴「朔夜～顔が赤いわよ。照れてるんだ～可愛いい」

鈴は俺の顔を見ながらそう言った。

朔夜「照れてねー！」

すると少女はクスクスと笑いだした。俺は一人の少女の笑顔を守れたのだな。

少女「それでは失礼します」

少女はそのまま帰っていった。俺はそれを見送って椅子に座った。
鈴は俺の目の前に来て

鈴「嬉しそうね朔夜、顔が笑ってるわよ」

朔夜「ああ。俺は……人を笑顔にさせてやれたんだなって改めて実感出来てさ」

そう言うと鈴は俺の手をとって

鈴「朔夜は色んな人を笑顔に変えてるわよ。アタシはそう思うわ」

朔夜「そうか……そうだと良いな。」

鈴「そうよ！」

鈴はそう言って俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

朔夜「あのさ、今度のタッグトーナメント一緒に出ないか？」

鈴「え！」

朔夜「嫌なら出なくていいんだけど」

鈴「出る！朔夜のパートナーはアタシよ！」

朔夜「なら出ようぜ。目指すは優勝だ」

鈴「当たり前よ！後頼みたい事があるんだけど？」

俺は鈴の頼みを受けた。次の日

朔夜「一夏来たか」

一夏「お前が誘ったからな。つうか何で合コンに俺を誘うんだ？」

朔夜「頭数。俺も来たくて来たんじゃないんだがな」

俺たちは駅前に来ていた。鈴の頼みは一夏と俺を含めた四名の男を連れてきてほしいの事。何だか一夏に会いたい奴が居るらしい。二人ほどね。すると

烏「面白そうだから来たぜ朔夜」

晃「うー！うー！」

烏と荒縄とボールキャップで縛られた晃が居た。晃はとばっちり受けたのね。かわいそうに

朔夜「流石にあの状態はかわいそうだろ」

烏「いや、逃げようとしたからさ？」

朔夜「嫌がるやつを連れてくるなよ！」

俺は烏にそう言いながら晃を拘束していた物を外した。

晃「助かったぜ朔夜。」

朔夜「気にするなよ晃。今回は烏のせいだしな」

一夏「確かにな。」俺たちはそう言って烏を睨むが烏は何事も無かったのような顔をしている。

朔夜「さて目的地に行こうぜ。みんなが待ってるからさ。」

俺たちはファミレスに向かう。ファミレスに着くと、適当な場所に座りとりあえずコーヒーを頼んで飲んでいる。

一夏「なあ朔夜？」

朔夜「なんだ一夏？」

俺は一夏に呼ばれたので、返事をした

一夏「こいつを合コンに連れてきてよかったのか？」

一夏は烏を指差す。

朔夜「多分アウトだな」

だって烏は

烏「ステーキとピザを追加ね！後ライス大盛り！さて後１０品でこのファミレスの料理は制覇だな！」

超人！無敵！斎藤！（後書き）

次回もよろしく！

合コン（前書き）

酒飲んで頭が痛い……二日酔いだわ

合コン

朔夜「ふ～」

俺はコーヒーを飲みながらデッキをいじっていた。もちろん遊戯王だ。すると鈴たちやって来た。俺はデッキをしまってコーヒーを飲みきった。烏はまだ食っていやがった。

鈴「お待たせ！」

？1「失礼します！」
？2「失礼します」

？「此が鈴の男友達か～」

気のせいかな？何でフェルトが居るんだろ？鈴たちは向かい側に座る

朔夜「さて正直に言うと合コンは初めてやるので何すればいいか分からない。なので、自己紹介を軽くしようと思う。俺は織斑朔夜だ。特技は家事全般。好きなものは和食だ」

一夏「俺は織斑一夏だ。好きなもの無、嫌いなものは外道だ。」

晃「俺は黒島晃だ。ただの数合わせだ。」

烏の番になるが烏は飯をまだ食っていた。こいつ話を全く聞いていない。俺はため息を吐いて

朔夜「こいつは黒葉烏だ置物だと思ってくれ」

鈴「そうね……アタシは挨拶はいらないわね皆知ってるし」

？1「私はエイミー・ディランディー。好きなことは楽しいことなら何でもだよ？」

？2「……フェルト・グレイスです。」

まさかの００キャラですかこの野郎！だから何でガンダムキャラなんですかこの野郎！

？3「私は鈴のルームメイトのティナだよ～よろしく！」

女性陣の挨拶が終わり俺たちは互いに自分たちの話をしていた。

ティナ「そう言えば朔夜くんってあのマゼダン色の戦士なんだよね？」

朔夜「ああ、ディケイドのことか？」

ティナが突然そんなことを聞いてきた。

フェルト「確かに……あれってどんな技術何だろう？」

エイミー「あれって数回しか見たこと無いけどすごいよね」

一夏「あれは確かにな（仮面ライダーをリアルで見ると確かにな認識改めないとな……）」

朔夜「聞いてもわからないし、何より此処の技術じゃ解析も出来ないからな。さてと後は何かしないか？」

烏「王様ゲームしようぜ！」

烏はそう言って六枚の紙を取り出した。嫌な予感しかしないよ。

朔夜「烏、何をする気だ？」

烏「な～にもないよ～朔ちゃ～ん？さあやろうぜ」

俺たちは紙をとる。そしてみんなで

みんな「王様だーれ？」

烏「俺様だ！」

烏だった。こいつ絶対に仕込みやがった！絶対に！百パーセント！

烏「さて、3番と5番は好きなやつの名前を言いなさい。（ニヤニヤ）」

こいはピンポイントに俺を当ててきやがった。俺は3番だし、鈴は真っ赤になってるから5番か……バレるのか？バレちまうのか？

烏「早く言えよ二人とも？（ニヤニヤ）」

こいつめ……後であやめにお話してもらうしかないか……

朔夜「……鈴が好きです（ボソッ）」

鈴「……朔夜が好き／／」

烏「聞こえないぜさ～くやく～ん（ニヤニヤ）」

朔夜「言ったんだから良いだろ？」

烏「聞こえないからむ……朔夜「あやめに言うぞ」ごめんなさい！この事はご内密にお願いします朔夜さま！」

烏は物凄く綺麗な土下座をしていた。まあ許してやるか

朔夜「まあ良いだろう。」

まあそんなこんなで今度はボーリングに行くことになった。

朔夜「烏……どうやったらあんなことになるだよ」

烏「なーにちょっとしたコツさ！」

朔夜「コツじゃないだろ！ガーターのとこからどうやったら元の所に戻ってストライクになるんだよ。」

烏「禁則事項です。」

烏と俺が話してると後ろからフラフラと誰かが近づいてきた。

鈴「さ～くやっ？」

朔夜「り、鈴！」

鈴が後から抱きついてきた。何があったんだ！この匂いは！まさかな……

朔夜「酒飲んだろ鈴？」

鈴「にゃ？飲んでないよ」

絶対に飲んだな。烏がみんなの分のジュースを買ってきてたし、絶対に烏が何か仕込んだに違いない。俺はため息を吐くと鈴が

鈴「朔夜は烏と話しすぎよ、アタシとも話なさいよ！恋人でしょ」

朔夜「少し落ちつけ鈴」

鈴「アタシはじゅーぶん落ち着いてるわ」

ちっとも落ち着いてないだろ……仕方ない

朔夜「何をしたら許してもらえるかな？」

鈴「キスしてくれたら／／」

キスですか！みんなの前で！

エイミー「鈴って大胆……それよりも二人はつきあってたんだ」

フェルト「初めて知った……」

ティナ「やっぱりか……何時も怪しいと思ってたんだけど」

朔夜「は～わかったよ」

俺は鈴にキスをする。すると鈴は自分から舌を絡めきた。ちょっと此処でディープかよ……

鈴「朔夜……だーい好き……」

鈴はそのまま寝てしまった。俺は頭を撫でながら

朔夜「俺もだよ鈴愛してる。」

俺たちはそのまま学園に帰ることにした。帰り道、もちろん俺は鈴を背負ってますよ。まあ一夏とフェルトにエイミーは何か楽しそうに話してますね。一夏はまあ少しは楽しそうだが対応に困ってますよね。

晃「さてと……シャルに何て言って許してもらうか……」

朔夜「正直に話せば良くないか？」

烏「そうだぜ。正直にいっちまえよ！」

晃「誰のせいだよ！」

朔夜「烏だな。俺も証言してやるからさ。」

烏「朔夜！テメェ、ダチを売りやがった！」

晃「ありがとう朔夜。」

まあそんな話をしていると。大量の銃弾ミサイルが飛んできた。ま

さかな……俺は上を見ると、五機のガンダムが居た。は～また転生者ですか……俺は白式を展開する。晃も幻想殺しを展開する。一夏は怒りをあらわにしながらＳフリーダムを展開しながら

一夏「お前らは！何街中でＩＳを展開して攻撃してるだよ！」

デュオみたいな奴？つうか顔わかんないからデスサイズでいいか

デスサイズ「はぁ？知ったことじゃねーよ！」

デスサイズはビームサイズを一夏に向かって振ってきたが一夏はビームサーベルで受け止めて居た。俺は雪片でウイングガンダムを斬る。しかし紙一重で避けていた。俺は雪羅で思いっきり殴る。だが後からナタクがドラゴンハングで攻撃してきた。俺はもろに喰い地面に激突した。何だよこいつらは！半端じゃねー。取りあえず出し惜しみはしない！

晃「斬艦刀！雲耀の太刀」

晃はガンダムサンドロックに必殺の太刀を入れるがヘビーアームズのガトリングに阻止される。一夏の射撃もデスサイズにはダメージが無い。今回の転生者はチートかよ！

一夏「射撃はダメージ無し。接近は相手の土俵か……」

晃「打つ手はないか……」

朔夜「面倒だ。」

俺は白式を待機に状態にする

ウイング「終わりか。ならお前を殺す」

朔夜「誰が殺されるかよ」

俺は右手に闇の力を込めて思いっきり殴る。ウイングは吹き飛ぶがサンドロック「それ以上動かない方が良いよ。彼等の命が無いよ」

晃と一夏がサンドロックとヘビーアームズにボロボロで捕まっていた。俺は両手を下ろした。

サンドロック「わかっているね。」

するとデスサイズとナタクがそれぞれの武器を構えて俺に攻撃してきた。完璧に殺す気だよ。

朔夜「がぁぁぁ

左手以外おおむね回復はしたな。だがどうする？動けなきゃ戦えない。何とかならないか？いや賭けてみるか？アイツに言ってな。

朔夜（ネガタロス）

ネガタロス（何だ朔夜）

朔夜（あの二人を助けてくれないか？こっちは動けないんだ）

ネガタロス（まあやっといてやる。死なれては俺の計画が狂うからな。）

朔夜（サンキュー）

俺はフラフラ立ち上がる。しかしナタクのビームトライデントが腹に刺さり貫通する。異臭がただよってきた。更に目眩もする。此は拷問だわ。ネガタロス早く頼むぜ……

一夏サイド

朔夜が一方的に攻撃されている、俺たちのせいで……朔夜は大怪我をおっている。俺たちが束まらなければ朔夜は……力が欲しい！奴を倒せるだけの力が！

力が欲しいか？なら俺と契約しろ！代償は……貴様の寿命だ

誰かが俺の頭の中で話しかけてきた。いいさ代償ならいくらでも払ってやる！だから力をくれやがれ！みんなを守る力を！

その言葉を確かに聞いた。貴様の覚悟もな……なら貴様に力をか

してやる。俺の名前はイフリート、お前のＩＳに入っているＡＩだ。お前のＩＳの本当の力を解放してやる。

朔夜サイド

一夏のＩＳが突然光だした。その姿は地獄の炎のように燃えていた。ネガタロス送った意味なくない？晃の救出に向かってるからいいか。炎が消えるとその姿は恐竜……ティラノザウルスを疑似していた。更に正確に言うならダンボール戦記のイフリートの顔がバイザーになっていて、口しか見えていない。武器は無くて素手のようだった。

一夏「邪魔だ！」

一夏はヘビーアームズの腹に肘打ちを喰らわせそのまま一回転して尻尾で吹き飛ばした。

一夏「すごい……」

サンドロック「こいつがどうな……ネガタロス「ふん！」ごばっ！」

ネガタロスがサンドロックの頭を掴んで投げ飛ばす。俺の方に飛んできやがった！俺はそれを避ける。つうかそれしか出来ない、血が足りない。

エイミー「あ、あ、」

エイミーにぶつかる。周りも対応が出来ない！動けよこの体！

エイミーサイド

身体が動かない！どうしようあんなのにぶつかったら骨折じゃすまないよ……助けて一夏くん……

？「間に合えぇぇぇ
ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

私はぶつかると思って目をつぶる。けどなにも当たらない。目を開けると目の前には炎の翼が見えた。

一夏「無事か？」

目の前には一夏くんが居た。顔はよく見えないけど口調からもの凄く心配していてくれるのがわかった。

エイミー「……怖かった……怖かったよ……」

私は思いっきり泣き出した。ホントに怖かったよ

一夏サイド

エイミーが目の前で思いっきり泣いていた。ホントに怖かったんだな……

一夏「いくぞイフリート」

イフリート『わかった。〈獄炎〉始動』

イフリートはワンオフ・アビリティー〈獄炎〉を発動してくれた。〈獄炎〉は相手を燃やしつく力がある。つまりだ

一夏「燃え尽きろ！バーニングクラッシャァァァァァァァァ！」

俺は〈獄炎〉をまとった手でサンドロックを殴る。するとサンドロックは燃え始め、直ぐに燃え尽きた。何も残っては居なかった。威力が高いな

イフリート『転生者相手だからそうしただけだ。本来なら人は燃えずシールドエネルギーだけを奪えるだけにすることも可能だ』

便利な能力だな。俺はナタクとデスサイズも燃やし出した。

ネガタロス「はぁぁぁ！」

ネガタロスはネガ電王に変身して、ヘビーアームズを斬り裂く。更に膝蹴りを放ちデンガッシャーで斬り裂く。残るはウイングだけだ。朔夜に任せとくか、何だか疲れが溜まってきたし。あれ？景色が倒れてきた……

朔夜サイド

あれが一夏の力か……凄まじいわ！傷も癒えてきたし、いくか。俺はディケイドドライバーを取り出す。

朔夜「変身！」

カメンライド・ディケイド

俺はディケイドに変身する。更にユニゾンライドのカードを取り出す。

朔夜「鈴、いけるか？」

鈴「何時でもいけるわよ」

ユニゾンライド・リン

俺は鈴とユニゾンしてディケイド・甲龍フォームになる。俺は双天月牙を出して、ウイングに投げる。ウイングはそれを避けるが、

朔夜・鈴「戻れ！」

俺たちがそう言うと双天月牙は手元に戻ってきた。俺たちは龍砲を展開して放つ。ウイングも見えない弾は対処出来ないか……さて決めるか

ファイナルアタックライド・リ・リ・リ・リン

俺たちは跳び上がり、ウイングに向かって最大出力の龍砲を放ち蹴りを放つ

朔夜・鈴「龍砲ライダーキック！」

そのままウイングを貫く。今回の転生者は辛かったよ。俺は変身を解くとその場に座る

合コン（後書き）

次回もよろしく

ダークネスの設定（前書き）

ダークネスの設定をのせてなかったのでのせてみました。

ダークネスの設定

仮面ライダーダークネス
朔夜の変身するライダー。外見はクウガとブレイドを足した感じの姿スペックはディケイド激情態と同等より少し低い。ディケイドみたいに、ミーラーワールドに出入りでき、アンデットや魔化魍も倒せる
武器
刹那
闇の力で生み出した日本刀。形は黒いガーベラストレート
技
ダークシューター
闇の弾丸を空中に展開して相手に放つ技ホーミング性能あり
ダークネスバスター
一言で言えば黒いディバインバスター

シューティングバスター
まんま某電脳世界の闇の破壊者の技
ダークネスオーバーロード
此も上と同じく
タイムブースト
まんまクロックアップ
ハイパータイムブースト
まんまハイパークロックアップ
ダークネスブレイク
ライダーキックに闇の力を込めたもの
ダークネスインパクト
ライダーパンチに闇の力を込めたもの
ダークシールド

前方に闇の壁を創る技

これらは変身前でも使えるが威力は落ちる

ダークネスの設定（後書き）

次回は七巻の内容に戻そうと思います

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3575r/

IS〈インフィニット・ストラトス〉～全てを虚無にかえすもの～

2011年11月21日18時15分発行